新東京国際空港

埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

—No. 14遺　跡——

1983

新東京国際空港公団
財団法人　千葉県文化財センター

新東京国際空港

埋蔵文化財発掘調査報告書III

――No.14 遺 跡――

1983

新東京国際空港公団
財団法人 千葉県文化財センター

序　文

千葉県の北部にひろがる広大な北総台地は、数多くの遺跡が所在し、歴史的文化遺産の多いことで知られています。

新東京国際空港予定地内におきましても、先土器時代・縄文時代早期を中心とする遺跡が数多く所在しており、当（財）千葉県文化財センターでは千葉県教育委員会の指導のもとに発掘調査を実施しております。

この度、昭和53年４月から翌54年３月にかけて実施したNo.14遺跡の調査の成果がまとまり、本報告書として刊行の運びとなりました。

今回の発掘調査では先土器時代から縄文時代早期後半（特に、鵜ガ島台式土器）にかけての遺物が数多く検出され、北総台地の分水界の歴史を知るうえで貴重な資料を追加することができました。

これらを収載した本報告書は、昭和46年に財団法人千葉県北総公社によって発行された『三里塚』、昭和56年に文化財センターが発行した『木の根』に引続き、新東京国際空港関連の発掘調査報告書の第３集に当たり、三里塚地域の歴史を解明するために欠くことのできない資料の一つと言えましょう。

このような本報告書が学術的資料として利用されるばかりでなく、教育資料及び郷土の歴史に対する理解を深める資料として活用されることを望んで止みません。

最後に、新東京国際空港公団をはじめ、関係諸機関の御協力と御指導、酷寒猛暑をついて発掘調査及び整理作業を行っていただいた多くの調査補助員の方々に対して心より謝意を表します。

昭和58年２月26日

財団法人千葉県文化財センター

理事長　今　井　　正

例　言

1．本書は、新東京国際空港予定地内の成田市古込字古込９番地他に所在したNo.14遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、新東京国際空港公団の委託を受け、千葉県教育委員会の指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが実施した。

3．発掘調査は昭和53年４月１日から翌54年３月31日まで実施した。調査面積は20,800㎡である。

4．本書は、昭和46年に刊行された『三里塚』（財団法人千葉県北総公社発行）、昭和56年に刊行された『木の根』（新東京国際空港公団・財団法人千葉県文化財センター発行）に続く新東京国際空港関連の発掘調査報告書の第３集にあたるものである。

5．発掘調査及び報告書作成作業の担当職員は次のとおりである。なお、太字は直接担当職員である。

(1)　発掘調査（昭和53年度）

調査部長　西野　元　　班長　**杉山晋作**　　調査研究員　**野口行雄**　**山口直樹**　宮重行　三浦和信　石倉亮治　加藤正信　藤崎芳樹　萩野谷悟　西川博孝

(2)　報告書作成作業（昭和56年度）

部長　白石竹雄　　部長補佐　中山吉秀　　班長　**西山太郎**　　主任調査研究員　**深沢克友**（57.2.1～）　　調査研究員　**野口行雄**　西川博孝　西口　徹　雨宮龍太郎　麻生正信　大野康男　糸川道行（56.6.1～）　横山　仁（56.12.1～）林田静男

(3)　報告書刊行作業（昭和57年度）

部長　白石竹雄　　部長補佐　天野　努　　班長　**西山太郎**　　調査研究員　西川博孝　西口　徹　雨宮龍太郎　川島利道　麻生正信

6．本書の執筆は、第１章第１節、結語を西山太郎、第３章第３節の鉄滓を山口直樹、他を野口行雄が担当した。

7．遺物の写真撮影は深沢克友が担当した。

8．本書の編集については、西山太郎が野口行雄と協議のうえ行った。

9．鉱物分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社の手をわずらわせた。

10．発掘調査から本書の刊行にいたるまで、千葉県教育庁文化課、新東京国際空港公団、成田市教育委員会、船橋市立郷土資料館佐藤武雄氏の御協力、御助言をいただいた。

また、多くの調査研究員、調査補助員の御協力を得た。深く謝意を表する。

目　次

序　文
例　言
第1章　調査の経過と方法 …… 1
第1節　調査に至る経過 …… 1
第2節　調査の方法 …… 1
第3節　調査の経過 …… 2
第2章　遺跡とその環境 …… 7
第1節　遺跡周辺の地形 …… 7
第2節　周辺の遺跡 …… 7
第3節　遺跡の概要 …… 8
第4節　基準層序 …… 13
第5節　鉱物分析 …… 16
第3章　遺構と遺物 …… 19
第1節　先土器時代 …… 19
第2節　縄文時代 …… 25
第3節　その他の時代 …… 96
第4章　考察編 …… 97
第1節　B地点出土の第2群土器について …… 97
第2節　遺跡の性格と特徴 …… 106
結　語 …… 110

挿 図 目 次

第１図　遺跡周辺地形と発掘区…… 3
第２図　No.14遺跡発掘調査区域図…… 5
第３図　遺跡の位置と周辺主要遺跡…… 9
第４図　遺構分布図…… 12
第５図　標準層序…… 14
第６図　遺跡土層断面図…… 15
第７図　重鉱物組成図…… 17
第８図　層序の対比関係図…… 18
第９図　No.１炭化物片集中地点…… 20
第10図　No.２炭化物片集中地点…… 21
第11図　No.３炭化物片集中地点…… 21
第12図　No.４炭化物片集中地点…… 22
第13図　No.５炭化物片集中地点…… 22
第14図　先土器時代遺物…… 23
第15図　001，002遺構…… 27
第16図　003，004遺構…… 28
第17図　Ａ地点土器出土状況図…… 30
第18図　Ａ地点石器・礫出土状況図…… 30
第19図　Ａ地点出土遺物…… 33
第20図　Ａ地点出土遺物…… 34
第21図　Ａ地点出土遺物…… 35
第22図　Ａ地点出土遺物…… 36
第23図　Ｂ地点縄文時代グリット別遺物出土図…… 38
第24図　Ｂ地点第２群Ⅰ・Ⅱ類土器…… 40
第25図　Ｂ地点第２群Ⅱ類土器…… 41
第26図　Ｂ地点第２群Ⅲ類土器…… 45
第27図　Ｂ地点第２群Ⅲ類土器…… 46
第28図　Ｂ地点第２群Ⅲ類土器…… 47
第29図　Ｂ地点第２群Ⅲ類土器…… 51
第30図　Ｂ地点第２群Ⅲ類土器…… 52
第31図　Ｂ地点第２群Ⅲ類土器…… 53

第32図　B地点第2群Ⅲ類土器……55
第33図　B地点第2群Ⅳ類土器……58
第34図　B地点第2群Ⅳ類土器……60
第35図　B地点第2群Ⅳ類土器……62
第36図　B地点第2群Ⅴ類土器及び把手……64
第37図　B地点第2群Ⅲ類土器（完形品）……65
第38図　B地点第2群Ⅲ類土器（完形品）……66
第39図　B地点第2群Ⅲ類土器及び粗製土器（完形品）……67
第40図　B地点第2群Ⅲ類土器（262、265　拓本図）……68
第41図　B地点第2群土器口縁部（1）……70
第42図　B地点第2群土器口縁部（2）……71
第43図　B地点第1・2群土器底部……72
第44図　B地点第3・4群土器……74
第45図　B地点第4・5群土器……75
第46図　B地点第5群土器及び古銭……76
第47図　B地点石器組成図……78
第48図　石鏃数量図……80
第49図　B地点縄文時代石器（1）……84
第50図　B地点縄文時代石器（2）……85
第51図　B地点縄文時代石器（3）……86
第52図　B地点縄文時代石器（4）……87
第53図　B地点縄文時代石器（5）……88
第54図　B地点縄文時代石器（6）……89
第55図　第2群土器模式図……102

図 版 目 次

1．遺跡全景（航空写真）南より　B地点遠景（航空写真）西より
2．遺跡近景（南方より）　遺跡近景（北方より）
3．8E38土層セクション　8G56土層セクション
4．No.2炭化物片集中地点　No.5炭化物片集中地点
5．No.4炭化物片集中地点セクション　No.4炭化物片集中地点
6．先土器時代遺物
7．A地点縄文時代遺物出土状況（東より）　A地点縄文時代遺物出土状況（西より）
8．A地点出土遺物
9．A地点出土遺物
10．A地点出土遺物
11．001遺構
12．002遺構
13．003遺構
14．004遺構
15．8G縄文時代遺物出土状況　9F南側縄文時代遺物出土状況
16．9F北側縄文時代遺物出土状況　10F縄文時代遺物出土状況
17．B地点　第2群Ⅰ・Ⅱ類土器
18．B地点　第2群Ⅱ類土器
19．B地点　第2群Ⅲ類土器
20．B地点　第2群Ⅲ類土器
21．B地点　第2群Ⅲ類土器
22．B地点　第2群Ⅲ類土器
23．B地点　第2群Ⅲ類土器
24．B地点　第2群Ⅲ類土器
25．B地点　第2群Ⅲ類土器
26．B地点　第2群Ⅳ類土器
27．B地点　第2群Ⅳ類土器
28．B地点　第2群Ⅳ類土器
29．B地点　第2群Ⅴ類土器
30．B地点　第2群Ⅲ類土器

31. B地点　第2群Ⅲ類土器及び粗製土器
32. B地点　第2群土器口縁部（1）
33. B地点　第2群土器口縁部（2）
34. B地点　第1・2群土器底部
35. B地点　第3・4群土器
36. B地点　第4・5群土器
37. B地点　第5群土器、鉄滓、古銭
38. B地点　縄文時代石器（1）
39. B地点　縄文時代石器（2）
40. B地点　縄文時代石器（3）
41. B地点　縄文時代石器（4）
42. B地点　縄文時代石器（5）
43. B地点　縄文時代石器（6）
44. 第2群土器文様拡大写真（1）
45. 第2群土器文様拡大写真（2）
46. 第2群土器文様拡大写真（3）

表目次

第1表　主な周辺遺跡…… 10
第2表　B地点石器計測表（1）…… 90
第3表　B地点石器計測表（2）…… 91
第4表　B地点石器計測表（3）…… 92
第5表　B地点石器計測表（4）…… 93
第6表　B地点石器計測表（5）…… 94
第7表　B地点石器計測表（6）…… 95

付図目次

付図1　B地点第2群土器分布図
付図2　B地点石器剥片類分布図

第１章　調査の経過と方法

第１節　調査に至る経過

新東京国際空港建設予定地内に所在する遺跡については、道路建設、宅地造成等の土木工事と同様に、事前に取扱いを協議し発掘調査を実施している。その結果は、財団法人千葉県北総公社によって、『三里塚－新東京国際空港用地内における考古学的調査』（昭和47年刊）として発行されている。また、当文化財センターでも、『木の根』（昭和55年刊）として発行した。これらに所収した以外の遺跡については、当文化財センターにおいて、現在も計画的、継続的に発掘調査を実施中である。

本書では昭和53年度に発掘調査を実施したNo.14遺跡を対象としている。No.14遺跡の一部については、昭和45～46年度に、財団法人千葉県北総公社（文化財調査班）によって発掘調査が実施されており、その成果は『三里塚』に所収されている。

ところで、県教育委員会(文化課)は、新東京国際空港公団から当該地で土木工事を実施したいとの要望があったため、公団と遺跡の取扱いについて度重ね協議を行った。その結果、当該地を現状で保存することが困難であったため、やむを得ず発掘調査による記録保存の措置をとることで結論に達した。そこで、県教育委員会（文化課）は、No.14遺跡の未調査区域であった20,800㎡について、当文化財センターを調査機関として指定した。これにより当文化財センターが発掘調査を行うこととなり、新東京国際空港公団と発掘調査についての詳細な調整を行い、委託契約を締結したのである。

当文化財センターは、公団との委託契約に基づき県教育委員会（文化課）の指導の下に、昭和53年４月１日から翌54年３月31日までの約１か年を要して発掘調査を実施した。以後、２年間の空白の後、昭和56年４月１日より１年間整理を行い、ここに本報告書を刊行する運びとなったのである。

第２節　調査の方法

今回のNo.14遺跡の発掘調査は、第１次調査時に未買収地のため調査されなかった20,800㎡を対象地として実施された。遺跡の性格、内容については、第１次調査により縄文時代早期の条痕文系土器を主体とした遺物包含地であることが明らかであったため、遺物の分布範囲を主に確認することを目的とし、本調査に先立ち確認調査を実施した。

調査は、まず調査対象区域を包括する大グリッドを設定することから始めた。大グリッドは

公共座標を用いて区分したもので、50m方眼を1つの大グリッドとした。なお、No.14遺跡の発掘調査と並行して隣接するNo.62遺跡の確認調査の実施が計画されていたため、この両遺跡を包括するように大グリッドを設定した（第1図）。大グリッドの名称は、西から東へAからIまで、北から南へ0から12までの記号を付して組み合わせる方法をとった。この大グリッドはさらに5m方眼の小グリッドにより細分し、1つの大グリッドは100個の小グリッドにより構成されている。小グリッドの名称は、最北列の西から東へ00から09まで、最北列の北から南へ00から90までの番号を付し（第2図）、大グリッドと小グリッドの名称を組み合わせ、1A－00、10F－99のようにグリッドを呼称した。

以上の方法による発掘区の設定後、最初の発掘作業として、縄文時代までの確認調査を実施した。確認調査は、調査対象全区域に2×4mの試掘坑を設定し、第Ⅲ層直上面まで掘り下げ遺構・遺物の検出を行なった。この結果に基づいて、縄文時代の本調査範囲を確定し、その確定された範囲については、人力により小グリッド単位に拡張して包含層と遺構の精査を行なった。縄文時代遺物包含層範囲は、調査区域の北西部分と南西部分の2地点が確認され、検出された遺物の違いにより、前者をA地点、後者をB地点と便宜的に区分を行なった。

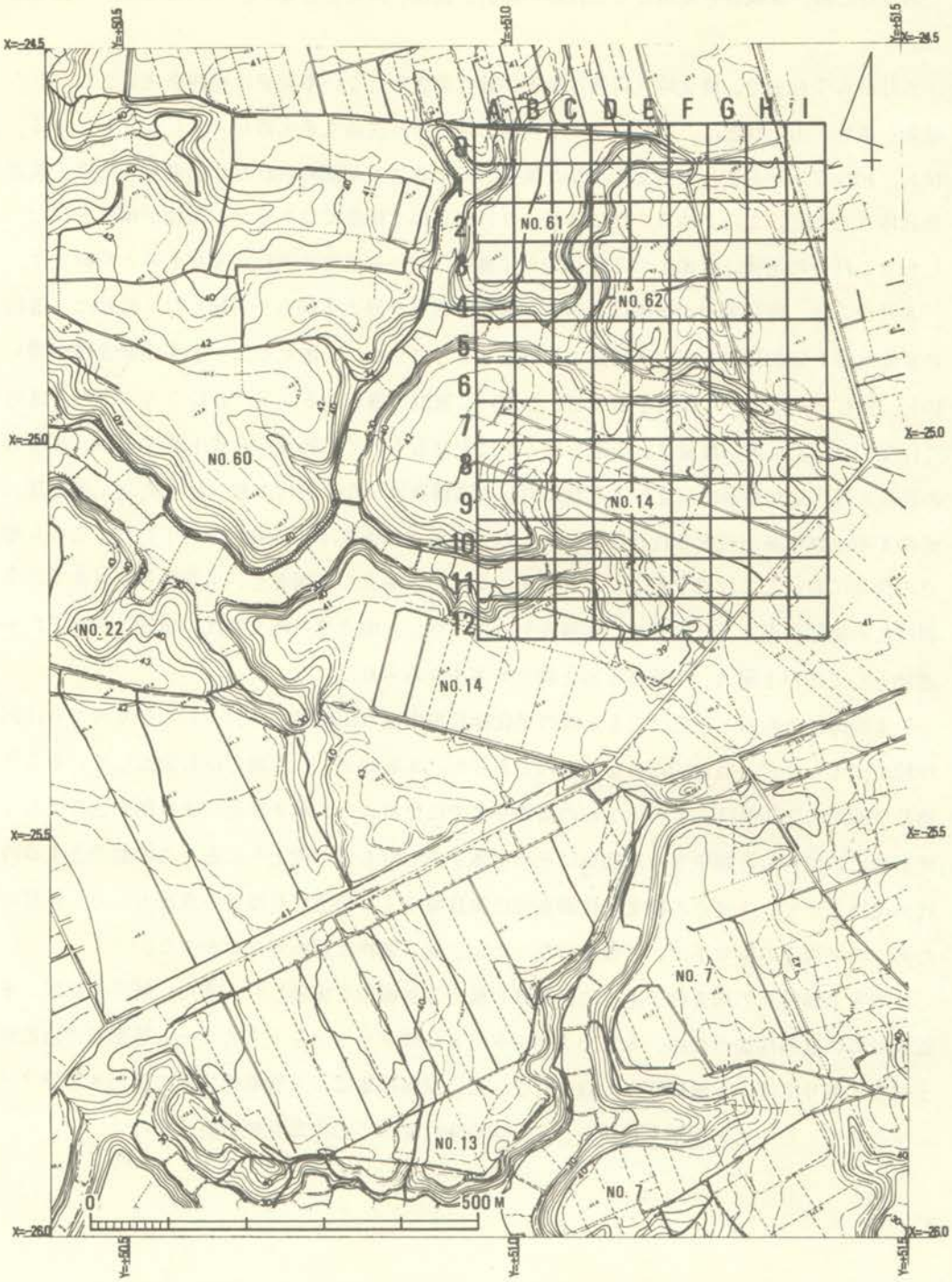
縄文時代の本調査終了後、2×2mの試掘坑を調査全区域に設定し、先土器時代の確認調査を行なった。発掘深度は、立川ローム層最下部までとし、遺物・炭化物片の検出を行ない、それらの検出されたグリッドについては拡張し本調査を行なった。またA地点、B地点のそれぞれに土層観察を行なうため、東西、南北にトレンチを入れた。

検出された縄文時代、先土器時代の遺物は、全て平面的位置とレベルを記録し、遺構より出土したものは各遺構ごとに001から3桁の数字で、包含層より出土したものは小グリッドごとに、表土攪乱層中遺物に対しては0001の番号を付して一括で、その他のものに対しては0002から4桁の通し番号を付し、写真撮影後取り上げを行なった。遺構番号は大グリッドごとにイ001から通しの番号を付した。

先土器時代の炭化物片集中地点の調査方法は、まず平面的な広がりを確認し、中央部にベルトを残し、10cm～20cmの一定のレベルごとに平面的に掘り下げを行なった。炭化物片の集中が密になった段階で、平面的位置を記録し写真撮影を行なった後、さらに平面的掘り下げを行ない記録をとった。この作業を3～4回繰り返し、つぎに炭化物片集中地点の中央部にサブトレンチを入れ、炭化物片の垂直的位置を記録することとした。

第3節　調査の経過

発掘調査は、昭和53年5月から実施された。発掘作業に先立ち基準点測量、地形測量を行なった。また調査区域内には竹林や雑草が生い茂っており、所々に土が多量に盛られている状態



第１図　遺跡周辺地形と発掘区

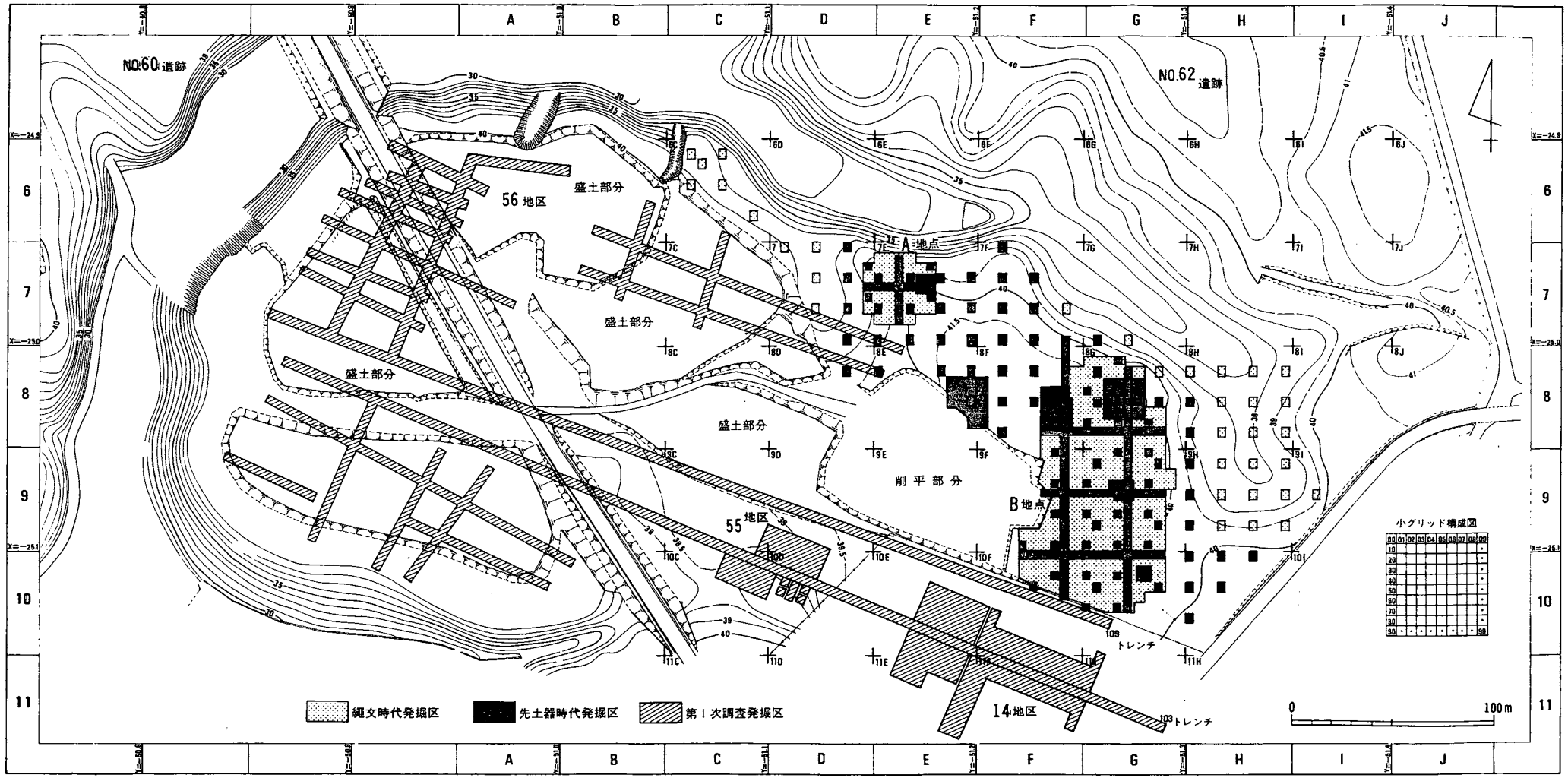
であったため、重機等を使用してこれらの除去、伐採、排土を行ない、その後発掘区を設定した。

６月から７月まで、縄文時代遺物包含層の確認調査を行ない本調査の範囲を決定した。この結果、遺物の出土状況は、７Ｅグリッド西側の地点より沈線文系土器が、８Ｇ、９Ｆ、９Ｇ、10Ｆ、10Ｇグリッドより条痕文系土器が集中していることが認められた。前者をＡ地点、後者をＢ地点とした。この２地点の他に８Ｈ、９Ｈの谷部で稀薄ではあるが、遺物が確認された。しかしこれらの遺物は台地上の９Ｇ、10Ｇに集中している遺物の流れ込んだものと判断した。

８月からは、確認調査の結果に基づき、縄文時代包含層の本調査を実施した。最初に、遺物の密度も濃く分布範囲も広いＢ地点より行なうことにした。Ｂ地点では、まず遺物密度の濃い10Ｆ、10Ｇグリッドから作業を着手し、しだいに密度の薄くなる９Ｇ、８Ｇグリッドへと進めて行なった。出土遺物数量は、予想をはるかに上回るもので、鵜ガ島台式土器や石鏃、黒曜石の剥片・砕片類が多量に出土し、それに対して遺構数は少なく炉穴１基、陥し穴状土壙２基、性格不明土壙１基が検出されたのみであった。Ｂ地点の作業は２月中旬で終了した。このＢ地点の作業に並行して12月下旬より１月下旬にかけてＡ地点の本調査を、１月から３月まで先土器時代の確認調査とそれに基づく本調査を行なった。Ａ地点での縄文時代の遺構は検出されず、遺物として田戸上層式、下層式土器と礫片の集中がみられた。

先土器時代のものとしては、５ヵ所の炭化物片集中地点が検出され、うちの２ヵ所からは剥片類が出土したが、数量的に少ないものであった。８Ｅ59グリッド周辺から出土している炭化物及び剥片の広がりは、この出土地の南側がすでに立川ローム層下部近くまで削平されており、地形的にみてむしろ削平された部分にその主体があったものと考えられる。この他の先土器時代の遺物として、Ａ地点の縄文時代調査時に第Ⅱ層中より切出形石器が１点出土した。確認のため、その周辺の掘り下げ、拡張を行なったが、他の遺物は認められなかった。

この先土器時代の調査終了近くに、遺跡の航空写真撮影を実施した。また、層序の観察と重鉱物分析の試料採集のため、８Ｅ38グリッドと８Ｇ55グリッドを下末吉ローム層相当の白色粘土層まで掘り下げ、土層観察、記録を行なった。試料採集は、土層堆積状態の良い８Ｅ38グリッドで行なった。この作業を最後として、３月末にすべての作業を無事終了した。



第２図　No.14遺跡発掘調査区域図

第２章　遺跡とその環境

第１節　遺跡周辺の地形

№14遺跡の位置する成田市周辺は、千葉県北部に広がる広大な下総台地と呼ばれる洪積台地上に在る。

成田市周辺の地形は、西は印旛沼、北は利根川、東は太平洋により区画されており、南は房総丘陵となっている。そして大小の河川により台地は浸食され複雑な地形を呈している。河川は、北部には天神峰、東峰地区に水源地をもち佐原市西部を経て利根川に注ぎこむ大須賀川、尾羽根川、取香川が流れ、また取香地区に水源地をもち成田市のほぼ中央を経て利根川に注ぎこむ、根木名川が流れている。西部には、印旛沼に注ぐ江川、高崎川が流れ、東南部には、高谷川、多古橋川が支流を集め栗山川に合流し太平洋へと注ぎこんでいる。このように成田市周辺の河川は、利根川、印旛沼、太平洋へと注ぎこむ３つの水系に分けられ、№14遺跡の位置する新東京国際空港周辺は、利根川、太平洋に注ぎこむ河川の水源地にあたる。言いかえるならば、利根川水系と太平洋水系の分水嶺に位置していると言える。このため開析の顕著な周囲に比べ、この地域は平坦な台地が広がる点が特徴的である。標高は40ｍと高く、ここから印旛沼、太平洋に向かって緩く低下してゆく。

№14遺跡の位置する台地は、以上のような地形の中に在る。台地の東部は、根木名川の源流である取香川により開析が奥深くまで進んでおり、「コ」の字状の形状を呈している。この開析谷により台地は北側と南側に大きく分けられている。また台地の付け根にあたる南部は、高谷川の支流が入り込んでいる。まさに№14遺跡は、利根川水系と太平洋水系の境界に位置していると言える。しかし、この台地は第１次調査後の大規模な工事のためにかなり地形が変わっており、昔の面影はほとんどみられない。今回の調査対象地は、「コ」の字状台地の北側台地の第１次調査時の未調査区域で、北側に取香川の支流の１つの水源地となっている谷が接し、南側はすでに工事により地形が変わってしまっているが、やはり北側と同じように谷が入りこんでおり、この２つの谷にはさまれ部分にあたる。なお北側の谷には、湧水による小さな池があり、今日でも鳥獣の安息の場となっている。

第２節　周辺の遺跡

新東京国際空港周辺は、遺跡の密度が濃く、1970年から1971年にかけて行なわれた第１次調

査以前に実施された分布調査により23ヵ所の遺跡が確認された（『三里塚』1971）。その後の分布調査や1976年より行なわれている第２次調査により、新たに10ヵ所近い遺跡が確認されている（第３図　第１表）

第２次調査で確認された遺跡は、第１次の時と同様に、先土器時代、縄文時代早期の遺物包蔵地が主体をなしており、その他、弥生時代から歴史時代までの遺構、遺物を埋蔵している複合遺跡が多い。

先土器時代の遺跡として、第１次調査時に関東ローム層黒色帯より楕円形石器を伴う石器群が検出されていることは周知のことであるが、第２次調査においても第Ⅶ・Ⅷ層より遺物の出土がみられ、No.61遺跡では、大形の打製石斧、刃部磨製石斧を有する規模の大きな石器群が検出されている。No.62遺跡でも、黒曜石を母岩とした規模の大きな石器群が検出されている。この他の遺跡でもⅧ層からⅢ層までのローム層中より多くの石器群が検出されている。

縄文時代では、早期前半の撚糸文土器、沈線文土器を多量に出土したNo.６遺跡、No.７遺跡、No.60遺跡がある。これらの遺跡からは、撚糸文期の住居跡も検出されている。早期後半の沈線文土器、条痕文土器は、No.61遺跡、No.62遺跡、No.67遺跡で多量に出土している。No.67遺跡では、沈線文期の住居跡が検出されている。No.10遺跡は、遺物の出土量は少ないが陥し穴状土壙が70基近く検出されている。以上の縄文時代の遺構、遺物が多量に検出されている遺跡はNo.14遺跡と同様に平坦な広い台地上に位置しているが、遺跡の時期、性格は少しづつの相違がみられる。

弥生時代としては、No.60遺跡、No.61遺跡、No.62遺跡より、遺構、遺物が検出されている。No.61遺跡においては、弥生時代後期の住居跡群が検出されている。

古墳時代以降の遺構、遺物が検出されている遺跡としては、No.２遺跡、No.７遺跡、No.60遺跡、No.61遺跡、No.62遺跡がある。これらの遺跡からは、鬼高期、真間期、国分期の小規模な住居跡群が検出されている。このうち国分期の住居跡群の特徴として、住居跡中より、多量の鉄滓、砂鉄が検出されているものがあり、その中には小鍛冶炉をもったものも見られる。これらは製鉄に関連した遺構と考えられる。このうち、No.60、No.61遺跡の台地南側斜面より、大規模な製鉄跡遺構が検出されており、前者を取香製鉄遺跡、後者を御幸畑製鉄遺跡と呼称されている。この遺跡以外においても、鉄滓の出土が多く見られることから、この周辺で製鉄の作業が昔盛んに行なわれたことがうかがえる。

第３節　遺跡の概要

No.14遺跡は、1970年から1971年に実施された第１次調査と今回の第２次調査の２度にわたる発掘調査が行なわれている。（第２図）

第３図　遺跡の位置と周辺主要遺跡

－この地図は国土地理院発行の５万分の１地形図(成田)を使用したものである－

第１表　主な周辺遺跡

番号	遺跡名	所在地	主な時代および遺物
1	No. 2	山武郡芝山町岩山字中袋2016他	先土器時代(ナイフ形石器) 縄文時代(撚糸文) 古墳時代(鬼高期) 歴史時代(国分期、鉄滓、砂鉄)
2	No. 5	成田市木の根東台217他	先土器時代(細石器、尖頭器) 縄文時代(撚糸文)
3	No. 6	成田市木の根192他	先土器時代(スクレイパー) 縄文時代(撚糸文、沈線文)
4	No. 7	山武郡芝山町香山新田地先	先土器時代 縄文時代(撚糸文、沈線文、条痕文) 古墳時代(鬼高期)
5	No. 10	山武郡芝山町香山新田106他	先土器時代 縄文時代(撚糸文、条痕文)
6	No. 13	成田市古込朝日丘地先	縄文時代
7	No. 14	成田市古込字古込６他	先土器時代(切出形石器) 縄文時代(沈線文、条痕文) 歴史時代(鉄滓)
8	No. 22	成田市天浪	先土器時代(尖頭器) 近　　世(馬込跡)
9	No. 60	成田市取香字和田戸711他	先土器時代(ナイフ形石器、彫器、尖頭器) 縄文時代(撚糸文、沈線文、条痕文) 弥生時代(後期) 歴史時代(国分期、鉄滓、砂鉄)
	取香製鉄跡	成田市取香字和田戸711他	歴史時代
10	No. 61	成田市東峰字御幸畑89他	先土器時代(石斧、ナイフ形石器、尖頭器) 縄文時代(沈線文、条痕文) 弥生時代(後期) 歴史時代(真間～国分期、鉄滓、砂鉄)
	御幸畑製鉄跡	成田市東峰字御幸畑89－１他	歴史時代
11	No. 62	成田市東峰地先	先土器時代(ナイフ形石器、スクレイパー、尖頭器) 縄文時代(沈線文、条痕文) 弥生時代(後期) 歴史時代(真間～国分期、鉄滓)
12	No. 63	成田市東峰字笠峰25－２他	先土器時代 縄文時代 歴史時代
13	No. 67	成田市十余三字稲荷峰151他	先土器時代 縄文時代(沈線文、条痕文) 歴史時代
14	No. 68	成田市十余三字稲荷峰151他	先土器時代 縄文時代(沈線文、条痕文)

第１次調査

調査の対象地は、「コ」の字状台地の北側台地部で未買収地を除いた全域の調査が行なわれた。南側台地については、遺物の散布状態が稀薄であったため調査の対象地外とされている。北側台地は、地形により台地基部より14地区、55地区、56地区の３地区に分けられ、それぞれの調査を行なっている。現在ではこれらの地区は、工事のためすでに削平されているため、当時の地形、環境の面影はみられない。

№14地区は本調査前に台地縁辺部に、ほぼ台地の長軸に沿った№103トレンチを設定し、さらにこのトレンチ北側に平行にはしる109トレンチを設定し確認調査を行なっている。この両トレンチの位置は、第２次調査で設定した発掘区の10Ｅ、10Ｆ、10Ｇ、11Ｅ、11Ｆ、11Ｇグリッドにあたる。遺物の出土状況は、103トレンチから鵜ガ島台式土器が密に出土している。一方の109トレンチからは、遺物の出土はみられず、遺物の分布範囲はこのトレンチ以南にあると報告されている。しかしこの109トレンチは第２次調査区域の南側とほぼ接する位置にあり、第２次調査でのこの地点は、最も遺物分布の濃い地点であることから、109トレンチから遺物出土が無いことをどう解釈すべきであろうか。むしろ出土遺物やその出土状況からみて第１次調査と第２次調査で確認された遺物分布範囲は１つのまとまったものと考えられる。遺構としては、鵜ガ島台期の竪穴住居跡３軒、炉穴３基、竪穴２基が検出されている。遺物は、鵜ガ島台式を主体とした土器と石鏃を主体とした石器類、そして黒曜石を主体とした剥片類が多量に検出されている。

55地区は、浅い谷を境に14地区と分けられており、第２次調査の９Ｃ、９Ｄ、10Ｃ、10Ｄグリッドにあたる。この地区から検出された遺構、遺物として炉穴２基、土壙２基と、稀薄ではあるが田戸下層式土器が検出されている。また関東ローム層黒色帯より楕円形石器を伴う石器群と炭化物片集中地点が検出されている。

56地区は、本台地の最西端部分にある。検出された遺構は、田戸上層期の竪穴住居跡１軒、炉跡２基、遺物は、井草式土器、田戸上層式土器が稀薄であるが検出されている。

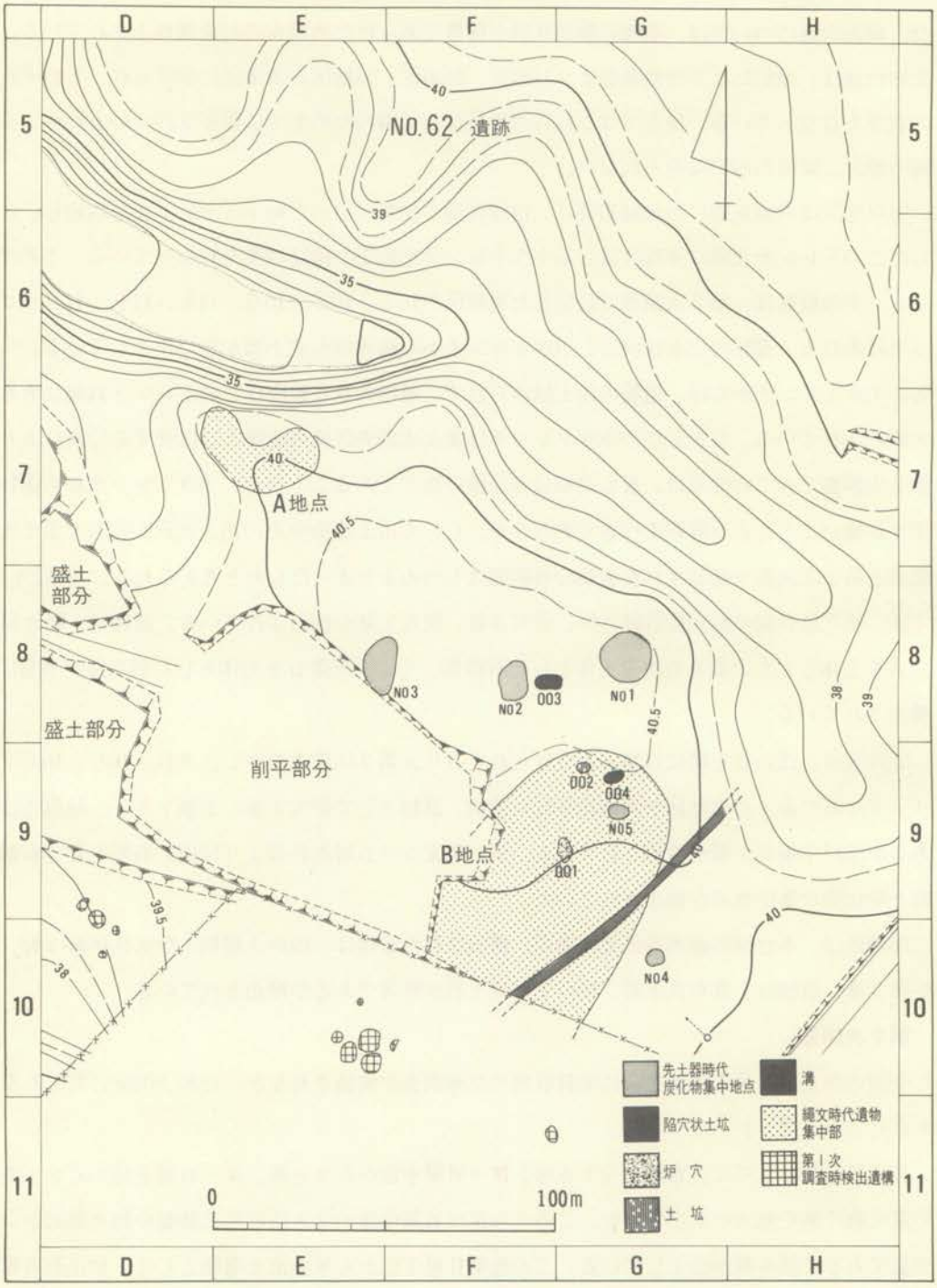
第２次調査

今回の調査は、第１次調査時に未買収地のため調査が実施されなかった20,800㎡に対し行なわれた（第４図）。

先土器時代としては、Ⅶ層から１ヵ所、Ⅳ－Ⅵ層中位から２ヵ所、Ⅳ－Ⅵ層上位から２ヵ所の炭化物片集中地点が検出された。このうちⅣ－Ⅵ層中位の２ヵ所の炭化物集中地点周辺から少量であるが剥片類が出土している。この他第Ⅱ層下位から単独出土遺物として、切出形石器が出土している。

縄文時代は、遺物集中地点が２ヵ所検出され、それをＡ地点とＢ地点に分けた。

Ａ地点は、この台地の北側に深く入り込んでいる谷の先端部の台地上にあり、早期の沈線文


D
E
F
G
H
5
6
7
8
9
10
11
NO.62 遺跡
A地点
B地点
盛土部分
盛土部分
削平部分
NO1
NO2
NO3
NO4
NO5
OO1
OO2
OO3
OO4
40
39
35
40.5
38
39.5
0
100m
先土器時代炭化物集中地点
陥穴状土坑
炉　穴
土　坑
溝
縄文時代遺物集中部
第Ｉ次調査時検出遺構

第４図　遺構分布図

系土器が集中して出土している。遺構は検出されず、土器の分布状態もそれほど密ではなく数個体分の土器片が散在している状態である。石器類は石鏃が3点出土しており、その他は細かく砕けた礫片が散在している。

B地点は、A地点より北東へ150m程離れた第1次調査時の14地区の北側部分に位置する。この地点は、台地の北側と南側に入り込んでいる谷の谷頭部に挟まれた部分である。遺物の広がりは、ほぼ全域にわたっているが、南側に密度が濃く北側にいくにしたがい稀薄になっている。検出された遺構としては、炉穴1基、陥し穴状土壙2基、土壙1基である。出土した遺物は、遺構から出土した遺物数は極くわずかであり、ほとんどの遺物は第II層中より出土している。そして土器は、鵜ガ島台式土器がほとんどを占め、その他前期、中期、後期の土器が少量検出されている。また石器においては、石鏃が石器組成の中で70%程を占め、また石材として、黒曜石が80%を占めている剝片・砕片類も多量に出土している。このような遺構、遺物の検出状況から、このB地点（14地区も含めて）は、縄文時代早期の鵜ガ島台期の単一時期の遺跡と考えられる。

その他の時代の遺構、遺物として、鉄滓が数点、古銭が50数点出土している。またB地点東側に南北にはしる近世の溝が検出されている。

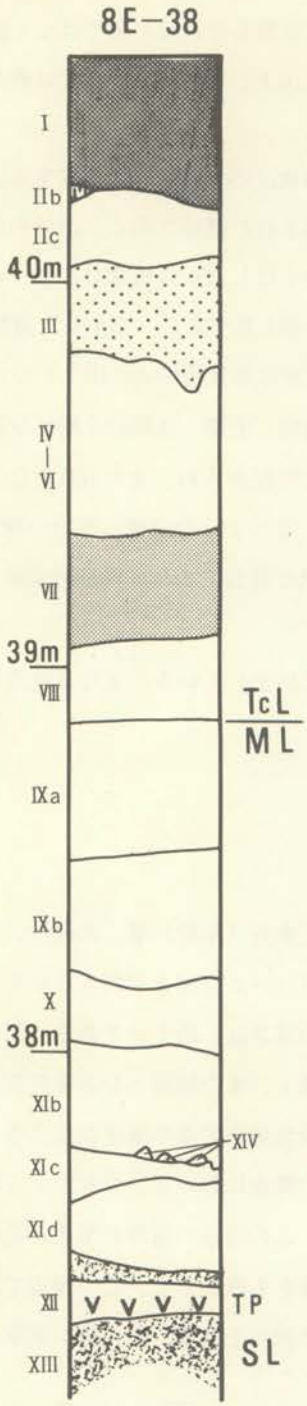
第4節　基準層序

No.14遺跡は、下総台地の上位面に位置し、砂層の成田層上に下末吉（常総）層、武蔵野、立川ローム層が堆積している。ローム層の厚さは、下末吉から立川ローム上面まで約3.5mで、このうち先土器時代遺物の包蔵が確認されている立川ローム層の厚さは、約1mである。同じローム層の堆積がみられる相模野、武蔵野台地と比べ、非常に薄く、また鍵層となる黒色帯、姶良丹沢パミスなど地域によって不鮮明な部分が多いため、下総台地での基準層序が確立されていない。このため肉眼による層序区分が主となっている遺跡の調査において、少なくとも新東京国際空港周辺の遺跡の調査での層序の混乱を避けるために、この周辺の遺跡の層序を比較し、また武蔵野台地の層序とも比較検討し、また重鉱物分析結果をも踏まえて、この周辺で比較的明瞭に確認でき、鍵層となりうる層（新期テフラ層、姶良丹沢パミス層、黒色帯、東京パミス層）に、統一した層序番号と名称を与えた（第5図）。

第I層　表土攪乱層　耕作と削平等により再堆積した層、調査区全域に及んでいる。

第IIa層　暗褐色土層　耕作、削平により台地平坦部ではほとんど確認できないが、谷部において20～30cmの堆積がみられる。

第IIb層　褐色土層　いわゆる「新期テフラ」と呼ばれている層であり、縄文時代以降の土層において鍵層となるものである。耕作、削平がこの層まで及んでいるため遺存状態の良い地



第５図　標準層序

点で20cm程の厚さが確認できたが、大部分の地点では、10cmたらずの堆積状態である。

第IIｃ層　黒褐色土層　調査区のほぼ全域で認められ、20～30cmの厚さであるが、傾斜地においては、第IIｂ層および下層の第III層が混入して色調も淡くなり、厚さも薄くなるため、肉眼による区分が困難である。

以上の第IIｂ、IIｃ層は、縄文時代の遺物包含層であり、本遺跡から多量に出土した沈線文、条痕文土器は、第IIｃ層から第IIｂ層にかけて出土しており、その主体は第IIｃ層にある。また中期後半以降の遺物は第IIｂ層から第Ｉ層にかけて出土している。

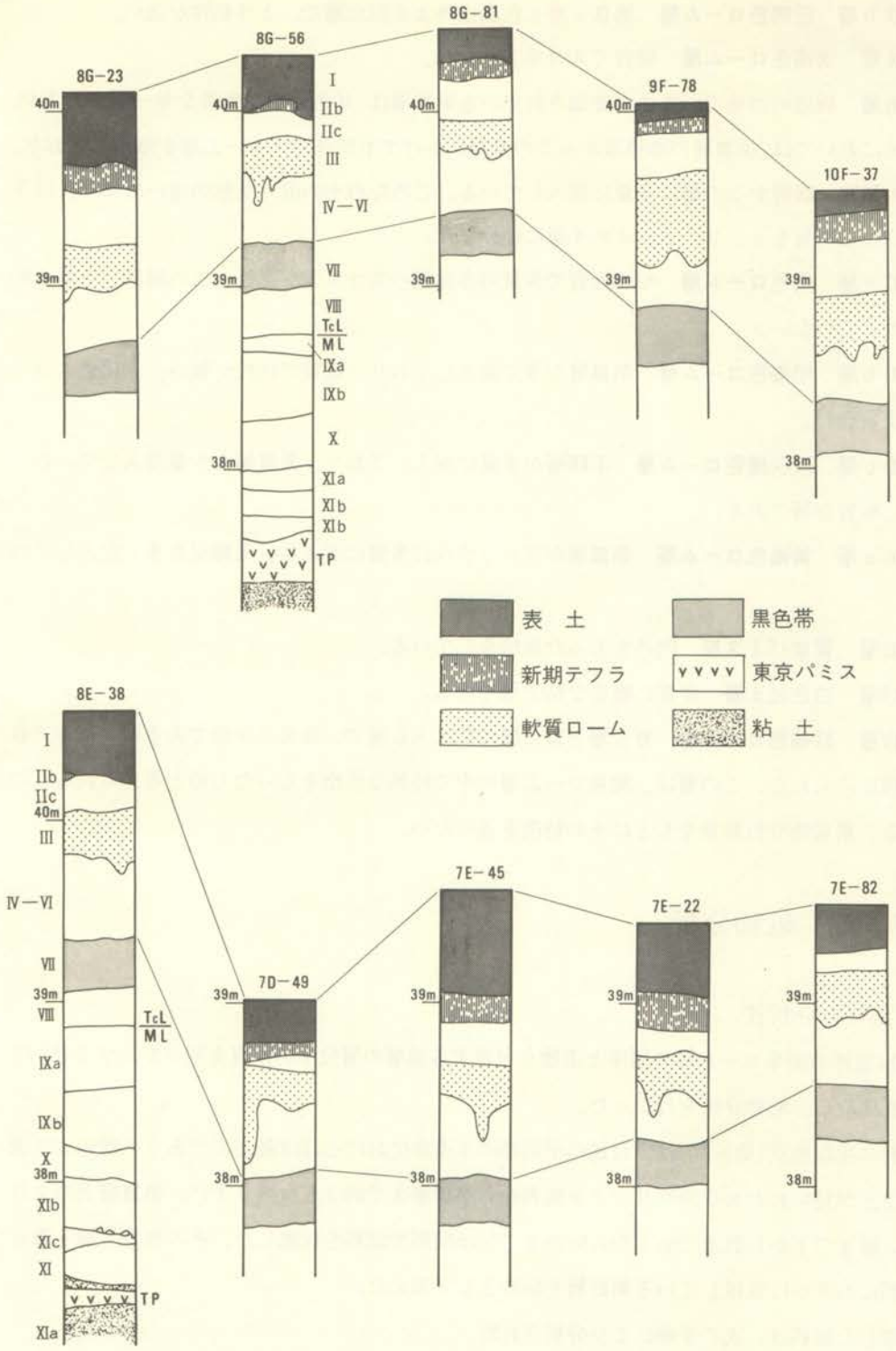
第III層　黄褐色ローム層　立川ローム層軟質部で、「ソフトローム」と呼ばれる層である。台地平坦部では30cm程の厚さで、50cmを越す地点もあるが、傾斜地では薄くなっている。

第IV－VI層　黄褐色ローム層　立川ローム層硬質部　クラックの発達が著しい。本台地では肉眼による区分ができず、１つの層としてとらえたが、本来この層は、３つの層に区分できる層である。第Ｖ層は、武蔵野台地の立川ローム層第１黒色帯に相当する層と考えられるが、現在のところこの地域で肉眼的観察による確認はされていない。しかし、重鉱物分析の結果では、第IV－VI層の中位に、この層が位置するものと考えられる。第VI層は、姶良丹沢パミス層である。周辺台地では、明瞭に確認できる層であるが、本台地においては、ガラス質のものが含まれているのは確認できたが、１つの層として区分することはできなかった。しかし谷部において、ブロック状に堆積しているのが確認され、第IV－VI層の下部に位置する層である。

第VII層　暗褐色ローム層　立川ローム層第II黒色帯に相当する層である。色調は、武蔵野台地で確認されるほど濃くなく、明瞭な層ではない。赤褐色のスコリアを多量に含む。

第VIII層　暗褐色ローム層　立川ローム層最下部層である。色調は、第VII層と似ているが、赤褐色のスコリアをほとんど含んでいない。

第IXａ層　褐色ローム層　武蔵野ローム層最上部層。クラックがよく発達し、軟質で粘性が強い。


8G−23
8G−56
8G−81
9F−78
10F−37
8E−38
7D−49
7E−45
7E−22
7E−82
40m
39m
38m
I
IIb
IIc
III
IV−VI
VII
VIII
TcL
ML
IXa
IXb
X
XIa
XIb
XIc
XI
TP
表　土
黒色帯
新期テフラ
東京パミス
軟質ローム
粘　土

第6図　遺跡土層断面図

第Ⅸｂ層　灰褐色ローム層　第Ⅸａ層と色調以外よく似た層で、より粘性が強い。

第Ⅹ層　淡褐色ローム層　硬質でスコリアを含む。

第Ⅺ層　周辺の台地でいままで確認されている第Ⅺ層は、褐色のやや軟質な単一層であるが、本台地においては、第Ⅻ層の堆積後からこのⅪ層にかけて不整合的にローム層が堆積しており、下層の第Ⅻ、ⅩⅢ層がこの層に多量に混入している。このためその混入状態の違いにより、以下のようにこの層をａ、ｂ、ｃ、ｄの４層に細分した。

第Ⅺａ層　褐色ローム層　やや軟質で少量の赤褐色のスコリアを含む。この層は、下層の影響が及んでいない。

第Ⅺｂ層　明褐色ローム層　第Ⅻ層が多く混入しており、硬質で粘性が強い。赤褐色スコリアを少量含む。

第Ⅺｃ層　淡灰褐色ローム層　第ⅩⅢ層が多量に混入しており、第Ⅻ層も少量混入している。非常に軟質な層である。

第Ⅺｄ層　黄褐色ローム層　第Ⅻ層がブロック状に多量に混入し、第ⅩⅢ層も多く混入している。

第Ⅻ層　東京パミス層　凹凸をもった堆積をしている。

第ⅩⅢ層　白色粘土層　非常に緻密な粘土層である。

第ⅩⅣ層　緑褐色ローム層　Ⅺｂ層とⅪｃ層の間に入る層で、非常に少量であるがブロック状の堆積がみられた。この層は、関東ローム層の中で特異な性格をもったものと考えられるものである。重鉱物分析結果をもとにその特徴を述べたい。

第５節　鉱物分析

1.　試料と分析法

No.14遺跡の関東ローム層の層序と遺物を包含する地層の層位学的性質を明らかにする目的で試料を採取し、鉱物分析を行なった。

試料の採取地点(第６図)は、台地の平坦部の本遺跡におけるほぼ最高点であり、周辺より遺物の出土が見られた８Ｇ38グリッドを地表から第ⅩⅢ層まで約3.5ｍ掘り下げ、第Ⅻ層上面より第Ⅱｃ層まで下から数えてNo.１からNo.28まで10cm間隔で試料を採取した。その後Ⅺｂ層とⅪｃ層の間にわずかに堆積している第ⅩⅣ層をNo.29として加えた。

採取した試料は、次の手順により分析された。

(1)　水分を含有した生の試料100gを超音波装置を用いながら傾斜法にて粘土分を除去した。

(2)　使用した試料の乾燥重量を求めるため、恒温乾燥器で105℃で５時間、乾燥後水分を測定。

(3)　乾燥後¼mm（60mesh）と⅛mm（120mesh）の篩を用いて¼～⅛mmの粒土の砂分だけを抽出した。

(4)　¼～⅛mmの砂分を秤量後、テトラブロムエタン（比重≒2.96）を重液に用いて重鉱物を分離した。

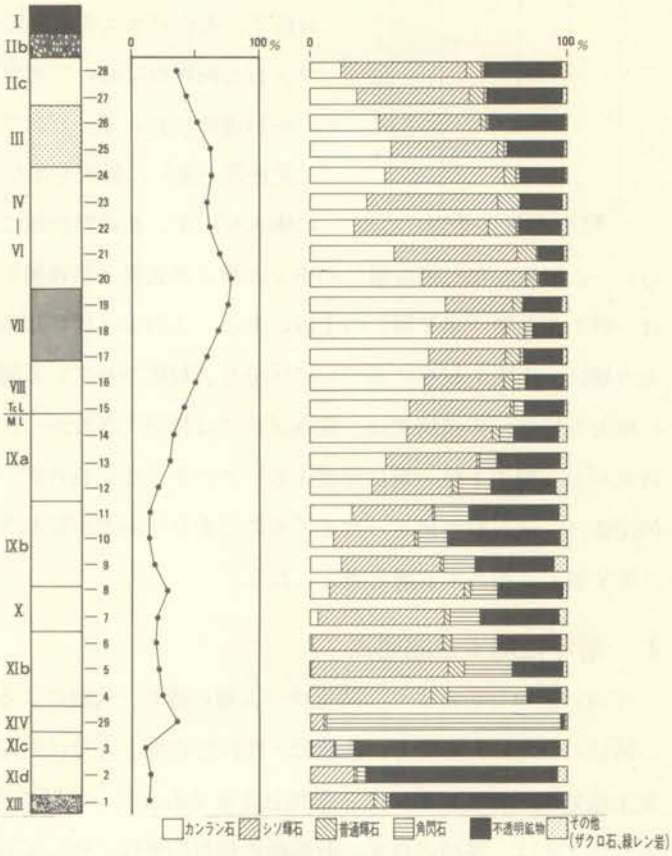
(5)　テトラブロムエタン中に沈んだ重鉱物を秤量後プレパラートを作製し、顕微鏡下にて300個体程度観察しそれぞれの鉱物の比重を考慮して重量比による鉱物組成を算した。

2.　分析結果

今回の重鉱物分析によって、カンラン石、シソ輝石、普通輝石、角閃石、緑レン石及びザクロ石の透明重鉱物、磁鉄鉱を含む不透明鉱物が観察された。

¼～⅛mm砂中の重鉱物量の割合は、滑らかな曲線を描いて変化しており、大まかに全体をながめるとNo.20を頂点として、下位は増加傾向にあり上位は減少傾向にあるといえる（第7図）。

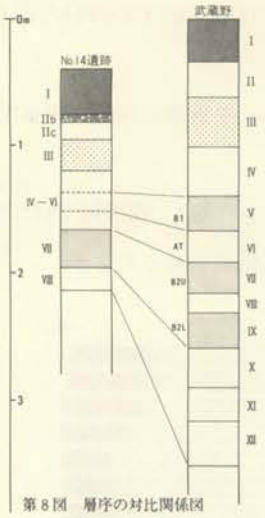
このような重鉱物組成のあり方は、No.6以降の試料において武蔵野台地・相模野台地のローム層と対応できるものである。No.6下位の試料が特異な分析結果を出したのは、No.29を除いて不整合による層の混乱によるものと考える。またNo.29は、角閃石が90%を占め、また黒雲母も多く含まれており、関東ローム層中において特異な組成をなしている。このNo.29について、群馬大学の新井教授は、グリース状火山灰に同定できるとされた。グリース状火山灰は、静岡県沼津市から富士市にかけての地域で報告されているが、火山灰の分布や給源火山など不明な部分が多い火山灰である。しかし広範テフラの可能性を充分にもつものと考えられるものである。



第7図　重鉱物組成図

3.　他地域との対比

重鉱物分析の結果、No.14遺跡における関東ローム層が、武蔵野台地、相模野台地のものと対応されるという結果を得た。そこで、本遺跡と、下総台地に隣接し、関東ローム層の研究が進



第８図　層序の対比関係図

んでいる武蔵野台地とを、調査時の肉眼による観察と分析結果に基づき、遺物が確認されている立川ローム層について対比してみる。

立川・武蔵野ローム層の層位を判定するのに、もっとも有効的なものは、カンラン石とシソ輝石、普通輝石の量比と火山ガラスの含有量であるとされている（杉原重夫　1974）。今回の分析で、火山ガラスの有無については行なわなかったが、カンラン石と両輝石において充分な結果が得られた。

No.14遺跡において、カンラン石はNo.19（第Ⅲ層中位）とNo.25（黒色帯上限）に極大を示し、両輝石はNo.22（第Ⅳ－Ⅵ層中位）に極大を示す。武蔵野台地において、カンラン石の極大は、立川ローム層軟質部（第Ⅲ層）の中位と第２黒色帯（第Ⅶ層）上部にある。そして両輝石の極大は、第１黒色帯（第Ⅴ層）の上限にある。このように両地域の対比で、カンラン石の量比の極大点層は、肉眼的観察に基づいて区分し、対応させている層と一致する。つづいて両輝石の量の極大点層は、本遺跡では、発掘区内では確認できなかったが周辺台地で確認されている姶良丹沢パミス層の上位の層に位置する。このような姶良丹沢パミス層と両輝石量の極大点の位置的関係は、武蔵野台地と一致するものであり、No.22が採取された層が、武蔵野台地第１黒色帯（第Ⅴ層）に相当する層と考えられる。

4.　層序に関する問題点

今回の鉱物分析により、関東ローム層の薄く、肉眼によるいくつかの層区分が困難であるこの地域の台地においても、武蔵野・相模野台地と充分に対応できるものと言える（第８図）。先土器時代の研究において、遺物包含層であるローム層の研究は、大きな役割を果してきている。たとえば、環境の復元、石器群の相対的年代、そして石器群の分析、研究、また他の地域との比較に重要な位置をしめているものと言える。本遺跡では、調査時に確認できなかった関東ローム層中で特徴をもち鍵層となっている第１黒色帯相当層も、鉱物分析により認められた。しかし、今回の鉱物分析のみにより、この層の存在をこの地域で認めることは性急すぎる結論かもしれない。本遺跡ではこの層の遺物は検出されなかったが、今後、この問題をより明らかにして行くには、他の遺跡で検出されている遺物によって層序を含めた考古学的見地による先土器時代の研究が必要なことと考える。

層位に依存することの多い先土器時代の調査・研究は、１つの台地または地域で統一された層位に基づいて行なわれることが望ましいと思う。しかし肉眼的観察による層序の把握が難しい下総台地においては、自然科学、考古学の研究により、層位を統一、確立していくことが、今後の先土器時代の研究を進めていくうえで、大きな課題になるものと思われる。

第３章　遺構と遺物

第１節　先土器時代

先土器時代の遺跡において、住居跡等の構築物が検出されることは極く稀れなことであり、多くの場合、石器・剥片類が集中あるいは単独で検出される。このような遺物の出土状態を「石器群」、「ブロック」、「ユニット」と呼称して、先土器時代の研究の中で、当時の人間の行動様式を把握するうえでの単位としてとらえられている。この「石器群」、「ブロック」、「ユニット」と呼称されている石器・剥片類の集中部に礫群、配石、焼土、炭化物片などが伴う例も多くみられ、人間の行動様式をより具体的にしている。

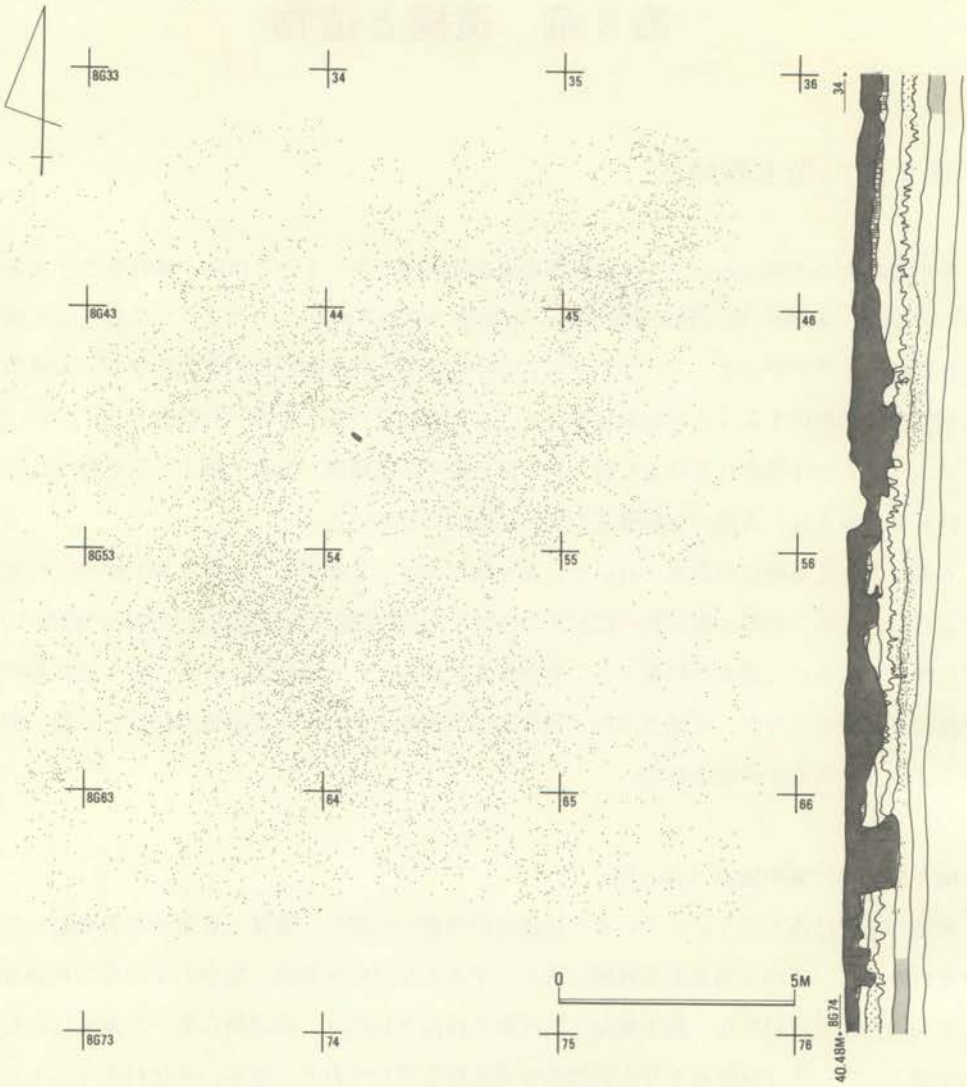
本遺跡の先土器時代の調査において、炭化物片をローム層中よりかなり多く検出した地点が確認されたため、石器・剥片類の広がりのみでなく、炭化物片の分布状態や性格の把握のため、炭化物片の広がりも調査の対象として発掘作業を進めた。その結果、石器・剥片類の集中地点は検出されなかったが、５地点の炭化物片集中部が検出され、うち２地点には、石器・剥片類が２、３点であるが検出された。

No.１炭化物片集中地点（第９図）

台地の北側に浅く入り込んでいる谷に接した地点に位置し、第Ⅳ－Ⅵ層から第Ⅶ層にかけて分布がみられ、その主体部を第Ⅶ層に置く。平面的な分布状態は、集中の中心部から径５cm、長さ20cm程の炭化材片が、数本重なった状態で検出されたが、炭化物片集中の密度はむしろ周辺が濃く、ドーナツ状にかなり広範囲の分布状態を呈しており、数本の炭化材を中心とし、炭化物片が散在している状態である。遺物の出土は無い。

No.２炭化物片集中地点（第10、14図　図版４）

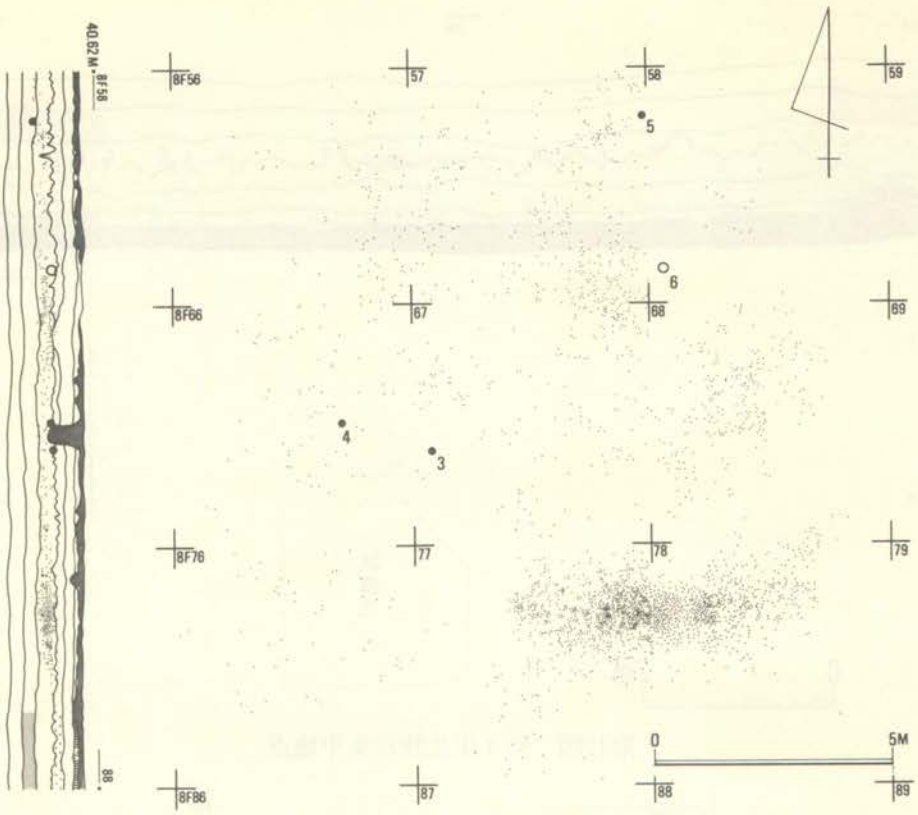
No.１炭化物片集中地点より、東へ約30ｍ離れた台地平坦面に位置し、第Ⅳ－Ⅵ層中位に主体部を置く。平面的分布状態は、８Ｆ77・78グリッドにかけて６×４ｍ程の密な集中部がみられ、さらに北側へ広がりを持つこの集中地点からは、剥片３点（３～５）、礫１点（６）が検出されている。これらの石質はいずれも安山岩であり、３は背面に礫面を残している縦長剥片で、打面、打瘤も残っている。４は一部に礫面を残し、背面には数条の剥離痕があり、縦長剥片剥離した両設打面をもつ残核片といえるものである。打面には、わずかに調整剥離が施されている。



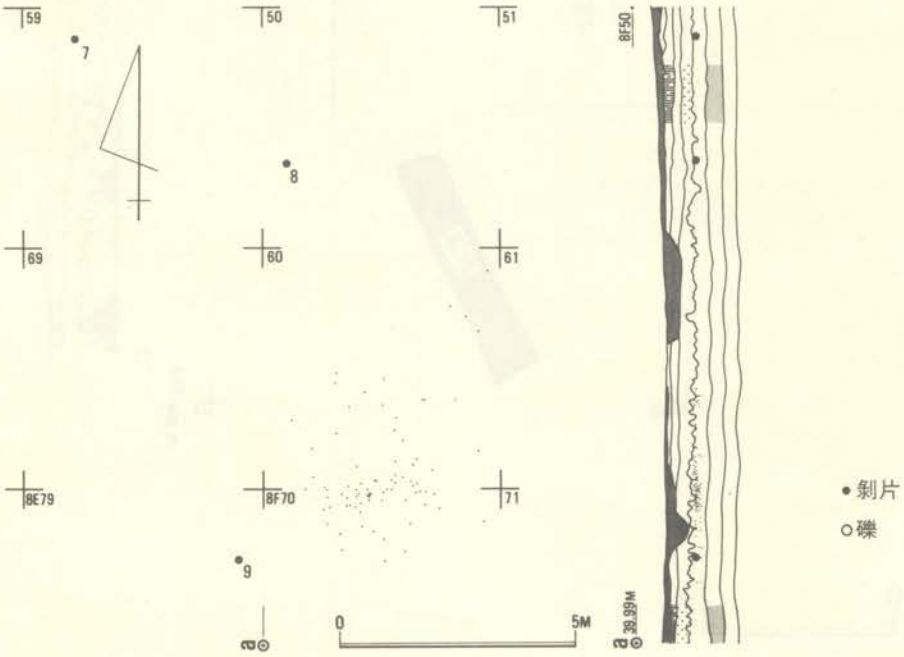
第９図　No.１炭化物片集中地点

No.３炭化物片集中地点（第11、14図）

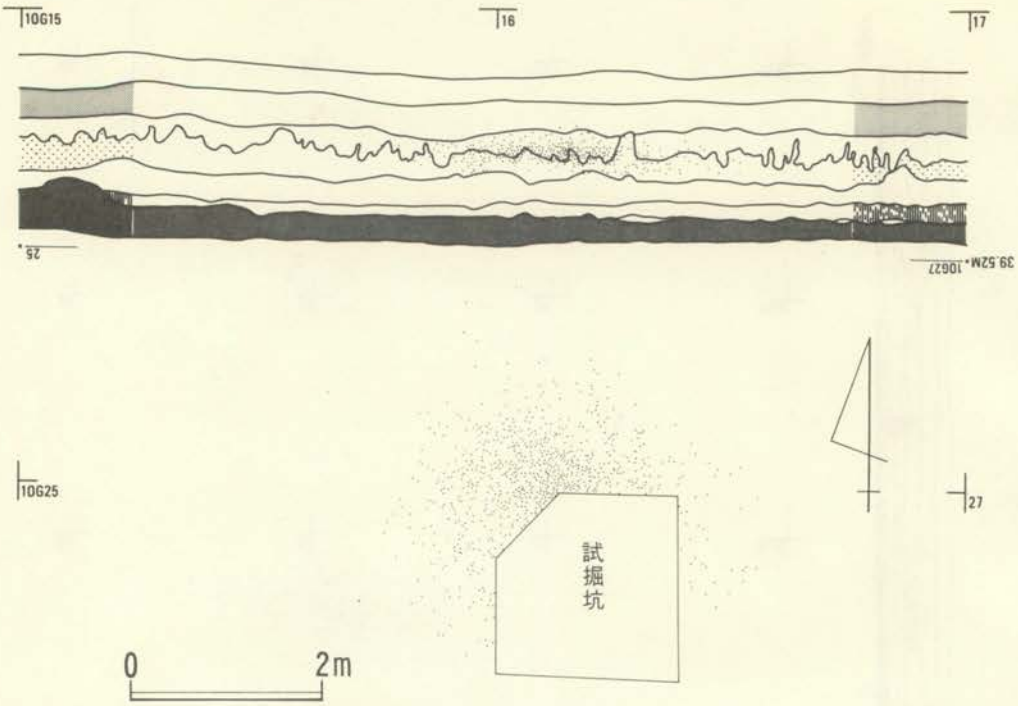
ほぼ台地の中央部に位置し、第Ⅳ－Ⅵ層上部から検出されている。平面的分布は、集中部と言うほどの密な部分はなく、わずかに散在している状態であるが、この集中地点の南側はすでに立川ローム層最下部近くまで削平されており、地形による立地を考えると主体部はむしろ削平部にあったと考えられる。また３点の遺物が検出されているが、その分布も南側に主体を置いたものと考えられる。遺物は、剥片２点（７、９）と調整加工がわずかに施された剥片１点（８）でいずれも頁岩製である。



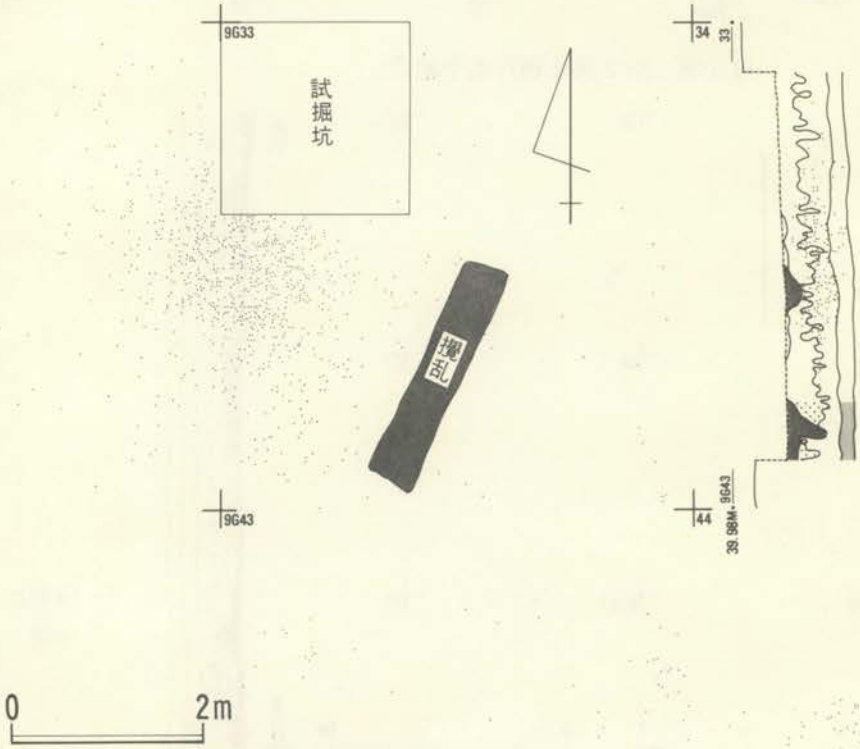
第10図　No.2 炭化物片集中地点



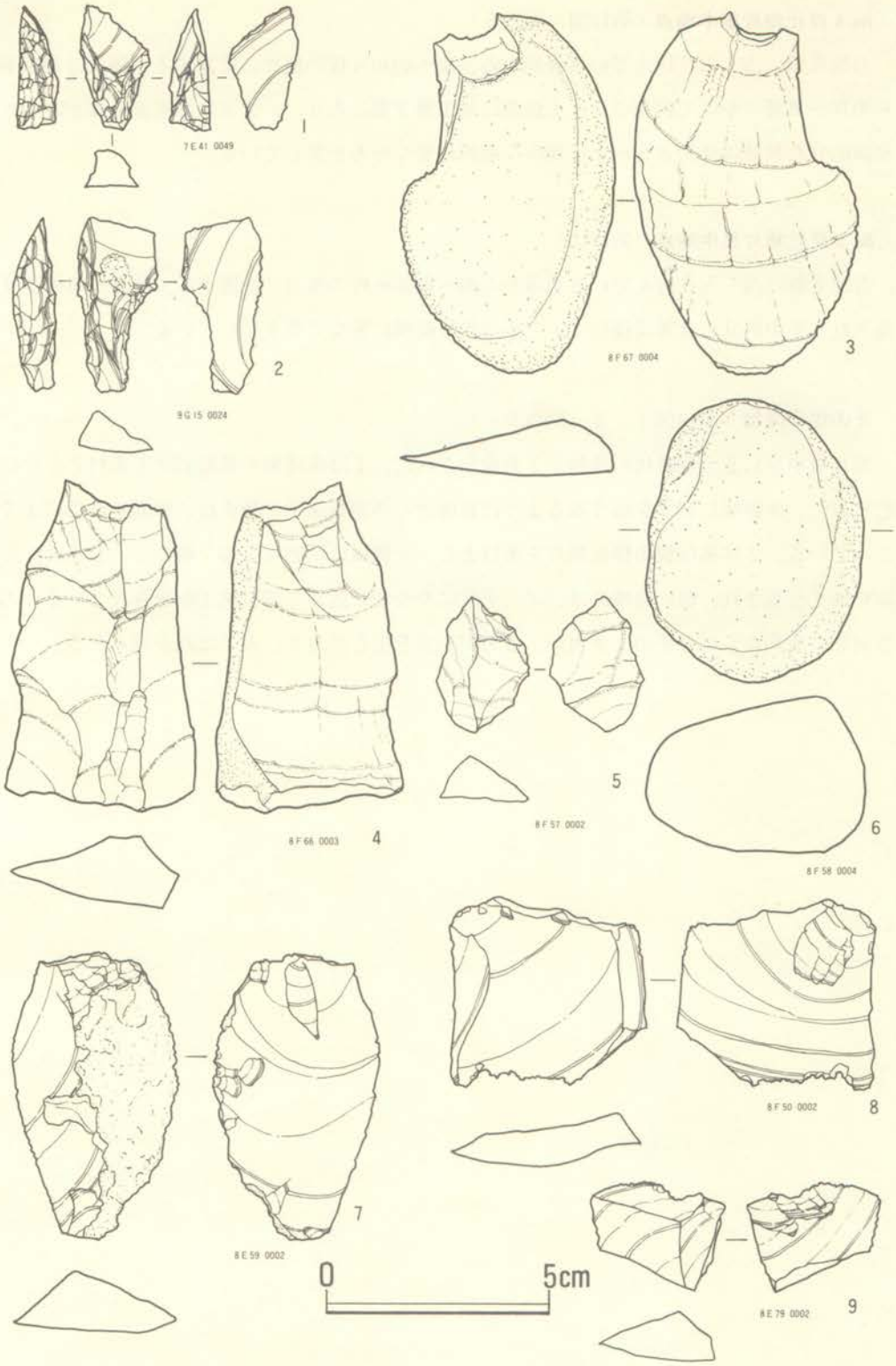
第11図　No.3 炭化物片集中地点



第12図　No.4 炭化物片集中地点



第13図　No.5 炭化物片集中地点



第14図　先土器時代出土遺物

No. 4 炭化物片集中地点（第12図　図版５）

台地北側に浅く入り込んでいる谷頭から、南へ約40ｍ程の地点に位置する。層位は第Ⅲ層から第Ⅳ－Ⅵ層にかけて検出され、主体部は第Ⅲ層下部にあり、レンズ状の垂直分布がみられる。平面的分布状態は径約２.５ｍと小規模な範囲に密な分布を呈している。

No. 5 炭化物片集中地点（第13図）

台地北側に浅く入り込んでいる谷頭から西へ約30ｍ程の地点に位置する。第Ⅳ－Ⅵ層より検出され、平面的分布状態は径約２ｍと小規模な範囲に密な分布を呈している。

その他の遺物（第14図１、２　図版６）

第Ⅱ層中から先土器時代の遺物が２点検出された。１は瑪瑙製の横長剥片を素材とした切出形石器で、両側縁に剥片を切り取るように裏面からの調整加工が施され、背面の基部にまでおよんでいる。２は瑪瑙製の横長剥片を素材とし、一側縁には剥片を切り取るような裏面からの調整加工が施され、他の側縁には、ノッチ状にやや切り込んだ調整加工が施されている。刃部は剥片の鋭利なものをそのまま用い、直刃的形状を呈しており、刃こぼれが見られる。

第２節　縄文時代

1．遺　構

今回の調査で検出された遺構は、いずれもＢ地点からのものであり、炉穴１基、土壙１基、陥し穴状土壙２基と遺物の出土量に比べ非常に数が少ない。また時期については、陥し穴状土壙は、縄文時代といった漠然としたものしか今回の調査ではつかめなかったが、炉穴、土壙については、このＢ地点の出土遺物の主体となる鵜ガ島台期のものと考えられる。

001遺構（第15図　図版11）

この遺構は、Ｂ地点の台地のほぼ中央の平坦部に位置する炉穴跡である。形状は、炉部と足場部の境がくびれたやや歪んだひょうたん形を呈している。さらに、北側に浅い楕円形の掘り込みがあるが、炉穴の埋没後に掘り込まれたもので、時期の異なった落ち込みであり、その性格は不明である。炉穴の底面は平坦な足場部から炉部に向って緩く傾斜している。足場部は、遺構検出面から約10cmの掘り込みで、底面はそれほど踏み固められていない。炉部は、遺構検出面より約40cm掘り込まれ、多量の焼土が検出された。底面はかなりの熱を受けた状態で、ローム層がボソボソの状態になっている。また、炉部西側にテラスが設けられている。遺物は、土器片９点、剥片類３点と少量で、いずれも小破片であり、底面からかなり浮いた状態で検出されているため流れ込んだものと思われる。土器はいずれも条痕文のみが施文されたものである。

覆土

第１層　暗褐色土層、ローム粒、焼土粒を極く少量含む。

第２層　黒褐色土層、ローム粒、焼土粒を少量含み、堆積にしまりがある。

第３層　黒褐色土層、ローム粒、焼土粒を多量含む。

第４層　暗褐色土層、焼土粒を多量にローム粒を少量含み、堆積にしまりがない。

第５層　黒褐色土層、焼土粒を多量にローム粒も多く含む。

第６層　茶褐色土層、焼土ブロックが多く含まれ、また熱を受けたローム粒も少量含まれて、堆積にしまりが少なくパサパサした状態である。

第７層　黄褐色土層、ロームブロックが多量に含まれ、堆積にしまりがある。

第８層　暗褐色土層、ロームブロックを多量に含み、焼土ブロックを少量含む。

第９層　黒褐色土層、ローム粒、ブロック、焼土粒、ブロックを多量に含み、炭化物片も少量含む。

第10層　褐色土層、ローム粒を多量に含み、焼土粒を少量含む堆積にしまりがない。

第11層　黄褐色土層、炉床面で熱を受けたロームブロック層であり、ボソボソした堆積状態である。

第12層　暗褐色土層、ローム粒を多量に含み焼土粒も若干含まれる。堆積にしまりがある。

第13層　暗褐色土層、第12層に比べローム粒が多く含まれ、焼土粒は全く含まれていない。

第14層　暗褐色土層、ローム粒、焼土粒を多量に含む。

002遺構（第15図　図版12）

この遺構は、Ｂ地点の包含層遺物集中分布範囲の北端に位置している。形状は長軸70cm、短軸50cmのやや歪んだ楕円形を呈する。長軸の断面形は西側壁より緩く傾斜し、テラス部を経て底部となる。底部はややオーバーハングしており、固くしまっている。遺構検出面から底部まで約35cmの深さである。この遺構の平面、断面の形状は、炉穴跡を思わせるものである。また底部周辺の覆土中より多量の炭化物が検出されているが、焼土は全く検出されず、壁面、底部に熱を受けた痕跡が認められなかったので、土壙としてこの遺構をとらえた。遺物としては、土器片が４点検出されているが、いずれも条痕文のみの小破片土器で、底面からかなり浮いている。

覆土

第１層　黒褐色土層、第Ⅱｃ層の影響を強く受けた層である。

第２層　黄褐色土層、ローム粒、ブロックが主体となった層であり、部分的に炭化物片が集中して検出された。

第３層　褐色土層、ローム粒、ブロックを多量に含み炭化物片を極く少量含む。

第４層　暗褐色土層、ロームブロック、炭化物片を多量に含む。

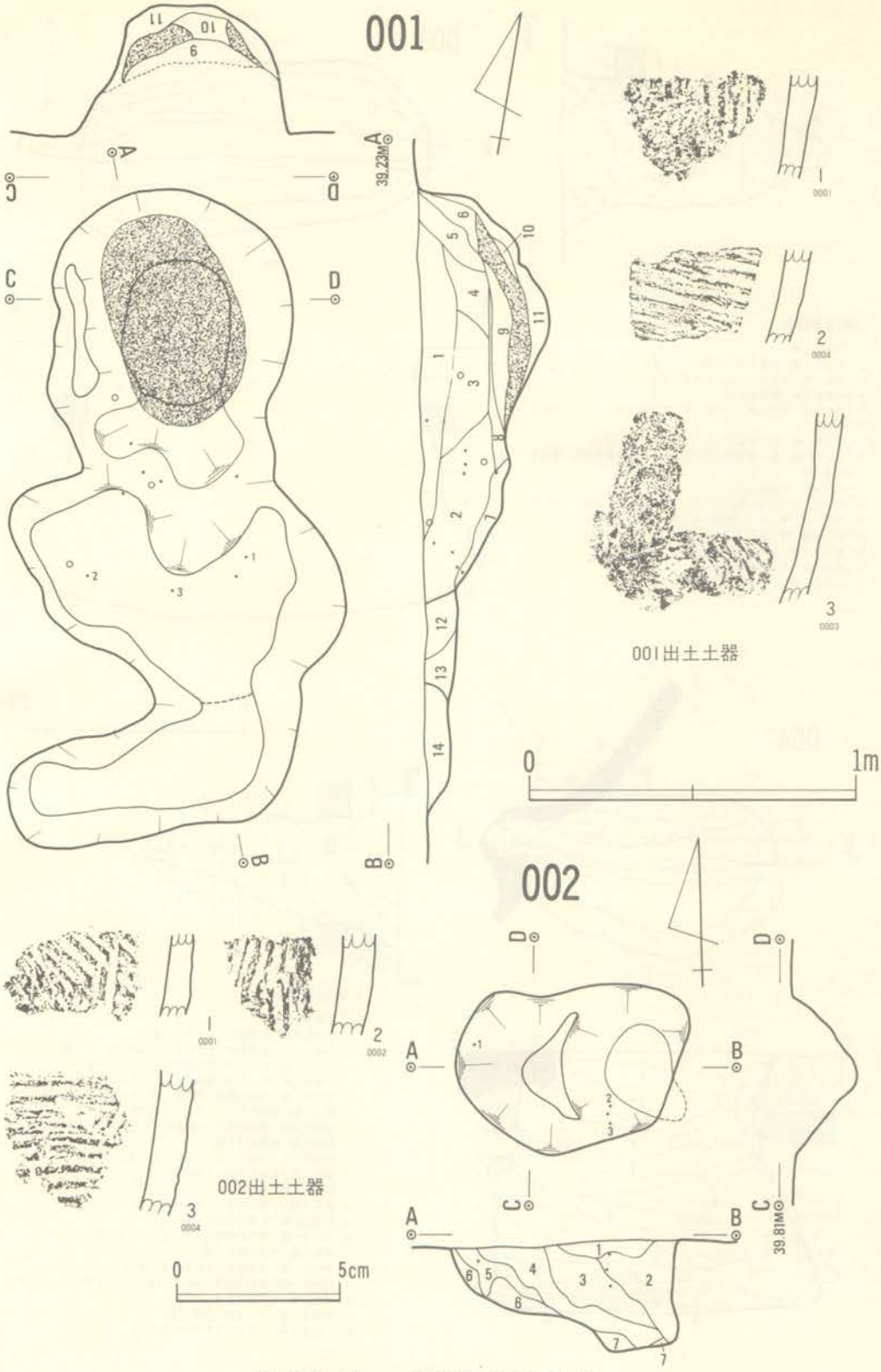
第５層　褐色土層、ロームブロック、炭化物片を少量含む。

第６層　黄褐色土層、ローム粒、ブロックを多量に含み、堆積にしまりがある。

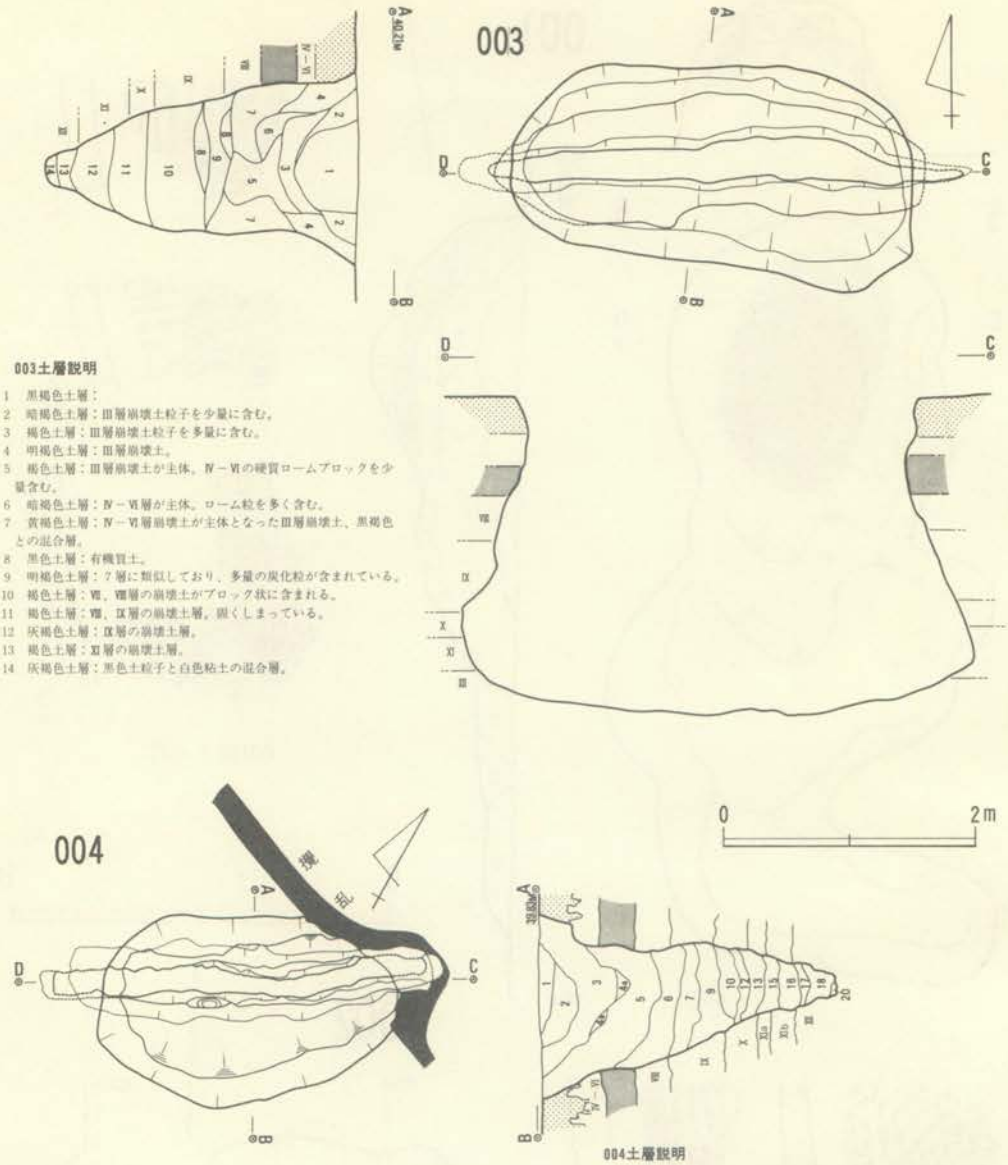
第７層　黄褐色土層、壁上部のローム層の崩壊土層。

003遺構（第16図　図版13）

この遺構はＢ地点の北側の包含遺物集中分布範囲から離れた地点に位置する陥し穴状土壙である。形状はＥ－Ｗに長軸をもつ楕円形を呈する。規模は、開口部長軸3.2ｍ、短軸1.6ｍ、底部長軸４ｍ、短軸0.3ｍ、深さ2.5ｍと大形のものである。長軸の断面形は袋状に下部が広がり、オーバーハングして底部に至る。底面は平坦であるが両端部が緩く上がっており、弓状の形状を呈する。短軸の断面形は、開口部より緩いくびれを途中にもちながら徐々にすぼまりながら底部に至っている。覆土の堆積状態は、ほぼレンズ状堆積であるが、第10層以下はローム層の２次堆積したものであり、壁部の崩壊したものがかなりの短時間で堆積したものと考えられる。しかし第10層においては、非常に固くしまっており、ほぼ水平に厚く堆積していることから、この層については人為的な堆積も考えられる。また、第14層は有機質土の堆積層である。



第15図　001、002遺構（遺物1/2）



003土層説明

1　黒褐色土層：
2　暗褐色土層：Ⅲ層崩壊土粒子を少量に含む。
3　褐色土層：Ⅲ層崩壊土粒子を多量に含む。
4　明褐色土層：Ⅲ層崩壊土。
5　褐色土層：Ⅲ層崩壊土が主体。Ⅳ－Ⅵの硬質ロームブロックを少量含む。
6　暗褐色土層：Ⅳ－Ⅵ層が主体。ローム粒を多く含む。
7　黄褐色土層：Ⅳ－Ⅵ層崩壊土が主体となったⅢ層崩壊土、黒褐色との混合層。
8　黒色土層：有機質土。
9　明褐色土層：７層に類似しており、多量の炭化粒が含まれている。
10　褐色土層：Ⅶ、Ⅷ層の崩壊土がブロック状に含まれる。
11　褐色土層：Ⅶ、Ⅸ層の崩壊土層。固くしまっている。
12　灰褐色土層：Ⅸ層の崩壊土層。
13　褐色土層：Ⅺ層の崩壊土層。
14　灰褐色土層：黒色土粒子と白色粘土の混合層。

004土層説明

1　黒褐色土層：
2　黒褐色土層：Ⅲ層崩壊土をブナ状に含む。
3　暗褐色土層：Ⅲ層崩壊土と黒褐色土のほぼ同量の混合層。
4ａ　褐色土層：Ⅲ層と黒褐色土混合層。ロームの比率がやや多い。
4ｂ　褐色土層：Ⅲ、Ⅳ層の崩壊土。
5　暗褐色土層：黒色有機質土が主体。ローム（Ⅳ－Ⅵ）層を多く含む。
6　褐色土層：Ⅶ層をブロック状に多量に含む。
7　灰褐色土層：Ⅶ層崩壊土が主体をなす。有機質土を少量含む。
8　褐色土層：Ⅶ層崩壊土層。
9　黄褐色土層：Ⅸ層をブロック状に多量に含む。堆積にしまりあり。
10　褐色土層：Ⅸ層をブロック状に含む。
11　灰褐色土層：Ⅸ層崩壊土。
12　褐色土層：Ⅹ層がブロック状に多量に含まれている。
13　暗褐色土層：Ⅹ層が粒状に主体となす。
14　黒褐色土層：黒色有機質土主体。Ⅸ、Ⅹ層を多量に含む。
15　黒色土層：黒色有機質土層。
16　暗褐色土層：Ⅺ層崩壊土を粒状に多く含む。
17　暗褐色土層：Ⅺ層の崩壊土を粒状に多く含み、有機質土を多く含む。
18　黒色土層：有機質土の単一層。
19　暗褐色土層：Ⅸ、Ⅹ層の崩壊土層。
20　灰褐色土層：白色粘土と黒色土の混合土。

第16図　003、004遺構

004遺構（第16図　図版14）

この遺構は、003遺構と同様に陥し穴状土壙と呼ばれるものである。形状はN－60°－Eに長軸をもつ楕円形を呈する。規模は開口部長軸2.5ｍ、短軸1.4ｍ、底部長軸3ｍ、短軸0.2ｍ、深さ2.4ｍと003に比べやや小振りであるが、平面形、長短軸の断面形はよく似ている。覆土の堆積状態もレンズ状のものであり、下位のものは壁部の崩壊土が主体となったものである。底部付近には、有機質土の堆積がみられる。

本遺跡で陥し穴状土壙の検出例は、第1、第2次調査において今回の2例しかなく、遺物の出土例もないため、時期の判断は困難であるが、周辺の遺跡からの検出例から縄文時代の前半のものと考えてよいと思われる。そしてこの2基の陥し穴状土壙は、覆土堆積状態において多少異なっているが、形状等ほぼ同じであることから、同一時期のものと考えられる。陥し穴状土壙は、その形態においていくつかに分類されているが、その性格、構造については不明な点が多い遺構である。本遺跡のように広い面積に対し、わずか2例という稀薄な分布や003遺構にみられた覆土堆積状態や底部付近にみられる有機質土層などは、この土壙の性格、構造を把握するうえで、1つの手掛かりとなりうる資料と思われる。

2.　遺　物

包蔵層の出土遺物は、A地点とB地点の2地点に集中して確認された（第4図）。遺物はいずれの地点も早期のものが主体をなし、後期までのものが出土している。このうち土器については、大別すると以下の5群に分類できる。

第1群土器　縄文時代早期沈線文系土器。田戸下層式、田戸上層式など。

第2群土器　縄文時代早期の条痕文系土器。鵜ガ島台式が主体となる。本遺跡においてこの土器群が主体となっており、土器総出土量の95%以上を占める。

第3群土器　縄文時代前期後半の土器。

第4群土器　縄文時代中期の土器。五領ヶ台式、阿玉台式、加曽利E式など。

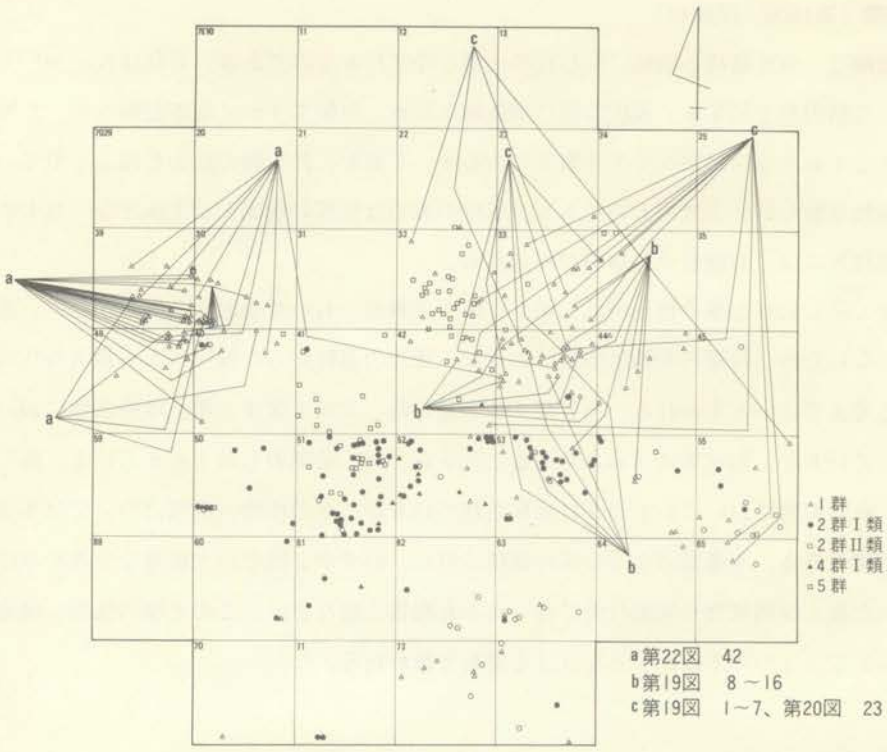
第5群土器　縄文時代後期の土器。

以上のように大別した訳であるが、各土器群はさらに細分することができる。この他に石器・剥片類の出土量も多く、それらを地点ごとに順をおって述べることにする。

(1)　A地点

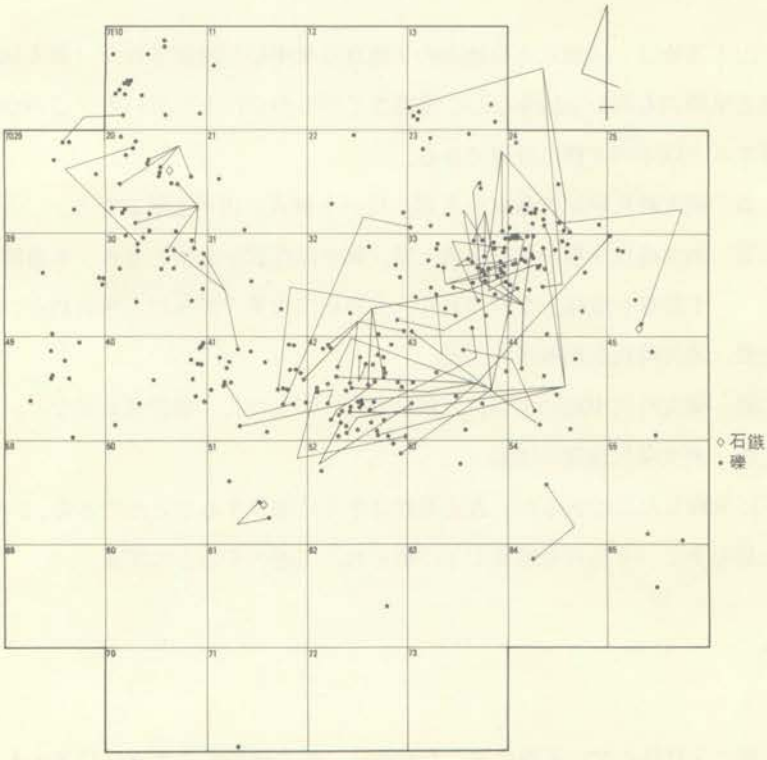
台地の北側に入り込んでいる谷に接した北西に、緩く傾斜する地点に位置する。

発掘区の面積は約1,000㎡で、遺物は第Ⅱb・Ⅱc層から検出され、その主体をⅡc層に置



第17図　Ａ地点土器出土状況図

0　10m



第18図　Ａ地点石器・礫出土状況図

く。平面的分布は、いくつもの集中部をもった分布状態であるが、同一個体土器、同一母岩が破損、粉砕した状態と考えられるものである（第17、18図）。また、土器の分布状態と石器類の分布状態は、重ならずわずかにずれている。

ア．土　器

出土総数約500点であり、そのうち5個の完形、半完形品が復元できた。

第1群土器

早期中葉沈線文系土器であり、その中でも主として田戸下層、上層式に比定されるものである。

第Ⅰ類土器（第19図1～7、第20図22～23　図版8、9）

田戸下層式土器を本類土器とした。土器の内外面を研磨した上に、沈線文、貝殻腹縁文による文様が施文されたものである。22は口縁は平縁であり、口唇部が丸味を帯びたものである。器形は、胴部にややふくらみをもつ尖底土器で、文様は、平行沈線文と爪形状文により構成されている。口縁部には、2条の平行沈線が廻ぐり、胴部には、縦位に押捺による爪形状文が施文され、この土器を6分割しており、その爪形状文間を2～4条の平行沈線により、菱形状に結んでいる。このような文様構成は、田戸下層式土器の典形的なものと言える。23は口縁部、口唇部の形状、器形は、22とほぼ同様のものと言える。しかし文様は平行沈線の代りに、アナダラ属の貝殻腹縁文を文様要素として多用しており、その他に爪形状文、沈線がわずかにみられる。ただ資料が、いずれも断片的なためはっきりとした文様構成は把握できないが、ほぼ22と同様なものと考えられる。口縁部には、貝殻腹縁文を平行に連続的に押捺し、胴部では爪形状文の間を菱形状に結ぶようにかなり密な状態で貝殻腹縁文が押捺されている。またこの貝殻腹縁文の輪郭を定めるような沈線が施されているものもみられる。

第Ⅱ類土器（第19図8～16、第22図　図版8、9）

田戸上層式土器を本類とした。土器の内外面を研磨した上に沈線、貝殻腹縁文により文様が施されたもので、胎土中にわずかに繊維が含まれている。8～13は、同一個体の土器と考えられるものであり、器形は42と同じような口縁部に緩いくびれをもつ大形の土器と思われる。口縁のくびれ部には、波状沈線をはさんだ平行沈線が横位にはしり、その下部に逆三角形状の区画状文が施され、その中央部に沈線による円形文とこれを中心とした貝殻腹縁文による孤状の充填文が施文されている。この円形文と区画状文との交叉部には、刺突文が押捺されている。また胴部には、平行沈線による孤線文が連続して引かれており、この平行沈線の間にも貝殻腹縁文が押捺されている。42は半完形品の土器であり、口縁は平縁又は波状か不明であるが、口縁部には1段の緩いくびれを有し、やや胴部にふくらみをもち、丸底の底部へとつづく大形の土器である。口唇部の両端には刻目をもち、断面形は角ばっている。口縁部の文様構成は、口縁に沿って2条の平行沈線が廻り、この平行沈線とくびれ部の間には平行沈線による鋸歯状

文と孤線文描出され、さらに貝殻腹縁文が充塡文として押捺されている。くびれ部には、２条の平行沈線が緩く曲線を描きながら廻っており、その間にも貝殻腹縁文が押捺されている。胴部は、上位、中位、下位に横位にはしる平行沈線により、２段に文様部を区画され、その区画内には独特な波状文が連続して描出され、さらに充塡文として貝殻腹縁文が押捺されている。そして底部は、無文となっている。14～16は平行沈線文内に刻目が施されているものである。

この他に、本群に属する底部が２点出土している。（第21図37、38）

第２群土器（第19図17～21　図版８）

広義の茅山式土器を本群とした。いずれも小破片であり、条痕文のみにより施文されている。

第４群土器（第20図24　図版９）

胴部下半部から底部にかけての土器片であり、上部は無文帯となっており、そこから無節の結束羽状縄文が、縦位方向に施文されている。これは五領ヶ台式土器の特徴的な文様といえる。

第５群土器（第21図34～36　図版10）

いずれも把手の破片であり、縄文時代後期初頭のものである。

その他の土器（第20図25、第21図26～33　図版９、10）

26～33は同一個体の深鉢土器片であり、これと25はいずれも胎土中に小礫を含み、焼成状態等も類似している。また器面調整においても、内外面に顕著な磨きがかけられ、そして口縁は平縁で、やや角張った形状を呈している。口縁部は、22は緩くくびれ、25は比較的強くくびれ段を有する。26～33は荒い格子目状沈線文が施文され、25は無文土器であるが、口縁上面から見た形状が、隅丸方形を呈している。この２つの土器は、資料例が少なく時期の判断が難しいが、第５群土器に属するものと考える。

イ．石　器

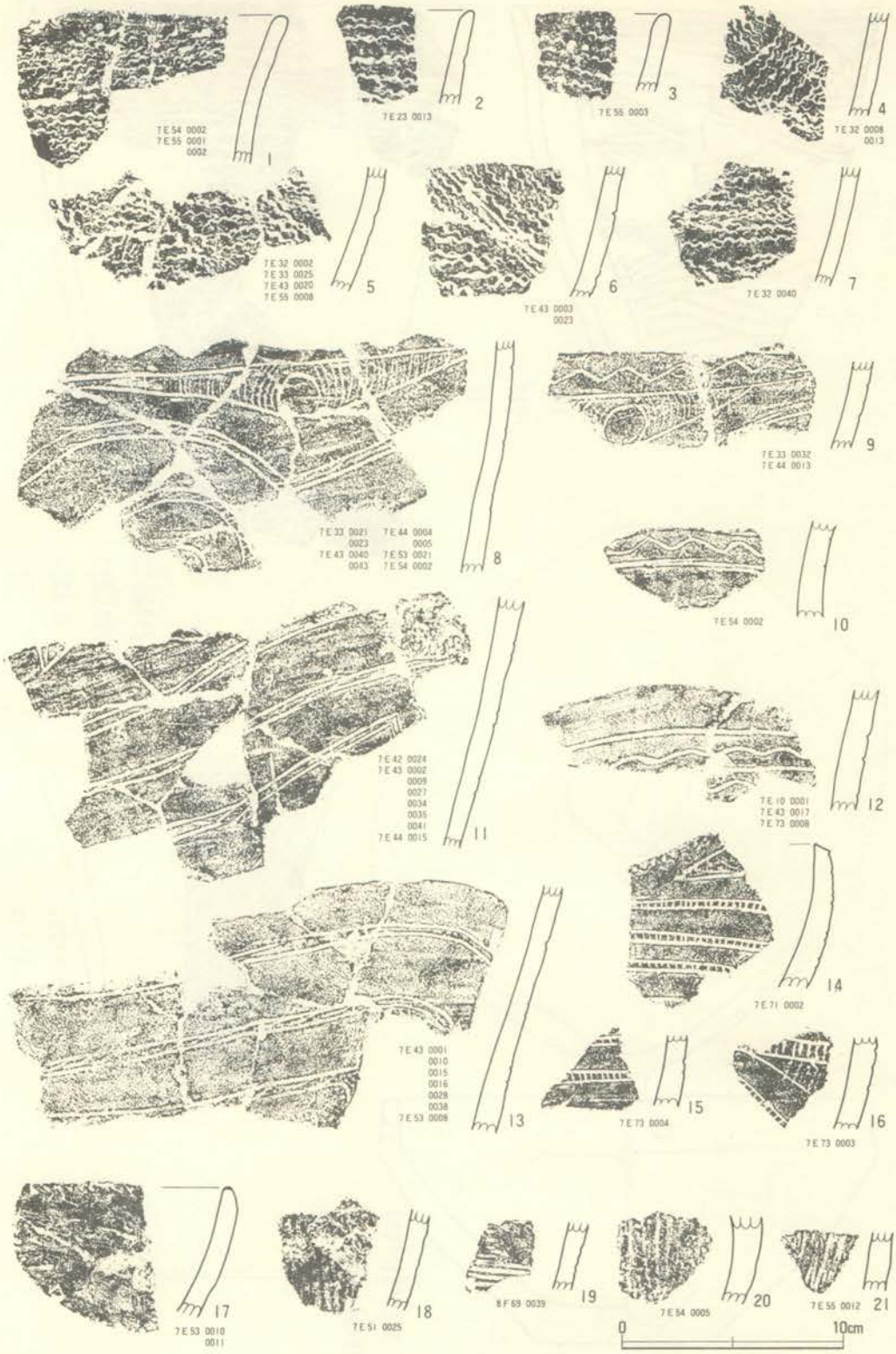
出土総数313点、その内訳は石鏃３点、礫片310点と定形的な石器は少なく、礫片がその主体をなす石器組成と言える。

○石鏃（第21図39～41　図版９）

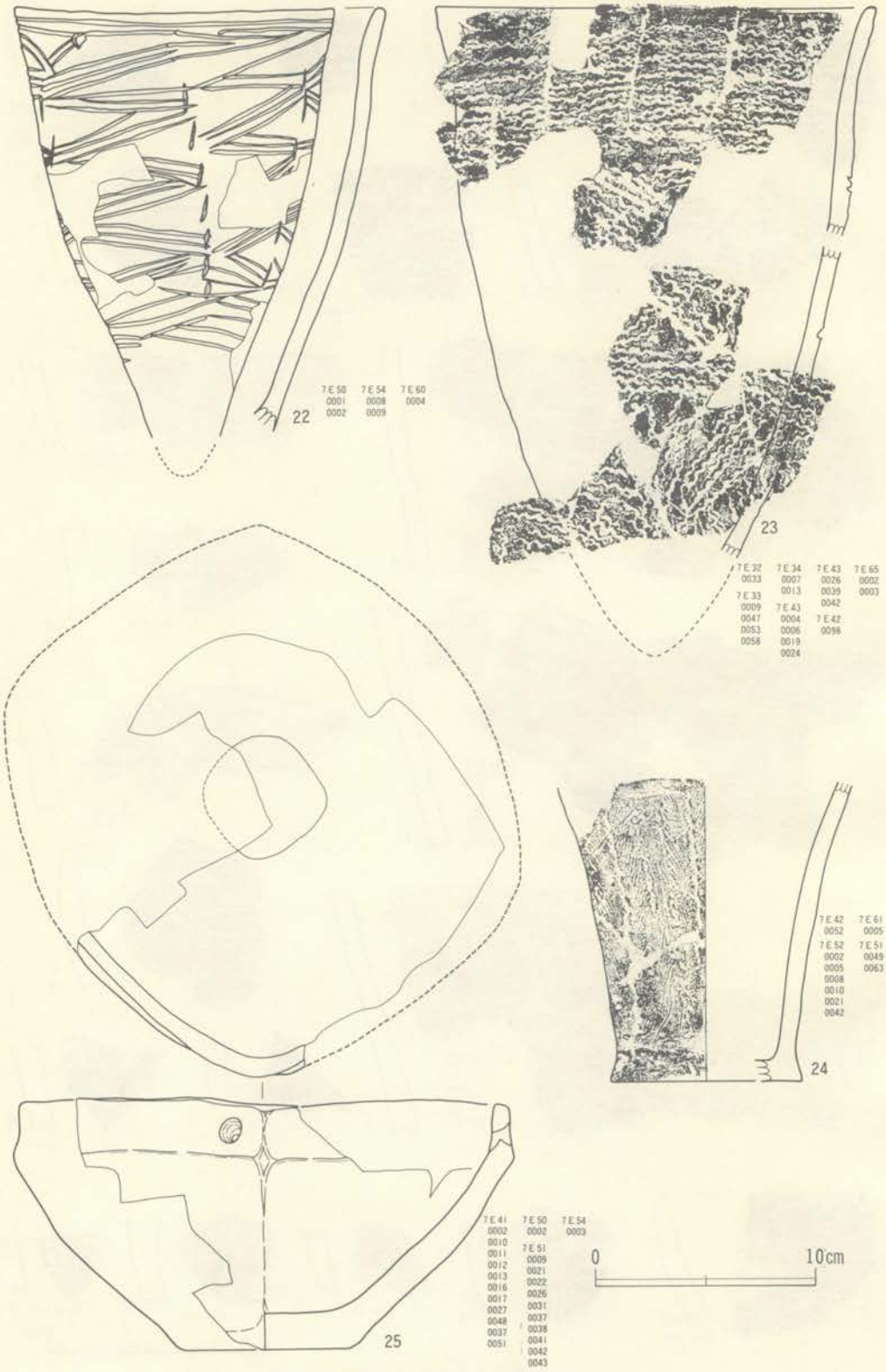
39は黒曜石製のもので脚が破損している。40は硅岩製の三角鏃である。41は砂岩製の完形品である。これらの時期的な決定は難しいが、後に述べるＢ地点出土の石鏃と比較して縄文時代早期後半のものと思われる。

○礫片

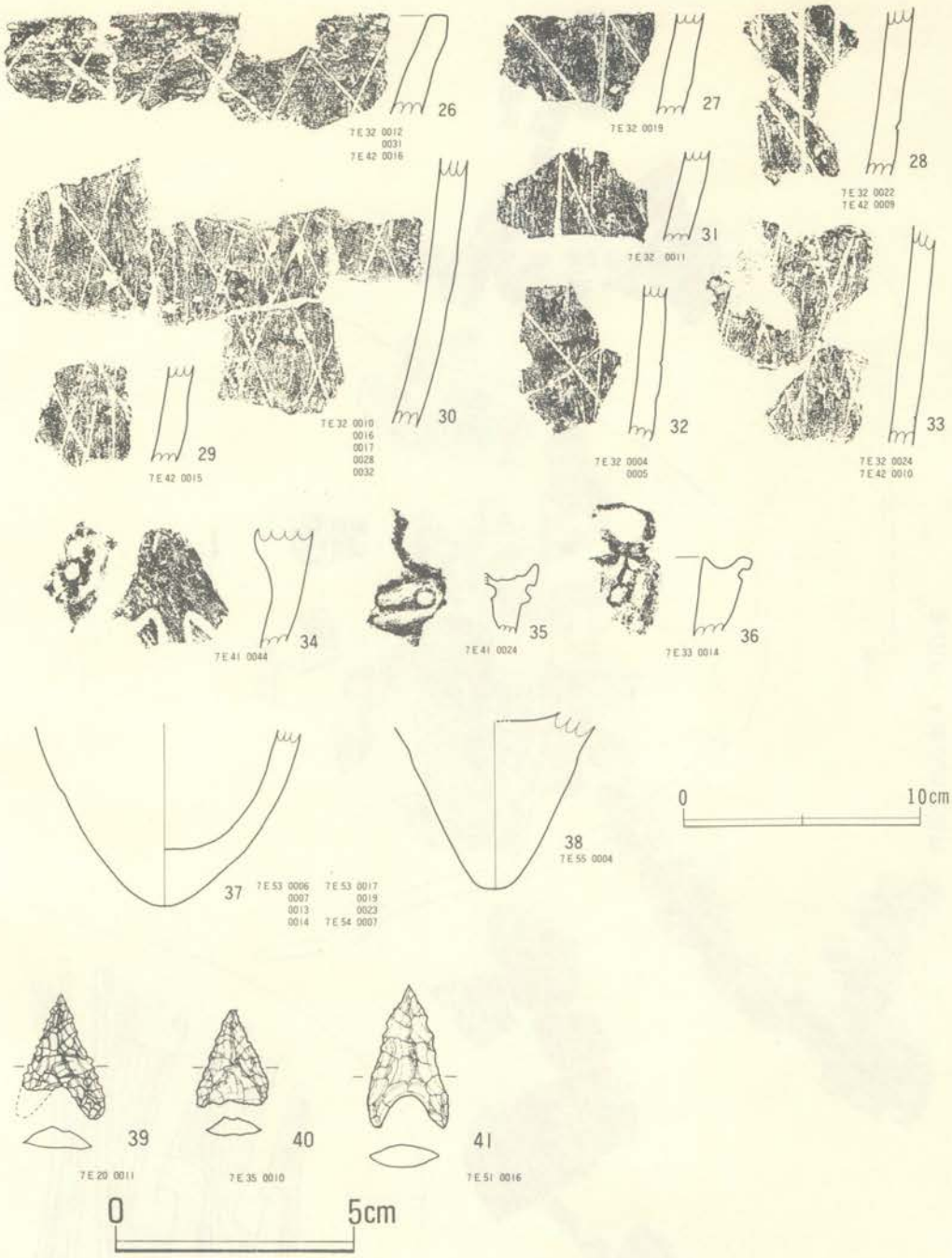
礫片はいずれも拳大のものがいくつかに破損し散在している状態のものであり、またその２割近くのものに熱を受けた痕跡がみられる。これらを石質別にみると、硅岩107点、砂岩63点、石英斑岩53点、流紋岩35点の順であり、さらに安山岩、ホルンフェルス、凝灰岩、石英、シルト岩などが少数みられる。これらの礫片の分布は、ほぼ同一時期のものと考えられるもので、沈線文系土器の分布に関係をもつものと思われる。



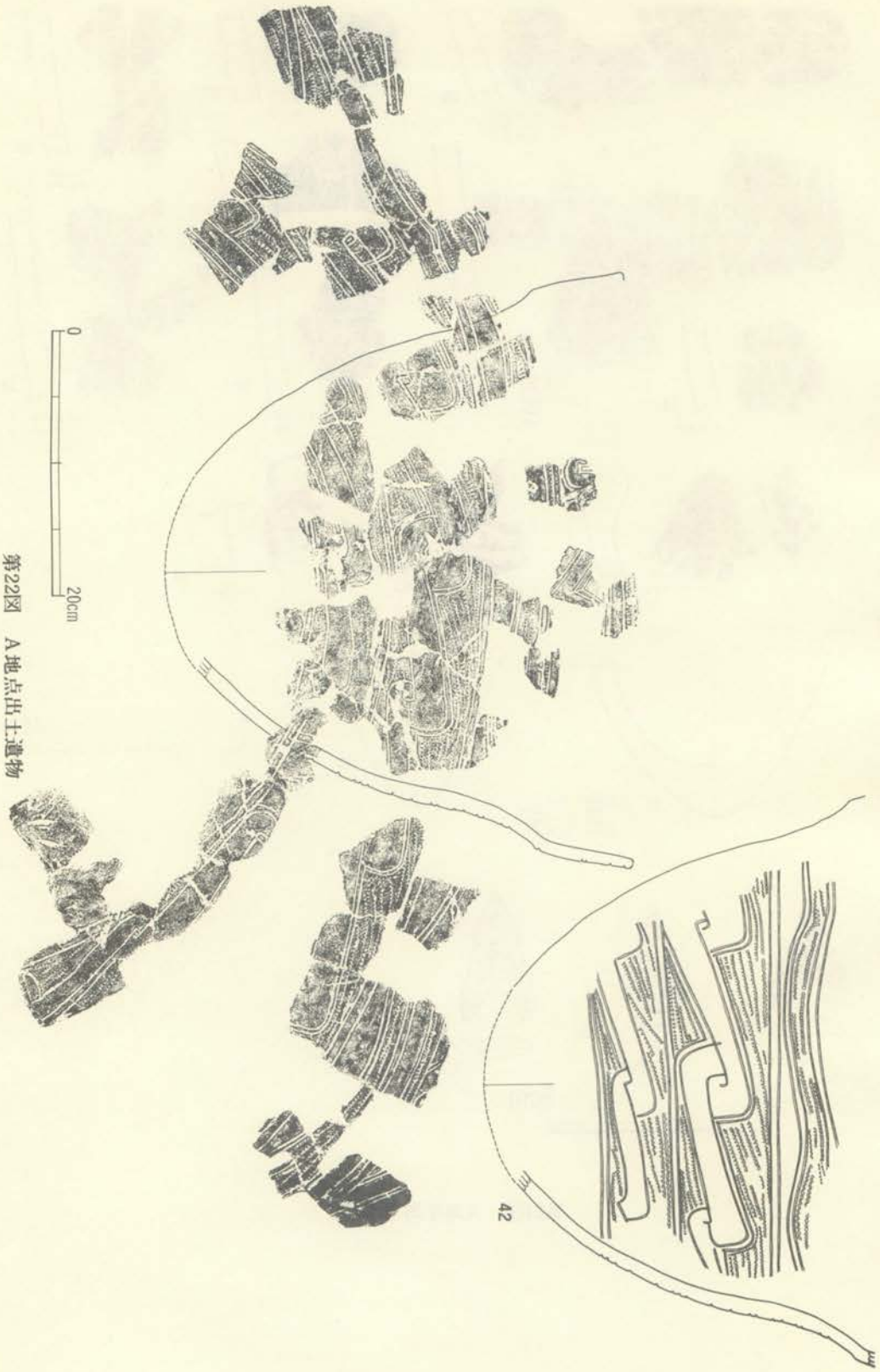
第19図　A地点出土遺物



第20図　A地点出土遺物



第21図　A地点出土遺物



第22図　A地点出土遺物

(2)　Ｂ地点

この地点は、台地の中央に入り込んでいる谷に接した第１次調査時の14地区の北側につづく台地平坦部に位置する。

発掘区の面積は約10,000㎡であり、出土遺物としては、土器類約16,000点、石器・剥片類約5,200点、その他鉄滓、古銭が少量出土している。土器類は縄文時代のもので「条痕文系」のものがその主体をなし、石器・剥片類もこれと同様のことが言える。これらの遺物は、第Ⅱｂ・Ⅱｃ層からの出土であり、その主体はⅡｃ層に置くものであるが、近年の耕作、削平により、かなりの攪乱を受けているため表土層中からの出土数も多い。遺物の平面的分布状況は、発掘区の南側に行くに従い密な分布となり、この西側はすでに削平されているが、分布は、それほど西側へ伸びるものと思われず、南北に長く伸びる分布状態である。土器類の分布は密度の濃いもので、多くの個体別の土器が破損、粉砕し、散在している状態であり（付図１）、時間差による分布の違いは認められない。石器・剥片類の分布状況も土器類のものとほぼ重なるものであるが、いくつかの集中部が見られる（付図２）。

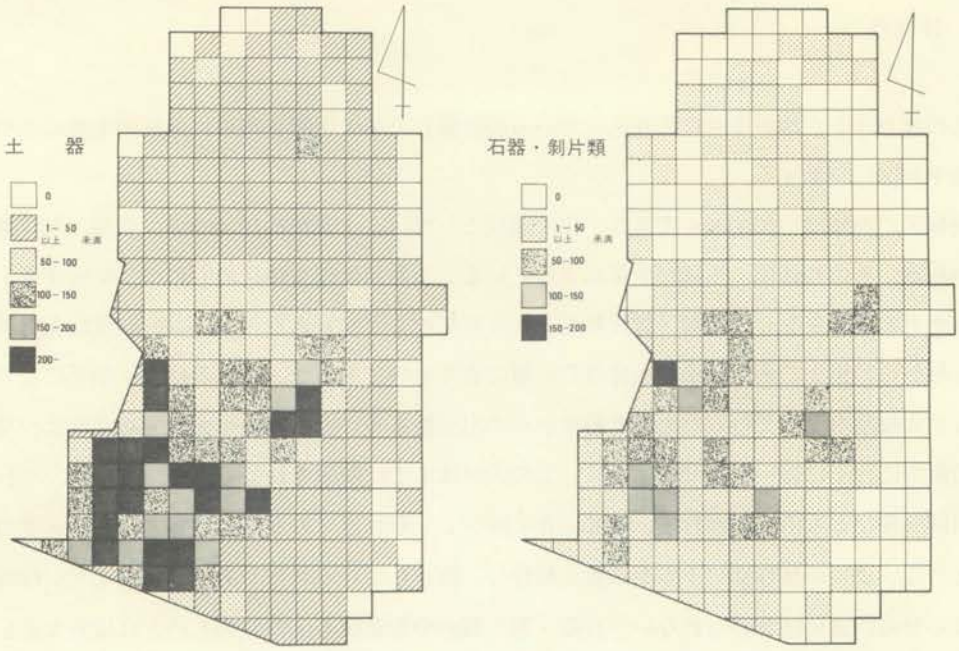
ア．土　器

第２群土器

本群の土器は、鵜ガ島台式土器が主体となった広義の茅山式土器群であり、Ｂ地点より出土した約16,000点の土器の95％以上を占めている。出土層位は、第Ⅱｃ、Ⅱｂ層に渡たり、その主体を第Ⅱｃ層に置く。さらに第Ⅰ層からも多量に出土しており層位による型式分類は困難であるが、器形、施文部位、施文方法、施文具等により、以下に述べるようにさらに分類できるものである。なお、遺物の説明を進めるにあたって、鵜ガ島台式土器の特色である区画状文は、文様帯を縦位に分割する区画状文と、さらにそれをタスキ状またはそれに近い形で文様帯を細分割する区画状文とにより構成されているが、これらは性格の異なったものと考えるため、前者を縦位区画状文、後者を横位区画状文と分けて便宜的に呼称する。そして単に区画状文と呼ぶ時は、両方のものを表わす。

第Ⅰ類土器（第24図１、２　図版17）

９点の出土例がみられ、いずれも小破片のため土器の器形等を知ることはできないが、いずれも２条の太い隆起線文により縦位区画状文が施こされ、その上には刻目が加えられている。横位区画状文は沈線によりタスキ状に描出されているものと思われる。充塡文は横位区画状文と同じ施文具によると思われる沈線を縦位方向に施こしている。本類は、野島式土器に比定されるものである。



第23図　Ｂ地点縄文時代グリッド別遺物出土図

第Ⅱ類土器（第24、25図３～42　図版17、18）

本類土器は、鵜ガ島台式土器の初期段階に位置するものであり、前段階の野島式土器のもつ特徴と鵜ガ島台式土器のもつ特徴をもった、いわば両型式の過渡期的な土器と考えられるものである。これらはさらに、縦位・横位区画状文の施文方法の違いによりＡ～Ｃ種に細分できる。

Ａ種（３～10）

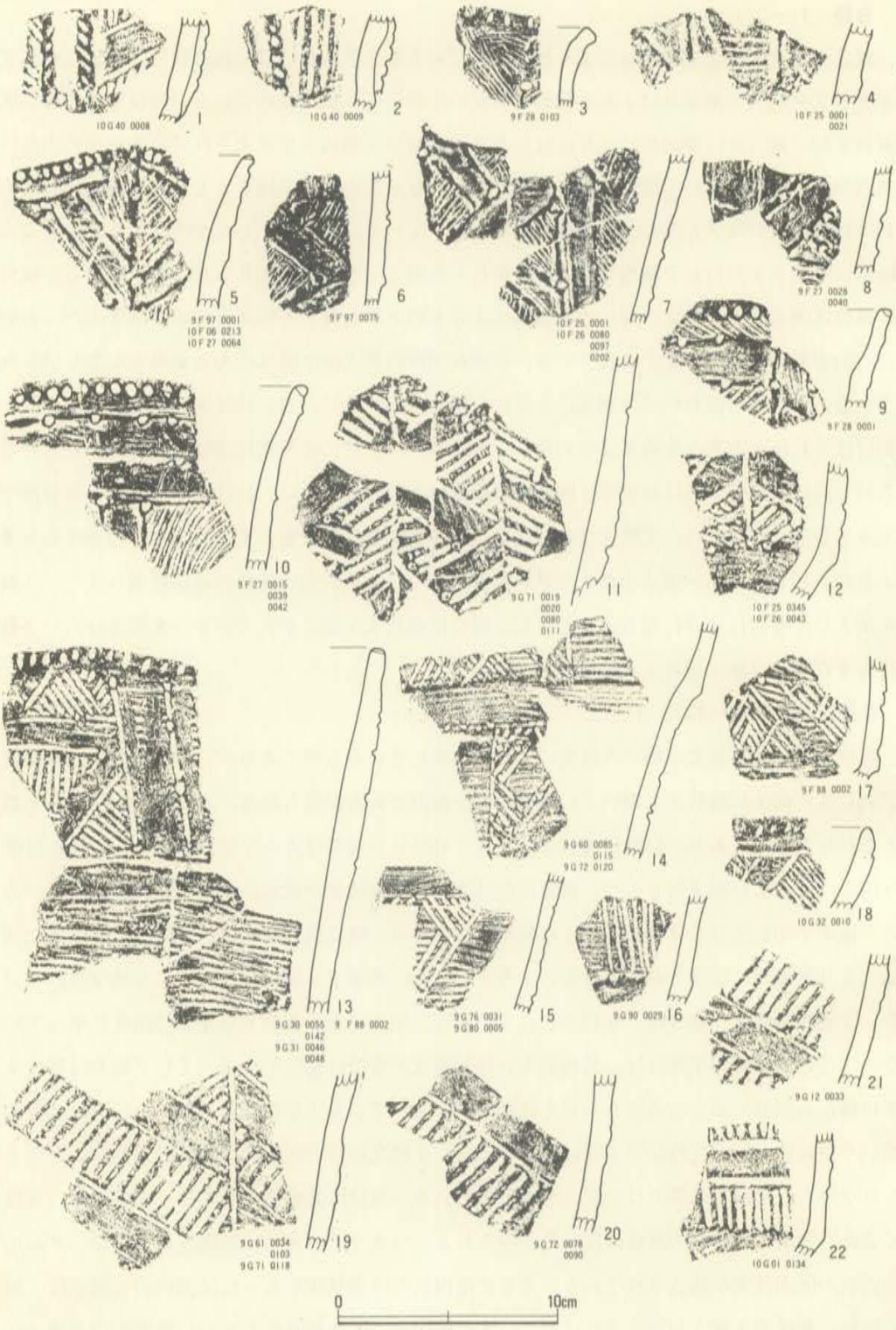
縦位・横位区画状文が隆起線文により描出されているものである。充填文は、いずれも串状の施文具による細い集合沈線が鋸歯状に配されている。そして縦位区画状文上と縦位、横位区画状文の交叉部に不規則に円形竹管による刺突文が押捺されている。３は把手部であり、横位区画状文は描出されておらず、細い集合沈線により縦位区画状文間を充填している。５～７は同一個体土器で、口縁は波状を呈する。この縦位区画状文は、波頂部と波頂部間の中央部から１条垂下し、文様帯を８分割している。そして横位区画状文はタスキ状を基調として抽出されている。10は口縁部に横にはしる１条の隆起線文を施してその上には等間隔に刺突文が押捺されており、口縁部の無文帯を広くもつ。

Ｂ種（11～22）

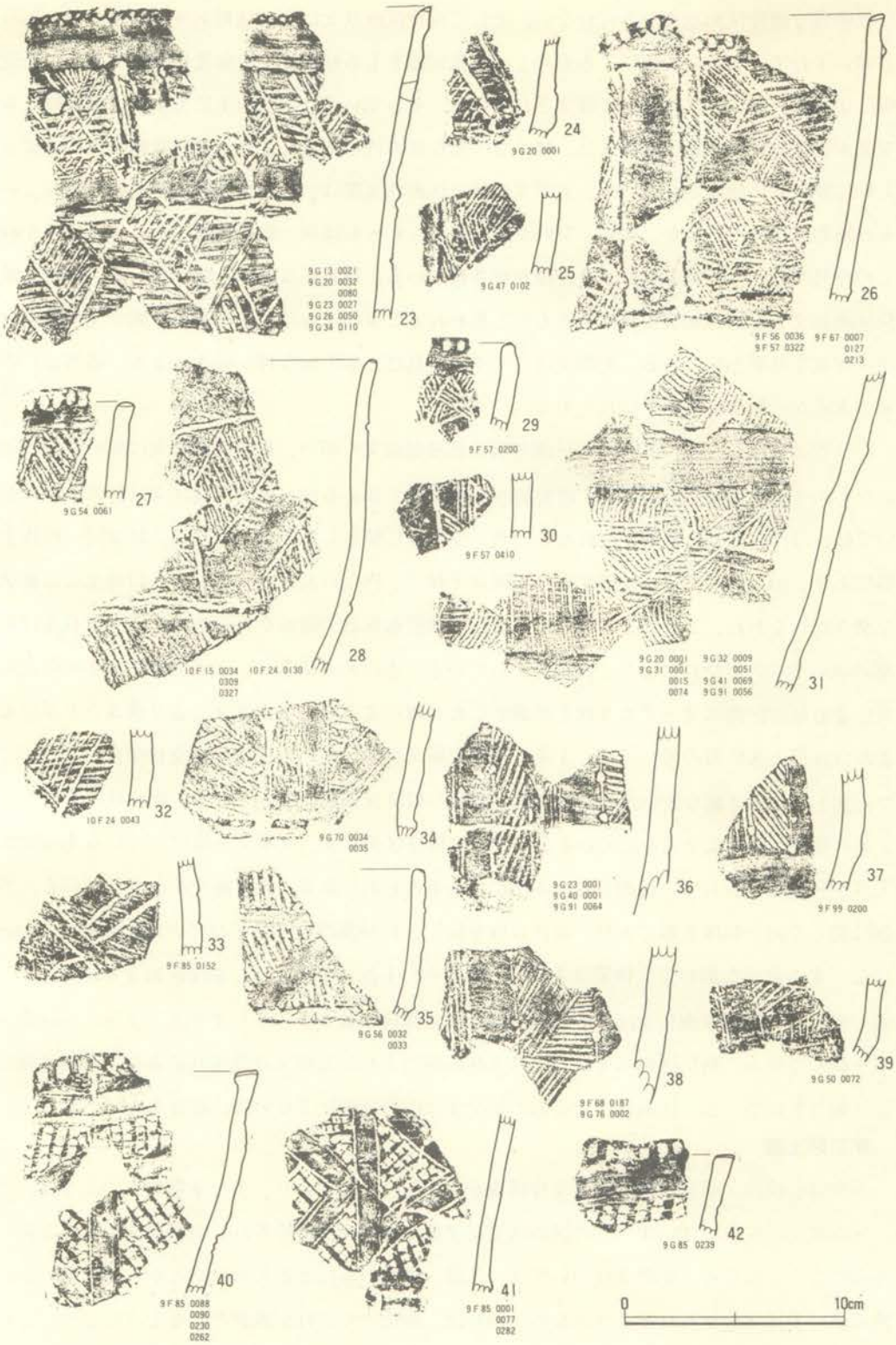
縦位・横位区画状文が沈線により抽出されているものである。11、12は縦位・横位区画状文と充填文が同一の施文具によると思われる太い沈線により抽出されている。11は１条の縦位区画状文間に縦方向に鋸歯状に交互にはしる２条の横位区画状文が施文されている。この土器片は胴部から底部にかかる部分であることから、かなり幅の広い文様帯をもった土器と思われる。13は口縁が緩い波状を呈し、口唇部は丸みを帯びている。波頂部からややずれて３条からなる縦位区画状文が斜行して描出され、タスキ状を基調とした横位区画状文がこれに加わる。縦位・横位区画状文と充填文は同一の施文具によるものと思われ、充填文は対応する区画内において方向を変え鋸歯状に施文されている。区画状文間の無文部は地文である条痕文が磨り消されている。また器形においては胴部にくびれが全くみられない。14、15は同一個体土器であり、14にはそれほど顕著なものではないがくびれがあり、これにより文様帯は２段に分かれている。この２段の文様帯における縦位区画状文の位置は一致していない。18は緩く内反する口唇部が丸みを帯びた口縁部で、充填文は細い沈線により施こされている。また胎土中に白色土粒を多く含む。19～21は同一個体土器片と思われるもので、１条の太い沈線の縦位区画状文と、これを境として左右に交互になるよう斜行状に横位区画状文が施こされている。充填文は太い多截竹管またはヘラ状工具により施文されている。

Ｃ種（第25図23～42）

縦位・横位区画状文が細い沈線文により描出されているものであるが、23～26のように縦位区画状文に細隆起線状文を用いているものも少数例であるがみられる。５、６は同一個体土器と思われるものであり、口縁は波状を呈し緩く外反し口唇部は丸みを帯びている。口縁部は磨り消しによる広い無文帯をもつ。縦位区画状文は、比較的細い沈線により１条施文されているが、途中で切れており文様帯を完全に縦割していない。横位区画状文は、細い深く刻まれた沈線により鋸歯状に描出されているものと考えられる。充填文も同様の沈線により施文されている。区画状文間は、磨り消しが行なわれているが、地文である条痕文を完全に消すに至っていない。この文様帯の下部には、比較的太い隆起線文が横位に廻っている。そして器形は外反する口縁から胴部にふくらみをもち緩く底部へすぼまっておりくびれはみられない。31は２段の緩いくびれをもち、文様帯を２段に分けている。上段文様帯の区画状文の構成は明確にとらえられないが、下段文様帯とほぼ同じものと思われる。縦位区画状文としては、９条の細い沈線による。横位区画状文の構成には特徴がみられる。つまりタスキ状に区画された中に、さらに楕円状の区画状文が施こされている。そして楕円状の区画状文をもった区画内の充填文は、同心円状の曲線的沈線文が施文されており、また楕円状の区画状文をもたない区画内の充填文は、直線的沈線文による。区画文の交叉部刺突文は、楕円状区画状文の１部と横位区画状文の１部に見られる程度で、刺突文自体も鮮明なものではない。36～38は同一個体土器でありこの土器



第24図　B地点第２群Ⅰ・Ⅱ類土器



第25図　Ｂ地点２群Ⅱ類土器

には明確な横位区画状文がみられない。そして縦位区画状文には２種類あり、非常に細く彫りの深い平行する２条の沈線によるものと、比較的幅をもち軽くなでた程度の平行する２条の沈線によるものとが、ほぼ交互に施文されている。そしていずれの沈線上にも、ほぼ等間隔に刺突文が押捺されている。充填文は、軽くなでた程度の浅い沈線により、縦位区画状文間を縦位方向に鋸歯状に施文されている。充填文の無い区画状文間は、顕著な磨り消しが行なわれている。器形は不明であるが、緩いくびれがみられる。40～42は同一個体土器であり、口縁は平縁でやや外反し、ヘラ状工具により押捺がなされている。口唇部は丸みを帯びている。縦位・横位区画状文とも同様施文工具によるものと思われる２条の沈線による。横位区画状文の構成は、タスキ状を基調としている。充填文は、ヘラ状工具による丁寧な押し引きによる。器形は、不明であるが、胴部に緩いくびれをもつ。

23～26は先述したように、縦位区画状文に細隆起線文を用い、横位区画状文に細い沈線を用いたものであり本種においては、特異的な文様構成と言えるが、縦位区画状文以外の文様においては、ほぼ共通した特徴がみられるため、今回はＣ種としてとらえた。23、24は同一個体土器であり、24は23の下位に位置する。口縁は平縁で、内削げ状になっている。口縁部には顕著な磨きが行なわれ、これにより口縁に平行して微隆起線状の陵線が作られている。文様帯は胴部の緩い２つのくびれにより２段に分かれている。上段の文様帯は、２条の垂下する細隆起線文による縦位区画状文とタスキ状を基調とした沈線による横位区画状文により構成されている。また口縁部と文様帯の境いには、１条の細隆起線文が廻っている。下段の文様帯は、上位のくびれ部との境いに雑な太い沈線を廻らしており、縦位区画状文はみられず、鋸歯状に平行する２条の横位区画状文を巡らしている。上下段の横位区画状文、充填文を描出している沈線文は、太さが一定しておらず、区画からはみ出ているものもあり非常に雑な施文がなされている。25、26は同じく同一個体土器であり、波状口縁を呈し、口唇部は丸みを帯びている。胴部にくびれはなくずんどうな器形で文様帯は１段である。その上部、下部には、細隆起線文を巡らして区画している。縦位区画状文は、波頂部分に２条の細隆起線文を垂下して上部、下部の細隆起線文を結んでいる。横位区画状文は、タスキ状に描出され、充填文は櫛歯状の非常に細い沈線により施こされている。区画状文交叉部の刺突文は円形竹管により明確に押捺されている。

第Ⅲ類土器

本類は、縦位・横位区画状文の文様構成が安定したものとなり、また多彩なものとなる。この区画状文の安定に伴いすべての区画状文交叉部に刺突文が押捺され、文様要素の大きな部分を占めるようになる。充填文については、沈線、押し引きによるものであるが、施文具とその使用法に多様化が見られるようになる。器形は、胴部のくびれが強調されるようになり、これにより明確な１段ないし２段の文様帯をつくる。そして大形土器も多くみられるようになる。口縁は、平縁と波状のものとがあり波状のものは、波頂部が強調されるようになり、またこの

時期の特徴的な把手も現われる。口縁の断面形は、内削げ状のものが多く占める。このように本類の土器は、鵜ガ島台式土器の典形的な特徴をもつものと言える。そしてその特徴の主となる区画状文の描出方法の違いにより以下のように分類できる。

A種　縦位・横位区画状文が、細隆起線文または、微隆起線状文によるもの。

B種　縦位・横位区画状文が、沈線によるもの。そして例は少数であるが、沈線による縦位区画状文に代わって隆帯文を施文し横位区画状文に沈線を用いたもの。

C種　縦位・横位区画状文が、細い沈線によるもの。

以上3種に分類を行なったが、さらに各種において、縦位・横位区画状文の文様構成の特徴を主として以下のように細分した。

a． II類に示めしたように、縦位・横位区画状文が直線的な文様により描出され単純な構成となっている。そして、文様帯内における縦位・横位区画状文の相互関係が明確である。

b． 縦位・横位区画状文の文様構成は基本的にはaと同じであるが、特に横位区画状文において、文様が複雑化し、曲線的文様も多く用いられる。また縦位・横位区画状の相互関係が不明瞭なものもみられるようになる。つまり、縦位・横位区画状文のそれぞれの文様において、また双方の構成において、多彩なものとなる。器形においては、波状口縁、くびれの発達が顕著なものが多い。

以上のように各種を2つに細分した。このように2段階（Aa、Ab、…Ca、Cb）の分類に従い土器の説明を行う。

Aa 種（第26図43～55、第28図76～80　図版19、21）

43～55は充填文が沈線によるものであり、76～80は充填文が押し引きによるものである。

43は口縁が内削げ状の波状を呈し、波頂部より3条からなる縦位区画状文が垂下する。横位区画状文は文様帯を2分するかのように横位にはしるものとタスキ状のものとにより構成されている。そしてすべての区画状文交叉部には刺突文が押捺されている。器形において胴部のくびれはみられない。46、47は縦位区画状文に太い隆起線文を用い、その上に押捺による刻み目が加えられている。またくびれ部も同様の刻み目が横位方向に施されている。49は胴部に強いくびれをもち、口唇部は丸味を帯びている。横位区画状文は、本群土器の特徴的文様の1つである曲線的に描かれた「へ」の字状の文様がみられる。50～55は充填文が太い沈線によるものであり、52の縦位区画状文は4条描出されている。76、79の充填文は押し引きというよりも、刺突に近い施文方法によるもので、特に79は2本の細い竹管を並行にして使用したものと考えられるもので、いわゆる「二連式押し引き文」と呼べるものである。76は波頂部に突起を有するものでこの部分に粘土を貼り付けさらにその中央に細隆起線文を垂下し、その上に刻み目を押捺し縦位区画状文をつくり出している。しかし下段の文様帯には貼り付けによる縦位区画状文は至たっておらず、ややずれた部分に3条の細隆起線文によるものが施文されている。78は

胴部に２段のくびれがみられ、上段のくびれ状態が非常に強い。この土器の胎土中には、３～５㎜程の小礫が多く含まれ、器面がザラザラしている。

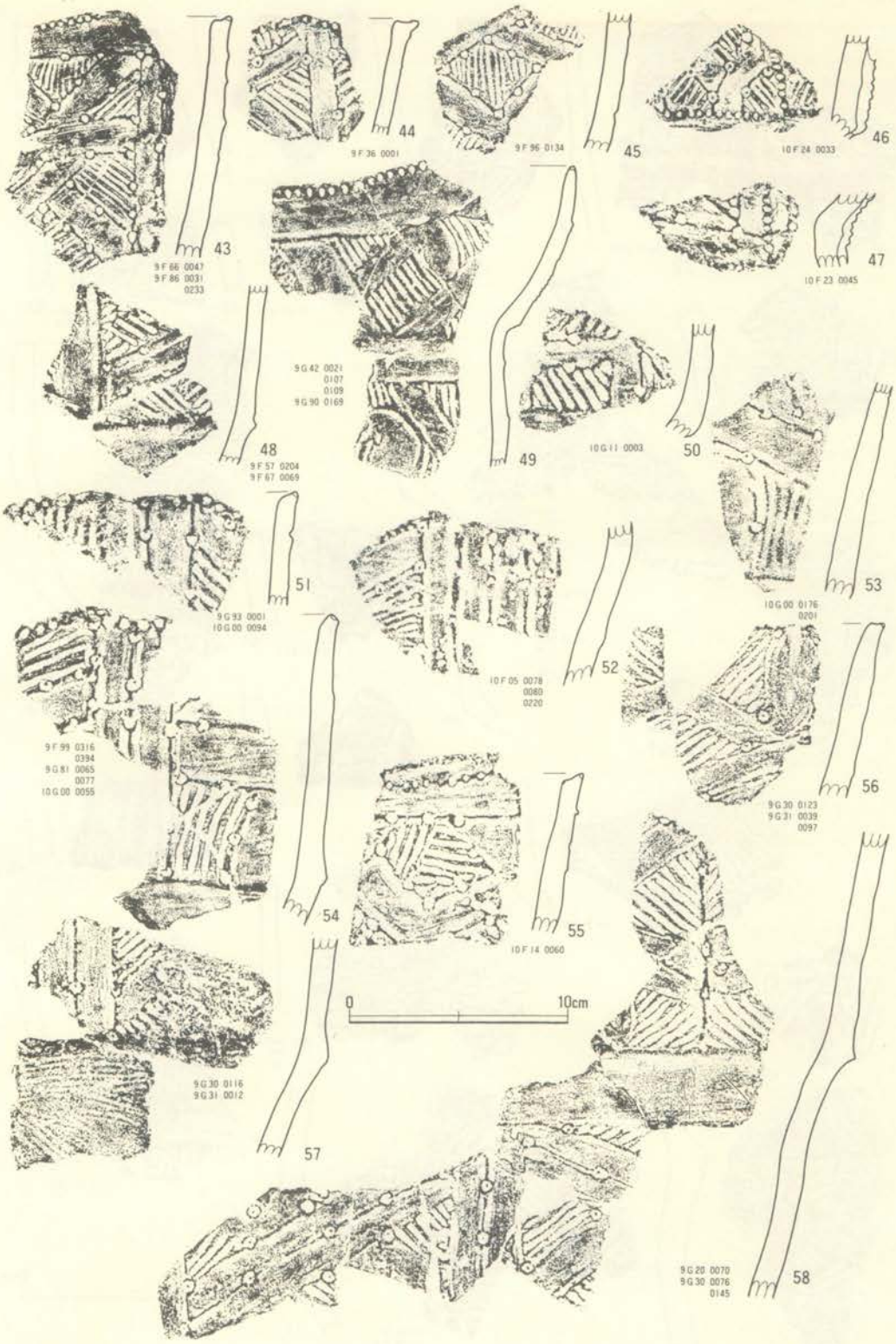
Ａｂ 種（第26、27図56～75、第28図81～86、第38図262　図版19、20、21、30）

56～75は充填文が沈線によるものであり、70～75は太い沈線による。81～86、262は押し引きによるものである。

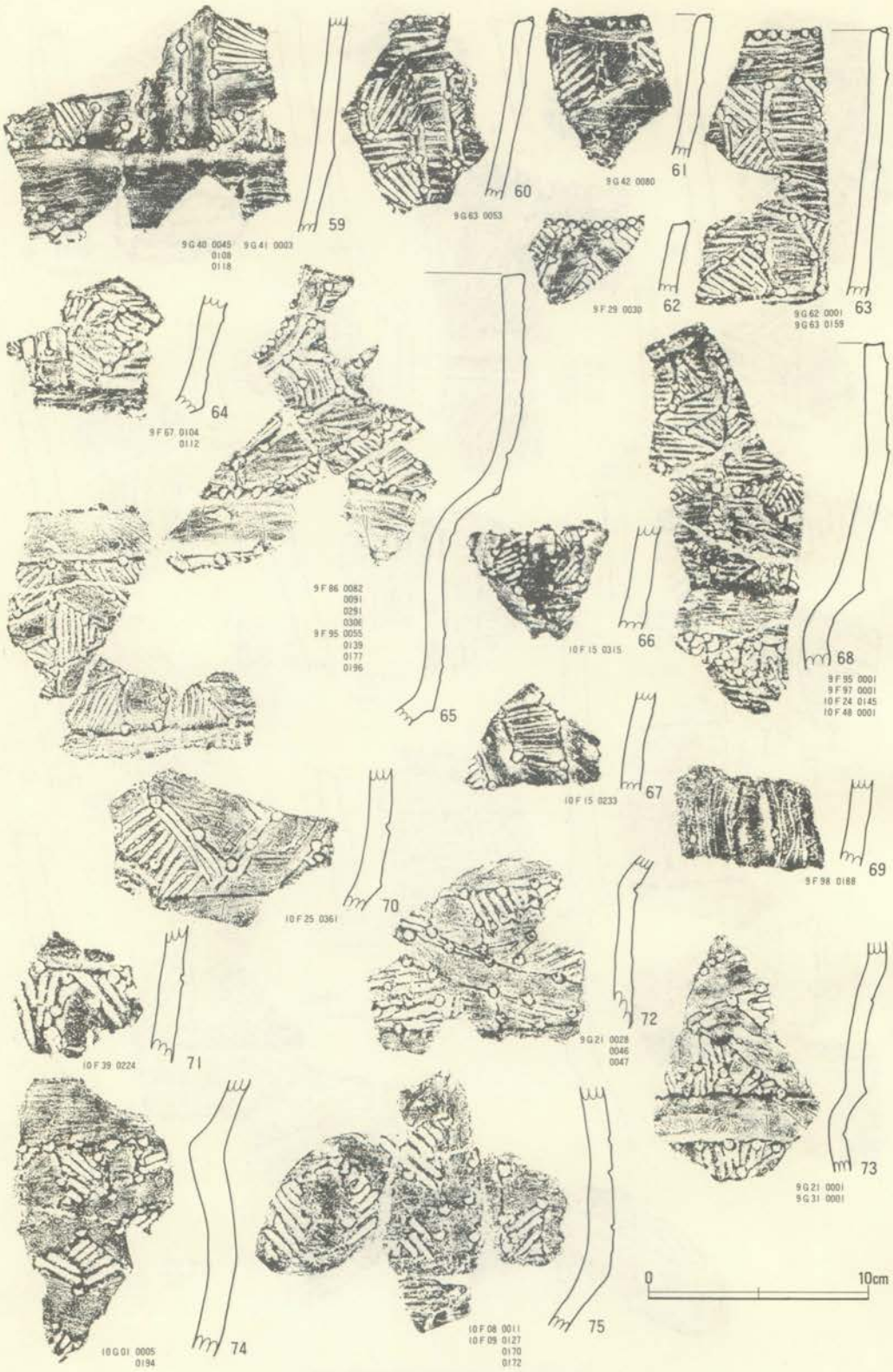
56～58は同一個体土器であり、口縁は波状を呈し胴部には２段の強いくびれを有し２段の文様帯をもつ、区画状文はその施文方法と構成に特徴がみられる。上段の文様帯における縦位区画状文は、１条の太い隆帯によるものと、それにより大きく区画された内をさらに、両側を磨くことにより粘土を盛り上げる特徴的な施文方法でつくり出された３条からなる微隆起線状文の区画状文により文様帯を縦割りしている。横位区画状文も２～３条の微隆起線状文のものによりタスキ状に描出されている　下段の文様帯には太い隆帯はなく、すべて微隆起線状文による。

59～62は区画状文が比較的直線的に描出されているが、区画状文の区画が細かく複雑な文様構成となっている。いずれの区画文間には磨り消しが施こされているが、60のように地文である条痕文を完全に消しきれていないものもある。59はくびれが強いものではないが、幅の広いものとなっている。

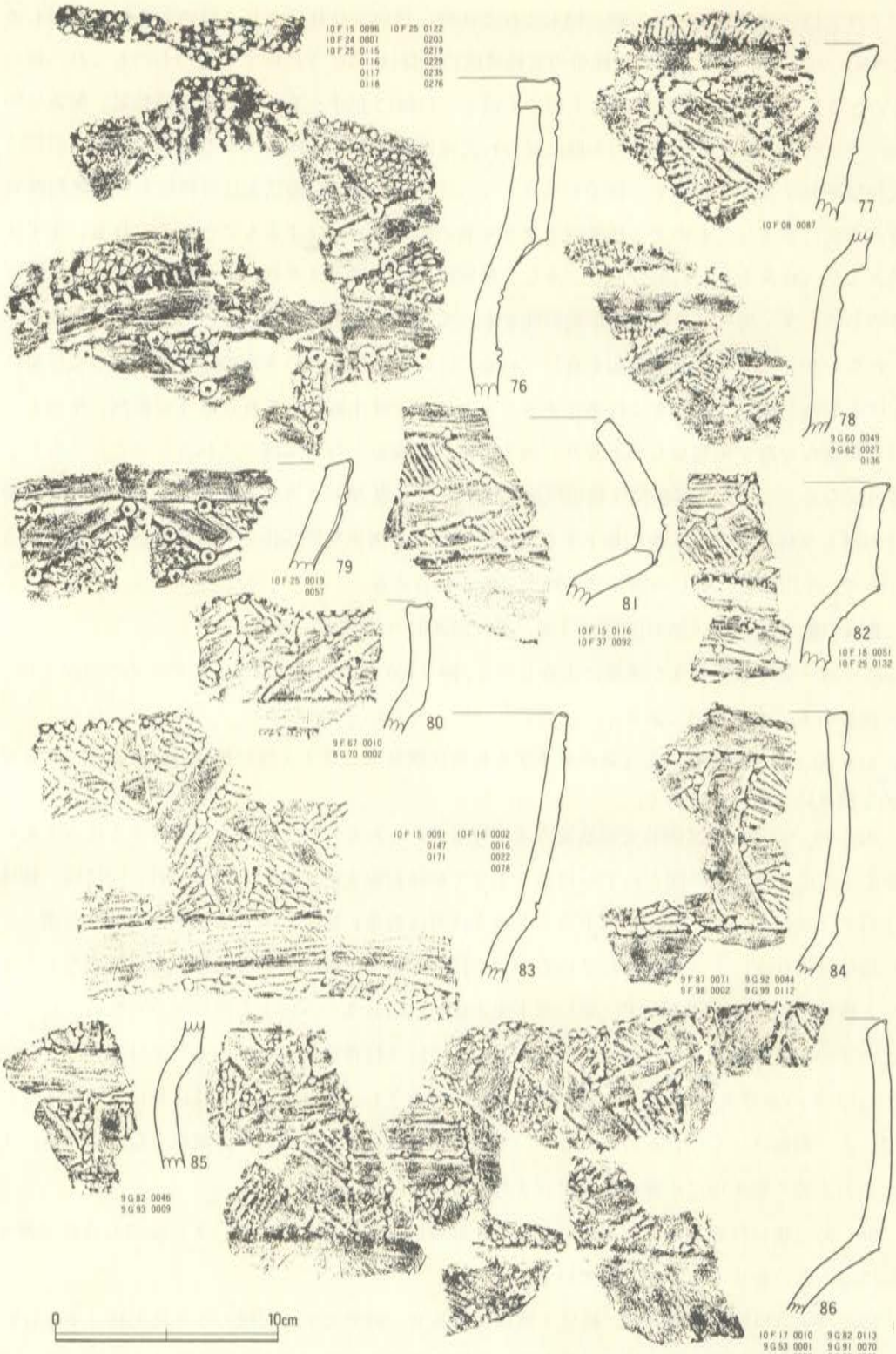
63～75、81～86、262は縦位・横位区画状文に曲線的なものをおり混ぜて、変化に富んだ文様構成をなしている。65、68は非常に発達した波状口縁を有し、65では波状が８つあると思われ、大形のものが４つそしてその間に小さな突起状のものが施こされ、大形の波状は内側によじれた状態となっている。文様帯は２つの強く屈曲したくびれにより２段に区画され、双方の区画状文は同様の構成によるものと思われる。縦位区画状文は、それぞれの波頂部から１条の隆起線文が垂下し、横位区画状文は基本的にはタスキ状に描出しているが、タスキ状の区画内をさらに直線的、曲線的な区画状文をおりまぜて幾何学的文様をつくりあげている。充填文はていねいな沈線文が施文されている。区画状文間の無文部やくびれ部には入念な磨きもが行なわれている。68は上段と下段の文様帯における文様構成が異なっているもので、下段文様帯は隆起線文が等間隔に垂下しているだけのもので、充填文はみられない。これは文様構成の簡略化と考えられるものである。69は小破片のため全体の文様構成は把握できないが、低い細隆起線文が紡錘状に描出され、そして同心円状に細く浅い沈線文による充填文が施文されている。74、75は同一個体土器で胎土中に１～３㎜程度の小礫と金雲母を多く含み、器面がザラザラしている。81、82はくびれが非常に強く、幅の広いものとなっており82にはくびれ部に横にはしる３条の細隆起線文が施こされ、その上に等間隔に刺突文が押捺されている。口縁はいずれも内削げ状のもので、81は内反、82は外反している。充填文はいずれも細い押し引きによるが、81は１つの単位が長く、押しが浅いため沈線文に近いものとなっている。82、83、84、262は、区画状文の文様構成がさらに複雑なものとなっており文様帯は、83、262では強い２つのくびれ



第26図　B地点第2群Ⅲ類土器



第27図　B地点第２群Ⅲ類土器



第28図　B地点第２群Ⅲ類土器

により２段に分かれている。82、84もこれと同様に強いくびれにより２段の文様帯をもつものと考えられる。上段と下段の文様帯の文様構成の関係は、262で把握でき他のものもこれに近いものと考えられる。262は非常に大形の土器で、口縁に把手を有する。把手の数量、配置は明確につかめないが、波状口縁の土器に見られた波頂部と縦位区画状文との密接な関係と同様に縦位区画状文を配する上で、把手が基点となっている。縦位区画状文は２種類あり、隆起線文を直線的に垂下したものと、括弧状とタスキ状の組み合わせによるものとがみられる。まず後者により文様帯を４つに縦分割し、そして横位区画状文はタスキ状のものだけでなく、平行線状のものも多く用いてそれぞれが規則性をもって複雑に描出されている。84、86には把手はみられないが、小さな２つの突起を有している。このように、この４点の土器の、上段文様帯における縦位・横位区画状文は複雑化するとともにＡａ種土器にみられたような縦割、横割といった単純な分離が困難なものとなり、両方の区画状文を１つの文様の流れとしてとらえられるようになる。このことは縦位・横位区画状文の発達（崩壊）と考えられる。一方下段の文様帯における文様構成は、１条の垂下する縦位区画状文と鋸歯状に描出された横位区画状文によるもので、上段に比べむしろ簡略化の傾向にあると言える。

Ｂａ種（第29図、第31図128～133、第37図260、　図版22、24、31）

87～97、260は充填文が沈線によるもので、98～105は太い沈線によるものであり、128～133は押し引きによるものである。

87～90、94は２条ないし３条の垂下する縦位区画状文とタスキ状の横位区画状文とによる単純な構成によるものである。

91～93、95は縦位区画状文の施文方法に特徴がみられるもので、２条の平行する沈線を走らせることにより、その間をわずかに盛り上げて細隆起線文を描出している。91、92は同一個体土器で、緩い２段のくびれを有する。上段文様帯は数条の縦位区画状文とタスキ状を基調とした横位区画状文により構成されているが、下段文様帯は上段のものと同様の文様構成をもつ部分と横位区画状文がみられず、単に垂下する縦位区画状文のみによる部分がみられる。しかしこの２つの文様構成がどのような関連をもって下段文様帯を構成しているのかは把握できない。93は２条の細隆起線文により縦位区画状文が施文され、横位区画状文は沈線により施文されている。胴部にはくびれがみられない。充填文は沈線により施文方向は縦位となっている。またこの土器の胎土中に小礫が多量に含まれている。

96、97は横位区画状文が直線的でなくやや曲線的に描出されている。また焼成も良好で無文部には入念な磨り消しが施されている。

102、260は口唇部の刻み目、縦位・横位区画状文、刺突文が、同様のヘラ状工具（多截竹管）により施文されている。103～105も単一の施文具によりすべての文様を施文されたものと考えられるもので、切断面の不揃いな円形竹管を器面に垂直に当てたまま引いたものと思われる。

102、260の胴部にくびれはみられず、1段の文様帯となっている。102には補修孔を開けようとした痕跡が残っている。260は上面から見た口縁の形状が方形を呈し、各コーナーに波頂部をもつ波状口縁となっている。しかし方形の形状も胴部では円形となっている。文様構成においては、施文方法が非常に雑であり、縦位区画状文は4条を基本とするものと思われるが、一定していない。横位区画状文はタスキ状を基調としているが、区画内よりはみ出したり、沈線の間隔も一定していない。また区画状文交叉部の刺突文は、タスキ状文様の交叉部のみに押捺されている。そして地文である条痕文の磨り消しは、全く行なわれていない。

128～133は充填文が押し引きによるもので、130、133は比較的太い竹管を工具とし、丹念に押し引かれている。131は、細い施文具により、連続刺突文状に施文されている。

Ｂｂ土器（第30図、第31図134～138、第38図263　図版23、24、30）

本種の土器は文様構成において、個々に特徴をもったものが多く、変化に富んだものとなっている。充填文は、106～119では沈線文により117、119では太い沈線文による。106、114は刺突文が区画状文の交叉部のみでなく充填文上にも押捺されている。115は充填文の間に1列の刺突文が配され、沈線文による横位区画状文の代わりとなっている。107、108、110の横位区画状文の文様構成に新しく円形状のものが加わっている。107は、口縁が緩い波状を呈し、波頂部より垂下する3条の縦位区画状文により6分割され、その間を横位区画状文は菱形状に配され、その中心部に円形の区画状文を描出している。充填文は円形文から放射状に配されている。111、112は小破片のため明確な文様構成はつかめないが、タスキ状の横位区画状文がやや曲線的に描出され、また無文部には入念な磨り消しが行なわれており、1部の区画状文がそのため消されてしまっている。この磨り消し手法は、後述する指頭、ヘラ状工具によるナゾリ手法に近いものと思われるものである。112には補修孔が見られ、裏面にはさらに孔を開けようとした痕跡が残っている。106、109、117、119は区画状文と充填文の区別が不明瞭なものである。つまり、同様の施文工具を用いて、同一方向に施文されている。また刺突文の押捺も雑であり、省略されているものもある。

135～138は充填文が押し引きによるものである。135、136は同一個体土器で、幅の広い入念な磨り消しの行なわれたくびれ部をもつ、くびれ部には細隆起線文が横にはしりその上には刻みが施されている。上段文様帯は緩い波頂部より貼り付けによる3条の隆線文を垂下し、その中央のものは口唇部まで伸びている。そして隆線文の上部、下部には、指頭またはそれに類した工具により押捺痕が施され、その間には刻みが施されている。この縦位区画状文は下段文様帯には至っていない。横位区画状文は135を見る限り、タスキ状を基調とした文様構成であるが、縦位区画状文内部にまでその文様が施されている。136では半円形状のものから1条の沈線が垂下して、縦位区画状文を構成している。充填文は細い円形竹管を2連にして押し引いている。またこの土器の断面には口縁部とくびれ部の接合状態が明確にわかる。137の充填文は

多截竹管を器面に対して垂直に押捺したもので、その断面形が良好に残っている。また区画状文にも同様の施文具が用いられている。138の充填文は間隔のあいた雑な沈線とさらにその間に円形竹管による刺突文が施されている。

118、121～125、127、263は上段文様帯もしくは下段文様帯に沈線による格子状のみの文様が描出されているもので、118の上段文様帯はタスキ状の横位区画状文による構成となっているが、下段文様帯に格子状の文様のみが施文されている。121、125は同一個体土器であり、121では充填文を有する横位区画状文と格子状文が同一文様帯内に併用されている。また125の格子状文は線がとぎれとぎれで完全な格子状となっていない。この土器の胎土中には、金雲母と小礫が多量に含まれている。127、263は同一個体土器で、胴部に１段の顕著なくびれを有し、その段上には押捺による刻み目が施文されている。文様帯は１段であり、格子状の文様のみにより構成されている。格子状文の交叉部には不規則に円形竹管による刺突文が押捺されている。口唇部は内削げ状に整形されている。また127の口縁部に補修孔がみられる。以上の土器のうち118、124は地文である条痕文を入念に磨り消した後に格子状文が施文されているが、他は地文をそのまま残している。

126は口縁部に無文帯を広くもち、口唇部が丸みを帯びている。縦位区画状文はみられず、一定の間隔をもつ数条の沈線を１単位として斜位に走らせ、隣り合う単位と直角に交わるよう施文されている。また地文が顕著に残っている。

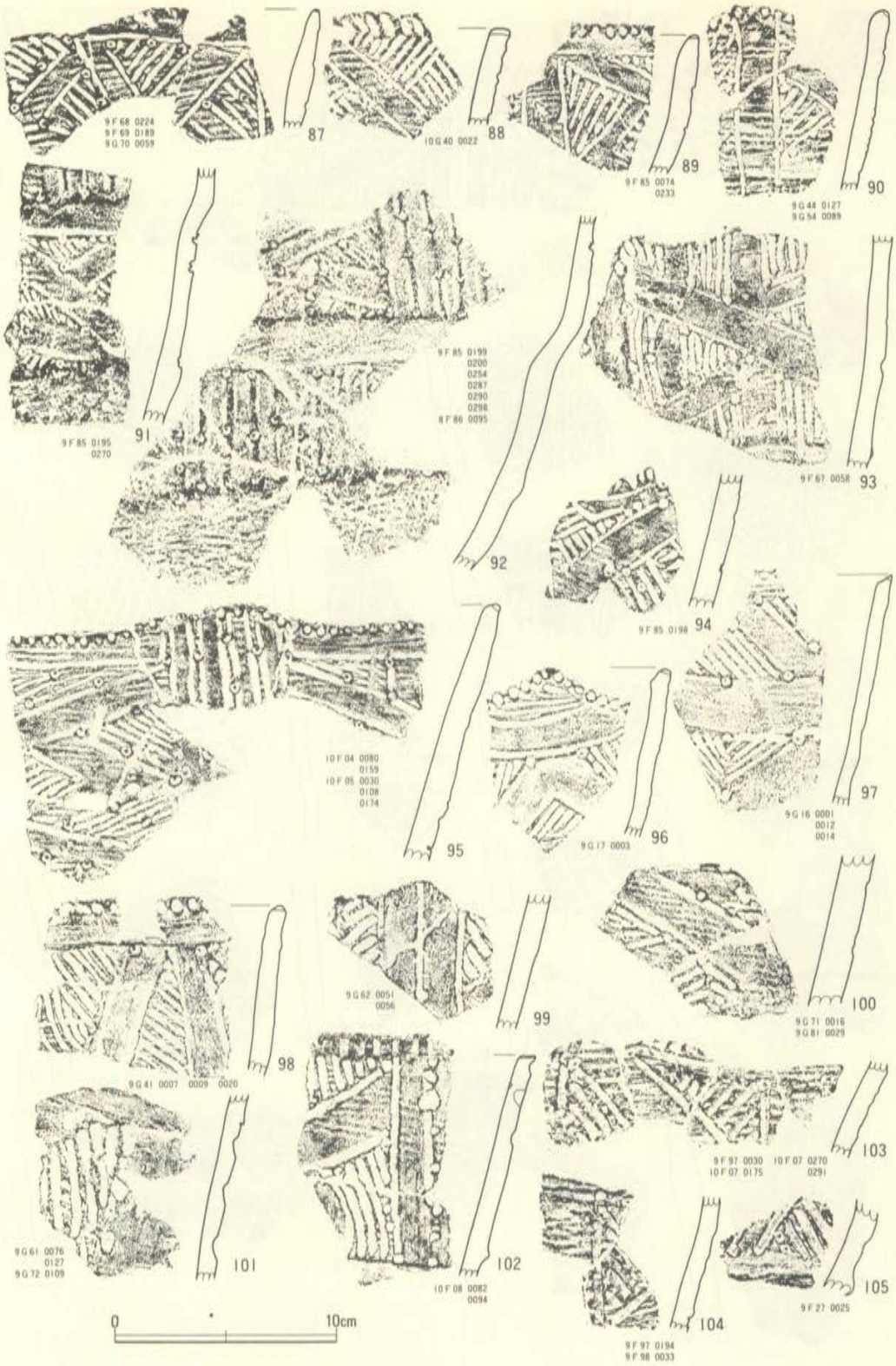
120は口縁がかなり外反し、口唇部は丸みを帯びている。くびれは１段と思われ、くびれ部は粘土を盛り上げており突き出ている。文様は口縁から浅く幅の広い押し引きによる垂下した文様が等間隔に施され、その上に円形竹管による刺突文が押捺されている。

Ｃａ　種（第32図146～152、第37図258、259、第38図264、第39図265　図版25　30、31）

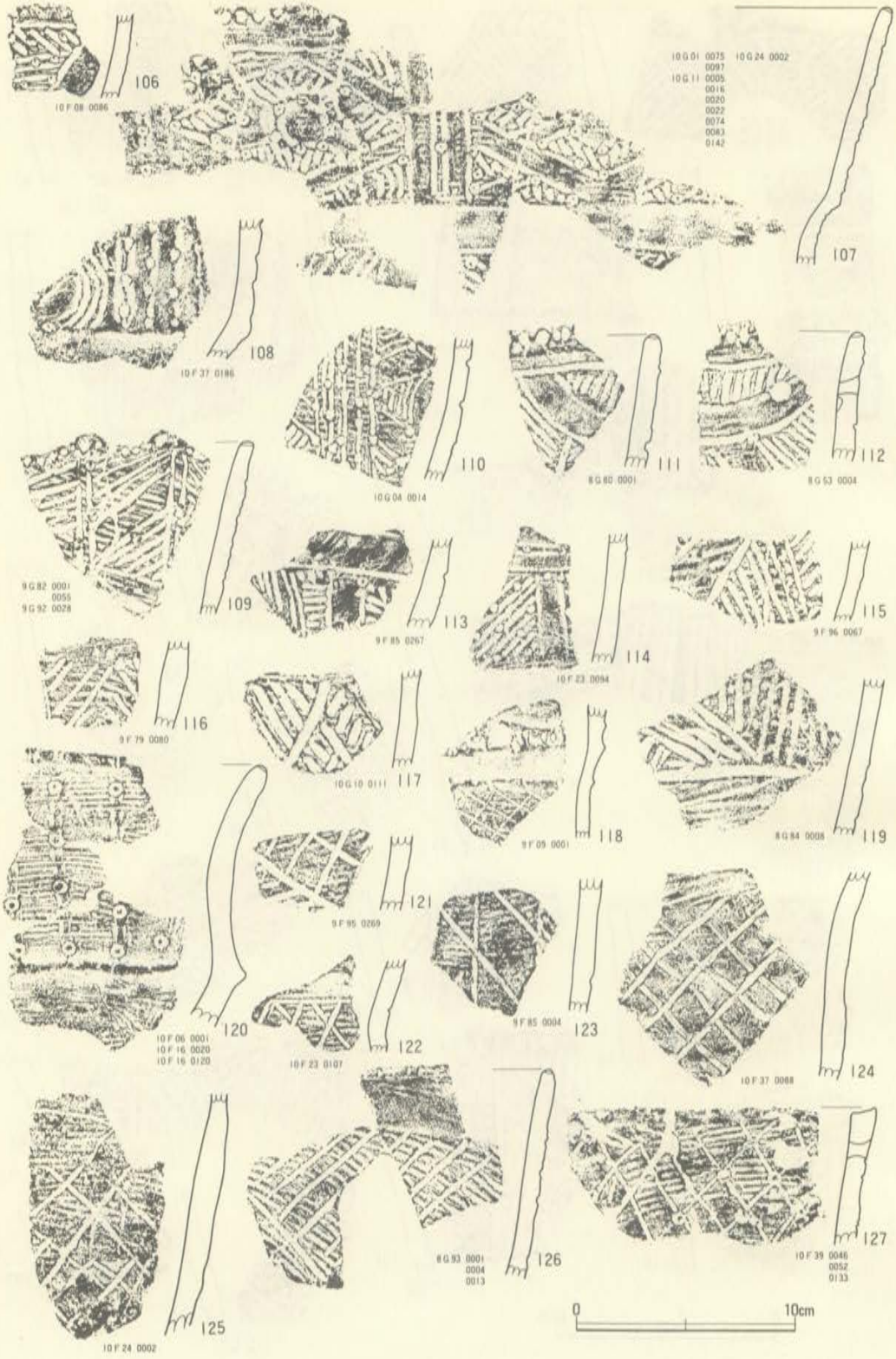
146～152、265は充填文が沈線によるものである。146～148は２段のくびれを有し、文様帯は垂下する複数の縦位区画状文とタスキ状を基調とした横位区画状文から成る。146、148では上段と下段の文様構成は、ほぼ同様と考えられるが、縦位区画状文の位置は一致していない。152は太い沈線による充填文が雑に施文されている。265は完形に近く復元できた資料で、文様構成などがよく把握できる資料である。口縁は４つの舌状の突起をもち波状を呈する。胴部は２段のくびれを有し、２段の文様帯をもつ。文様帯の幅が広いため器形は縦長の円筒形に近いものとなっている。２つの文様帯の上部には細隆起線文が横にはしり、その上に刻み目が押捺されている。文様構成は上段、下段ともほぼ同様のものとなっており、波頂部から３条の縦位区画状文が垂下し、横位区画状文は直線的に描出されたものと曲線的に「へ」の字状に描出されたものとにより構成されタスキ状を基調とし、さらに細かな区画がなされている。

Ｃｂ　種（第31図139～145、第32図153～166、第38図　図版24、25、30）

153～166は充填文が沈線によるものであり、139～145、261は押し引きによるものである。



第29図　B地点第２群Ⅲ類土器



第30図　Ｂ地点第２群Ⅲ類土器

第31図　B地点第２群Ⅲ類土器

153 はくびれが緩く無文帯も幅が狭い。下段の文様帯に孤状に描かれた横位区画状文がみられる。155 は区画状文が粗雑であり、小破片のため全体の文様構成は不明であるが、浅い沈線によるタスキ状を基調としたものと思われるが沈線がとぎれたり刺突文も交叉部からずれている。また区画状文と充塡文が同様施文具によるものと考えられ、その区別が不明瞭となっている。156 は充塡文に特徴がみられるもので、上位の区画内は刺突文状の、下位区画内は沈線文の充塡文である。

157 、161～163は横位区画状文内に円形または孤状の区画状文が描出されているもので、157、162、163 は充塡文が同心円状に施文されている。161 は円形の区画状文に直角に交わるように上下、左右の充塡文が施文されている。

158、159は区画状文に特徴がみられるものであり、158 は口縁部の小破片で、横位区画状文はタスキ状に施文された中をさらに小さく枡状に区画されており、無文部には顕著な磨り消しが施され、それにより区画状文が消されてしまっている部分が多くある。そしてタスキ状の斜行する沈線に沿って刺突文が連続して押捺されている。充塡文はヘラ状の工具による太い沈線である。159 は口縁に突起をもち緩い波状を呈する。胴部には１段のくびれを有し文様帯は１帯である。その文様構成において口縁より垂下して縦位に文様帯を分割する縦位区画状文はみられず、斜行する区画状文のみにより区画されている。またこの土器の区画状文、充塡文、区画状文交叉部刺突文がすべて同様の肉の薄いヘラ状の施文具によるものと思われるもので、区画状文はヘラ状工具の肉の部分を用いて引いたと考えられ、充塡文はヘラの部分をそのまま用いたもので、刺突文は他に見られるような押捺によるものでなく、ヘラ状工具を押しひねってつくられている。

160～166は格子状の文様が施文されているもので、いずれも縦位・横位区画状文により区画された中に施文されている。160 は雑な施文方法のため格子状文も乱れたものとなっており、区画内からはみ出ている。164 は格子状文と斜行する横位区画状文が併用されているもので、３条の垂下する縦位区画状文によって区画された右側は目の細かな格子状文が施文され、左側は横位区画状文が施文されている。またこの土器の口唇部は内側にやや折り返されている。

139～145、261 の充塡文は押し引き、またはそれに類するものである。139、140は同一個体土器であり、口縁は顕著な内削げ状の平縁を呈する。胴部は屈曲の強い２段のくびれを有し、２段の文様帯をもつ。139 では上段のくびれ部の断面には口縁部と胴部の接合状態が観察できた。文様帯の文様構成において上、下段とも縦位区画状文がみられず、上段はタスキ状に描出された横位区画状文が、下段には鋸歯状に描出され横位区画状文により構成されている。さらにそれらに区画された中を 158 と同様に小さく枡状に区画し、顕著な磨り消しが行なわれている。142 は２段目の文様帯の土器片で、細隆起線文による縦位区画状文が描出され、横位区画状文は半截竹管（３截）により格子状に施文されている。充塡文は相い対する区画内に施文さ

第32図　Ｂ地点第２群Ⅲ類土器

れ半截竹管による連続的な刺突文が施こされている。144は横位区画状文が鋸歯状と孤状のものにより構成され、無文部に顕著な磨り消しが施され区画内にまで至っている。261は口縁を上から見た形状が方形を呈し、各コーナーに舌状の突起をもつ、胴部のくびれは１段で、文様帯の文様構成は縦位区画状文が各コーナー部では、突起部から垂下する１条の貼り付けよる隆起線文により描出され、さらに隆起線文間の中央部には３条の沈線による縦位区画状文が施され文様帯を縦に８分割している。なお隆起線文の上には刻みが加えられ、３条の沈線のうち中央部のものには等間隔に刺突文が押捺されている。横位区画状文はタスキ状を基調とし、さらにその内部を細かく区画されている。

第Ⅳ類土器（第33～35図167～236　図版26～28）

本類の土器は、口縁部より垂下する縦位区画状文とタスキ状または鋸歯状を基調とした横位区画状文、及び充填文によるⅡ・Ⅲ類にみられた基本的文様構成が崩れ、区画状文、充填文の省略などが多く見られ、また新たに押し引きによる区画状文や指頭またはそれに類似した施文具によるなぞりの手法が用いられたものなどが現われ、個々に特徴をもった文様構成をもつものが多くなる。

167～187は細隆起線文もしくは微隆起線状文による区画状文により文様構成がなされているものである。

167～169は同一個体土器であり、２段のくびれを有する。上、下段の文様帯はほぼ同様の文様構成によるものと考えられ、鋸歯状の細隆起線文による区画状文を横に２列はしらせ格子状の文様を描出している。

170～174は横位区画状文が曲線的に描かれたものである。170～172、174は同一個体土器で、口縁は緩い波状を呈し内削げ状となっている。胴部くびれは１段で、文様帯は１帯となっている。縦位区画状文は、174に見られるように、口縁から垂下する１本の太い隆起線文とそれを直径とした２つの同心円状の区画状文により構成されている。そして隆起線文の中央部には指頭状工具による圧痕文が加えられている。横位区画状文は171、172にみられるようにコンパス文状の文様構成となっており、充填文はそれに沿って押し引き文により施文されている。そして円形竹管による刺突文が規則性をもって押捺されている。この刺突文すべてに同様の２ヶ所の小さな傷痕がみられることから、１つの施文具により押捺されたものと考えられる。この傷痕をもつ刺突文は173にも押捺されており、土器胎土も同じものであることから、この２つの土器は、同時期に製作されたものと言える。173は文様帯の幅も広く、胴部のくびれも緩いもので、縦位区画状文の構成も前者のものと違ったものとなっている。

175～181、184、185は微隆起線状文または隆起線文により区画状文が施文されているもので、その文様構成において縦位・横位区画状文の区分は不明瞭なものとなり、また充填文は全く施

文されていない。

177はくびれ部の土器片で、隆起線文による縦位区画状文とくびれ部の交叉部に指頭状工具による圧痕文が施され、横位区画状文には微隆起線状文による曲線的なものが施文されており、その上に従来見られた竹管による刺突文の代わりにハイガイの殻頂部分を押捺したものが加えられている。178の口縁部内側に突き出た片口状の突起がみられる。180、181は同一個体土器であり、緩い波状口縁を呈し波頂部から刻み目をもった太い隆起線文が縦位区画状文として施され、これに対して横位区画状文としては口縁に沿ってはしる2本のものとそれに等間隔に垂下する微隆起線状文により構成されている。さらに区画状文交叉部にはハイガイまたはサルボウの貝殻頂部による圧痕文が押捺されている。186、187も同一個体の土器片で、4条からなる縦位区画状文とこれに集合するように斜行する横位区画状文とにより文様構成され、そしてその上には、ハイガイまたはサルボウの殻頂部の圧痕文が押捺されている。この土器の器形においては、上面から見た形状が方形を呈するものと思われる。また破片のため不明ではあるが、くびれ部の無文帯において、縦位区画状文の延長上に1本の隆起線文が垂下している。

175、176、179、185は同一個体の土器と思われ、176、179、185は縦位区画状文部、175は横位区画状文部にあたるものと考えられる。口縁は発達した波状を呈し、波頂部には穿孔がなされている。この波頂部より刻み目をもつ太い隆起線文が1本施され、これを直径として3つの同心円状の区画状文が施文されている。横位区画状文は、縦横に直線的に施され、さらにその中を曲線的なものにより細分されている。この175の口縁は厚みをもち口唇部は内削げ状に調整され鶏冠状の突起をもつ、さらに従来見られた刻みに代わり、刻み目をもつ隆起文が貼り付けられている。

182、183は口縁に沿って平行に区画状文がはしり、その上には竹管による刺突文が押捺されている。182は微隆起線状文、183は沈線による区画状文である。

189～198、200～210は沈線による区画状文が施文されているものである。

191～197は区画状文間に新たな施文技法であるなぞり手法が行なわれている。191、192は同一個体土器で、口縁は波状を呈し波頂部には指頭状工具による圧痕が施こされている。文様帯は1帯と思われ幅の広いものとなっている。文様構成は、波頂部より2条の縦位区画状文が垂下し、横位区画状文はその構成において、文様帯の上半部と下半部に分離できる。上半部は、2本の区画状文が緩く曲線を描きながら横にはしり、下半部は鋸歯状の区画状文が施文されている。この上半部と下半部との境は、わずかではあるがくびれていることから、従来の2帯の文様帯が1つに合わされたものとも考えることができる。こうした区画状文内にさらに円形の区画状文が加えられているが、大方のものは、区画内をさらに細分する区画状文は省略され、押し引きによる充塡文が鋸歯状に配されている。この充塡文間にはなぞり手法が加えられている。また区画状文交叉部の刺突文は、不規則に押捺されている。193、194、196もほぼこれと

第33図　Ｂ地点第２群Ⅳ類土器

同様の文様構成によるものと思われるが充塡文は沈線によるものである。194の口縁はかなり強く外反している。193はなぞり手法が顕著で、区画状文がかなり潰ぶされ、また充塡文は細い竹管を2連にして引いたものである。また区画状文交叉部の竹管は区画内、外にも不規則に押捺されている。195は2段のくびれを有し、上段文様帯は孤状、円形状の区画状文により構成され、下段文様帯は直線的な縦位・横位区画状文の比較的明確な文様構成による。197は充塡文に区画によって多截竹管による刺突文と串状工具による刺突文が施文されている。

198は口縁から垂下する区画状文が省略され、押し引きによる充塡文のみにより描出されている。

200は文様帯の幅が広く、文様構成は波頂部間の中央部に口縁からくびれ部に垂下する2条の沈線とその中央に押し引きによるものが加わる3条の縦位区画状文により文様帯を縦に5分割している。その各区画内は帯状の横位区画状文がはしり、その上部は波頂部より垂下するものと半円形状の区画状文により文様構成がなされ、下部は鋸歯状の文様が施文されている。これは191に見たように1つの文様帯に従来見られた上段、下段の文様構成が集約されたものと考えられるものである。

202、203は同一個体土器であり、口縁は極端に内反し、胴部には緩いくびれを有している。区画状文は沈線による2条の口縁部から垂下するものがほぼ等間隔に施文されており、横位にはしるものは見られない。充塡文は押し引きによるもので、区画状文に沿って垂下するように施文されている。なお203には1条の沈線による充塡文が見られる。

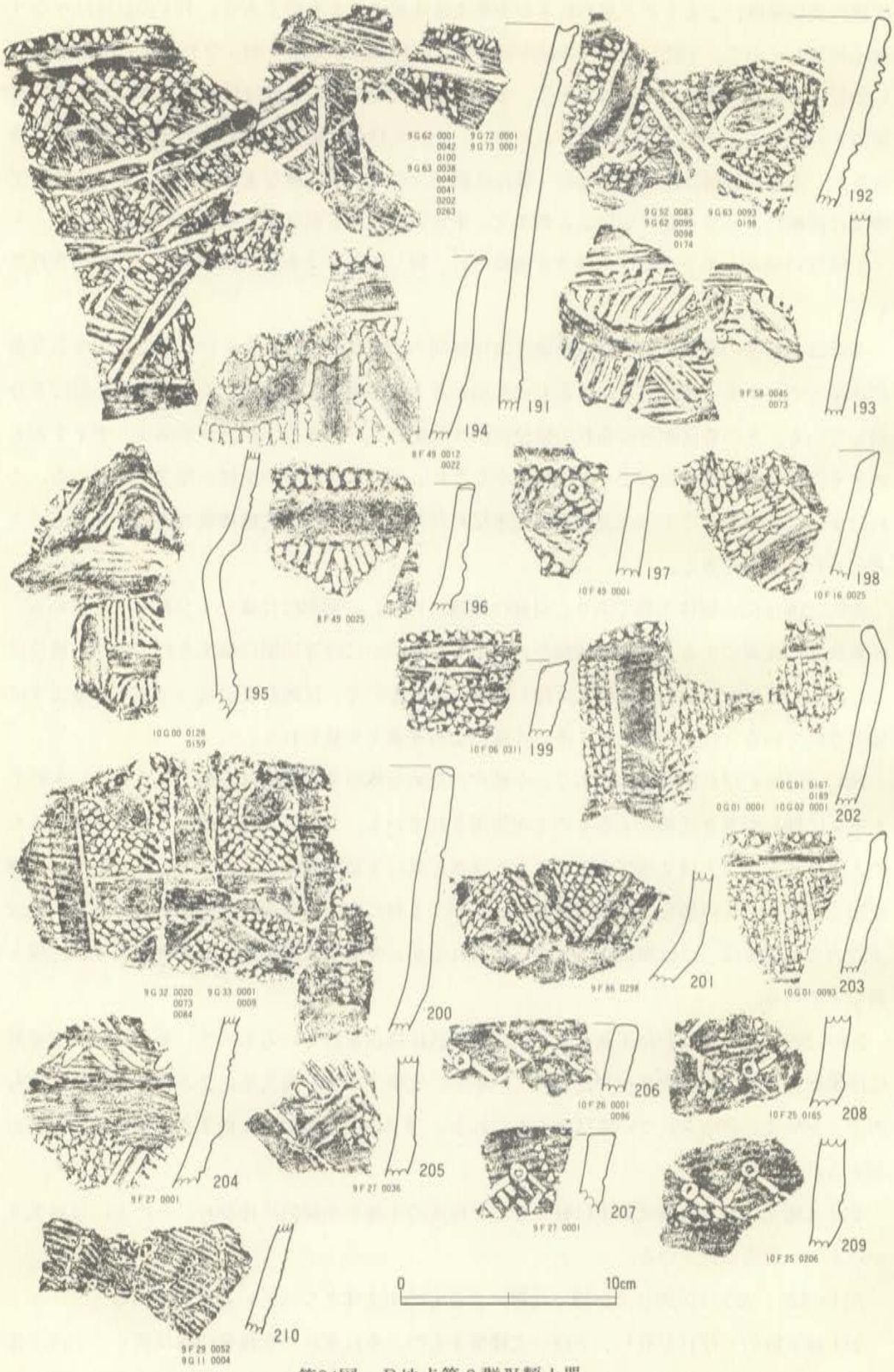
204、205はくびれ部の破片であり、小破片のため全体の文様構成は不明であるが、いずれも充塡文に押し引きと沈線によるものとが併用されている。204は2段の緩いくびれを有するものと思われるが、上段文様帯の下部にもヘラ状工具による調整によりわずかながらくびれを作り出している。この部分には太い沈線が2本づつ1対になって鋸歯状に施文されている。上段、下段の文様構成は、ほぼ類似したものと思われるが、充塡文は区画によって押し引き、沈線と異なっている。

206～209は区画状文が格子状、もしくは鋸歯状に描出されているもので、それぞれの交叉部には規則性をもった刺突文が押捺されているが、充塡文は雑な施文法による押し引きによるもので、充塡文が省略されている区画も見られる。また207、208には垂下する刺突状の文様が加えられている。

210は地文である条痕文の上に軽くなでた程度の沈線が曲線的に描かれ、その上には刺突文がいくつか押捺されている。

211～220、223は区画状文が細い沈線によるものが主体となっているものである。

211は2段のくびれを有し、2段の文様帯をもつ。それぞれの文様帯の幅は狭く、上段文様帯は、縦に4分割する口縁から垂下した隆起線文による縦位区画状文がそのまま胴部くびれ部



第34図　Ｂ地点第２群Ⅳ類土器

を横にはしる。この隆起線文の上にはヘラ状工具により刻み目が顕著に押捺されている。隆起線文により区画された内には、細い沈線による鋸歯状を基調とした文様が施文され、充填文は竹管による押し引きである。また区画状文交叉部の刺突文は、ヘラ状工具を押しひねって施文されている。下段文様帯の文様構成は不明であるが、上段と同様のものと思われる。

212、213は縦位区画状文が隆帯によるものである。212はその上に指頭状工具による圧痕文が加えられ、横位区画状文は、ヘラ状工具を軽く押し引いたものであり、充填文は省略されている。213は2条の隆帯が施文され、竹管と指頭状工具による圧痕文が加えられている。横位区画状文は、2条の隆帯の内側ではヘラ状工具による太い沈線によりタスキ状に施文され、その外側では細い沈線により施文されている。充填文は串状のもので軽くつついた程度のものがみられる。

214～217は同一個体土器であり、口縁は内削げ状でやや外反する。胴部には2段のくびれを有する。縦位区画状文は3条の細隆起線文が口縁から垂下し、横位区画状文は細隆起線文と細い沈線とにより構成され、細隆起線文はタスキ状、鋸歯状に配され、細い沈線によりさらにその区画内を紡錘状に区画している。区画状文交叉部の刺突文は不規則である。充填文は沈線による。

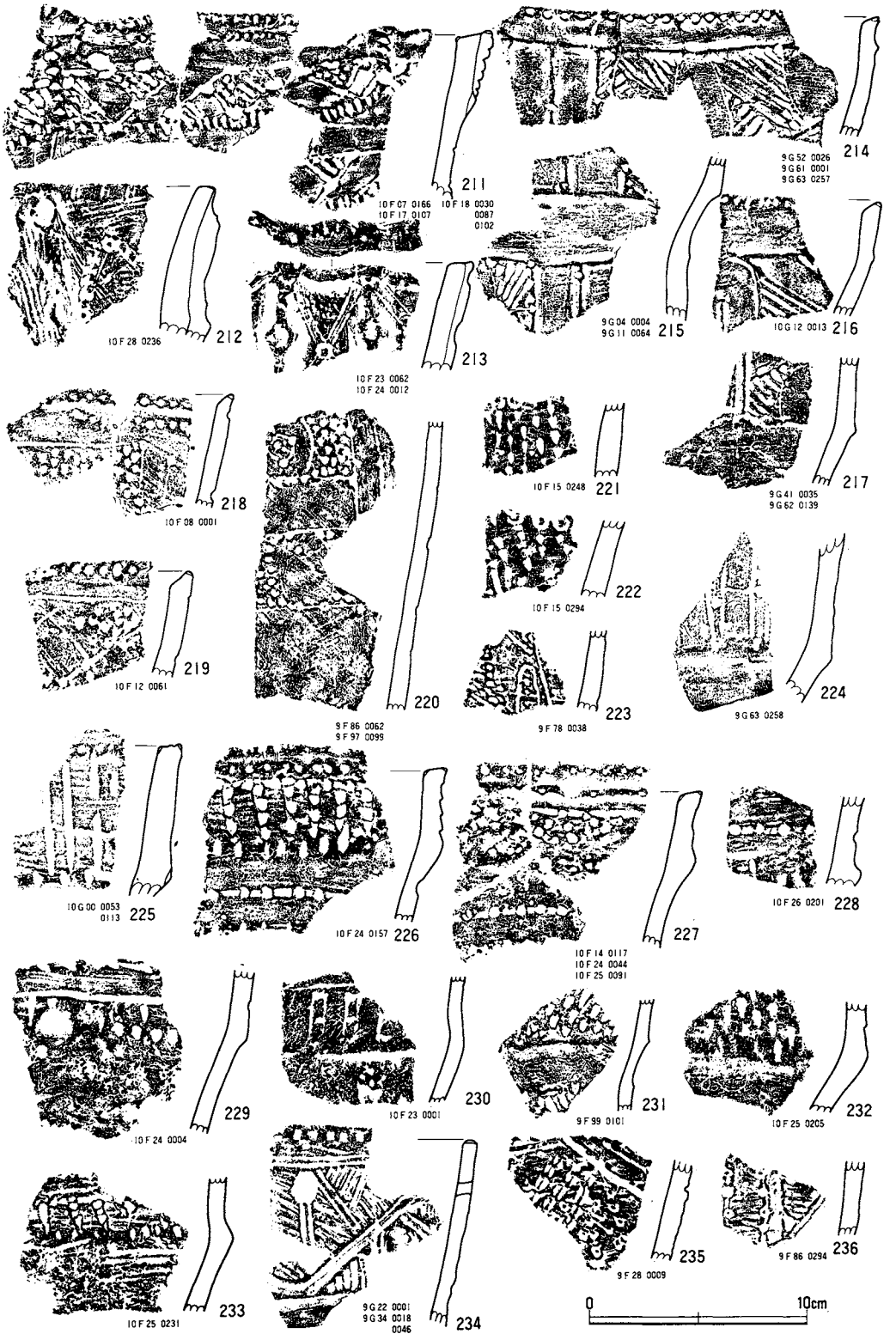
218、220は同一個体土器であり、胴部にくびれが見られず、直線的な器形をなしている。口縁は内削げ状で、口唇部と口縁部に連続刺突文が施文されている。文様帯の幅は広く、3条の縦位区画状文が垂下し、これに直角に接する帯状の横位区画状文と、それにより区画された内に円形、紡錘状の区画状文が施文されている。充填文は竹管による刺突文である。またこの土器の器面調整の条痕文は非常にきめ細かなものである。

224、225、230は区画状文が垂下する沈線のみによるものであり、224、230は平行する沈線とその間に竹管による刺突文が加わったものが、等間隔に施文されている。225は太い沈線により、垂下する沈線と「U」の字が向い合ったような文様とにより構成されている。

199、221、222、226～229、231～233は区画状文が押し引き文によるものである。

221、222は円形竹管による刺突文が横位に配され、そこから雨垂れ状に押し引き文が施文されている。

226～228、229は同一個体土器と考えられるもので、226、227は上段文様帯、228、229は下段文様帯になり、いずれも幅の狭いものとなっている。226は口縁部に間隔をもつ連続刺突文が施文されそれを基点として垂下する押し引きによる文様が施文されている。227は口縁部に横にはしる押し引き文が施され、さらにタスキ状、鋸歯状を基調とした区画状文が押し引きにより施文され、充填文もそれらと同様の工具によるものと思われる押し引き文により施文されている。このように上段文様帯では、2つの異なる文様構成によるものと思われるが、その相互関係は把握できない。一方下段文様帯は横にはしる平行した2条の沈線文にほぼ等間隔に刺



第35図　Ｂ地点第２群Ⅳ類土器

突文が押捺された単純な文様構成となっている。またくびれ部には、指頭状の工具による圧痕文が施文されている。

234は区画状文が半截竹管による平行沈線文によるものであり、横位区画状文が鋸歯状に描出されている。またこの土器に補修孔がみられる。

235は区画状文が沈線により施文され、さらにその内を2連の竹管による押し引き文により区画されており、区画状文交叉部の刺突文はみられない。充填文は円形竹管の刺突文による。

第V類土器（第36図237～253　図版29）

本類の土器は押し引き文、なぞり手法により凹線文、刺突文、沈線文のうち単一の文様要素のみを用い文様が描かれているものであり、区画状文は文様帯を縦位、横位に区画するといった本来的性質を失い単なる文様として描出されている。区画状文交叉部の刺突文と充填文においては、全てに省略されている。

237～243、247は押し引きにより文様が描出されているものである。

237は胴部に2段のくびれを有し、上段文様帯は平行にはしる2列の押し引き文により口縁から垂下するものと弧状に描出されているものとにより構成され、下段文様帯は2列の押し引き文が垂下するものと横にはしるものとにより構成されている。

238は波頂部より垂下する指頭状の圧痕文をもつ隆起線文と蛇行状に描かれた2連の押し引き文とによる。

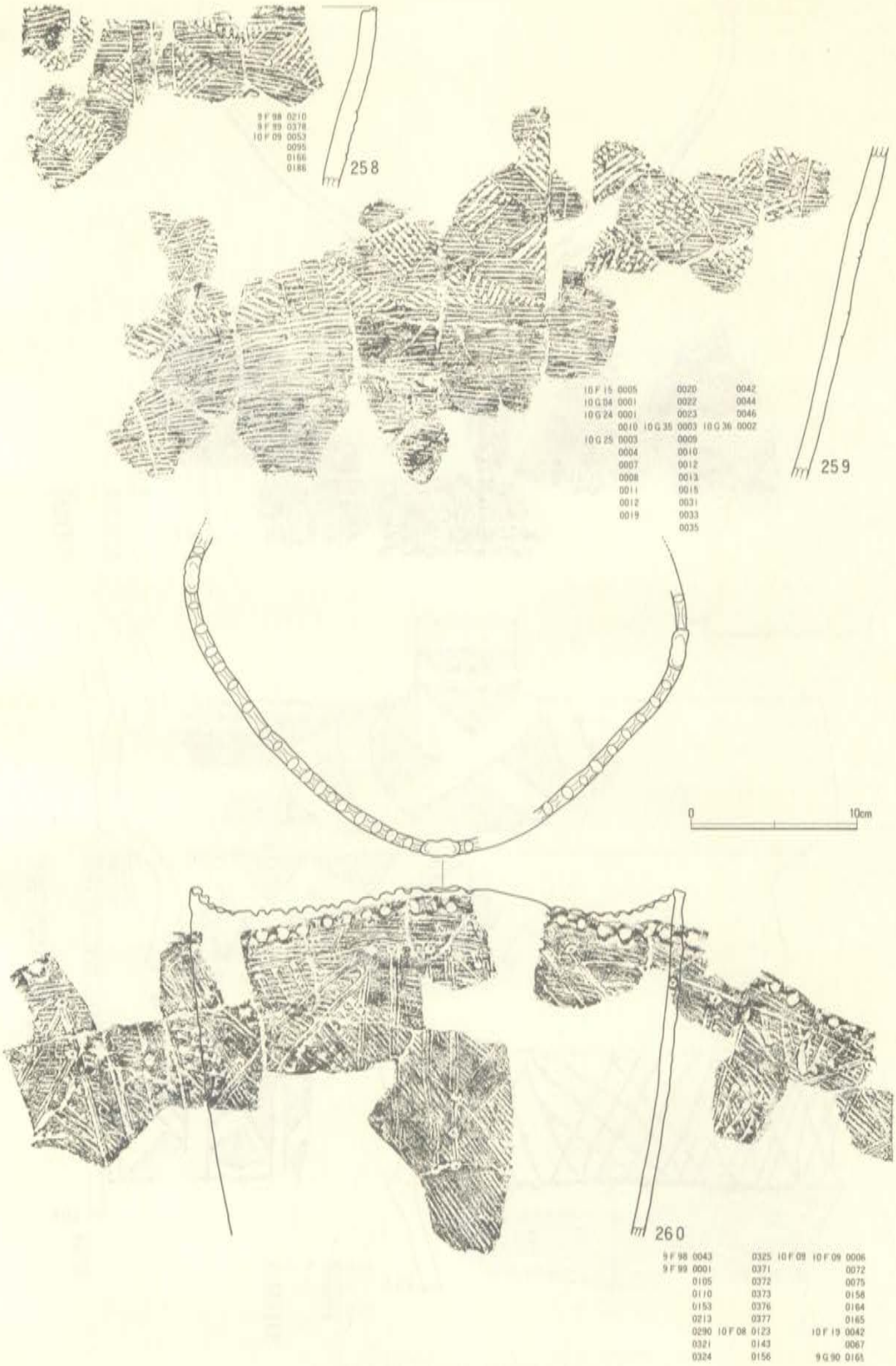
240は2連の押し引き文が横位に、241では縦位に施文されたもので、240では押し引きの方向が途中で180度変わっている部分がみられる。

242、243は同一個体土器であり口縁は波状を呈している。242の波頂部は把手を有し、243の波頂部には鶏冠状の突起を有する。そしてその部分より指頭状の圧痕文と刻み目をもつ隆起線文が垂下している。2連の押し引き文は、隆起線文の周囲を巡るものと口縁に沿ったものとタスキ状に描出されたものが施文されている。

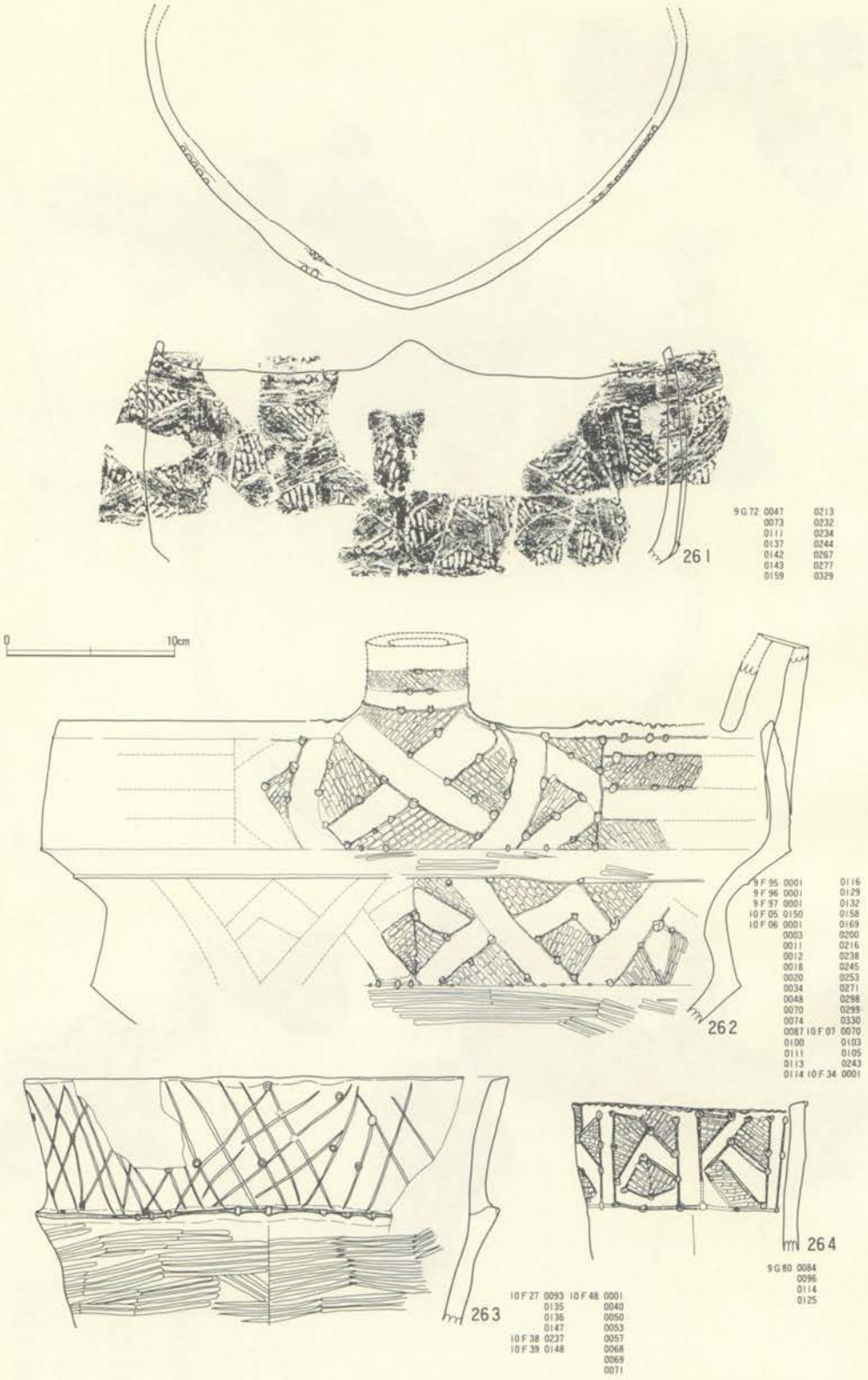
244～246はなぞり手法による凹線文により文様が施文されたもので、この3点は同一個体土器であり、他にこの種の文様をもったものは見られなかった。比較的薄手の土器であり、凹線は指頭またはヘラ状工具により渦巻状に施文されている。口縁はやや内反し、胴部のくびれは顕著なものである。地文の磨り消しは表裏に入念に行なわれているが、器面はかなり凸凹をもっている。

248～250は口縁部に竹管による連続刺突文が施文されているもので、248、249は口縁部に緩いくびれをもち、そのくびれ部分に刺突文が押捺されている。そしてくびれより下には横方向の条痕文が施文されている。250は円形竹管により、2段に押捺されているもので、口唇部は丸みを帯びている。

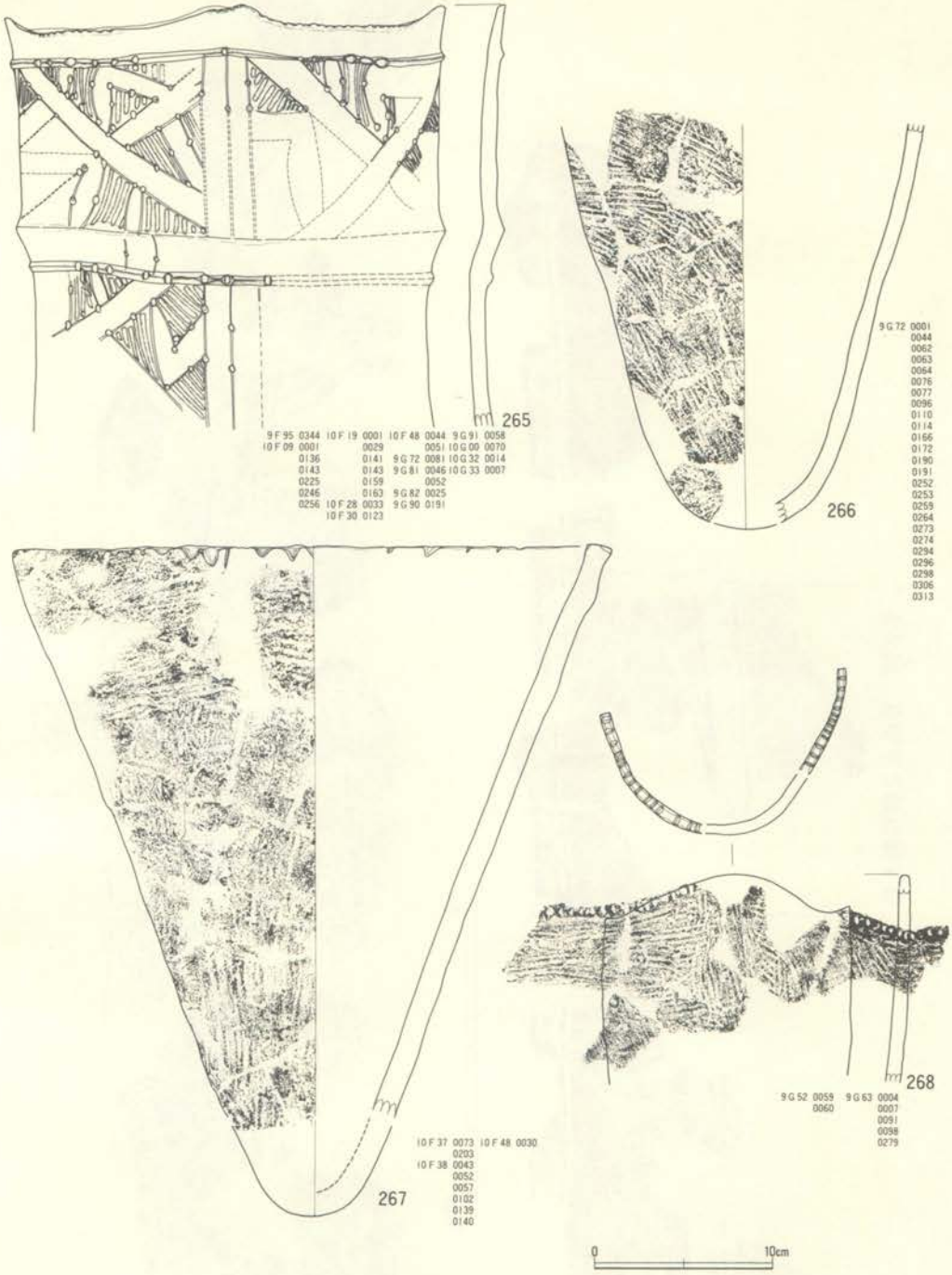
第36図　Ｂ地点第２群Ｖ類土器および把手



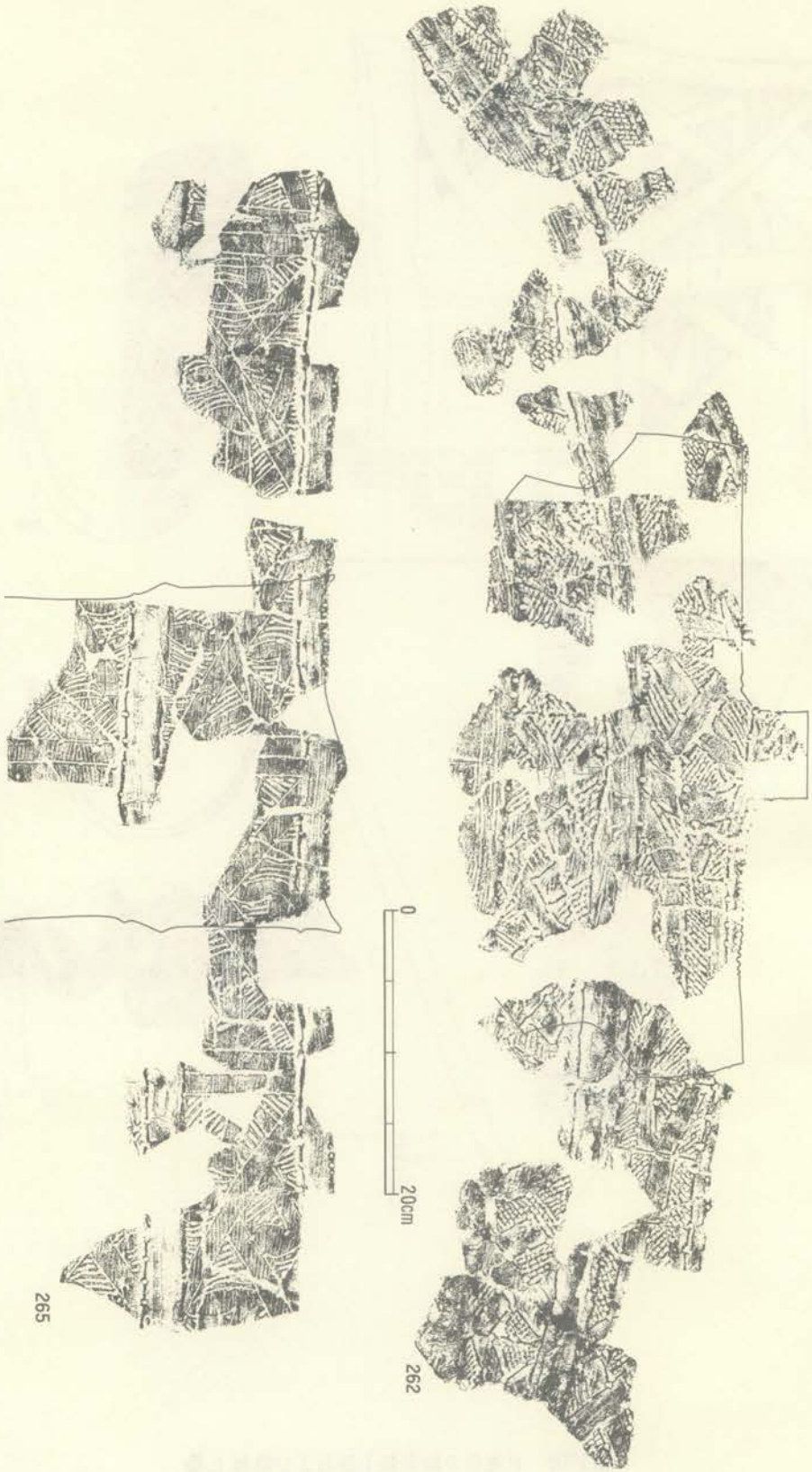
第37図　B地点２群Ⅲ類土器



第38図　B地点２群Ⅲ類土器



第39図　B地点２群Ⅲ類土器および粗製土器



第40図　B地点２群Ⅲ類土器

251、252は半截竹管による平行沈線が鋸歯状に幾本か平行して施文されているものであり、いずれも胴部のくびれは顕著なものとなっている。252には沈線の間に凹線が施文されている。

把手（第36図254～257　図版29）

把手は円筒状の比較的大形で口縁の内側に付けられたもの（254、255）と波状口縁の波頂部に粘土を盛り上げ成形されたもの（256、257）とに大きく分けられる。施文される文様は口縁部、胴部に施文される文様要素・構成の縮小化されたものであり、特に文様構成において相互関係をもつものである。

粗製土器（第39図266～268、第41、42図１～50、第43図１～20　図版31～34）

本遺跡より出土した土器の大半は第２群土器であり、その中でも条痕文のみにより器面調整されているいわゆる「粗製土器」と呼ばれるものが主体を占めている。条痕文は、ハイガイ、サルボウなどの凸凹をもつ貝殻の内側の縁辺を施文具として、土器の表裏面に縦、横に引かれたもので、施文具の大きさにより太い条痕、中位の条痕、細い条痕に分けられる。粗製土器の装飾土器との大きな相違点は、器形において胴部にくびれをもたず、底部は尖底となるものが大半を占めている。この粗製土器の特徴がよく把握できる口縁部、底部についていくつかに分類し説明を行う。

口縁部

口縁は平縁のものが大半を占めているが、268、22のように波状を呈するものも少数みられる。口唇部には竹管やヘラ状工具による刻み目が施文されたものが多い。これら口縁部、口唇部の断面形態により６つに分類することができる。

１～11は口唇部が丸みを帯びたものである。10、11には補修孔が施されている。

12～22は口唇部が内削げ状に調整されているものである。22は口唇部の両端に刻みが施文されている。13には補修孔が施されている。

23～30は口唇部の内削げ状の調整が顕著に施され、さらに表面からも調整が行なわれているため口唇部の断面形が尖頭状になっている。

31～40は口唇部が丸みを帯び内反しているものである。40には補修孔が施されている。

41～46は口唇部が丸みを帯び外反しているものである。46には補修孔が施されている。

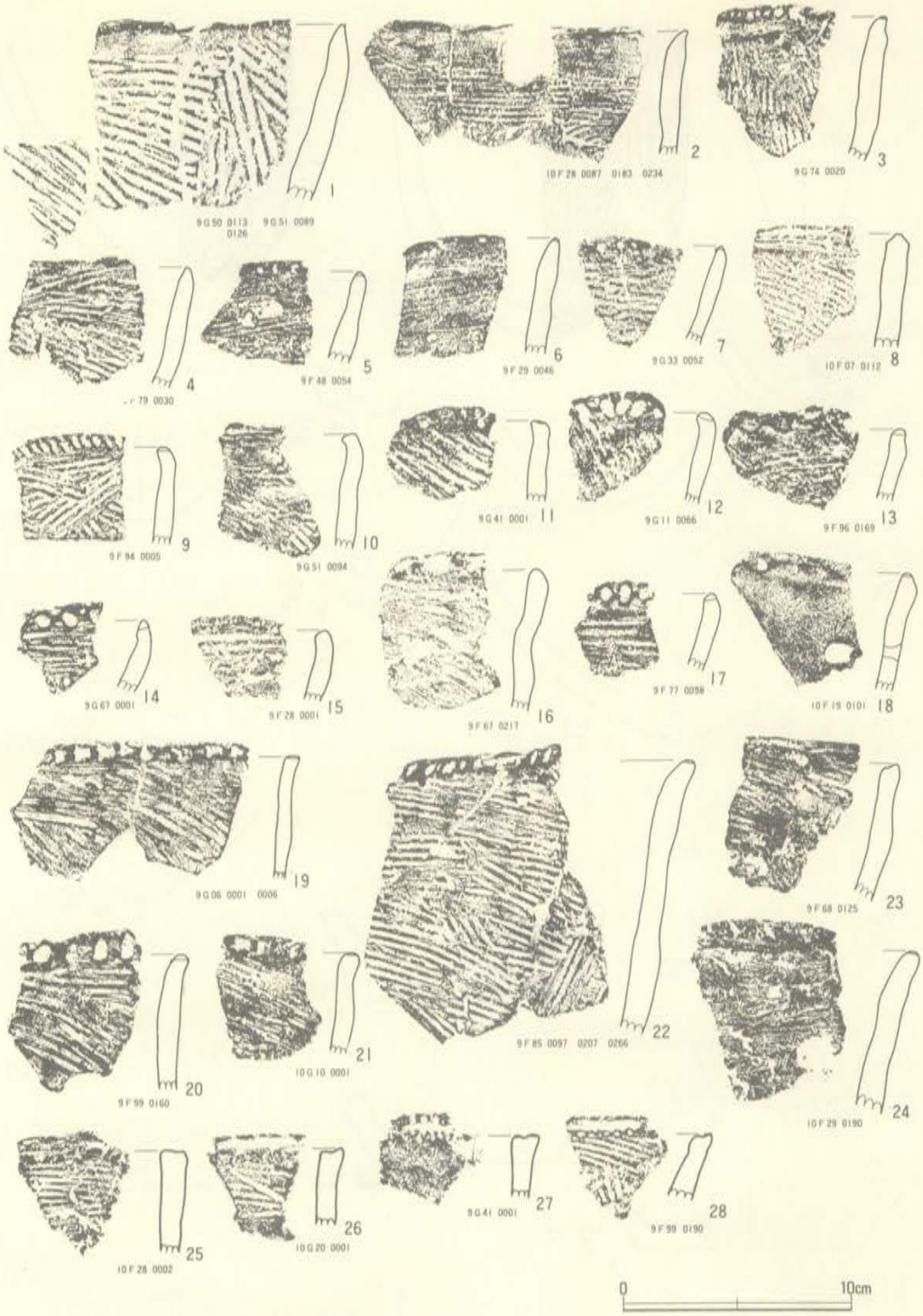
47～50は口唇部が緩い内削げ状に調整されその中央部には浅いくぼみを有するものである。

底　部

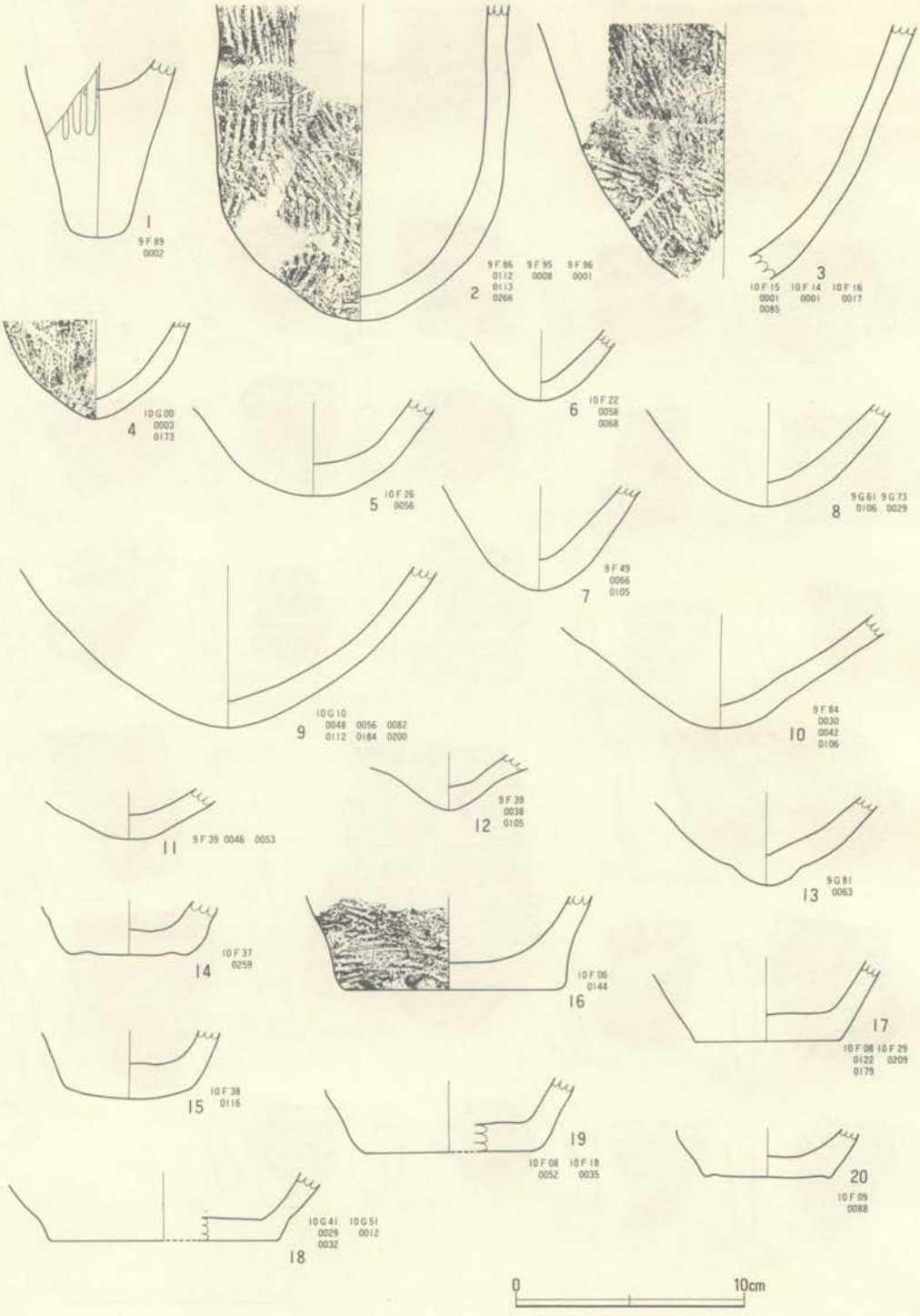
１は第１群土器に属する底部であり、胎土中に繊維は含まれず、器面には縦方向に顕著なヘラ削りによる調整が行なわれている。Ｂ地点ではこの土器以外に第１群の出土例はない。

２～20は第２群土器に属するもので、尖底（２～13）と平底（14～20）に大別できる。尖底

第41図　B地点第2群土器口縁部(1)



第42図　B地点第２群土器口縁部(2)



第43図　B地点第１、２群土器底部

は胴部から緩く曲線を描きながらそのまますぼまるもの（266、267、３～９）と底部に緩いくびれをもつもの（２、10～13）とに分けられる。平底は底面がやや丸みを帯びたもの（14、15）と平坦なもの（16～20）とに分けられる。

第３群土器（第44図１～６　図版35）

本群は縄文時代前期後半に比定されるもので、胎土中に植物繊維を含有しないもの（１～４）とするもの（５、６）に分けられる。１、２は沈線文と押捺文により文様が施文されているものであり、１は波状口縁を呈し、口縁部には半截竹管による２条の平行沈線がはしる。胴部には口縁部より等間隔に平行沈線が垂下する。この沈線の頂部には半截竹管による押捺文が１つないし２つ施文されている。３、４は貝殻腹縁により、縦位方向の波状文が施文されている。５、６はＲＬの縄文が施文されているもので、５には斜行する沈線がみられる。

第４群土器（第44図７～29、第45図１～12　図版35、36）

本群は縄文時代中期に属するものを一括した。さらに３つに細分できる。

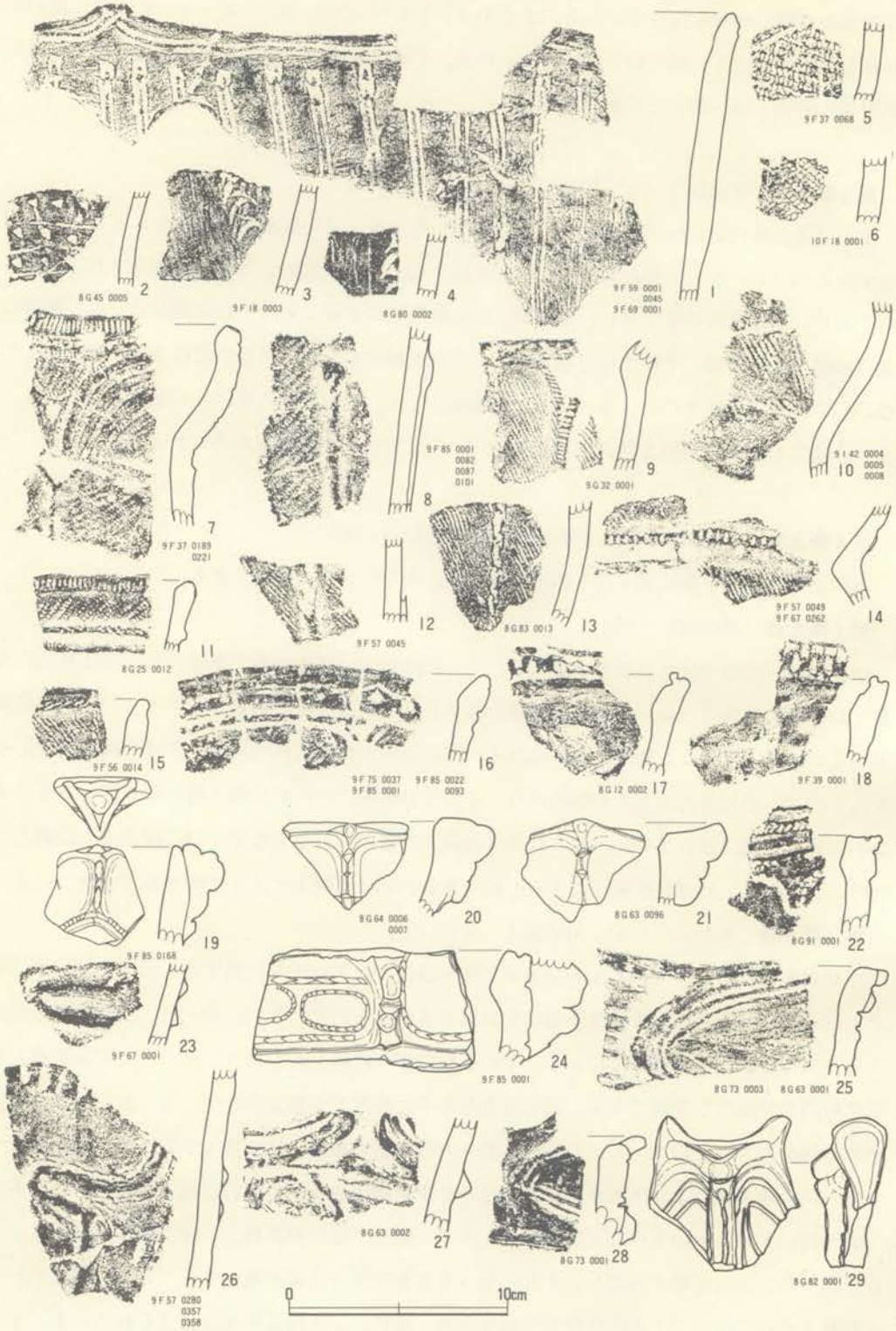
第Ⅰ類土器（第44図7　～18）

中期初頭に位置づけられるものである。７～16は地文に縄文が施文され、17、18は無文の土器で口唇部の内側に「コ」の字状の文様が施文されているだけである。７～９、12は胴部に隆起線文によるＹ字状文が施文され９にはその上に刻みが付けられている。７は口縁が波状を呈するもので、口唇部には刻みが付けられ、そして口縁部には円形竹管の押し引きによる３～４条の弧線文が施文されている。11、14は隆起線文が横にはしるもので、14にはその上に刻みが付けられている。13は結節縄文によるものである。16は沈線文により文様が施文されている。

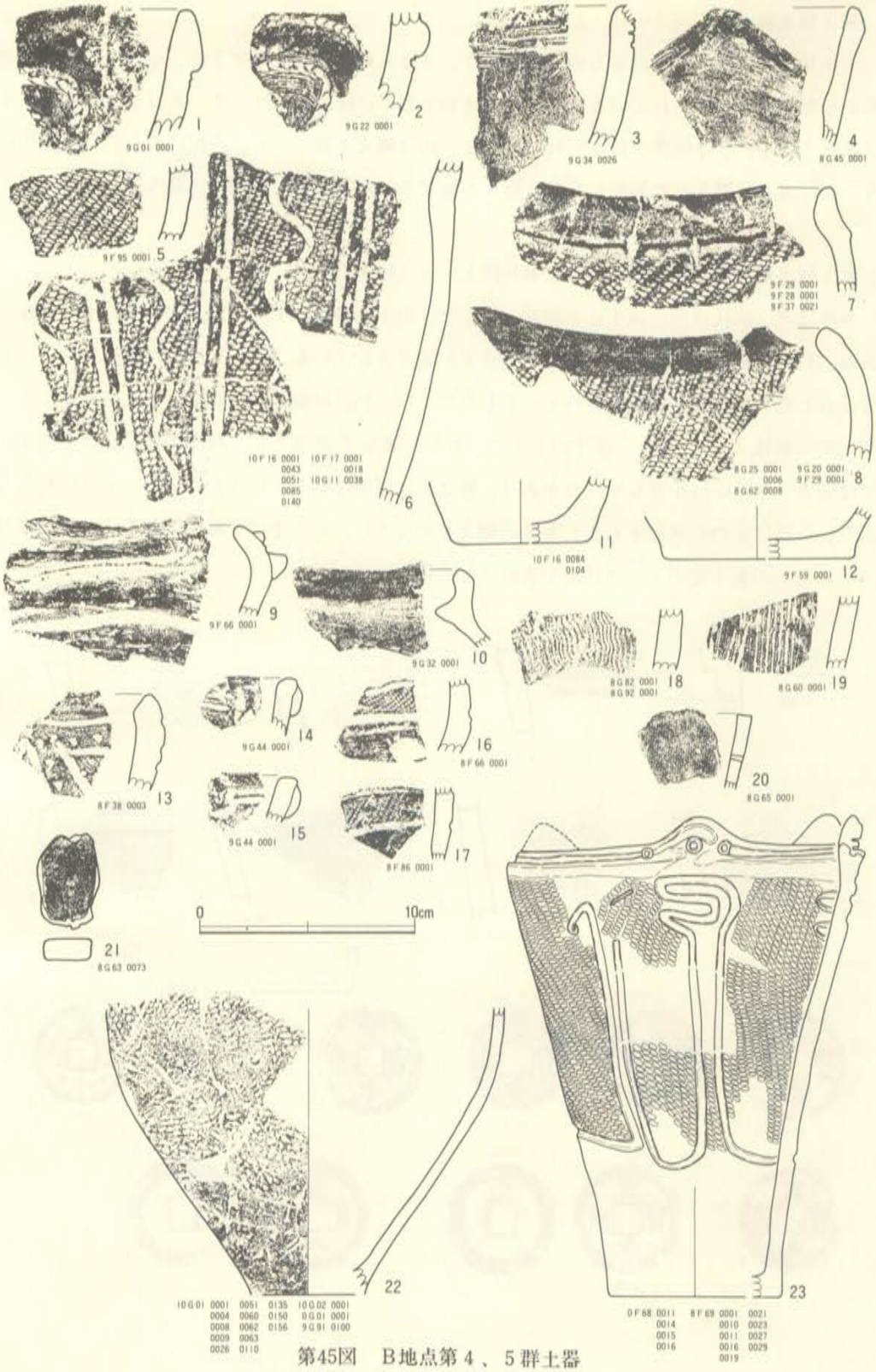
第Ⅱ類土器（第44図19～29、第45図１～４）

中期中葉に位置づけられるものである。19～24は、阿玉台Ｉｂに属するもので、胎土中に細かい砂をまじえたものが多く金雲母はそれほど多く含まれていない。19～21、24は口縁の突起であり、19～21は粘土棒を芯にして、それを包むように粘土板を付け、その上に刻みを施したこの時期の特徴的な突起である。19には突起の下に角押文が施文されている。22、24は口唇部内側に稜を有するもので、22は口唇部に刻みを有し、口縁部には角押文が蛇行状に施文されている。24は角押文により区画され、さらにその中を楕円形状に角押文が施文されたものである。

25～29、１～４は阿玉台Ⅱ式に属するもので、胎土中には金雲母、小礫、細かい砂を多く含む。25、27、28は隆線が発達し、それに沿って２条の平行沈線が施文されている。26は蛇行する隆線とそれに沿って１条の角押文が施文され、横位には連続瓜形文が施文されている。１、２はかなり大形の角押文が隆帯に沿って施文されたものである。３、４は無文土器であるが、３は口縁部に３条の平行沈線が施文され、４は口縁が波状を呈し、内側には稜を有するものである。



第44図　B地点第3、4群土器



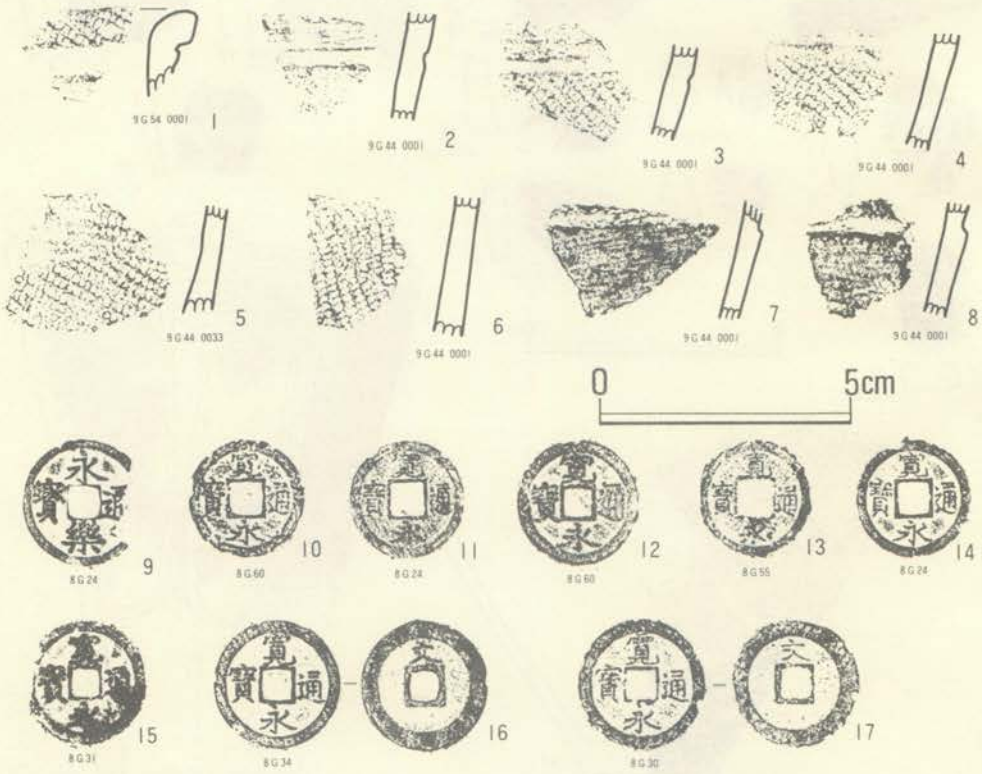
第45図　B地点第４、５群土器

第Ⅲ類土器（第45図５～12、22）

中期後半に位置づけられるものである。５、６はＬＲの縄文が施文され、６には蛇行状と直線的な懸垂文が加えられている。７～10は鉢形土器の口縁部であり、７、８はＬＲの縄文が施文されている。９は隆帯が付けられたもので、10は無文土器であり、内側に段が設けられている。22は良く研磨された器面にＲＬの縄文が施文された、非常に薄手の土器である。

第５群土器（第45図13～20、23、第46図１～８　図版36、37）

本群は縄文時代後期に属するものを一括した。出土総数はわずかであり、いずれも小破片である。13は沈線により区画された中に列点文が施文されている。14～17は口縁部に横位にはしる沈線と磨り消し縄文が施文されているもので、14、15には瘤状の突起が付されている。１～８は同一個体土器であり、薄手のもので、ＲＬの縄文を地文とし、口縁部に２条の沈線が横位に走る。胴部には小さなくびれがあり、無文部は顕著な磨きが施されている。23は完形品であり、口縁に３つの突起をもち、ＬＲの縄文を地文とし、その上に６単位の蕨手文が施文されている。この蕨手文の１つは頭部が省略されて描かれている。



第46図　Ｂ地点第５群土器および古銭

イ．土製品（第45図21　図版36）

無文土器の破片の周縁に調整加工を施し、両端に刻みを入れた土錘であり、土製品の本遺跡からの出土はこの１点のみである。胎土等からみて、第４群II類土器に属するものと思われる。

ウ．石　器

Ｂ地点より出土した縄文時代の石器・剥片類は、総数約5,200点と多量に出土しており、その出土状況は土器同様に遺構からのものはほんのわずかで、第IIb・ｃ層から出土している。分布状態は、土器の分布範囲に重なり、また石器の特徴からも考えて時期的にも同様のものと考えられるが、土器の分布状態に比較して、いくつかの集中部をもった分布状態が見られる。しかし先土器時代に見られるような「ブロック」「ユニット」と言った機能的性格は稀薄なものと思われるが、それらは、剥片・砕片類が中心となった石器組成であり、またこの地点における石鏃、スクレイパー等の石器の石質別割合が、剥片・砕石類のそれにほぼ一致し、またそれぞれの出土数も非常に多いことから、この地点において幾種かの石器が製作されていたものと思われる。そして剥片・砕片類の集中部はそれと関連の深いものと考えられる。石器・剥片類の内訳は、剥片・砕片類が約4,000点と全体の80％近くを占めており（第47図２）、石器としては、石鏃、スクレイパー、ノッチ状石器、石錐、使用痕のある剥片（Ｕ・剥片）、調整痕のある剥片（Ｒ・剥片）、石斧、礫器、石皿、磨石、凹石、残核などといった多くの器種による組成となっているが、数量的に見た場合、石鏃が70％近くを占め、その他の各器種は数量的に少ない（第47図３）。また、石材別に見ると、黒曜石が80％と大半を占めている（第47図４）。このようにＢ地点における石器・剥片類の特徴は、組成の上で石鏃を主体としたもので、石材としては黒曜石を主な素材として使用されている。この黒曜石の原産地について第１次調査の

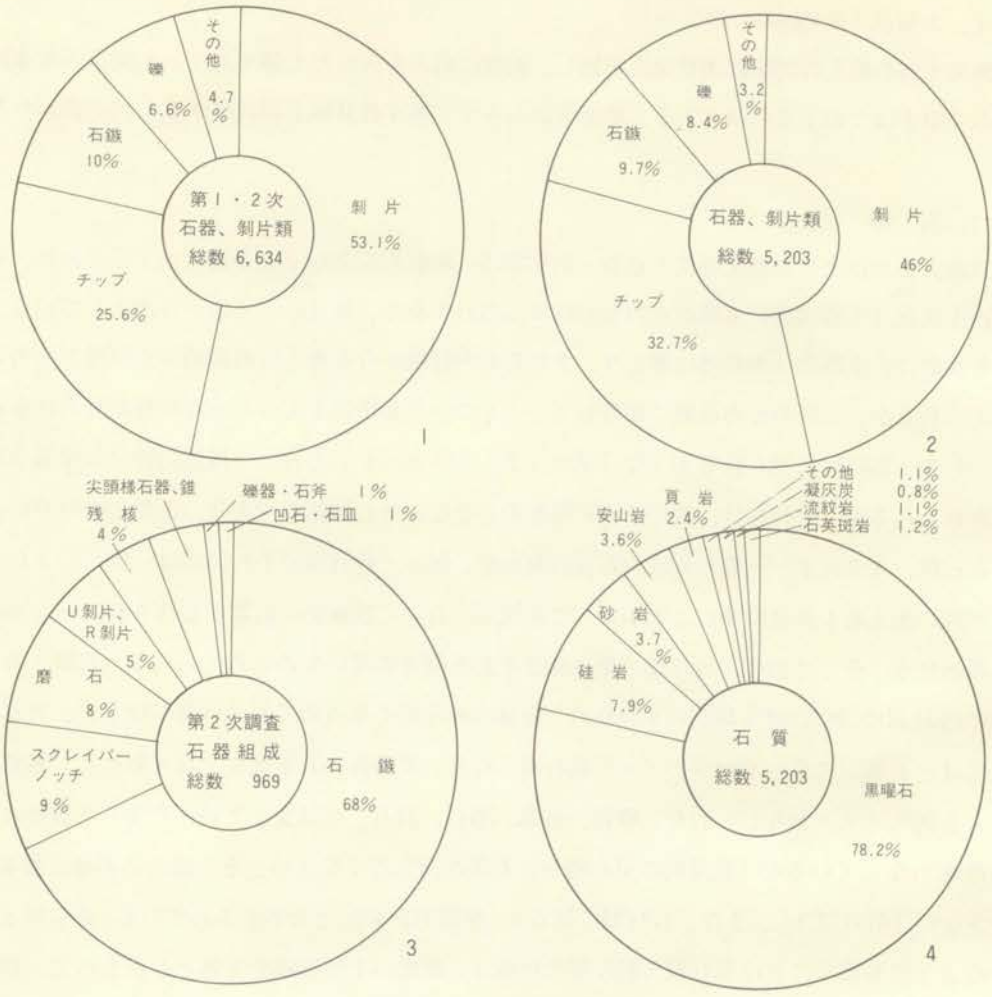
の中で、箱根系と信州系のものに分けられ、その比率は２対３の割合であると分析結果が出されており、このＢ地点のものについてもこれと同様と考えられる。第１次調査でも石器・剥片類の出土量は多く、石器組成、石材についても、今回のＢ地点と同様の結果がでている（第47図１）。

○石　鏃

総数505点で、表土層から出土したものも多いが、その大半は、この地点の主体となっている第２群土器の時期と考えてよいと思われる。石材は黒曜石を使用しているものが断然多く、続いて硅岩、安山岩、頁岩、砂岩の順となっている（第48図１）。大きさは重量0.5～1.5ｇ、長さ15～25㎜のものが多く、また尖端角度は45～60°に集中している。これらの石鏃は形態により以下の12に分類できる。

第Ｉ類（第49図１～61　図版38）

両面に調整加工が施されているもので、形態は、幅に対し長さが長くやや細身の二等辺三角



第47図　B地点石器組成図

形を呈する。基部の抉りはそれほど顕著なものでない。本類のものが量的に大半を占めている。さらに大きさにより5つに細分できる。

a（1～9）　大形のもので、長さが30～35㎜である。

b（10～26）　長さが20～30㎜のもので、aに比べややずんぐりした形状である。抉りが顕著なもの（18）とわずかで三角鏃に近いもの（23、25）も少数みられる。

c（27～47）　bに比べさらに小ぶりになり、長さが15～20㎜のものである。基部の抉りが顕著なもの（28～30、32）やわずかなもの（38、43）が少数みられる。また片面が周縁のみに調整加工が施されたいわゆる「半両面加工品」もある（45～47）。

d（48～56）　本類の中で最小の大きさのもので長さが15㎜に満たないものである。

e（57～61）　非常に細身に仕上げられたもので、調整加工も入念に行なわれている。

第II類（第50、１～32　図版39）

両面に調整加工が施され、Ｉ類に比べ長さに対する幅が広いもので、形状はややずんぐりした二等辺三角形を呈する。基部の抉りは顕著でないものが多い。本類もＩ類と同様に大きさによってさらに区分できる。

a（１～10）　長さが30㎜前後と大形のものである。

b（11～21）　長さが20㎜前後のものである。13は脚部が左右非対称である。19は胴部にややふくらみをもつ、21は主剥離面を残し周縁加工に近い調整となっている。

C（22～32）　長さが15㎜前後のものである。形状は正三角形に近く、基部の抉りも比較的顕著なものが目立つ。

第III類（第50図33～41　図版39）

比較的厚みのある剥片を素材とし両面に調整加工が施されている。形状は肩の部分がやや張り、三角形というよりも砲弾形を呈する。基部の抉りはわずかなものである。調整加工は入念なものであり、38は細部の調整加工も入念に施されている。

第IV類（第50図42～48　図版39）

厚みのある剥片を素材とし、両面に調整加工が施され、基部はほぼ直線的に仕上げられている。形状は稜の高いずんぐりとした三角形を呈する。48は基部の調整加工がエンドスクレイパーを思わせるような調整加工が施されている。

第Ｖ類（第50図49～53　図版39）

両面に調整加工が施され、尖端部が細く鋭角に仕上げられたもので、錐状の形を呈する。基部は第IV類と同様直線的であり、三角鏃に近い形状である。

第VI類（第50図54～61　図版39）

片面調整加工のものを本類とした。

a（54、55）　大形のもので粗い調整加工が施された三角鏃である。54の基部は折断してその部分に細部調整加工を施し仕上げられている。

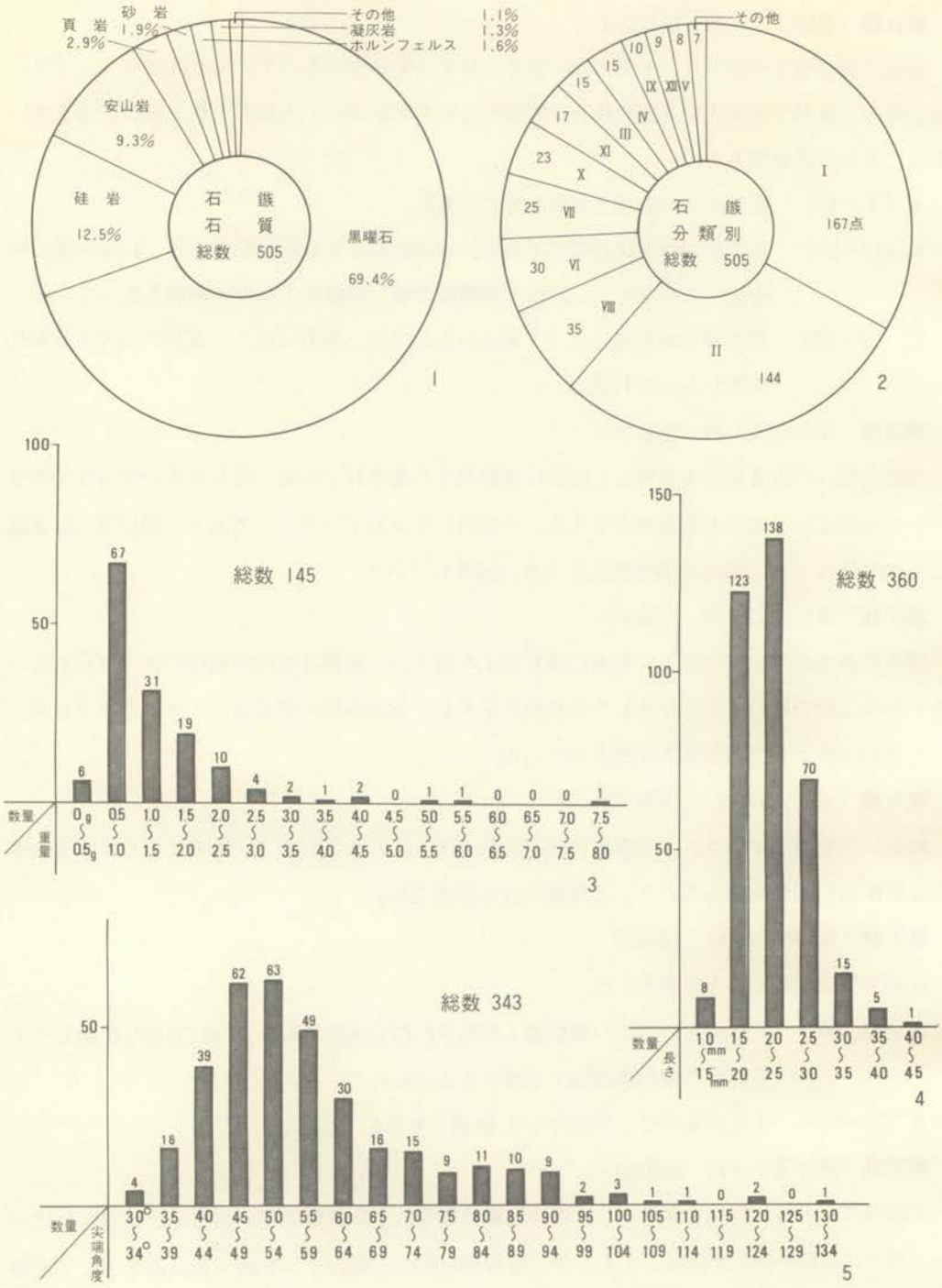
b（56～61）　小形のもので、形状的にはIc類と類似している。

第VII類（第51図１～12　図版40）

大形の厚みのある剥片を素材とし、階段剥離技法等により非常に荒い調整加工が施されている。形状は基部の抉りをほとんどもたず、左右非対称の三角鏃で、石鏃の飛び道具としての機能を果たしえるものか疑問なものが多い。12は尖端部が丸みを帯び、欠損等により再加工されたものと思われる。

第VIII類（第51図13～22　図版40）

周縁調整加工のもので、薄手の剥片の形状を利用して周縁のみに軽い調整を施し加工したものである。形態は個々に特徴をもったものが多く、18は厚みある剥片を素材とし、基部は丸み


砂岩 1.9%
頁岩 2.9%
その他 1.1%
凝灰岩 1.3%
ホルンフェルス 1.6%
安山岩 9.3%
硅岩 12.5%
石鏃 石質 総数 505
黒曜石 69.4%
1
その他
石鏃 分類別 総数 505
I 167点
II 144
2
総数 145
数量
重量
3
総数 360
数量
長さ
4
総数 343
数量
尖端角度
5

第48図　石鏃数量図

を帯びている。21、22は非常に小形のものである。

第Ⅸ類（第51図23～29　図版40）

部分的に調整加工が施されたもので、剥片の形状および鋭い縁辺をそのまま利用して、わずかに、調整加工を施し形を整えたものである。

第Ⅹ類（第51図30～48　図版40）

両面に調整が施され、幅が長さと同じかそれ以上で寸の詰まった三角形の形状を呈する。30～32は基部が直線的に仕上げられ、尖端部は丸みを帯びている。33～38は基部に抉りが施されたもので、35、38は「鍬形」に近い形状となっている。

第Ⅺ類（第51図39～45　図版40）

顕著な抉りにより長脚を有するものを本類とした。

第Ⅻ類（第51図46～59　図版40）

本類は基部に抉りを有しない典形的な三角鏃である。47、48、50は基部に細調整が施されているが、46、49は雑な調整のみである。

その他（第52図１～７　図版41）

本類はⅠ～Ⅻ類のいずれにも属さない形態のもので、１は大形の細身の胴部に対し小さく鈍角な脚を有する。２、３は有茎石鏃である。４、５は左右の脚の長さが顕しく違うものである。６は尖端部と胴部に段をもつ特異的な形状を呈する。７は槍先形尖頭器状のものである。

○槍先形尖頭器（第52図８、９　図版41）

いずれも第Ⅱｃ層中より出土したものである。９は縄文時代草創期のものと考えられ、荒い剥離により調整されている。また表面の風化が激しい。８は細調整加工が入念に施されており、第２群土器に伴うものと考えられる。

○残核（第52図10～15　図版41）

残核は総数24点の出土で、剥片・砕片の出土量に比較して非常に少ない。そして出土したいずれのものも、剥片の剥離作業がすでに不可能なものと思われるもののみである。10、11は打面部と背面に礫面を残している単設打面のもので、幅の広い寸の詰まった剥片を剥離したものと思われる。打面の調整は行なわれていない。12はチュピングツール状のもので、礫の１端より、交互に２、３回の剥片剥離作業が行なわれたものである。13、14は一定の打面をもたず、剥離面を打面とした無作為的な剥片剥離作業が行なわれている。15は打面調整剥片であり、かなり大形の石核の存在がうかがわれるが、今回の調査では出土例はない。

○尖頭様石器・石錐（第52図16～21　図版41）

いずれも剥片の１端に調整加工を施し、槍先形尖頭器状に仕上げたもの（16～18）と錐状に仕上げたもの（19～21）である。

○スクレイパー（第53図１～13　図版42）

出土総数50点、１は石匙であり、大形の剥片を素材とし表面は、荒い剥離により形を整え、さらに周縁に細部の調整が施され刃部、つまみを作り出している。これに対して裏面は、ほとんど二次調整が施されず、刃部、つまみの一部に細部調整が施されているのみである。２～５は比較的厚手の剥片を素材とし、表面のほぼ全面に細かな調整剥離が施され刃部角が鈍角なものである。６～13は剥片の周縁やその一部分に調整剥離を施し刃部を作り出したもので、６、７は非常に荒い調整剥離により、８、９は軽く調整剥離が施され、10～13は細かな調整剥離による。

○ノッチ状石器（第53図14～16　図版42）

剥片の側縁に細かい調整剥離により、抉りを入れたものである。

○調整痕のある剥片（第53図17～21　図版42）

出土総数15点で剥片の一部分に軽く調整剥離を施したものである。

○使用痕のある剥片（第53図22～26　図版42）

出土総数36点で、いずれも剥片のもつ鋭い側縁を刃部として使用されたもので、調整剥離は施されておらず、わずかに刃こぼれが見られる。

○打製石斧（第54図１～３　図版42）

出土数はこの３点のみであり、１は完形品であり、基部には礫面を残し、刃部は片刃状を呈する。２は扁平な剥片を素材として、刃部、側縁に調整剥離が施されたものである。基部は欠損している。３は表面の風化が激しく調整剥離の状態はよく解らないが、表面に荒い剥離により刃部を作り出し、裏面には、わずかに調整剥離がみられるだけで、研磨が行なわれたことも予想される。

○礫斧（第54図４　図版42）

大形の礫を素材とし、その形状を利用し一端に表裏面から研磨のみにより片刃状の刃部を作り出したものであり、石斧のように柄の装着は考えられず、握斧のように使用されたものと考えられる。

○敲石（第54図５　図版42）

礫の先端や側縁に敲打痕が残っているもので、５は先端から側縁にかけてかなり顕著な敲打痕がみられ、頻繁に使用されたことがうかがえる。またこの石器は熱を受けた跡がみられる。

○凹石（第54図６　図版42）

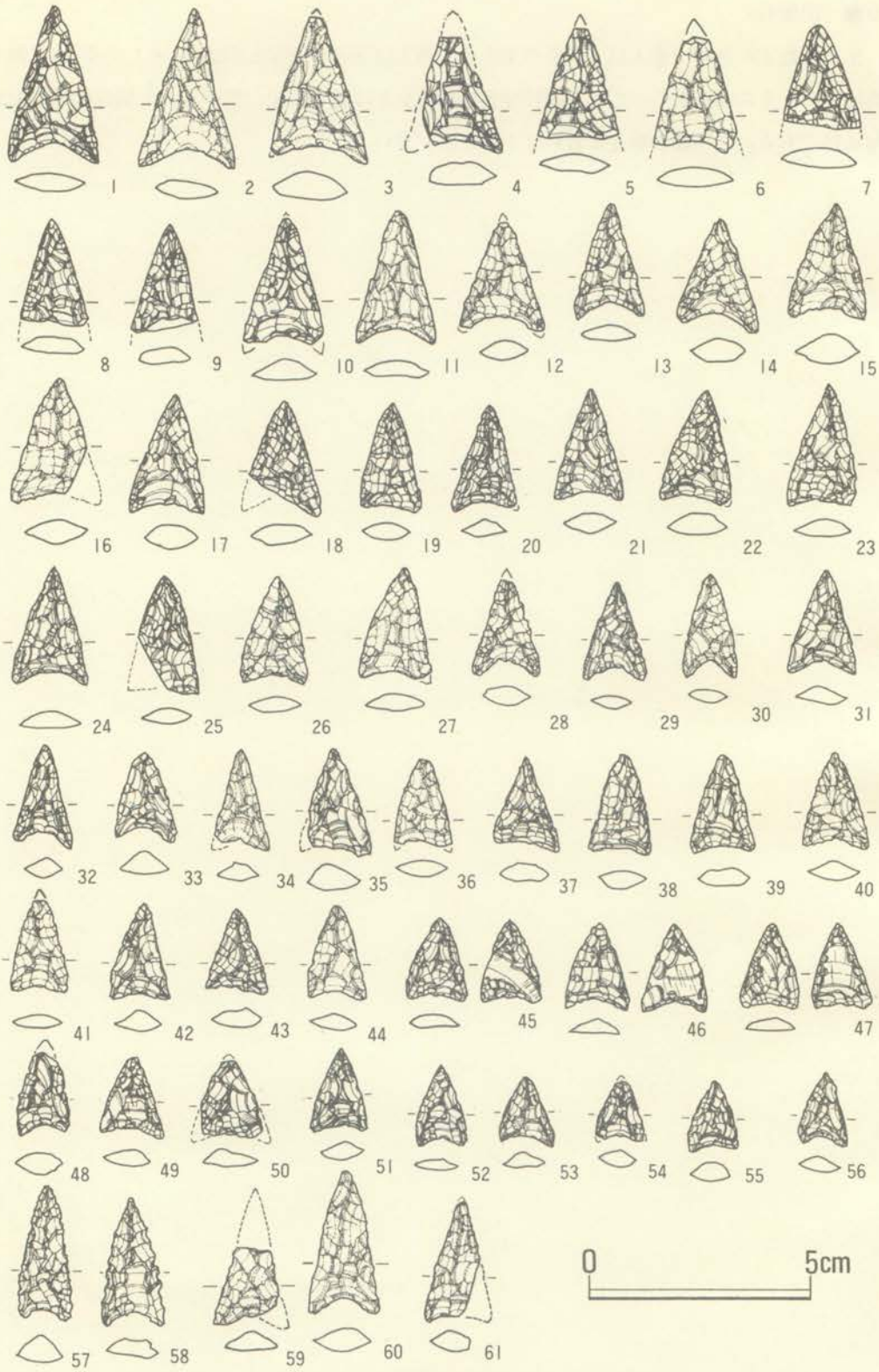
出土数はわずか２点のみであり、非常に少ない。６は両面に３～４つの凹をもち、礫面は研磨されている。

○石皿（第54図７、８　図版42）

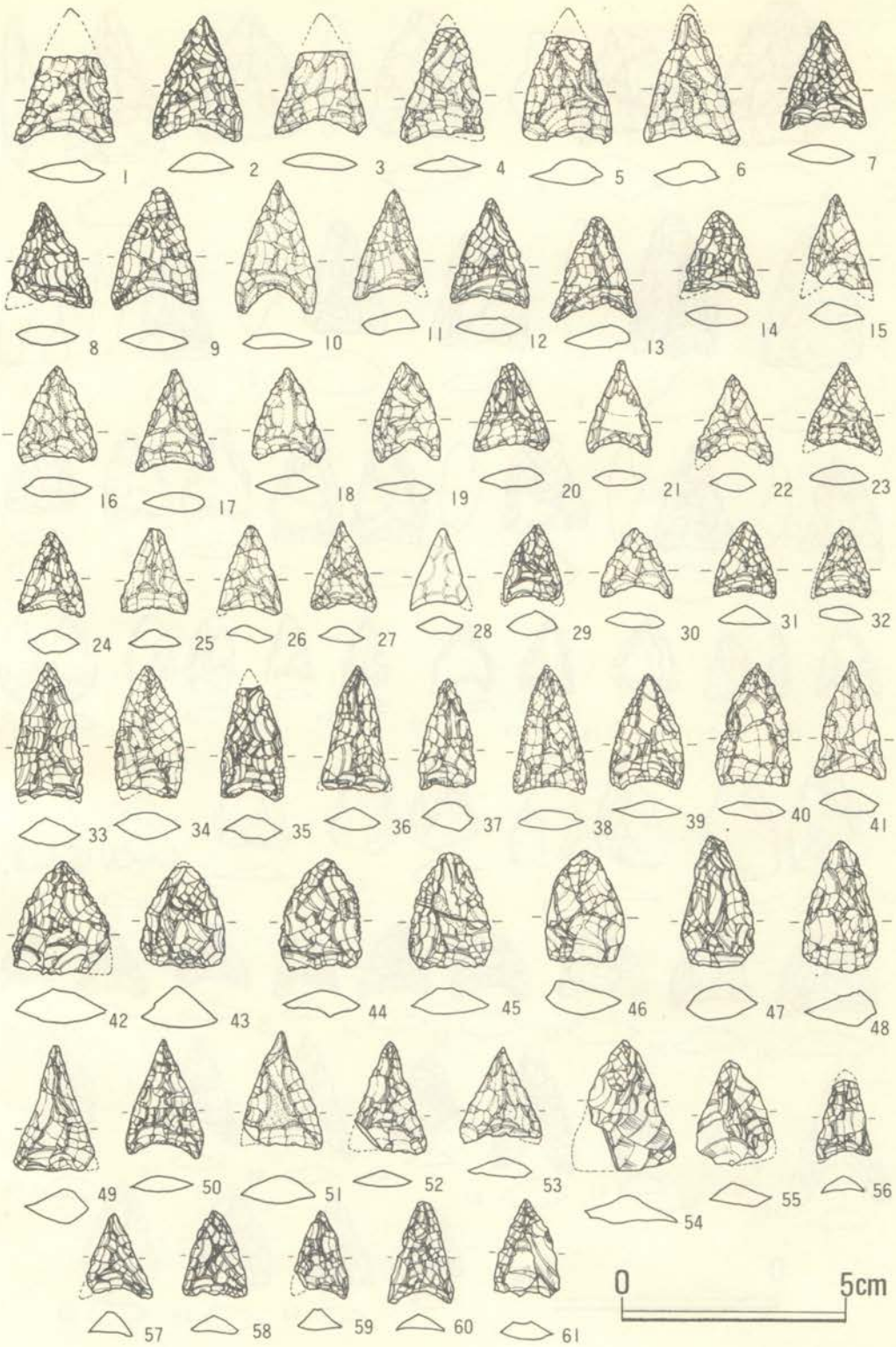
この２点のみの出土で、いずれも欠損品である。８は表面の研きが顕しく行なわれている。

○**礫**（図版42）

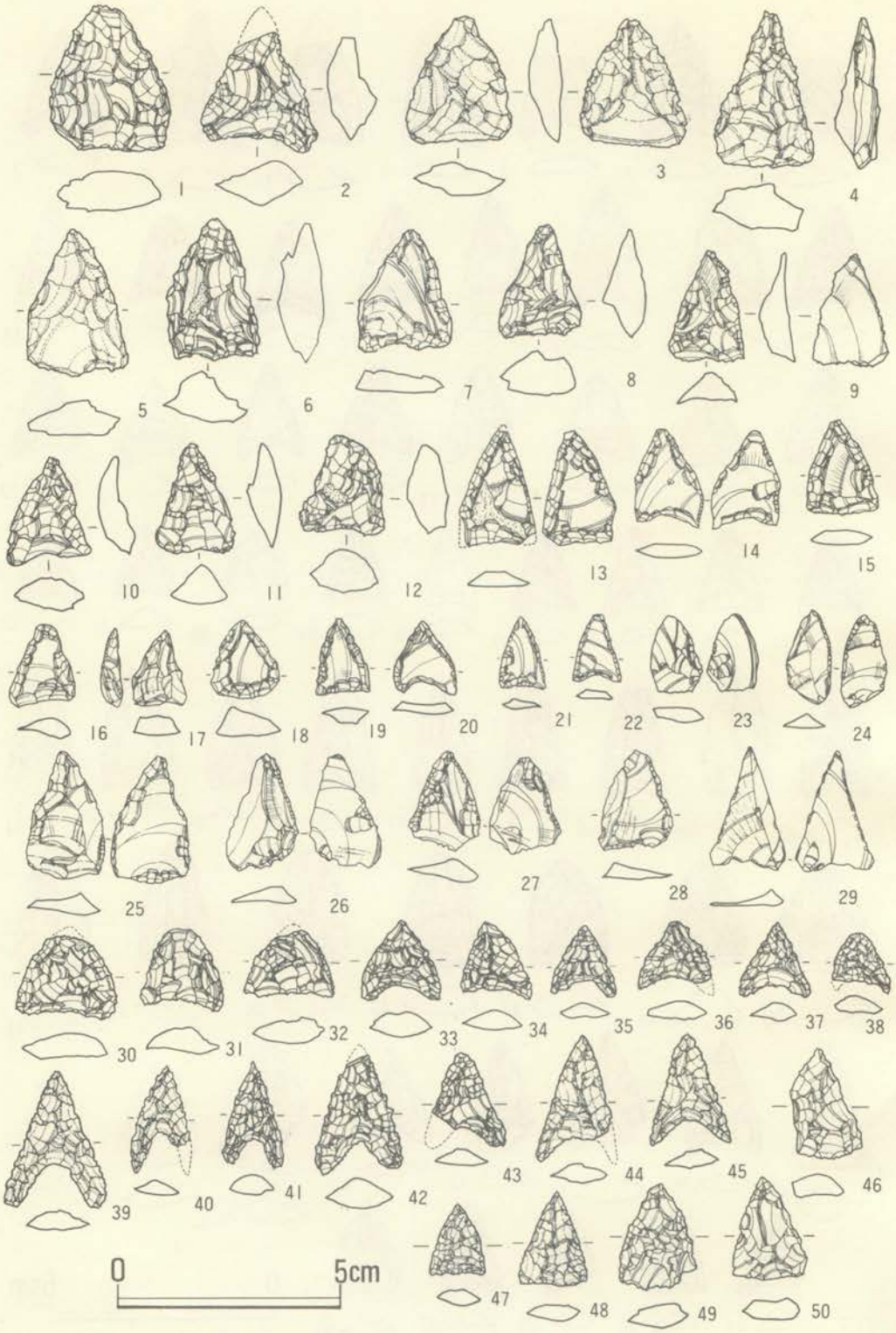
出土総数436点で、拳大以上のもの407点、拳大以下の小さなもの29点、そしてその内、熱を受けているもの85点ある。これら礫の分布に集積などは見られず、他のものと同様散在した分布状態である。この礫の用途において不明な点が多い。



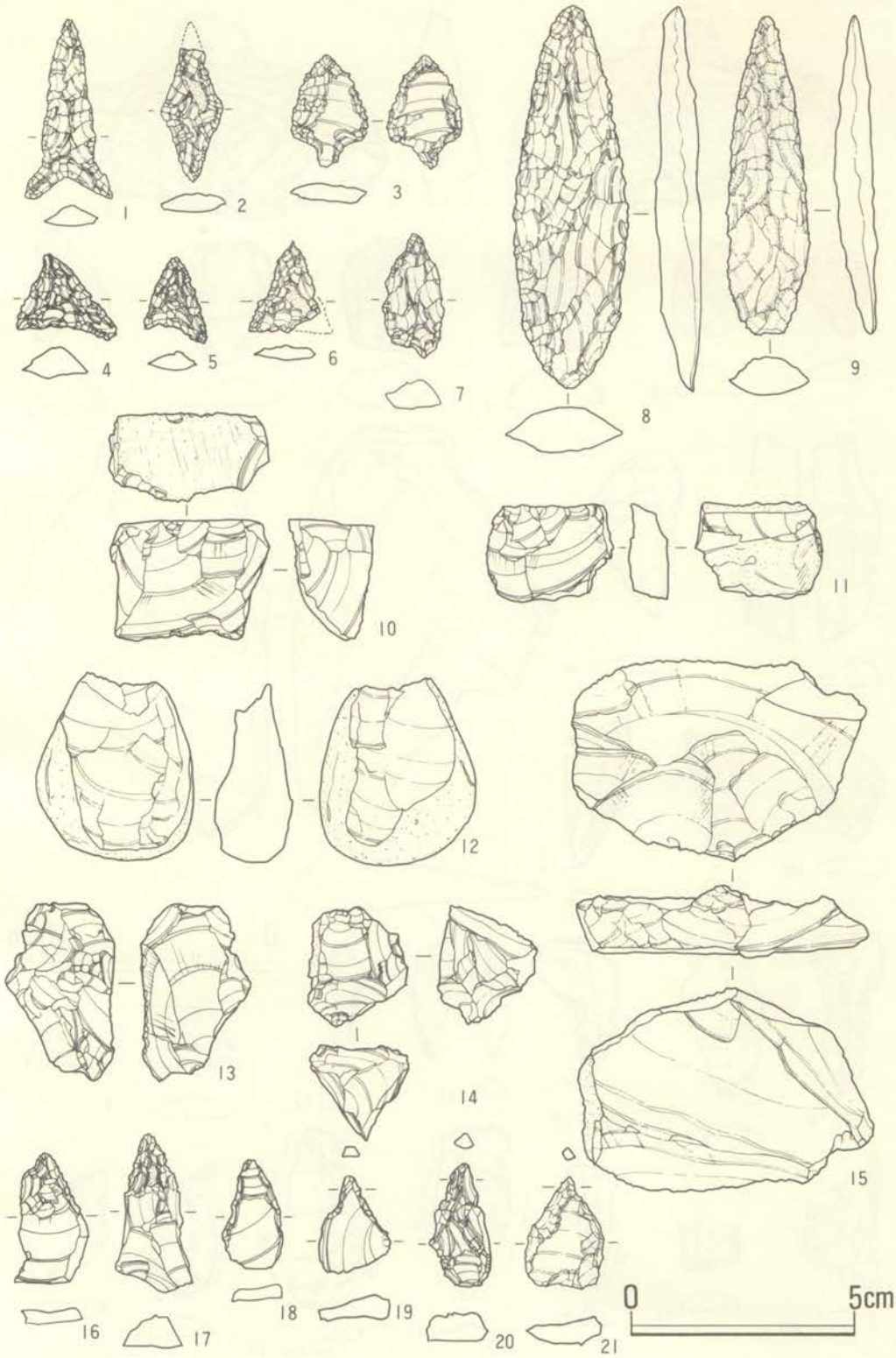
第49図　Ｂ地点縄文時代石器(1)



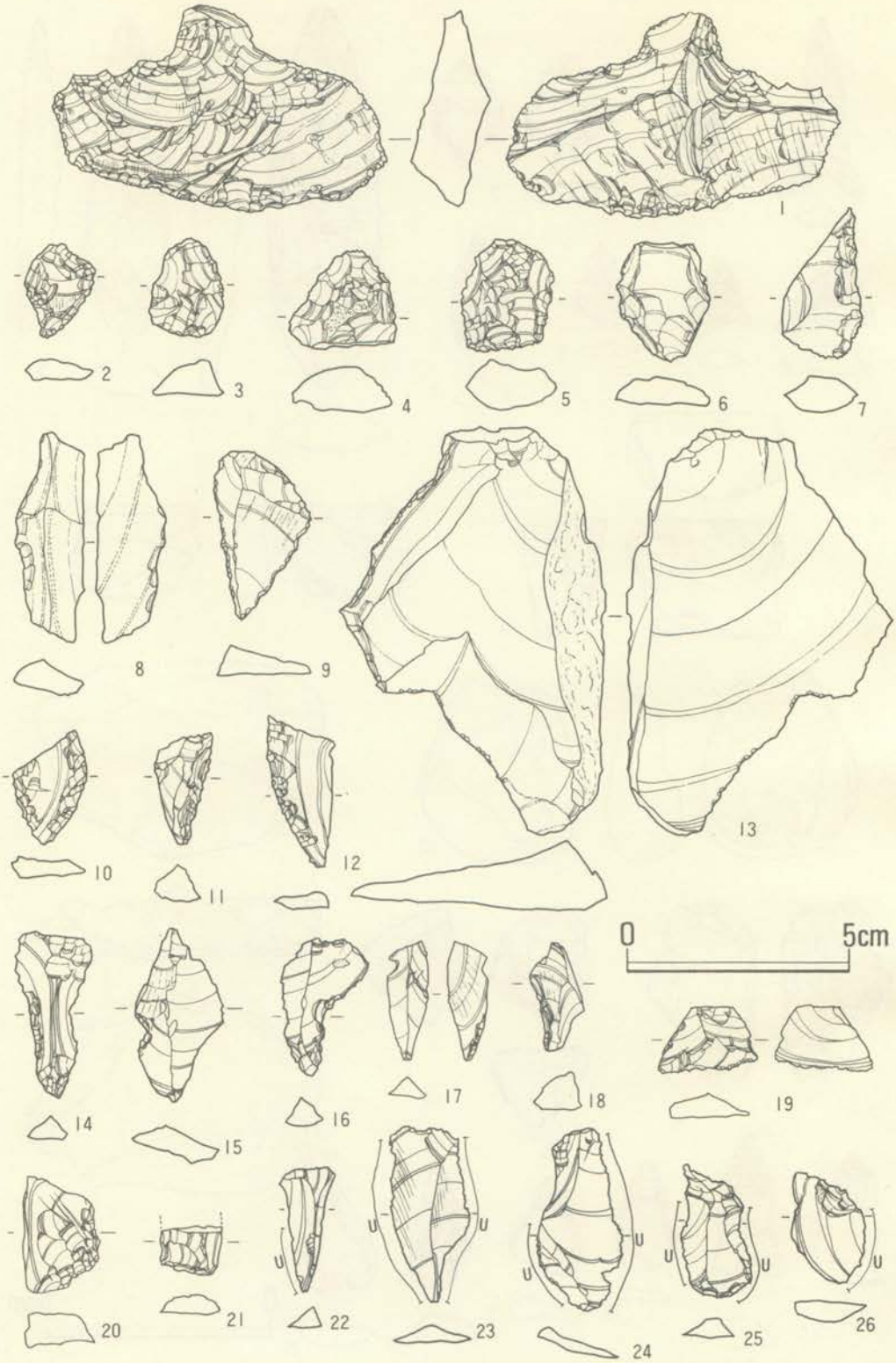
第50図　B地点縄文時代石器(2)



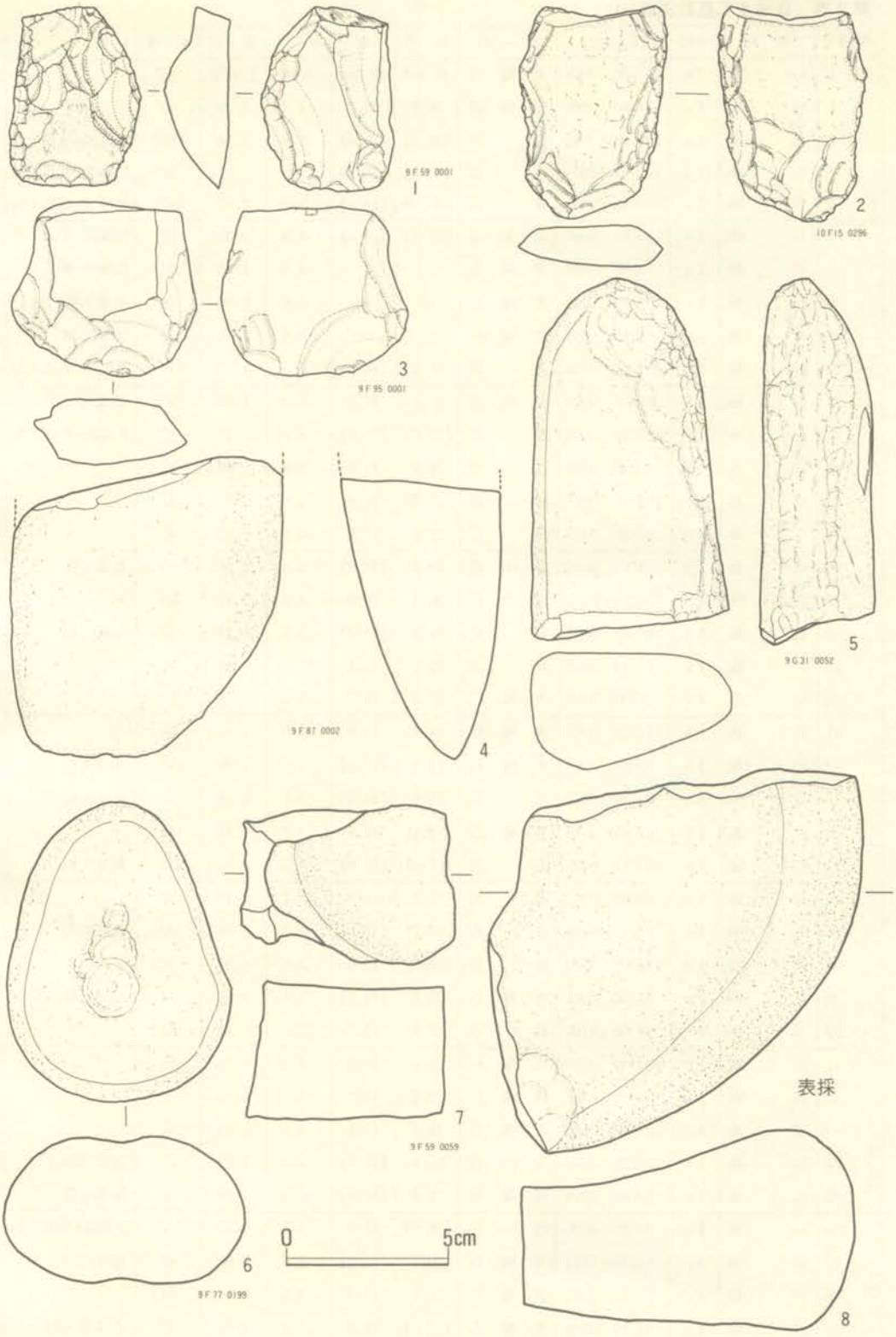
第51図　B地点縄文時代石器(3)



第52図　B地点縄文時代石器(4)



第53図　Ｂ地点縄文時代石器(5)



第54図　B地点縄文時代石器(6)

第2表　B地点石器計測表 (1)

挿図番号	名称	分類	出土地点	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	角度	備考
49－1	石鏃	Ⅰa	10G30 0001	黒曜石	35.4mm	20.5mm	3.8mm	1.99g	36°	
2	石鏃	Ⅰa	9G60 0001	安山岩	36.7	21.7	4.3	2.28	43	
3	石鏃	Ⅰa	10F18 0041	安山岩	(36.0)	(22.0)	5.8	3.04	(48)	先端部・基部欠損
4	石鏃	Ⅰa	10F37 0001	頁岩	(32.0)	(19.5)	4.6	1.97	(55)	先端部・基部欠損
5	石鏃	Ⅰa	10F15 0001	頁岩	(32.0)	(18.0)	3.2	1.37	(47)	先端部・基部欠損
6	石鏃	Ⅰa	9F57 0386	流紋岩	(31.0)	(19.0)	4.4	1.99	(59)	先端部・基部欠損
7	石鏃	Ⅰa	9G22 0045	黒曜石	—	—	4.5	1.56	(48)	先端部・基部欠損
8	石鏃	Ⅰa	9G52 0015	黒曜石	—	—	3.0	0.96	39	基部欠損
9	石鏃	Ⅰa	10F15 0012	黒曜石	—	—	3.8	1.05	37	基部欠損
10	石鏃	Ⅰb	10F24 0010	頁岩	(27.2)	(18.0)	4.3	1.62	(39)	先端部・基部欠損
11	石鏃	Ⅰb	9G35 0022	凝灰岩	29.3	18.0	3.2	1.52	(37)	先端部欠損
12	石鏃	Ⅰb	10F38 0001	頁岩	(27.0)	(20.0)	4.0	1.17	(47)	先端部・基部欠損
13	石鏃	Ⅰb	9F38 0055	頁岩	26.9	15.9	3.0	0.96	47	
14	石鏃	Ⅰb	10F26 0001	硅岩	25.7	18.0	4.6	1.50	47	
15	石鏃	Ⅰb	10F38 0193	頁岩	26.6	17.2	6.1	2.12	47	
16	石鏃	Ⅰb	9F84 0001	安山岩	28.2	(20.0)	4.6	1.85	53	基部欠損
17	石鏃	Ⅰb	10G30 0001	流紋岩	26.1	16.9	4.6	1.45	40	
18	石鏃	Ⅰb	9G62 0001	頁岩	24.9	(17.0)	3.5	1.11	49	基部欠損
19	石鏃	Ⅰb	9F94 0127	頁岩	23.5	13.4	3.4	0.89	55	
20	石鏃	Ⅰb	9G37 0001	黒曜石	23.2	14.7	3.2	0.74	56	
21	石鏃	Ⅰb	9G22 0001	黒曜石	24.4	15.8	3.9	1.03	44	
22	石鏃	Ⅰb	9F85 0069	黒曜石	25.2	(17.0)	4.0	1.29	44	基部欠損
23	石鏃	Ⅰb	9F38 0077	頁岩	27.6	(16.5)	3.5	1.28	37	基部欠損
24	石鏃	Ⅰb	9F85 0014	黒曜石	25.4	16.9	3.7	1.14	46	
25	石鏃	Ⅰb	10F17 0026	頁岩	(27.0)	(15.0)	3.2	0.97	52	基部欠損
26	石鏃	Ⅰb	9F29 0001	硅岩	23.0	15.0	3.2	1.12	32	
27	石鏃	Ⅰb	9G73 0196	頁岩	24.7	(17.0)	3.9	1.16	49	基部欠損
28	石鏃	Ⅰc	10F05 0003	硅岩	(23.0)	15.0	3.9	0.92	(52)	先端部欠損
29	石鏃	Ⅰc	9G90 0001	黒曜石	21.5	(14.5)	2.8	0.58	44	基部欠損
30	石鏃	Ⅰc	9F69 0100	硅岩	22.9	11.9	3.1	0.71	62	
31	石鏃	Ⅰc	10F06 0269	黒曜石	21.0	15.0	3.5	0.76	53	
32	石鏃	Ⅰc	10G34 0005	黒曜石	22.2	13.2	3.9	0.72	38	
33	石鏃	Ⅰc	10F18 0086	黒曜石	18.7	13.5	4.8	0.85	84	
34	石鏃	Ⅰc	9G25 0106	安山岩	21.6	(13.0)	4.0	0.69	33	基部欠損
35	石鏃	Ⅰc	9F95 0004	黒曜石	22.8	(16.0)	6.0	1.28	43	基部欠損
36	石鏃	Ⅰc	9F89 0100	硅岩	(20.0)	12.5	3.7	0.57	(62)	先端部・基部欠損
37	石鏃	Ⅰc	9F39 0111	黒曜石	20.5	(16.0)	4.0	0.81	45	基部欠損
38	石鏃	Ⅰc	9G11 0001	黒曜石	21.5	14.2	4.0	0.86	54	
39	石鏃	Ⅰc	9G44 0088	黒曜石	(22.0)	14.3	3.8	1.08	(40)	先端部欠損
40	石鏃	Ⅰc	10G52 0001	硅岩	20.6	14.5	4.3	1.02	59	

第3表　B地点石器計測表 (2)

挿図番号	名称	分類	出土地点	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	角度	備考
49−41	石鏃	Ic	10F15 0001	頁岩	(23.0)mm	12.6mm	3.0mm	0.73g	(59)°	先端部欠損
42	石鏃	Ic	9F39 0001	黒曜石	21.2	(14.0)	4.4	0.86	44	基部欠損
43	石鏃	Ic	9F87 0042	黒曜石	18.3	13.7	4.0	0.77	49	
44	石鏃	Ic	9F95 0159	安山岩	20.4	13.2	3.1	0.83	48	
45	石鏃	Ic	9G21 0009	黒曜石	18.1	14.8	2.9	0.55	(81)	先端部欠損
46	石鏃	Ic	9G32 0001	黒曜石	19.0	14.2	3.0	0.58	54	
47	石鏃	Ic	10G33 0001	頁岩	18.9	12.8	2.8	0.68	53	
48	石鏃	Id	10G20 0041	黒曜石	(20.0)	11.5	5.5	0.98	—	先端部欠損
49	石鏃	Id	10F16 0113	黒曜石	16.9	14.2	3.5	0.60	55	
50	石鏃	Id	9G90 0160	黒曜石	(18.0)	13.6	3.7	0.72	(60)	先端部欠損
51	石鏃	Id	9F99 0395	黒曜石	18.0	13.7	4.0	0.66	54	
52	石鏃	Id	9G40 0001	黒曜石	17.4	11.2	2.1	0.38	52	
53	石鏃	Id	9G12 0001	黒曜石	(15.0)	12.3	3.4	0.49	(53)	先端部欠損
54	石鏃	Id	9F95 0369	黒曜石	(13.0)	10.7	3.7	0.46	(52)	先端部・基部欠損
55	石鏃	Id	9F96 0120	黒曜石	15.2	11.1	3.9	0.51	57	
56	石鏃	Id	10F15 0043	黒曜石	15.5	10.6	3.3	0.41	51	
57	石鏃	Ie	9G64 0001	硅岩	29.7	12.1	5.3	1.62	37	
58	石鏃	Ie	10G00 0124	硅岩	28.0	13.8	3.6	1.22	41	
59	石鏃	Ie	10F23 0123	流紋岩	(26.0)	(14.5)	3.8	0.86	—	先端部・基部欠損
60	石鏃	Ie	9G50 0117	安山岩	31.8	16.6	4.7	1.70	42	
61	石鏃	Ie	9G22 0001	凝灰岩	31.8	(13.0)	4.6	1.20	41	基部欠損
50−1	石鏃	IIa	10F06 0320	頁岩	(32.0)	(23.0)	3.7	1.57	—	先端部・基部欠損
2	石鏃	IIa	9F97 0052	黒曜石	27.7	19.8	3.8	1.58	53	
3	石鏃	IIa	9F95 0121	安山岩	(28.0)	(21.0)	3.6	1.26	—	先端部・基部欠損
4	石鏃	IIa	9G43 0095	硅岩	(28.0)	(18.0)	3.4	1.39	(72)	先端部・基部欠損
5	石鏃	IIa	9G44 0146	安山岩	(30.0)	(21.0)	5.2	2.03	—	先端部欠損
6	石鏃	IIa	10F49 0023	安山岩	(32.0)	21.2	4.6	2.15	(56)	先端部欠損
7	石鏃	IIa	9F86 0035	黒曜石	23.5	18.8	3.7	1.21	53	
8	石鏃	IIa	9F68 0244	黒曜石	24.2	(19.0)	3.5	1.12	52	基部欠損
9	石鏃	IIa	8F48 0015	頁岩	26.9	18.7	3.5	1.47	53	
10	石鏃	IIa	9F85 0085	安山岩	29.6	17.7	3.5	1.54	50	
11	石鏃	IIb	9G60 0104	砂岩	23.8	(15.2)	4.0	1.27	44	基部欠損
12	石鏃	IIb	10F18 0046	黒曜石	23.3	17.4	3.7	1.12	46	
13	石鏃	IIb	10G20 0001	頁岩	22.6	18.8	4.3	1.36	(44)	先端部欠損
14	石鏃	IIb	10G02 0051	黒曜石	18.6	(18.0)	3.8	0.90	(87)	基部欠損
15	石鏃	IIb	9F45 0001	凝灰岩	(23.0)	(16.5)	4.3	1.02	(47)	基部欠損
16	石鏃	IIb	10F09 0130	安山岩	21.3	17.2	3.9	1.22	60	
17	石鏃	IIb	8F58 0001	安山岩	22.4	17.0	4.1	1.28	(42)	先端部欠損
18	石鏃	IIb	9F57 0333	ホルンフェルス	20.3	15.6	3.3	0.99	62	
19	石鏃	IIb	9G93 0012	硅岩	21.7	15.0	2.9	0.94	75	

第4表　B地点石器計測表 (3)

挿図番号	名称	分類	出土地点	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	角度	備考
50－20	石鏃	IIb	9F84 0010	硅岩	19.1mm	16.5mm	3.9mm	1.05g	51°	
21	石鏃	IIb	9F58 0032	安山岩	20.3	14.1	3.2	0.87	48	
22	石鏃	IIc	9F97 0087	安山岩	18.7	(18.0)	3.9	0.91	55	基部欠損
23	石鏃	IIc	9G80 0001	頁岩	19.0	16.0	3.8	1.03	(54)	先端部・基部欠損
24	石鏃	IIc	10F18 0043	硅岩	17.7	14.6	4.5	1.01	53	
25	石鏃	IIc	10F27 0087	安山岩	(19.0)	14.6	3.5	0.82	(45)	先端部欠損
26	石鏃	IIc	10F09 0098	安山岩	18.5	14.0	3.2	0.82	50	基部欠損
27	石鏃	IIc	9G50 0010	硅岩	18.7	14.5	3.6	0.76	55	
28	石鏃	IIc	9F98 0079	砂岩	17.3	(14.0)	3.4	0.56	50	基部欠損
29	石鏃	IIc	9G24 0035	黒曜石	17.0	(13.5)	4.9	0.85	65	基部欠損
30	石鏃	IIc	9G10 0049	ホルンフェルス	14.7	15.3	3.2	0.61	74	
31	石鏃	IIc	9G30 0004	黒曜石	14.8	14.7	3.8	0.62	(59)	先端部欠損
32	石鏃	IIc	9F39 0004	硅石	(17.0)	(14.0)	3.1	0.55	(48)	先端部・基部欠損
33	石鏃	III	8G23 0019	黒曜石	29.4	14.8	5.8	2.17	58	基部欠損
34	石鏃	III	10G02 0001	硅岩	28.7	15.0	5.6	2.19	60	基部欠損
35	石鏃	III	10F37 0287	黒曜石	(28.0)	14.8	4.7	1.58	(64)	先端部欠損
36	石鏃	III	10F29 0196	瑪瑙	26.9	(17.0)	4.4	1.64	42	基部欠損
37	石鏃	III	9F96 0099	頁岩	23.3	12.7	5.4	1.73	40	
38	石鏃	III	10F05 0001	瑪瑙	(12.8)	16.0	3.8	1.54	(46)	先端部欠損
39	石鏃	III	9F67 0212	黒曜石	24.6	16.6	3.2	1.25	59	
40	石鏃	III	9G95 0008	硅岩	26.3	16.5	3.1	1.59	72	
41	石鏃	III	8G62 0002	安山岩	25.5	15.5	4.5	1.50	48	
42	石鏃	IV	9F79 0001	黒曜石	24.6	(22.0)	6.0	2.80	90	基部欠損
43	石鏃	IV	9G83 0083	黒曜石	(23.5)	18.6	9.2	3.31	(82)	先端部欠損
44	石鏃	V	9F99 0125	黒曜石	24.1	17.2	5.9	2.26	94	
45	石鏃	IV	9F48 0099 49 0053	黒曜石	24.9	18.6	5.8	2.41	—	先端部主剥離面
46	石鏃	IV	9F49 0001	流紋岩	24.1	17.2	6.4	2.64	81	
47	石鏃	IV	9G73 0025	黒曜石	(30.0)	(17.0)	7.1	3.01	52	基部欠損
48	石鏃	IV	9G21 0012	硅岩	28.9	16.9	6.7	2.90	73	
49	石鏃	V	9F79 0001	頁岩	27.0	(19.0)	7.4	2.57	30	基部欠損
50	石鏃	V	10G31 0002	黒曜石	25.4	17.2	3.6	1.16	44	
51	石鏃	V	9F95 0095	硅岩	24.6	(18.5)	5.2	2.08	33	基部欠損
52	石鏃	V	8G63 0001	硅岩	(25.0)	(17.5)	3.5	1.05	40	基部欠損
53	石鏃	V	9G31 0035	安山岩	20.8	18.2	4.3	1.30	51	基部欠損
54	石鏃	VIa	9F76 0020	黒曜石	28.2	(21.0)	5.8	2.35	79	基部欠損
55	石鏃	VIa	9F99 0093	黒曜石	22.9	(18.0)	5.5	1.70	80	基部欠損
56	石鏃	VIb	9G13 0020	黒曜石	(19.0)	11.8	3.2	0.61	—	
57	石鏃	VIb	9G50 0001	黒曜石	17.3	(15.0)	4.3	0.87	47	
58	石鏃	VIb	10F38 0239	黒曜石	18.4	14.1	3.2	0.82	57	
59	石鏃	VIb	9G35 0063	黒曜石	18.9	(13.0)	3.7	0.61	54	基部欠損

第5表　B地点石器計測表 (4)

挿図番号	名称	分類	出土地点	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	角度	備考
50－60	石鏃	VIb	9G10 0001	黒曜石	21.7mm	14.6mm	2.7mm	0.74g	46°	
61	石鏃	VIb	9G00 0001	黒曜石	20.8	14.4	3.1	0.86	57	
51－1	石鏃	VII	10G20 0005	頁岩	33.1	26.9	8.2	7.96	107	
2	石鏃	VII	9G73 0058	黒曜石	(32.0)	(27.0)	11.1	4.70	—	先端部欠損
3	石鏃	VII	9G32 0041	安山岩	27.8	23.5	6.9	4.42	58	
4	石鏃	VII	8G92 0001	頁岩	35.1	22.8	10.0	5.72	40	
5	石鏃	VII	9F47 0088	凝灰岩	32.2	22.6	7.2	5.03	65	
6	石鏃	VII	9G91 0098	黒曜石	31.4	(20.0)	9.7	5.44	62	
7	石鏃	VII	10F09 0194	硅岩	27.1	20.8	5.7	3.15	60	
8	石鏃	VII	9F48 0079	黒曜石	24.9	18.5	9.5	2.97	48	
9	石鏃	VII	9G40 0109	黒曜石	24.3	(17.0)	7.4	2.55	63	基部欠損
10	石鏃	VII	9G50 0040	黒曜石	22.7	18.8	6.6	2.11	38	
11	石鏃	VII	9F96 0001	黒曜石	24.8	17.6	8.6	2.31	48	
12	石鏃	VII	9G53 0001	黒曜石	21.5	19.5	9.1	3.30	82	先端部再加工
13	石鏃	VIII	9F87 0094	黒曜石	(26.5)	(18.0)	3.7	1.59	54	
14	石鏃	VIII	9G83 0101	黒曜石	21.2	15.3	3.3	0.89	55	
15	石鏃	VIII	9G63 0063	黒曜石	20.7	15.8	3.2	0.89	54	
16	石鏃	VIII	10F06 0333	黒曜石	18.1	14.5	4.9	0.95	130	
17	石鏃	VIII	9F38 0073	黒曜石	16.7	11.8	4.2	0.85	47	
18	石鏃	VIII	9F77 0159	黒曜石	17.0	14.8	5.4	1.36	76	
19	石鏃	VIII	9F38 0070	黒曜石	16.4	11.9	3.6	0.67	66	
20	石鏃	VIII	9G53 0001	黒曜石	16.1	13.9	2.3	0.51	65	
21	石鏃	VIII	9F68 0098	黒曜石	15.5	10.2	2.4	0.35	53	
22	石鏃	VIII	9F78 0041	黒曜石	(16.0)	11.0	1.5	0.25	53	先端部欠損
23	石鏃	IX	10F07 0282	黒曜石	16.9	11.0	2.5	0.61	84	
24	石鏃	IX	9G70 0066	黒曜石	(22.0)	9.6	3.6	0.69	92	基部欠損・柳葉形
25	石鏃	IX	9G32 0001	頁岩	26.9	17.6	4.8	1.87	49	
26	石鏃	IX	9G34 0014	黒曜石	25.4	15.2	3.0	0.97	56	
27	石鏃	IX	9G45 0001	黒曜石	21.3	(16.0)	4.0	1.14	66	基部欠損
28	石鏃	IX	9G31 0009	黒曜石	21.2	16.3	3.3	0.80	99	
29	石鏃	IX	9F27 0047	黒曜石	26.3	16.4	3.0	0.75	38	
30	石鏃	X	9F57 0375	黒曜石	(21.0)	22.3	5.1	2.18	95	先端部欠損
31	石鏃	X	10F04 0070	黒曜石	(19.0)	18.1	5.2	1.44	101	先端部欠損
32	石鏃	X	10G10 0011	黒曜石	(15.5)	20.1	5.2	1.11	114	先端部欠損
33	石鏃	X	9G63 0147	黒曜石	17.5	17.7	4.5	1.10	75	
34	石鏃	X	9G41 0001	黒曜石	16.6	16.2	4.0	0.86	73	
35	石鏃	X	9G60 0001	黒曜石	15.1	14.5	2.9	0.52	64	
36	石鏃	X	9G50 0050	黒曜石	(17.0)	(15.0)	4.1	0.69	89	先端部・基部欠損
37	石鏃	X	9G11 0001	黒曜石	15.9	15.9	3.8	0.65	54	
38	石鏃	X	10F08 0112	黒曜石	(13.0)	(14.0)	3.0	0.45	102	先端部・基部欠損

第6表　B地点石器計測表（5）

挿図番号	名称	分類	出土地点	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	角度	備考
51－39	石鏃	XI	9G31 0001	安山岩	29.6mm	22.8mm	3.7mm	1.62g	45°	
40	石鏃	XI	9F77 0186	硅岩	24.1	(12.2)	2.8	0.54	50	基部欠損
41	石鏃	XI	8G 表採	黒曜石	22.5	13.5	4.0	0.73	48	基部欠損
42	石鏃	XI	8G93 0001	黒曜石	(27.0)	19.3	6.2	2.21	65	先端部・基部欠損
43	石鏃	XI	10F15 0057	黒曜石	20.9	(18.0)	3.6	0.71	52	基部欠損
44	石鏃	XI	9F86 0147	硅岩	27.8	(18.0)	4.4	1.19	54	基部欠損
45	石鏃	XI	10G35 0037	安山岩	23.9	17.9	3.3	0.88	60	先端部欠損
46	石鏃	XII	9G50 0005	黒曜石	24.2	(18.0)	4.3	1.57	51	基部欠損
47	石鏃	XII	9G73 0130	黒曜石	15.5	12.5	3.5	0.65	60	
48	石鏃	XII	10G43 0016	硅岩	20.8	15.2	3.6	1.09	52	
49	石鏃	XII	9F98 0012	黒曜石	23.3	(19.0)	6.5	1.85	93	基部欠損
50	石鏃	XII	9F59 0012	黒曜石	23.0	16.8	4.1	1.66	61	
52－1	石鏃	—	10F18 0124	硅岩	40.1	19.0	4.4	2.20	34	
2	石鏃	—	8G73 0002	瑪瑙	(36.0)	13.7	4.0	1.51	—	先端部欠損
3	有茎石鏃	—	8G67 0001	黒曜石	25.6	17.3	3.5	1.38	79	
4	石鏃	—	9F69 0001	黒曜石	21.8	17.5	6.0	1.52	120	
5	石鏃	—	9F96 0184	黒曜石	17.7	14.5	3.7	0.67	59	
6	石鏃	—	9G80 0100	黒曜石	20.6	(15.0)	2.7	0.68	49	基部欠損
7	石鏃	—	9G63 0151	黒曜石	27.0	14.0	7.0	2.14	—	
8	槍先形尖頭器	—	9F49 0002	硅岩	85.6	26.1	9.1	—	—	
9	槍先形尖頭器	—	9G03 0002	安山岩	70.6	18.5	8.0	10.31	—	
10	残核	—	9F58 0130	黒曜石	—	—	—	—	—	調整加工痕有り
11	残核	—	10F29 0031	黒曜石	—	—	—	—	—	
12	残核	—	10F37 0035	硅岩	—	—	—	—	—	
13	残核	—	10F26 0176	黒曜石	—	—	—	—	—	
14	残核	—	9G54 0002	黒曜石	—	—	—	—	—	
15	残核	—	9F49 0022	安山岩	—	—	—	—	—	石核調整剥片
16	尖頭様石器	—	9G04 0007	黒曜石	29.0	15.0	6.0	—	42	
17	尖頭様石器	—	10F14 0077	黒曜石	34.0	14.0	8.1	—	37	
18	尖頭様石器	—	10G01 0160	黒曜石	24.2	13.2	3.4	—	40	
19	錐	—	10G00 0043	黒曜石	21.0	16.0	4.5	—	—	
20	錐	—	10F48 0031	黒曜石	27.4	12.8	6.7	2.53	—	
21	錐	—	9F85 0156	硅岩	25.0	17.6	4.7	2.33	—	
53－1	スクレイパー（石匙）	—	9G95 0009	黒曜石	44.0	73.9	14.1	38.00	—	
2	スクレイパー	—	9G20 0094	黒曜石	20.2	14.9	4.5	1.43	—	
3	スクレイパー	—	9F49 0185	黒曜石	21.0	15.5	4.8	2.65	—	
4	スクレイパー	—	10F05 0239	黒曜石	21.6	23.2	9.6	502	—	
5	スクレイパー	—	9G35 0002	黒曜石	25.5	19.8	9.8	5.37	—	
6	スクレイパー	—	9G81 0055	頁岩	26.5	20.0	5.9	4.21	—	
7	スクレイパー	—	9G40 0031	頁岩	33.2	18.2	8.5	4.63	—	

第7表　B地点石器計測表（6）

挿図番号	名称	分類	出土地点	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	角度	備考
53－8	スクレイパー	—	9F49 0104	安山岩	42.5mm	14.6mm	6.6mm	5.23g	—g	
9	スクレイパー	—	10F22 0005	黒曜石	36.8	19.6	8.8	4.14	—	
10	スクレイパー	—	9F57 0288	黒曜石	20.6	15.9	4.0	—	—	
11	スクレイパー	—	10F09 0191	黒曜石	24.6	12.4	7.6	1.96	—	
12	スクレイパー	—	10G10 0123	黒曜石	29.2	13.0	3.2	1.56		
13	スクレイパー	—	10F15 0120	頁岩	87.5	60.1	15.0	61.50	—	
14	ノッチ	—	9F85 0263	硅岩	35.8	16.9	5.4	3.34	—	
15	ノッチ	—	10F08 0168	黒曜石	37.7	19.3	5.7	3.11	—	
16	ノッチ	—	9F67 0271	黒曜石	29.7	16.5	7.5	3.26	—	
17	R・剥片	—	10G02 0017	黒曜石	26.2	8.7	4.1	0.91	—	
18	R・剥片	—	9G50 0162	黒曜石	23.5	10.5	8.5	1.81	—	
19	R・剥片	—	9G60 0024	黒曜石	13.4	22.0	6.5	1.39	—	
20	R・剥片	—	10F07 0320	黒曜石	25.0	16.8	6.8	4.09	—	
21	R・剥片	—	9G90 0122	頁岩	10.8	13.0	3.8		—	
22	U・剥片	—	9G13 0022	黒曜石	26.5	11.1	5.0	1.00	—	
23	U・剥片	—	9F86 0108	黒曜石	38.6	17.3	3.3	1.81	—	
24	U・剥片	—	10F07 0033	黒曜石	39.4	19.7	4.4	2.78	—	
25	U・剥片	—	9G84 0052	黒曜石	30.0	14.5	5.5		—	
26	U・剥片	—	9F59 0004	黒曜石	23.2	16.8	5.0	1.62	—	
54－1	石斧	—	9F59 0001	砂岩	—	—	—	—	—	
2	石斧	—	10F15 0296	ホルンフェルス	—	—	—	—	—	基部欠損
3	石斧	—	9F95 0001	シルト岩	—	—	—	—	—	基部欠損
4	礫斧	—	9F87 0002	砂岩	—	—	—	—	—	
5	礫器	—	9G31 0052	砂岩	—	—	—	—	—	
6	凹石	—	9F77 0199	砂岩	—	—	—	—	—	
7	石皿	—	9F59 0059	安山岩	—	—	—	—	—	
8	石皿	—	表採	安山岩	—	—	—	—	—	

第３節　その他の時代

鉄滓（図版37）

本遺跡から６点の鉄滓が、第Ⅰ層中から出土している。本遺跡周辺には、取香製鉄遺跡、御幸畑製鉄遺跡といった平安時代の規模の大きな遺跡が発見、調査されている。また他の多くの遺跡からも鉄滓が出土していることから、この周辺で当時製鉄が盛んに行なわれていたと考えられる。

１（７Ｅ－53　0001）表面は灰褐色を呈し、大小の気孔が多く、砂粒をまばらに噛んでいる。破面は銀灰色で部分的に茶褐色の錆が吹出し、比較的密度が高い。重量130ｇ。

２（９Ｆ－96　0135）　表面は暗灰色を呈し、滑らかであるが部分的に皺状の凹凸がある。裏面には砂粒が付着するが、破面の観察においても、砂粒が層状に含まれており、また、この部分に気孔が集中していることからも、２回に亘って流れ出たものが重なっていることが判る。９Ｇ－87グリット出土品と同様製錬流出滓と思われる。

３（９Ｇ－87　0001）　流動性の強い黒色タール状を呈し、比重は小さい。裏面には砂粒が多く付着している。重量14.5ｇ。

４（９Ｇ－87　0001）　表面は暗灰色を呈し、滑らかで部分的に弱い凹凸がある。破面からは、小気孔をまばらに含んでいるが、比較的密度の高いことが観察される。製錬時の比較的流動性の強い流出滓と思われる。重量17ｇ。

５（９Ｆ－94　0001）　暗灰色で部分的に暗赤褐色を呈す。裏面は平坦であるが、表面は皺状の凹凸が著しく流動性が強い。破面は小気孔が密集するが、部分的に大きいものもある。重量３ｇ。

６（７Ｅ－10　0001）　表面は灰色で、茶褐色の錆がまばらに吹出ている。割られた様な破面があり、この面は銀灰色で、小気孔が多く見られる。重量33ｇ。

古銭（第46図９～17　図版37）

いずれも第Ⅰ層中から出土したもので、永楽通宝１枚、寛永通宝50枚が出土している。寛永通宝には大形のもの（12、15～17）と小形のもの（10、11、13、14）とがあり、大形のものの裏側に「文」の文字が書かれているものがある。

第4章　考察編

第1節　B地点出土の第2群土器について
—— 鵜ガ島台式土器の細分 ——

1．はじめに

鵜ガ島台式土器は、山内清男氏により茅山式土器として縄文時代早期後半に位置づけられた（注1）。その後、岡本勇氏らにより茅山式土器の細分が進められ、野島式、鵜ガ島台式、茅山下層式、茅山上層式の4つに分類された。そして鵜ガ島台式土器の型式的特色として岡本氏は「段のくびれと平底の器形を、また文様単位の区画の上に押捺をもつ幾何学的な細隆起文、沈線文をそれぞれメルクマールの典形とする型式」と述べ（注2）、さらには「器形の上では茅山下層式との、文様の上では野島式との系統的関連を示めしている。」とそれぞれの型式間における関連をも述べている（注3）。この岡本氏の指摘した鵜ガ島台式土器の型式的特徴は、今日に至っても的確なものと言える。しかし、これは関野哲夫氏も指摘されているように（注4）鵜ガ島台式土器といった一型式の中においても当然時間差を保有するものと考えられるもので、型式学的に細分されるものと考えられる。このような点を考えるにあたり、本遺跡より得られた資料は好資料であると言える。しかし本遺跡の場合、いずれの資料も自然層中からの出土であり、自然層自体浅く、近年の耕作等による攪乱、削平を受けているため、層位学的観点からの遺物の観察は不可能に近く、型式学的観点に基づいた分類、分析に頼らざるを得なかった。また筆者自身浅学のため、資料の観察が充分に行なわれていないとも思われるが、本遺跡から出土した資料を中心として、鵜ガ島台式土器の細分について行なってみた。なお、この時期の土器には、条痕文のみの調整による粗製土器といろいろな文様が施文されている精製土器の2つのものが見られ、その個体別の比率としては、今回は充分に把握することはできなかったが、粗製土器の比率が大であることは充分に認められることであり、鵜ガ島台式土器の研究を進めるにあたって、粗製土器の研究および粗製土器と精製土器の相互関係をみてゆくことは重要なことと思われる。それらについては今後の課題として充分に考慮して、今回は文様の特色の比較的明確に把握できる精製土器のみについて考えてゆくこととした。

2．鵜ガ島台式土器の文様について

鵜ガ島台式土器の型式的特色は、器形においては胴部に1段ないしは2段の段とくびれを有

し、文様では区画状文、充塡文、区画状文交叉部刺突文の3つの性格の異なる文様が1つの文様帯内において幾何学的な構成により描出されている。この3つの文様は、施文方法の違いにより、それぞれにさらに分類することができる。

区画状文

区画状文は、文様帯をいくつかに区画する役割の文様であり、縦位に区画するものと、横位に区画するものの2つの性格の異なったものとに分けることができ、前者を縦位区画状文、後者を横位区画状文と呼ぶことにした（注5）。そしてさらに細かく見るならば、この縦位・横位区画状文は、施文の段階において、文様帯を大きく区画するものとその区画内をさらに区画するものとの2段階の区画状文に分けることができるものもある。これは特に縦位区画状文では文様要素の違いによって明確に認められる場合がある。またこの2つの区画状文は文様要素の違いにより細分することができ、縦位区画状文の文様要素として、ⓐ隆起線文、ⓑ細隆起線文、ⓒ微隆起線状文、ⓓ沈線文、ⓔ細い沈線文、ⓕ刺突文・押し引き文の6つに分けられ、横位区画状文では、ⓑからⓕの5つに分けられる。これら文様の具体的な施文方法については後に触れることにするが、多様な施文方法がみられる。しかし1つの土器の文様帯においては、縦位・横位区画状文とに共通した単一の文様要素によるものがほとんどであり、複数の文様要素からなるものでもせいぜい2、3のものからなる。

充塡文

充塡文は、縦位・横位区画状文により区画された中に施文される文様であり、各区画間に関連性をもった規則的な施文方向に基づき施文されている。その文様要素としては、ⓐ沈線文、ⓑ細い沈線文、ⓒ刺突文・押し引き文に分けられ、特殊な例として凹線文がこれに加わる。これらも区画状文と同様に1つの文様帯において単一の文様要素のみにより施文されるものが大部分であるが、複数の文様要素によるものも極く少数であるがみられる。

区画状文交叉部刺突文

この文様は区画状文の交叉部や区画状文上に押捺される文様であり、この時期の特徴的文様と言える。そしてこの文様は施文工具により、ⓐ円形竹管によるもの、ⓑ半截（3、4截も含む）竹管によるもの、ⓒヘラ状（多截竹管も含む）工具によるもの、ⓓアナダラ属の貝殻頂部によるものに分けることができる。

以上の3つの文様は、文様要素の組み合わせにおいては、規則性はみられず、さまざまな組み合わせが見られる。しかし文様構成におけるこの3つの文様は、強い規制の上につながりを持ったものと言える。つまり、胴部の段、くびれにより規制された文様帯内を縦位区画状文により4ないし8つに縦割に区画され、さらにそれぞれの区画内をほぼ同様のタスキ状、鋸歯状を基調とした横位区画状文により細かく区画される。そして最小単位の区画内に各区画間に関連をもった施文方向に基づいた充塡文が施文され、最後に区画状文の交叉部に刺突文が押捺さ

れることにより、特徴的な文様構成が作り出されている。言い換えるならば、3つの文様が、1つの文様帯内において、それぞれの文様構成上の役割りを果たすことによって、典型的な鵜ガ島台式の文様が描出されると言える。

3．鵜ガ島台式土器の細分

鵜ガ島台式の文様とその構成の特徴について簡単に述べてみたが、それらが前後型式をも含めた時間の中において、いかなる系統的変遷がみられるか次に述べてみる。

(1)野島式土器

第Ⅰ類とした土器群がこれにあたる。今回の調査で出土したものは、いずれも小破片のため明確な特色を把握するのは難しいが、文様の特徴として、刻み目を有する隆起線文の縦位区画状文が2条垂下し、沈線による横位区画状文がタスキ状に施文され、沈線による充填文がこれに加わっている。区画状文交叉部の刺突文は存在していない。また器形において胴部に緩いくびれがみられる。これらの文様のうち縦位区画状文は、野島式の特徴的施文方法によるものであり、横位区画状文、充填文、そして胴部のくびれは、鵜ガ島台式に通づるものである。この土器群は、野島式の終末段階に位置づけられるものと考える。この他に、この段階の良好な資料として、第1次調査時の14地区から出土した土器があげられる（第55図①）（注6）。この土器は、器形において、口縁がやや内反し、口唇部は丸みを帯びている。胴部にはそれほど顕著なものではないが、わずかにくびれを有する。このくびれにより文様帯は2段に分けられる。さらに、文様要素に沈線文を用いて、縦位区画状文とタスキ状の横位区画状文そして充填文が比較的整った構成により描出されている。これに区画状文交叉部刺突文が加われば、鵜ガ島台式と言っても良いほどのものであるが、文様の施文方法は非常に雑であり、その構成において、また器形においても不安定な感が強いものである。しかし野島式の終末段階において、すでに鵜ガ島台式の特徴的な文様要素、文様構成、器形の土台はできあがっていたものと言える。

(2)鵜ガ島台式土器（第55図　⑥～㉚）

Ⅱ～Ⅳ類の土器群がこれにあたり、それらは文様系統において3段階に分けられる（注7）。第1段階は鵜ガ島台式の初期段階と言えるものでⅡ類がこれにあたる。第2段階は鵜ガ島台式の発展段階と言えるものでⅢ類がこれにあたる。この段階はさらに2つの段階に分けられる。第3段階は鵜ガ島台式の終末段階と言えるもので、Ⅳ類がこれにあたる。この3段階の各段階ごとの特色と相互の関係について見て行くことにする。

第1段階

器形においては、口縁が外反するものが多くなり、口唇部は丸みを帯びたものが多いが、内削げ状の割合も多くなる。胴部には1段ないし2段のくびれを有するが、くびれ状態は緩いも

のである。しかし野島式終末期のものと比べ、はっきりとしたものとなっている。文様においては、縦位・横位区画状文の文様要素に細隆起線文、沈線文、細い沈線文が多く使われ、充填文には沈線文、細い沈線文、押し引き文があり、細い沈線文の割合が多い。その構成は垂下する縦位区画状文と、タスキ状、鋸歯状に描出された横位区画状文による単純なものである。以上の点から見ると前段階のものと共通性が強いものであるが、施文方法、文様構成のまとまりと言った点で安定性が見られる。そして前段階のもので最も異なる点は、区画状文交叉部刺突文が加わることである。しかしこの段階におけるこの文様は、一部分の区画状文交叉部にのみ押捺されているもので、その施文において規則性が見られない。以上のようにこの段階は、野島式終末段階のものが新たな文様要素が加わったことにより、新型式に転換した段階にあると言える。

第２段階

この段階は先に述べたようにさらに２段階に分けられるものであり、第３章の本文中の分類ではａ、ｂに細分した。

ａ段階（第55図⑥～⑩）

器形、文様の要素とその構成において鵜ガ島台式の特徴となるものがほぼ出そろう段階である。器形においては、口縁は外反するものが多くを占め、口唇部は内削げ状のものが大部分となる。胴部のくびれ状態は顕著なものとなり、それに伴い土器の大形化の傾向が見られるようになる。また口縁上部から見た形が方形を呈するような特異的器形も見られるようになる。文様においては、縦位・横位区画状文の文様要素に第１段階のものに新たに隆起線文、微隆起線状文が加わり、充填文では文様要素の種類は変わらないが、押し引き文の割り合いが多くなり、逆に細い沈線文の割り合いが非常に少なくなる。また文様の施文方法が多様化し、施文工具としてヘラ状工具の使用が多くなる。文様構成においては、文様帯内における縦位・横位区画状文の相互関係にまとまりが見られ、安定したものとなると同時に横位区画状文の複雑化する傾向が見られる。そして区画状文交叉部刺突文も施文において規則性が見られるようになり、安定した文様となり、同時に文様構成において大きな部分を占めるものとなっている。以上述べてきたこの段階の特徴を具体的資料により見てみると、⑥は②と系統的つながりの強いものと考えられるもので、両者を比較すると、⑥は丁寧な文様が施文されており、特に横位区画状文は複雑化するとともに、縦位区画状文により縦割りされた各区画内における文様構成に規則性がみいだせる。⑩は上段文様帯の縦位区画状文が強調されて施文されているもので、その延長上の口縁にはこの時期特徴的な突起を作り出している。

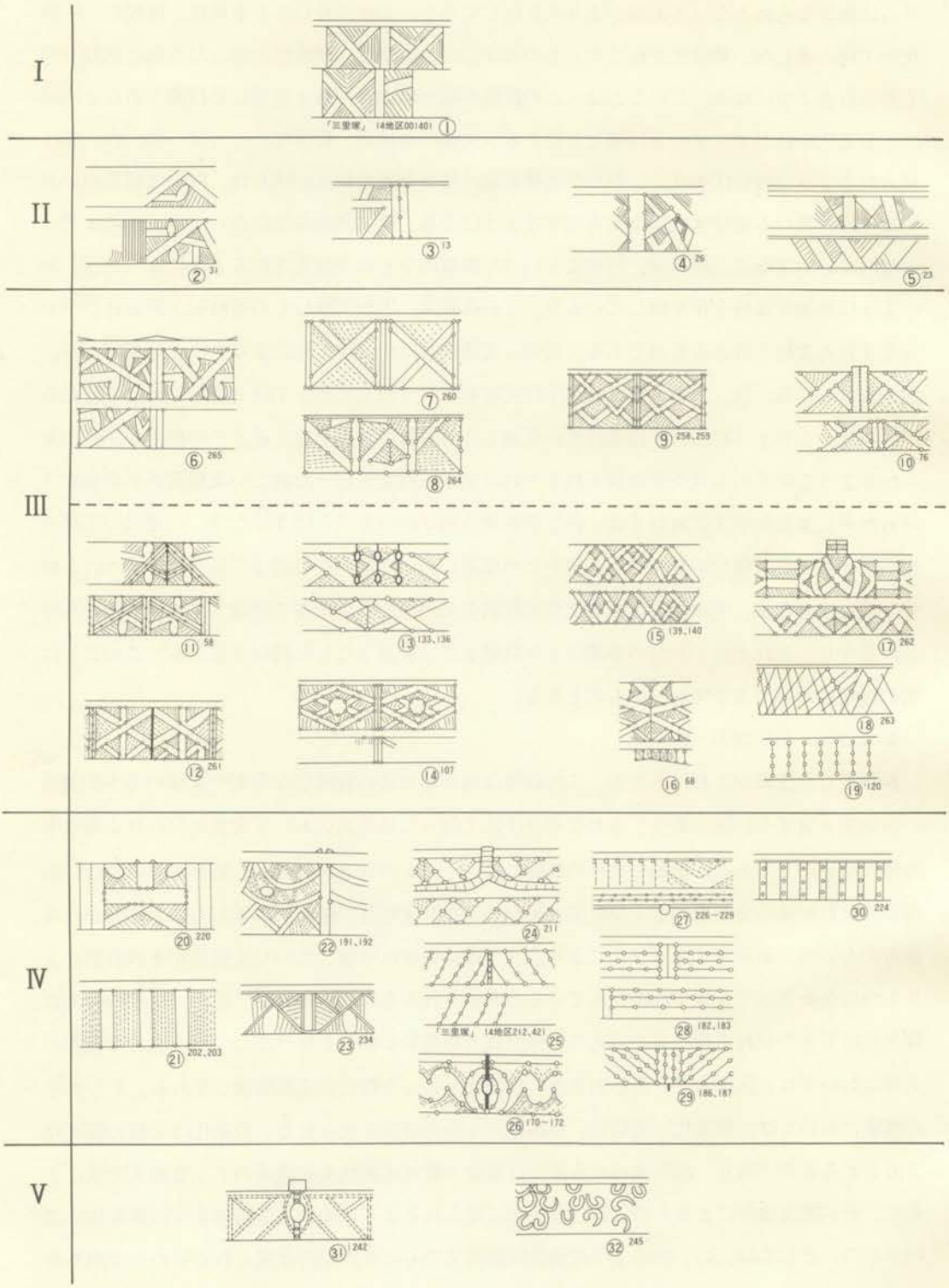
ｂ段階（第55図⑱～⑲）

この段階はａ段階のものがさらに発展を遂げたものであり、鵜ガ島台式土器の最も発展した段階である。器形においては、口唇部の内削げ状のものがより多くなり、胴部のくびれ状態も

さらに顕著なものとなって土器がより大形化してゆく。文様においても多様化、複雑化、精練化が1段と進むが、精練化されてゆくものの中には、省略化、簡素化と言った方向に進むものも見られるようになる。このことは、この段階が鵜ガ島台式の最も発展した段階であると同時に、衰退化がはじまっている段階とも言える。文様の多様化、複雑化としては、⑪、⑫、⑬に見られるように縦位区画状文に新たな文様要素の独特な隆起線文が使われ、同一文様帯内において性格の異なる縦位区画状文が存在するようになる。横位区画状文においては前段階までの直線的なものでなく、孤状文、円形文といった曲線的なものが施文されるようになり、⑭、⑯のように複雑な文様を作り出しているが、この孤状文、円形文はむしろ省略化、簡素化の中から生まれた文様と言えるものである。反対に文様の省略化、簡素化によるものとして⑯、⑱、⑲が上げられる。⑱、⑲の場合は従来下段文様帯であったものが、上段文様帯に施文されたものであり、このような上・下段文様帯の交換もこの段階の特徴と言える。この他には、⑰に見られるような把手の出現や指頭状工具とそれによる圧痕文といった新しい文様要素の出現が上げられる。また充填文においては、押し引き文の割り合いがさらに多くなり、二連式の工具を用いると言った多様化が見られる。以上この段階においては、前段階まで見られるように、縦位・横位区画状文、充填文、区画状文交叉部刺突文が同じ歩調の基で発達してきた段階のものとは異なり、それぞれの独自の歩調により発展または衰退しだした段階と言える。このことは次の段階においてより明らかなものとなる。

第3段階（第55図⑳～㉚）

Ⅳ類とした土器がこれにあたる。この段階は鵜ガ島台式の特徴的な器形や文様の基本的構成の崩壊期と言える段階であり、またなぞり手法と言った後型式において発展が見られる新たな文様の出現期でもある。器形や文様の崩壊にはいくつかの方向が見られ、器形においては、胴部のくびれが緩くなるものとくびれ部の幅が狭くなり文様帯の幅が狭ばまるものとに分かれる。前者のものは、前段階までくびれにより上・下段に明確に分離していた文様帯がその衰退により1つに合わさって文様が描出されていると考えられるものである（⑳、㉒）。後者のものは、後型式に引きつがれて行くものであり、後型式の特徴的な器形を作り出して行くものである。文様においては、区画状文に押し引き文、刺突文と言った新たに文様要素が加わる。そしてその構成においては、簡素化、省略化、強調化の3つの傾向が見られる。簡素化は文様の模式化とも言えるものであり、⑳に見られるように縦位・横位区画状文が従来のような施文方法によるが、形式的な構図によるもの、㉕、㉗～㉙に見られるように施文方法自体非常に簡素化しているもの、そして㉒、㉓、㉖のように横位区画状文のみにその傾向が見られるものなどがある。省略化のものについては、㉑のように横位区画状文が描出されてないもの、㉕、㉗～㉚のように充填文が描出されていないもの、㉒、㉓のように区画状文交叉部刺突文が省略されているものがある。強調化の傾向にあるものとしては、㉔のように縦位区画状文が発達したものや、㉖



第55図　第2群土器文様模式図

～㉚に見られる区画状文上の刺突文があげられる。また簡素化の傾向として上げた㉒、㉓、㉕～㉙の横位区画状文は、その強調化ともつながるものと言える。つまり、この段階における縦位区画状文、横位区画状文、充填文、区画状文交叉部刺突文の簡素化、省略化は言いかえるならば、1つの文様帯内において特定の文様の強調化されたものと言え、その強調化された文様はさらに簡素化傾向をたどり後型式へ引きつがれて行く。しかし区画状文交叉部刺突文は、この段階で消滅してしまい、後型式では全く見られない文様である。ここでこの文様の発生から消滅までの推移を見て行くと、鵜ガ島台式土器型式の中で大きなメルクマールのなる文様と言える。つまり鵜ガ島台式の特徴的な器形、文様要素、文様構成がほぼ確立された第1段階においてこの文様の発生が見られる。しかしこの段階において、この文様は、まだ未熟なものであるが、その後の鵜ガ島台式の発展に伴いこの文様は文様構成において大きな位置を占めるようになる。さらに崩壊期の第3段階においても、この文様が強調され施文されているものが多いことから、鵜ガ島台式土器において重要な文様であったと言えよう。

(3)茅山下層式土器（第55図㉛㉜）

第Ⅴ類とした土器群がこれにあたる。この土器群は鵜ガ島台式の第3段階のものと関連が深いものであり、器形においてはほぼそのまま引きついでいる。しかし文様においては文様要素として隆起線文、刺突文、押し引き文、なぞり手法による凹線文が多く使われ、文様構成においては鵜ガ島台式第3段階で述べた強調された文様のみが引きつがれている。㉛は充填文が全く省略され、区画状文のみにより文様構成されたものである。この土器は鵜ガ島台式の幾何学的な構成がよく引きつがれているが、蛇行状に施文されているものもあり、完全に鵜ガ島台式の文様構成が崩れ去ってしまっているものも見られる。㉜は前段階では区画状文内に施文されていた凹線が区画状文の省略により、凹線のみの文様構成によるものである。この他にもこれと同じように充填文のみが強調され施文されているものも見られる。この2つの土器を含めた第Ⅴ類土器は、鵜ガ島台式の影響を強く残しているもので、茅山下層式の古い段階のものと言える。これ以後、文様構成はさらに簡素化の傾向にあり、また縄文が文様要素に加わり、文様帯も上段のみとなり、新しい段階へと移行して行く。

以上本遺跡B地点より出土した第2群土器を基に、鵜ガ島台式土器の細分について述べてきた。そして鵜ガ島台式は、特徴的文様要素による幾何学的文様構成に区画状文交叉部刺突文が加えられたことにより、安定した文様を作り出した第1段階、さらにその文様が発展しさまざまな文様構成を作り出して行く第2段階、そして基本的文様構成が崩壊して行く第3段階の3つの段階に大きく細分できるものと考える。なお第2段階については、さらに発展の段階により2段階に細分できるものと考える。

4．施文方法と施文工具について（図版44～46）

最後に、鵜ガ島台式土器に施文されている文様の施文方法と施文工具について若干述べていきたい。

鵜ガ島台式土器の文様は、先に述べてきたように区画状文、充塡文、区画状文交叉部刺突文の大きく分けて3つの文様により構成されていると言える。そしてそれらの文様要素としては、それぞれの文様のみに見られる特徴的なものもあるが、隆起線文、沈線文、押し引き文、刺突文の4つの文様要素により大半のものが描出され、その他に凹線文、圧痕文、刻み目等のものが加わる。このうち先に上げた4つの文様要素は、施文具やその使われ方の違いにより、さらに変化に富んだ文様を作り出している。これらの施文工具、施文方法について、各文様要素ごとにみてみる。

(1)隆起線文

この文様は、鵜ガ島台式土器においては区画状文のみに用いられているもので、さらに微隆起線状文（20）、細隆起線文（1）、隆起線文（28～30）に分けることができる。微隆起線状文は両側をヘラ状の施文具により入念な磨き（削り）をかけることにより、粘土をわずかに盛り上げて作りだされたものである。細隆起線文にもこれと同様な作られ方のものもあるが、多くのものは細い粘土紐を器面に貼り付けることにより作り上げられたものである。隆起線文もこれと同様の施文方法であるが、粘土紐がかなり太くなり、そしてその上に指頭や指頭状工具による圧痕文と刻み目が施文されているが、これは単なる装飾の意味だけのものでなく、多分に粘土紐を器面に充分付着させるための手法と考えられる。以上のものとは別に、 19 にみられるように、2条の間隔の狭い平行沈線をはしらせ、その間に刺突文を施文することにより細隆起線文状に作り出されたものも少数ではあるがみられる。

(2)沈線文

沈線文は細、中、太位の3つに分けることができる。細いものは串状の施文具によるもの（4、21）と非常に細い円形、または半截竹管によるもの（1）とがある。中位のものでは、多くのものは円形、また半截竹管の表皮面を器面にあて引いたものであり、22に見られるような半截竹管による平行沈線のものは少ない。22の場合は、半截よりむしろ3截に近いものと思われ平行する沈線の幅の広いわりに浅い沈線である。また特異的なものとして、6に見られるように円形また半截竹管を2本合わせて引いた2連式のものもある。太い沈線は、竹管によるもの（2、3）とヘラ状の工具によるもの（4、21、30）とに分けられ、竹管によるものは3のように表皮面をあてて引いたものと、2のように竹管の切断面が器面に対して垂直に当て引いたものとがある。2の場合は、区画状文、充塡文とも同一の工具により、この施文方法により描出され、また刺突文も同一の工具によるものと思われるもので、1つの施文具によりすべ

ての文様を描出している。以上沈線文においては、円形または半截竹管によるものが、太さに関係なく、大半を占めている。

(3)押し引き文

押し引き文も沈線文と同様に細、中、太位に分けられ、その内容においても沈線文とほぼ一致する。ただ押し引き文を施文する場合、まず工具を器面に強く押し当てて引くといった方法の繰り返しにより作り出される文様であるため、押しが浅いものや引きが長いものは沈線状のものとなり（24、25）、逆に押しが深いものや引きの短いものは刺突状のもの（12、18、26）となり、その区別が困難なものも多くある。また2連のものも押し引き文には多くみられ（11～14）、13の場合は細い円形竹管による2連のものを2列づつ施文している。

(4)刺突文

刺突文は、区画状文交叉部に押捺されるものと充塡文として押捺されるものとがある。前者の場合その大半のものは円形竹管をそのまま押捺しているが、4の場所は押捺によるものでなく、ヘラ状の工具により押しひねったものである。また27は、竹管の代わりにハイガイの貝殻頭部によるものである。充塡文においては、円形竹管を押捺したもの（15、16）、半截竹管を押捺したもの（17）、多截竹管を押捺したもの（18）、串状の施文工具により押捺したもの（9、30）など施文具において多種にわたる。

(5)その他

その他のものとして、5、23にみられるように指頭状工具によるなぞりの手法がある。また28、29のように圧痕文もみられる。

以上のものが本遺跡でみられた鵜ガ島台式土器における施文工具、施文方法の主なものであるが、実際は、個々の土器ごとに施文工具、施文方法が少しづつ異なっており、製作者の個性と言えるものがうかがえる。しかし1つの土器の中においては、文様要素もそうであるが、施文工具においても、それほど多くのものを用いず、せいぜい多いもので2～3個ぐらいのものであり、その使い方を工夫して多くの文様を作り上げている。

5．おわりに

本遺跡の資料を中心として鵜ガ島台式土器について述べてきたが不充分な点も多々あることと思われる。本遺跡では層位的観察が困難であったため、型式学的観察に基づいた分析方法を進めてきた。そして一地域における分析であるため、今後他の地域との対比をも充分に行ない、さらに今回の分析結果を検討、修正して行く必要があるものと考える。また前後型式である野島式、茅山下層、上層式についても、今日に至ってなお不明な点が多く、充分に検討の余地を残しているものと思われ、それらも充分に分析がなされた後に、再び鵜ガ島台式土器の細分について考えてみたい。

第２節　遺跡の性格と特徴
―― 遺物包蔵地について ――

新東京国際空港予定地内に所在するいずれの遺跡からも多量の縄文時代早期の遺物が検出されていることから、縄文時代早期の大規模な遺跡群がこの地域に所在していると言えよう。このことは当時の生活において、この地域が利根川水系と太平洋水系の分水嶺であり、あまり開析を受けていないといった地形的立地条件や植物相、動物相といった環境的立地条件が適していたものと考えられる。

それぞれの遺跡の共通して言えることは、土器・石器といった遺物の出土数が極めて多く、それに対する住居跡の数が少ない。そして遺物の多くは、住居跡等の遺構からの出土したものでなく自然層中からのものである。このような遺跡は遺物包蔵地と呼ばれているものであるが、今回本遺跡の調査および整理作業を行なっていくうちに、単純な数の計算上で遺物の数と遺構の数が合わないこれらの遺物包蔵地において、どのような当時の人々の行為・行動が考えられるのか、№14遺跡の第１次、２次調査結果により、本遺跡におけるそれらについて推論してみたい。

本遺跡での縄文時代早期の遺物分布地点は、55地区、56地区、Ａ地点、Ｂ地点（14地区も含む）の４地点が確認された。そしてこの４地点は、時期的に沈線文期の55、56地区、Ａ地点と条痕文期のＢ地点とに分けられる。

55、56地区、Ａ地点の遺物組成を見ると、土器は田戸下層・上層式が主体となり、その他、撚糸文土器や中期、後期のものが見られる。石器組成では、55地区は石鏃５点、剥片２点、56地区は石鏃３点、石皿、磨石、スクレイパー、剥片、Ａ地点は石鏃３点・礫310点・剥片といった多少の内容においての違いはあるが、単純な組成であると言える。遺構については、55地区は炉穴２基、土壙２基、56地区は竪穴住居跡１軒、炉穴２基、Ａ地点は遺構は検出されなかった。この３地点に共通して言えることは、土器・石器の量が少なく、土器では主体となっている沈線文系土器でも多くて３、４個体分である。石器組成では、いずれも貧弱なものと言える。そしてそれらの分布状態は小規模なものである。このような性格をもつ地点における人間の行動を推測すると、非常に小規模な集団による、短期間に営なまれた場所と考えられる。この３地点の有機的関連は不明であるが、遺物の内容にいくつかの違いが見られるのは、その地点における機能的（人間の行動様式）な違いによるものと考えられる。

Ｂ地点は、先の３地点とは対照的に出土遺物量、分布範囲が大規模なものであり、それもほぼ鵜ガ島台期の一型式期間に営なまれた地点である。遺構としては、住居跡３軒、炉穴４基、竪穴状遺構２基、陥し穴状土壙２基、土壙１基が検出され、このうち陥し穴状土壙以外は明らかに遺物と結びつくもので、その分布状態は、炉穴１基と土壙の他は台地の南側縁辺部に

集中している。これに対して遺物の分布は、遺構集中部より北側へ楕円状に広がりをもつものと南側の谷に続く傾面部に見られる。前者の場合は、遺物密度の濃い部分は遺構集中部よりやや北側に離れた所にある。後者について詳細なことは不明であるが、傾斜地のくぼみ部分に多量に遺物が見られたとされている。このように遺構と遺物の分布に多少ずれが見られる。包蔵層から出土した遺物のうち土器は30,000点近い数量が検出され、個体数として捉えても数百以上を数えるものと思われる。しかしその分布状態については、時間差や人間の意図的行為によるものとは考え難く、無作為に捨てられたものと考えられる状態である。しかしこれだけ多くの土器が集中して見られることはどうしてであろうか。つづいて石器・剥片類の分布について見てみると、Ｂ地点では土器と多少異なった分布が見られる。石器・剥片類の場合いくつかの小さな集中地点がいくつか見られ、土器のように単に散在している状態ではない。この集中地点の組成はいずれも剥片・砕片類が大半を占め定形的石器は少数である。このＢ地点における石器組成を見ると、石鏃が多量に出土しており、また剥片・砕片類の数も非常に多い。そして、この石鏃と剥片・砕片類の石材別割合を見るとほぼ一致する。このことは、この地点において石鏃やいくつかの石器がこの地点で盛んに製作されていたと考えられ、完形品も遺物包蔵層から多く出土し、住居跡からの完形品はもちろん、剥片・砕片類の出土が少ないことから、石器製作は、先に述べた剥片・砕片類を主とした小規模な集中部に関係の深い場所において行なわれたと思われる。このように石器・剥片類の分布状態を見ると、散在した状態のものとなんらかの意図的行為（この場合石器製作）によるものとが見られる。それでは土器の分布状態を含め、２つの異なった遺物分布がこの地点に見られることをどう解釈するべきなのであろうか。

まず土器について考えるならば、数百以上の土器は、３軒の住居で生活していた人々によりのみにより廃棄されたものとは数的に見て考えられない。また住居跡自体に拡張、修復の跡が見られないため居住期間はそれほど長期的なものとは思われない。よってこの大規模な遺物包蔵地の土器の多くは、他の地から持ち運こばれたものと考えるのが妥当と思われる。この他の地については具体的に指適するのは困難であるが、隣接するNo.60、61、62遺跡において多量の鵜ガ島台式土器が検出され、やや離れたNo.67遺跡でも条痕文系土器が多量に検出されている。これ以外の多くの遺跡からも量的に少ないが茅山系土器が確認されている。しかし、現在は未整理のものが多く各遺跡の詳細な内容について不明である。今後これからの遺跡の整理作業が進むに従い鵜ガ島台期の遺跡のあり方、性格が明らかになり各遺跡間における相互関係も充分に把握されることが可能と思われる。

つづいて石器・剥片類のあり方について見ると、先にも述べたように散布しているものと集中しているものとに大きく分けられ、前者は定形的石器にその傾向が強く、後者は剥片・砕片類にその傾向が強く見られる。そして後者には石器製作の場に関連が強いものと考えると述べた。しかし前者の場合をどう考えるべきであろうか。定形的石器は完形品も多く見られ、この

場所での製作が考えられる石鏃において特に言える。これらの散在した分布状態を土器と同様に単に捨てられたものとは考えられない。むしろなんらかの原因により置き去られたと考える方が妥当的と思われる。

以上のようにB地点について見てきた。この地点のように比較的短い期間に営なまれたものであるが、遺物の量が多く組成も複雑であることからベースキャンプ的様相の地点であったと思われる。この縄文早期後半は狩猟・採集経済が生産基盤となっている縄文時代の中にあっても、労働用具や方法において未発達な段階であったと言える（注８）、それは小規模集団により定住性をあまり持たずにたえず移動をよぎなくされたと思われ、そこで、№55、56地区、A地点のように極く一時的キャンプ地とB地点のようなベースキャンプ地が存在した可能性は充分考えられる。そのベースキャンプ地と考えられるB地点において、この地で使用された土器はもちろん、他の地で使用された土器についても持ち帰られこの他に廃棄されたものと考えられ、またそれらが廃棄された場所は、同時にこの遺跡での生産の場所とも言える所であり、つまりこのB地点の遺物包蔵地はなんらかの当時の規制を受けていた生活の場と考えられないであろうか。これは貝塚遺跡における、遺構集中部と貝層集中部とに見られる社会的規制関係と重ねて考えられないであろうか。

またB地点の特徴としてすでに述べているが、石器製作が盛んになされていたと考える。この時期の他の遺跡においてこれほど多くの石鏃や剥片・砕片類の出土例はあまり見られない。つまりこのB地点は石器製作と言った１つの機能をもったベースキャンプと言える。このことは、ベースキャンプ的単位の遺跡ごとに１つまたは複数の生産的、社会的機能をもっていたことが窺え、それぞれが有機的関連により結びついていたと予想される。

以上のように今回の調査で筆者自身、最も疑問に感じた点につき自分なりの解答を得てみたが非常に論拠の薄いものであることは筆者自身自覚している。しかしこの疑問点を考えるにあたって、過去調査され報告された遺物包蔵地遺跡に対して遺物収集的傾向が強く、それのみで終ってしまうものが多いように思われる。近年、開発も規模が大きなものとなり、台地全体における遺構、遺物のあり方が明確に把握できるようになってきた中で、単に個々の遺物にのみに研究が注がれるのでなく、いかなる人間の行動、行為により遺物包蔵地が作り出されたのかと言ったマクロ的研究も必要な段階にきていると思う。

注１　山内清男　『縄紋土器型式の細別と大別』　昭和13年

注２　岡本勇　「三浦市鵜ガ島台遺跡」『横浜市立博物館研究報告』５　昭和36年

注３　注２と同じ

注４　関野哲夫　「鵜ガ島台式土器細分への覚書」『古代探叢』　昭和55年　関野氏のこの論文は、岡本勇氏以後の鵜ガ島式土器研究において充分に評価されるものと思われる。筆者自身、今回の報告書をまとめあげるについて氏の研究に負う所が大である。

注５　縦位・横位区画状文の区別については本文中でも述べてきたが、非常に関連性の強い文様であると言える。しかしそれら文様の系統的発展を見て行くと、異なった様相を展開して行くものであり、本来的性格の違う文様と言える。よってこの２つの文様を分離して考えることが必要と思われる。

注６　千葉県北総公社　「No.14遺跡」『三里塚』　昭和46年　この報告書においてこの土器は茅山下層式ととされているが、文様その他の特徴から野島式終末期に位置づけられるものである。

注７　関野氏は、鵜ガ島台式を古、中、新期の３段階に分けている。いくつかの点において異なるが、ほぼ関野氏の分類されたものに比定される。

注８　岡本勇氏はこの時期を縄文時代の社会と文化において大きく上昇した時期であるとしている。そしてその傾向は茅山式土器の時期に強く見られると述べられている。本遺跡の鵜ガ島台期においても後段階に影響を及ぼす変革期と言えるが、生産形態や社会形態はまだ前段のものが強く残っていたと思われる。

結　語

新東京国際空港内　No.14遺跡の調査結果には、先章までに詳細に紹介し、あわせて若干の問題点についてふられている。ここではNo.14遺跡の調査結果を取りまとめ、結語としたい。

発掘調査

No.14遺跡の発掘調査は昭和53年４月１日から翌54年３月31日まで、班長　杉山晋作、調査研究員　野口行雄、山口直樹を調査担当者として実施した。調査面積は20,800㎡である。この調査に先立ち、昭和45年から46年にかけて、財団法人　千葉県北総公社によって第一次調査が実施され、『三里塚－新東京国際空港団地内の考古学的調査－』　財団法人　千葉県北総公社、1970、11、１）に報告されているので、参照していただきたい。

今回の発掘調査の方法は基本的にグリッド法とし、縄文時代遺物包含層までについては２ｍ×４ｍのグリッド、先土器時代石器群については２ｍ×２ｍのグリッドによって確認調査を実施した。確認調査の結果は、本調査の面積及び調査方法等を検討する基礎資料として用いた。現在調査中の遺跡においてもグリッドを２ｍ×２ｍとしたものの、原則的には、その方法を踏襲している。

なお、詳細については、第１章第２節に述べられているとおりである。

遺　跡

千葉県の北部にひろがる北総台地は標高40ｍ前後の平坦な台地である。三里塚地域においては、利根川、栗山川の支流によって開析を受け、複雑な地形を呈している。No.14遺跡は空港予定地内の他の遺跡と同様三里塚地域に含まれ、利根川に注ぎ込む根古名川の支流取香川の源流点に位置する。また、本遺跡の南側には太平洋に流入する栗山川の支流である高谷川の源流がある。即ち、本遺跡は広くみると、利根川水系及び太平洋水系の分水界に位置していると言えるのである。

新東京国際空港は分水界に建設された空港である。従って、これに関わる当文化財センターが行なっている一連の発掘調査は分水界の遺跡を対象としていると言えよう。現在も継続中である一連の発掘調査において、分水界の原始古代の社会、文化を究明することが重要な研究テーマの一つとして与えられていると言うことができる。当然、三里塚地域にあるNo.14遺跡においても、同様のテーマが与えられていると考えねばならない。

昭和45～46年度にかけて実施された第１次の空港関連調査によって、No.14、No.55遺跡をはじめとして10か所の遺跡が発掘調査され、先土器時代の石器群、縄文時代早期の土器群が多量に出土した。この傾向は昭和51年度以降に行なわれている発掘調査においても大きく変化することがない。これは分水界という立地条件や動・植物相という環境条件が、先土器時代、縄文時代早期の人々の生活に適していたためといえよう。しかし個々の遺跡を考えるとき、No.14遺跡

では鵜ガ島台式土器を主体としていたり、No.67遺跡において三戸式土器が多く出土している等、内容的に多様性も認められるのである。このことから三里塚地域を分水界の一つのまとまった地域と想定した場合、その中にある個々の遺跡の分析及び遺跡相互の関連性を検討することによって、分水界における先土器時代・縄文時代の社会・文化を知ることができると言えよう。残念ながら遺物の整理はやっと手がついたばかりである。すべての整理が終了した時には、分水界における原始時代の社会、文化の一端を知ることができるはずである。これによって、三里塚地域全域を発掘調査した意義があったと言えよう。この意味でNo.14遺跡の調査報告書は、三里塚地域における一里塚と位置付けられよう。

ところで、考察編において、野口行雄は遺跡の性格と特徴と題し、No.14遺跡における遺跡の内容からその問題点を論考しているが、今述べた点から三里塚地域における遺跡論の予察と考えられる。

遺物と遺構

昭和45～46年にかけて実施された発掘調査において、No.14遺跡群は、台地基部より、14地区（遺跡）、55地区（遺跡）、56地区（遺跡）の３地区（遺跡）に分けられている。

今回発掘調査したNo.14遺跡は、14地区の北側に位置している。

No.14地区からは、次の遺物・遺構が出土している。

先土器時代

尖頭器・掻器・削器・細石核？・剥片等

縄文時代

遺物　土器（鵜ガ島台式・茅山下層式・他に後期の縄文式土器）、石器（有茎尖頭器・石鏃・石皿・磨石・凹石・敲石等）

遺構　竪穴住居跡３軒（鵜ガ島台期）、炉穴２基、竪穴３基

今回、発掘調査したNo.14遺跡からは次の遺物・遺構が出土した。

先土器時代

切出し形石器（１点）・剥片・炭化物片集中地点５か所

縄文時代

遺物　土器（早期鵜ガ島台式を主体とし、他に前期・中期・後期の縄文式土器）、石器（石鏃・スクレイパー・剥片・石斧・礫器・石皿・磨石・凹石等）

遺構　炉穴１基、陥し穴状土壙２基、土壙１基

その他の時代

遺物　鉄滓・古銭（50数点）

遺構　溝（野馬堀）１条

先土器時代

先土器時代の遺物については、第１次調査では、細石核・尖頭器・剥片等が多数出土しているにもかかわらず、今回の調査では切出し形石器が１点、剥片が数点出土したのみであった。これは、No.14遺跡が、14地区の北側に隣接しているうえに、55、56地区にくらべ台地の奥部にあるという地形的理由によるのであろうか。

ところで、本遺跡から炭化物片の集中地点が５ヶ所発見された。No.１地点は第Ⅶ層を中心に検出され、数本の炭化材を中心に炭化物片が広範囲に散在していた。No.２地点は第Ⅳ層から第Ⅵ層にかけて、６×４ｍの範囲で検出された。No.３地点は第Ⅳ層から第Ⅵ層にかけて検出された。分布範囲は削平部分があり確認できなかった。No.４地点は第Ⅳ層を中心とし、径約2.5ｍの範囲に散布していた。No.５地点は第Ⅳ層からⅥ層にかけて、径約２ｍの範囲で検出された。石器が付近より出土したのは、No.２・No.３地点である。No.２地点では安山岩製の剥片が３点、No.３地点では頁岩製の剥片が３点出土した。

ここで、特に注意をしなければならない点は、炭化物の集中地点の意味するところである。山火事等により山林の立木が焼け落ちたために炭化物が周辺に散布したものであったのであろうか。あるいは、先土器時代人が営んだ炉跡のようなものであったであろうか。炭化物の集中地点を人為的なものととらえるか、あるいは、自然的なものととらえるかによって、考古学的意味が変ってくるばかりでなく、その取扱い方がまったく異なってくるのである。即ち、炭化物集中地点が人為的なものであるならば、これを遺構に準ずるものとして取扱う必要が生じてくる。

さて、本遺跡の炭化物集中地点には、炉跡等で認められる焼土及び焼けた跡が認められなかった。また、No.１地点では数本の炭化材を中心に炭化物片（炭化粒）が散在した状態で検出された。剥片は、No.２・No.３地点で出土したが、炭化物集中地点と積極的に関連性を持たせるという根拠もなかった。このようなことから、我々は本遺跡の炭化物集中地点を人為的なものでなく、自然的なものと考えている。

No.14遺跡より出土した炭化物片は、空港に関連した他の遺跡と比較にならないほど多量に出土した。このため、発掘調査を実施するに当たっては、このことが何を意味しているのかについて、特に注意を払ったのであるが、残念ながら十分なる成果を得られなかった。炭化物片（炭化粒）を１点１点注意深く発掘調査することは、No.14遺跡の発掘調査を通じて非常な労力を要することがわかった。現在、とりまかれている埋蔵文化財の環境において、ただ万全と発掘調査を行うことは許されない。他方、炭化物集中地点をすべて自然的なものとばかり結論することができないのも事実である。従って、炭化物集中地点の発掘調査に当っては、少なくとも、本調査に移行すべきか否か、又その性格を事前に確認しておくことが重要なこととなる。たとえば、炭化物集中地点が人為的なものである根拠をして、焼土又は焼けた跡、礫、石器の存在等が考えられよう。そして、本調査を実施した場合には、次の点に留意する必要があろう。

(1) 炭化物片の散布の範囲

(2) 焼土又は焼けた跡の有無

(3) 礫が出土しないかどうか

(4) 石器が出土する場合、その組成と出土のしかた

(5) その他

縄文時代

今回の発掘調査において、検出された遺構は炉穴1基、陥し穴状土壙2基、土壙1基である。昭和45～46年度調査にくらべて極めて貧弱であった。

遺物としては、土器、石器、土製品が出土した。その分布の状態からA、B地点に分けることができた。

A地点からは、土器が約500点出土した。第1群（田戸下層式、田戸上層式）、第2群（広義の茅山式）、第4群（五領ヶ台式）、第5群（後期初頭）に分類される。石器の出土総数は313点であり、石鏃3点、礫片310点よりなる。

B地点からは土器が約16,000点出土した。そのうち鵜ガ島台式土器が95%を占めていた。出土土器については、第2群（早期）、第3群（前期後半期）、第4群（中期）、第5群（後期）に分けられる。第2群は第Ⅰ類（野島式）、第Ⅱ類（鵜ガ島台式の形成段階）、第Ⅲ類（鵜ガ島台式の完成段階）、第Ⅳ類（鵜ガ島台式の崩壊段階）、第Ⅴ類（茅山下層式）、粗製土器等に分類されている。さらに、第Ⅱ類、第Ⅲ類については、縦位・横位区画状文を隆起線文・沈線・線い沈線によって作出したものをA～C種に細分している。これらの土器は第Ⅱ層b（新期テフラ）、c（暗褐色土層）より出土しており、型式学的に分類されたものである。特に、第2群土器、鵜ガ島台式土器については、考察編に詳述されているので、参考とされたい。また、土器の詳細は第2章に記されているので省略したい。

B地点より出土した土製品は土錘1点のみである。時期を判断することは困難であるが、中期に属するものであろう。

石器は石鏃、スクレイパー、ノッチ状石器、石斧、石皿、磨石、凹石等であり、石鏃が70%を占める。石鏃の80%は黒曜石製であり、第2群に属するものと考えられる。

石器について注目すべき点は、剥片・砕片が石器総数の80%におよび、集中地点が数か所認められることである。石器集中地点から砕片が多く認められるとともに、石核が数点出土してることから、石器製作跡的性格をもつものと考えられよう。No.14遺跡では石製品の70%が石鏃であるという事実から考えると、この石器集中地点は石鏃製作跡であった可能性が強い。先土器時代において石器の分析が重要な研究課題であるのは当然のことであるが、縄文時代においても石器の分析を軽視すべきではない。本遺跡から出土した縄文時代の石器については、整理段階で製作技術を検討してみたが、十分な成果を得られなかった。他の遺跡において、同様な

性格の石器群が出土した場合には、石器製作技術という側面から検討したい。

その他の時代

本遺跡から鉄滓が6点出土した。No.14遺跡の北側をめぐる支谷は根古名川の支流であり、その源流点にあたる。この支谷を取りまき、No.60、61、62遺跡が所在している。No.60遺跡の傾斜部には取香製鉄跡、No.61遺跡の南傾斜部には御幸畑製鉄跡が認められる。また、No.62遺跡の傾斜部にも製鉄炉は発見されなかったものの、多量の鉄滓が出土している。このように河川の最も奥まった支谷、即ち河川の源流点に近いところからまとまって製鉄に関連した遺物・遺構が検出されるのは、注目すべきことである。

なお、これに関して文化財センター研究部では古代の製鉄技術等について集中的に検討を加え、「千葉県文化財センター研究紀要　Ⅶ」として発行してある。詳細はそれにゆずる。

この他、永楽通宝、寛永通宝が第Ⅰ層中から出土した。

また、溝も1条検出された。当地域には古来より牧場が営まれていた。この溝もそれに関連した野馬堀であろう。本地域については現在も発掘調査を実施中である。牧場の全体像について記述するのは、将来にゆずらねばならない。

まとめ

No.14遺跡については昭和53年度に発掘調査を実施し、昭和56年度に整理を行い、昭和57年度に本報告書を刊行するに至った。この間、発掘調査に従事した調査研究員も人事移動に伴ない他の発掘調査に携わっている。幸い、発掘調査を担当していた野口行雄調査研究員が整理を行う機会にめぐまれ、本書の大部分を執筆し、あわせて考察を加えてくれた。論考等について不十分な点もあると思われるが、氏に対する温い御批判をお願いするところである。

さて、No.14遺跡では縄文時代早期鵜ガ島台式土器が多数出土した。これは三里塚地域において例のないことであるばかりか、周辺域においても稀れなことである。このことによってNo.14遺跡は縄文時代早期鵜ガ島台式土器研究において欠くことのできない遺跡の一つと位置付けられよう。また、鵜ガ島台式土器を出土している三里塚地域内の遺跡との比較研究を通じて、当該地の遺跡論の研究に欠くことのできない資料を提供してくれた。

三里塚地域を含めた分水界の社会・文化の研究はその途についたばかりである。本報告書もその一つと考えられよう。本報告書を発行するにあたり、あらためて、三里塚地域を広域にわたって発掘調査している意味を再認識したい。

最後に、発掘調査に御協力いただいた関係諸機関及び調査補助員の方々に厚くお礼を申し上げる次第である。

参考文献

赤星直忠　「神奈川県野島貝塚」『考古学集刊』1　昭和23年

我孫子市教育委員会　『柴崎第4次調査報告書』　昭和55年

岡崎文喜　古内茂編　『北総台地』　りくえつ刊　昭和54年

岡本勇　「茅山貝塚」『横浜市立博物館研究報告』1　昭和32年

岡本勇　「三浦市鵜ガ島台遺跡」『横浜市立博物館研究報告』5　昭和36年

岡本勇　「横須賀市吉井城山第1貝塚の土器(1)」『横浜市立博物館研究報告』6　昭和37年

岡本勇　戸沢充則　「縄文文化の発展と地域性」『日本の考古学』II　昭和40年

岡本勇編　『縄文土器大成』1　早、前期　昭和57年

小田静夫　C・T・キーリー　『武蔵野公園遺跡』　昭和48年

小林達雄編　「縄文土器」『日本原始美術大系』1　昭和52年

佐倉市教育委員会　佐倉市遺跡調査会　「石神第I地点」『臼井南』　昭和50年

杉原荘介　芹沢長介　「神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚」『明治大学文学部考古学研究報告』第2冊　昭和32年

関野哲夫　「鵜ガ島台式土器細分への覚書」『古代探叢』　昭和55年

千葉ニュータウン埋蔵文化財調査会　「高根北遺跡」「五斗蒔遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』Ⅳ　昭和51年

千葉県北総公社　『三里塚』　昭和46年

千葉県文化財センター　『佐倉市星谷津遺跡』　昭和53年

千葉県文化財センター　「No.6遺跡」『木の根』　昭和56年

千葉市史編纂委員会　『千葉市史』史料編1　昭和51年

戸沢充則　堀越正行　『美濃輪台遺跡－A地点』　昭和49年

飛ノ台貝塚発掘調査団　『飛ノ台貝塚発掘調査概報』　昭和53年

所沢市教育委員会　『砂川先土器時代遺跡』　昭和49年

永峯光一編　『縄文土器大成』2　中期　昭和56年

成田市史編さん委員会　『成田市史』原始古代編　昭和55年

西村正衛　「茨城県潮来町狭間貝塚（第1次調査）」　『学術研究』22号　昭和48年

沼津市教育委員会　『元野遺跡発掘調査報告書』　昭和50年

八王子市春日台遺跡調査会　『春日台下耕地遺跡』　昭和49年

堀越正行　田川良　『美濃輪台貝塚－B地点』2　昭和50年

町田市田中谷戸遺跡調査会　『田中谷戸遺跡』　昭和51年

山内清男　『縄文土器型式の細別と大別』　昭和13年

米田耕之助　「土器」『東間部多古墳群』　昭和49年

吉田格　「千葉県城ノ台貝塚」『石器時代』第1号　昭和26年

SUMMARY

Background

This is a report of the excavation at Site No.14 of the New Tokyo International Airport. The work began on April 1978 and continued until March 1979, conducted by the Chida Prefecture Cultural Properties Center.

The site is located at 6 Furugome, Narita-shi, Chiba prefecture, lying on the bluff along the Totsuko stream altitude about 40m. This area forms the watershed of Pacific basin and Tone basin.

The mission conducted by the Chiba-Prefecture Hokuso Corporation had excavated the site in 1971 and exposed artificial remains and features during preceramic and Earliest Jomon Era.

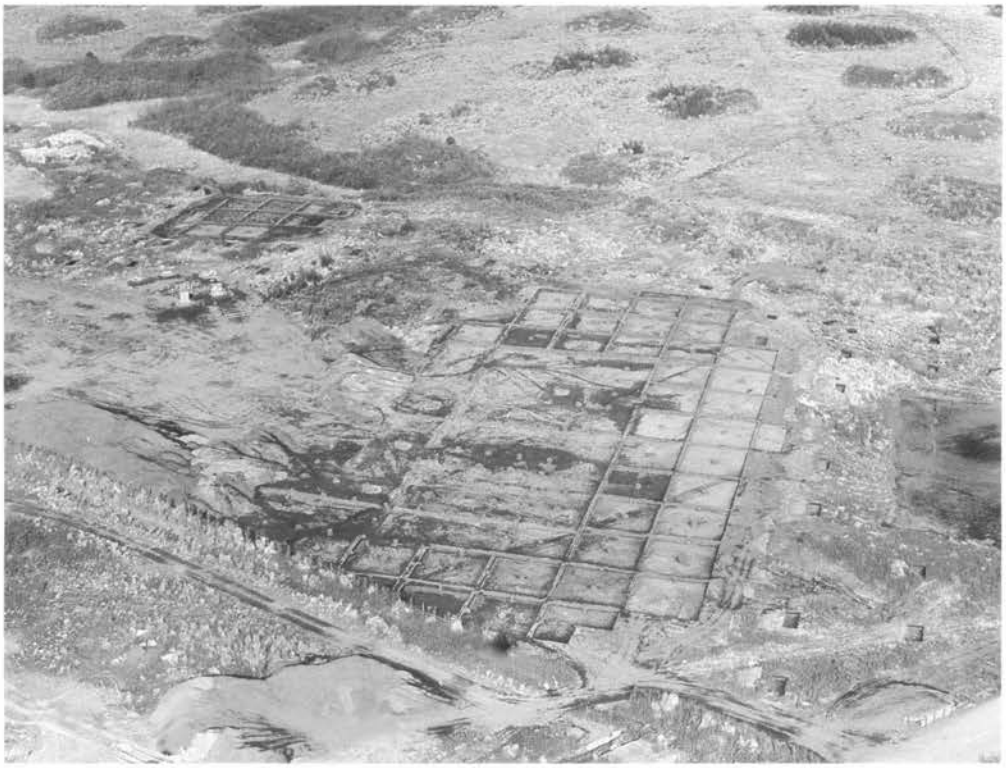
Artifacts and Features

There were found many artifacts and features belonging to Preceramic, Jomon and Historical Era, resulting of excavation of thid season throughout about 2000 squace meters, the rest part of the former excavation. Five clusters of charcoal flecks and few artifacts were found from Preceramic layer. Stone implements were composed of kife-like backed blades, kiridashi-type tools, scrapers and pebble tools and flakes.

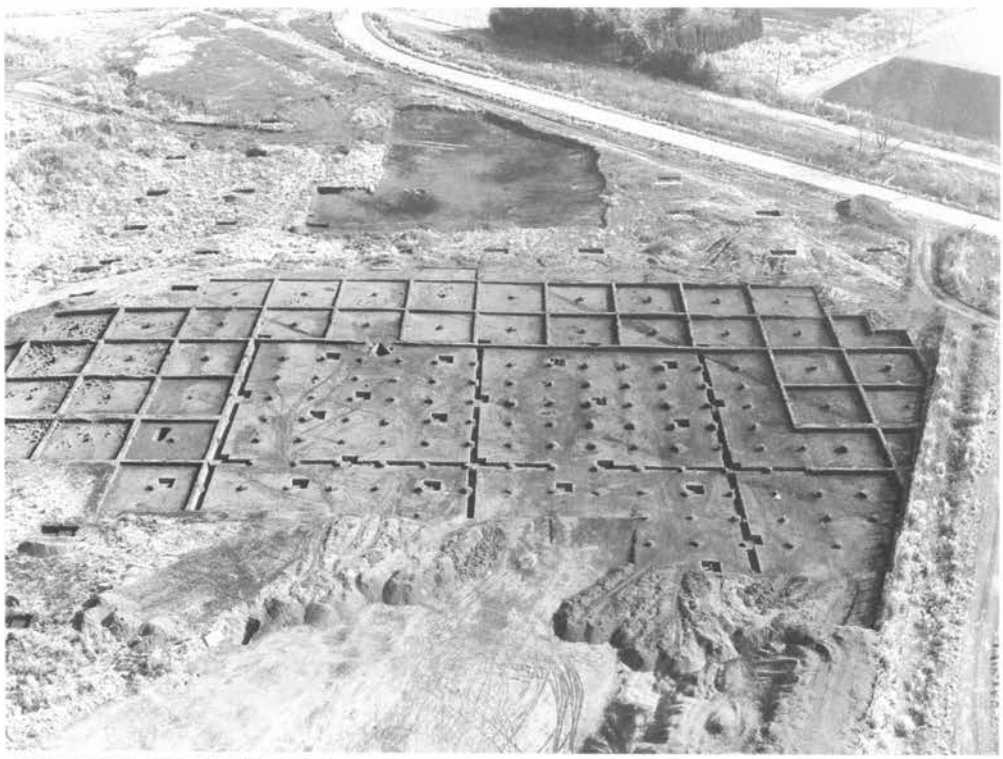
Artificial remains and features of Jomon were fcund at two areas, A and B. Potsherds of Area A were mostly Upper and Lower Tado type of Earliest Jomon including Middle and Late Jomon and pebble tools also found. Large quantities of potsherds mostly Ugashima-dai type of Earliest Jomon were distributed over a wide range of Area B. Arrow-heads were common in large number of stone tools from this area including spear-head-like points, scrapers, axes and querns.

There were slag of Heian period and coins nf Edo period from Historical layer.

写 真 図 版



遺跡全景（航空写真）南より



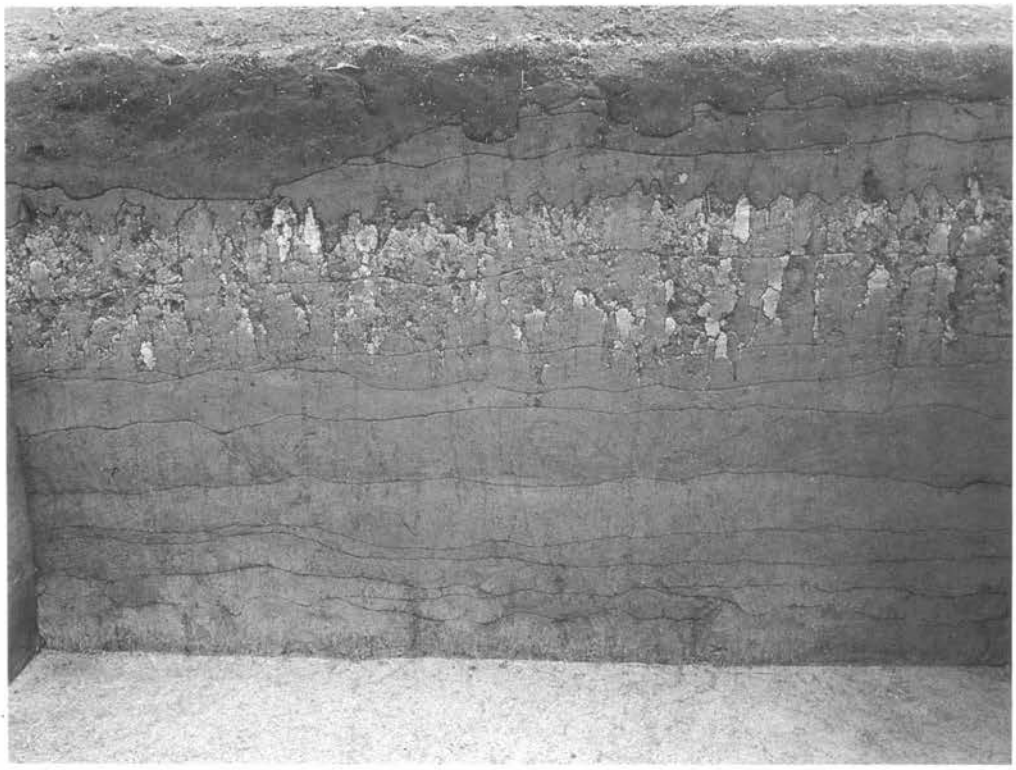
B地点遠景（航空写真）西より

遺跡近景（南方より）

遺跡近景（北方より）

図版３　層序

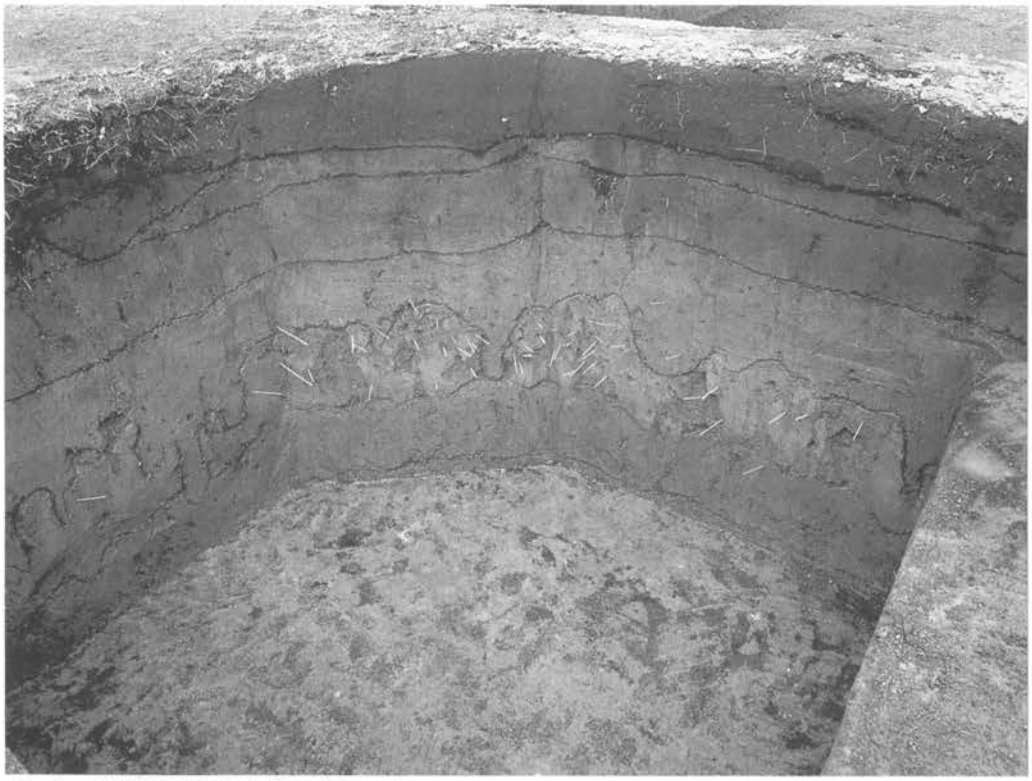
８Ｅ38　土層セクション



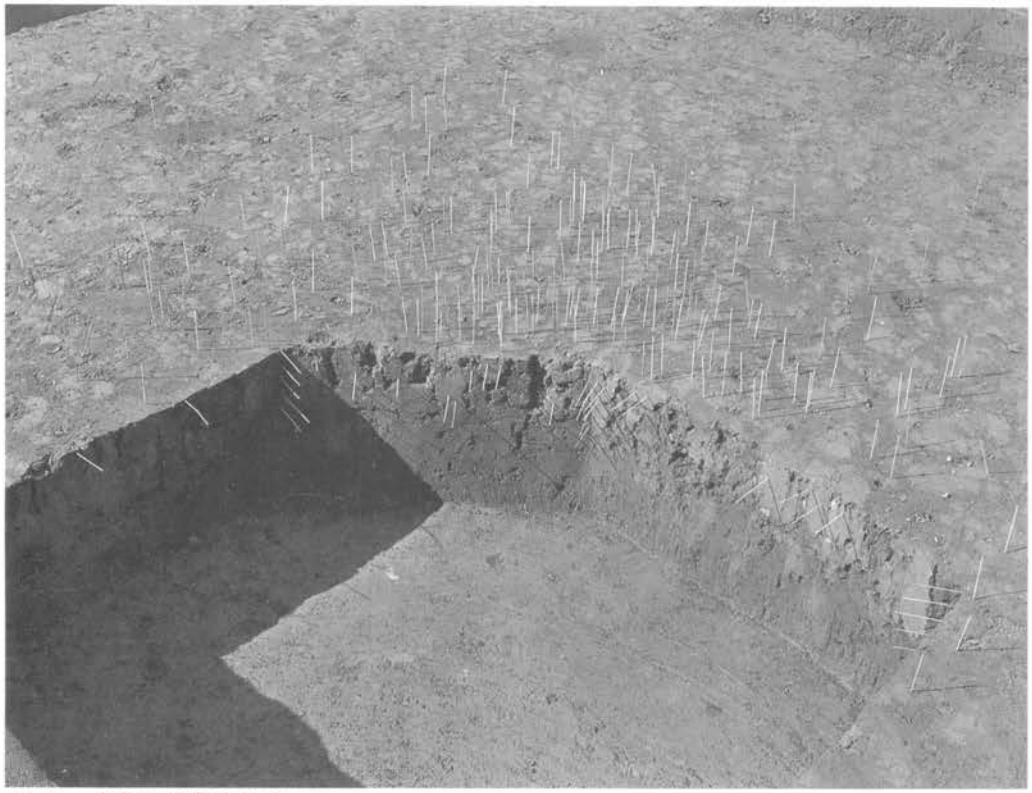
８Ｇ56　土層セクション

No. 2　炭化物片集中地点

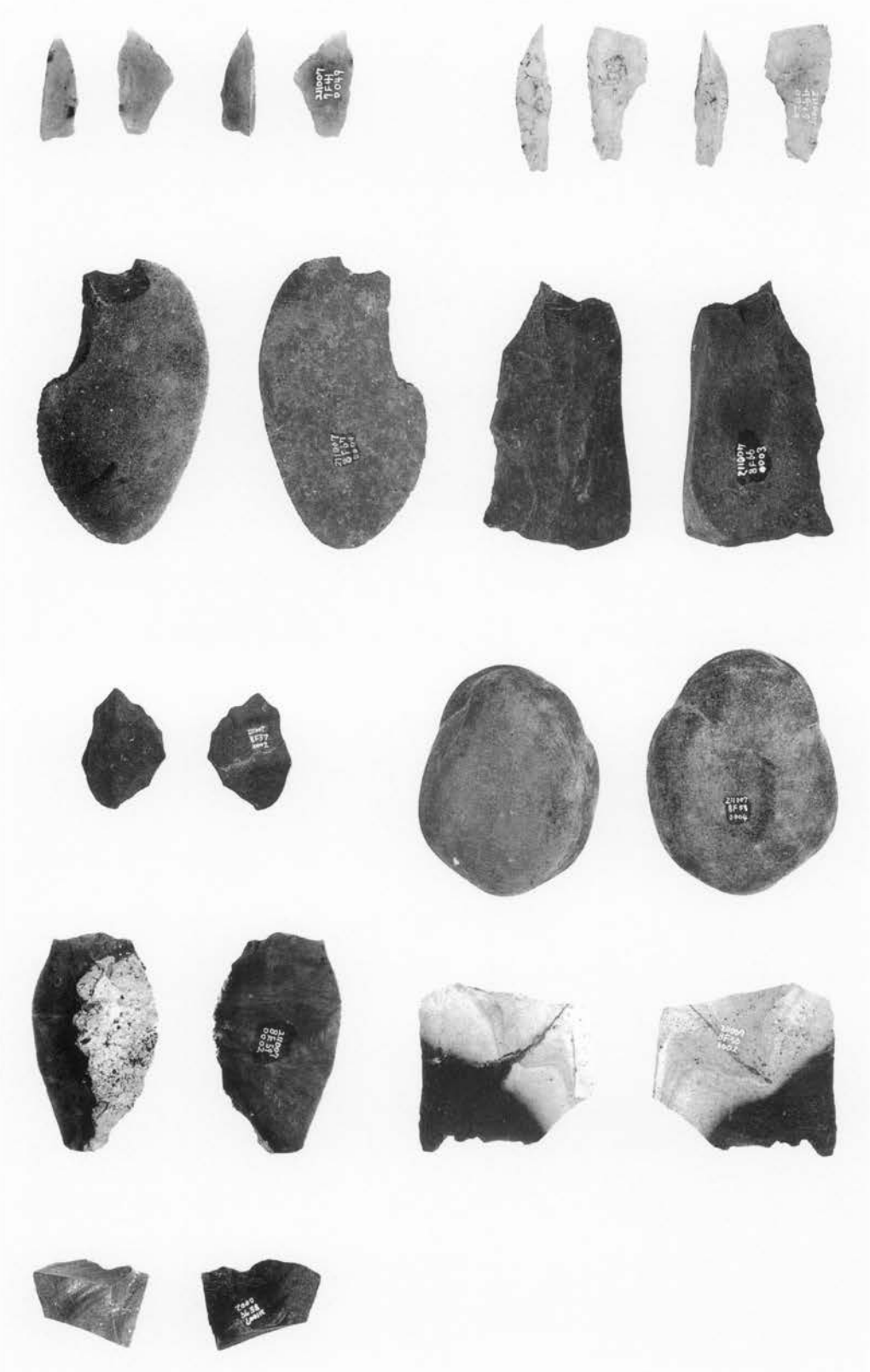
No. 5　炭化物片集中地点



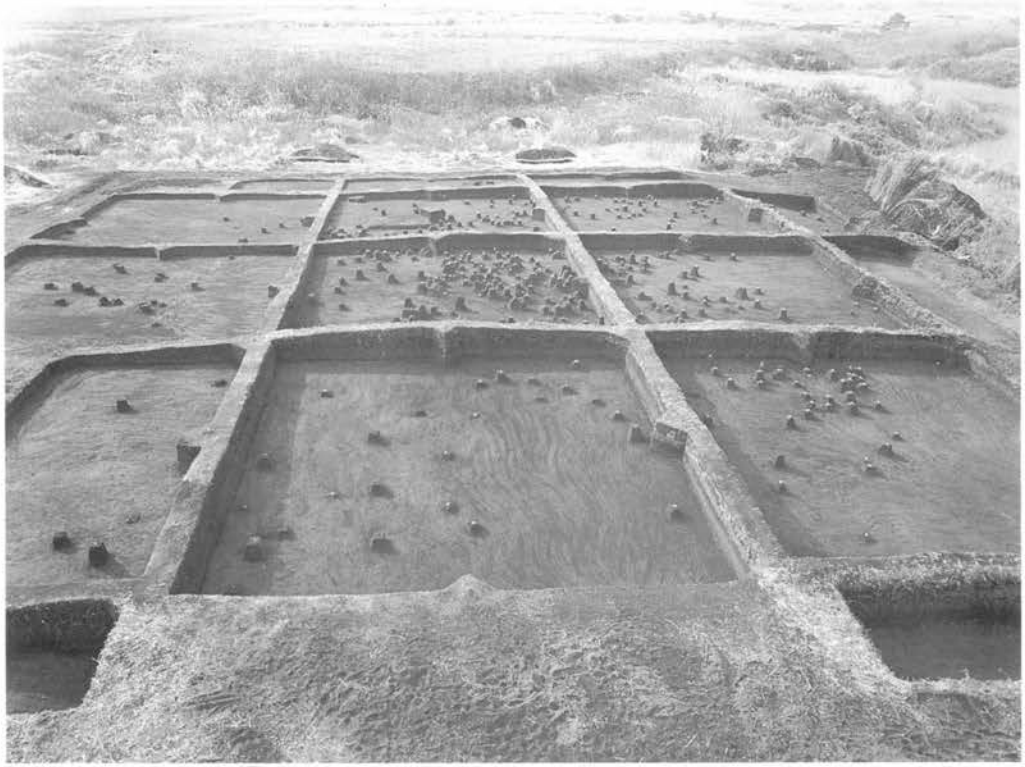
No. 4　炭化物片集中地点セクション



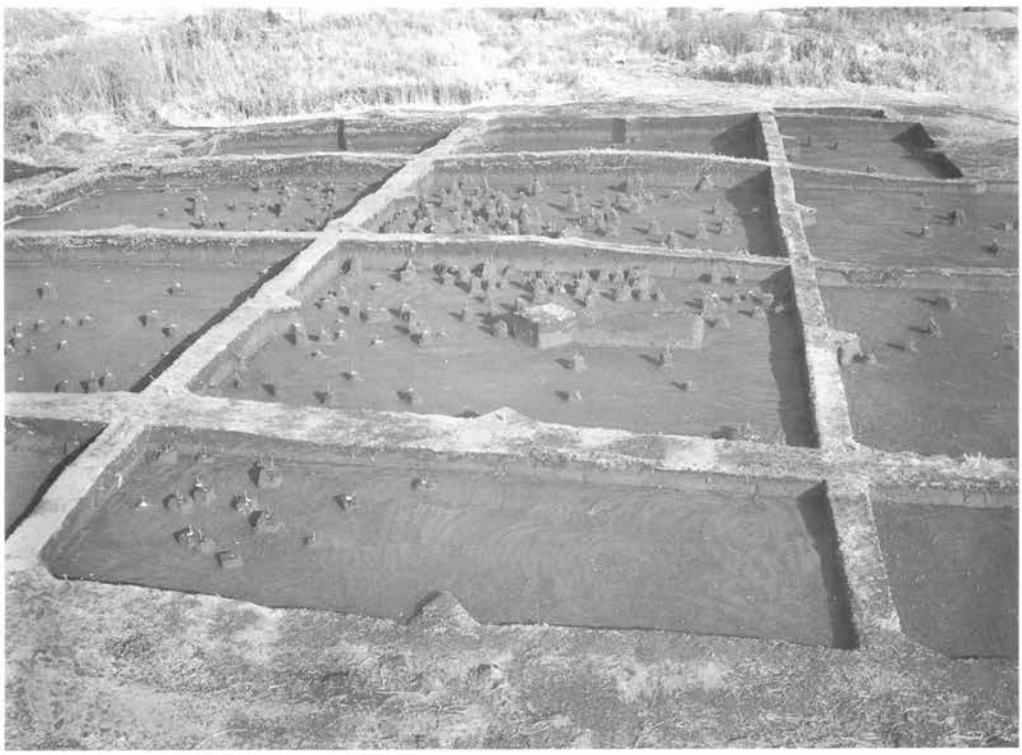
No. 4　炭化物片集中地点

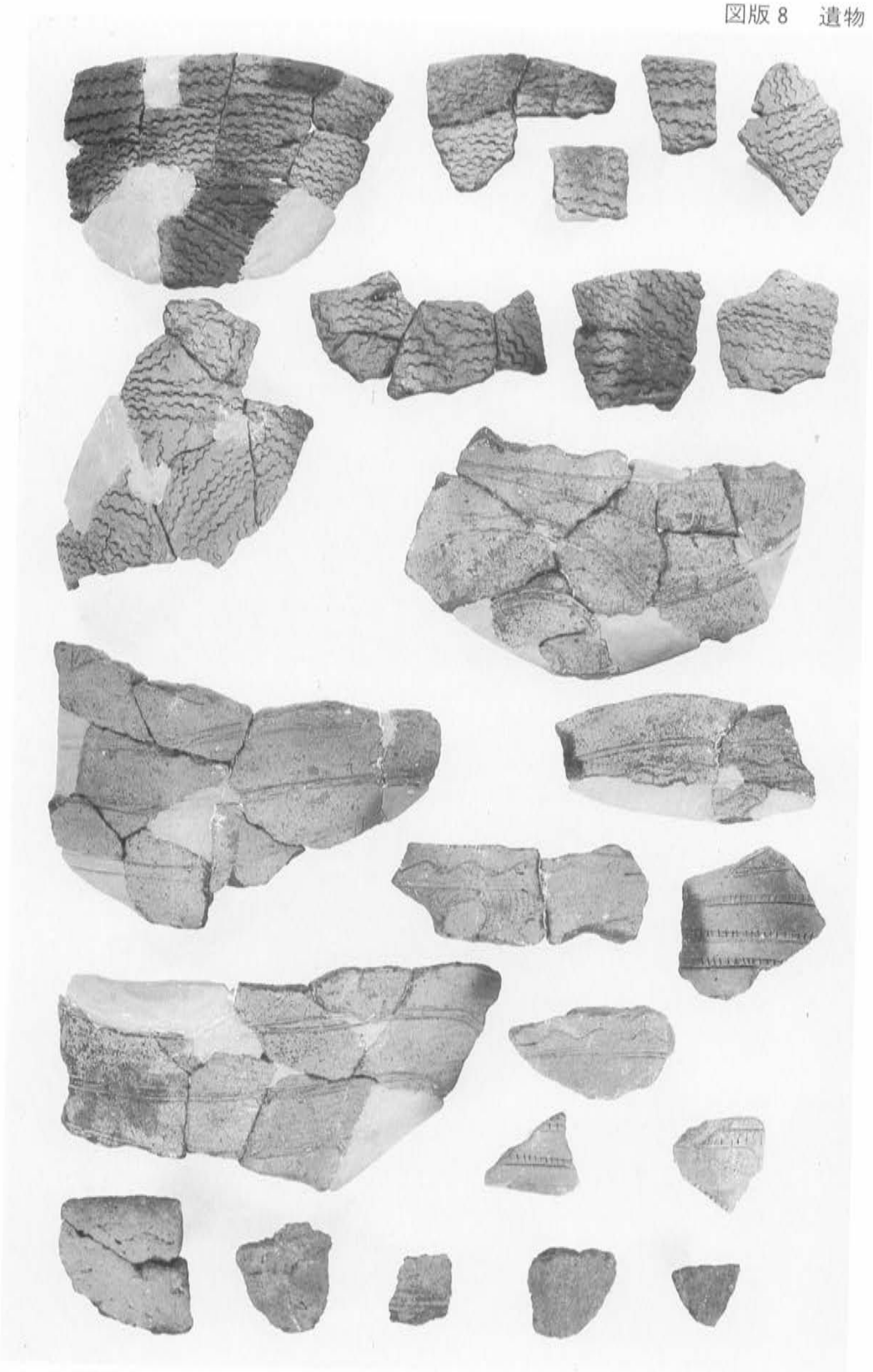


先土器時代遺物

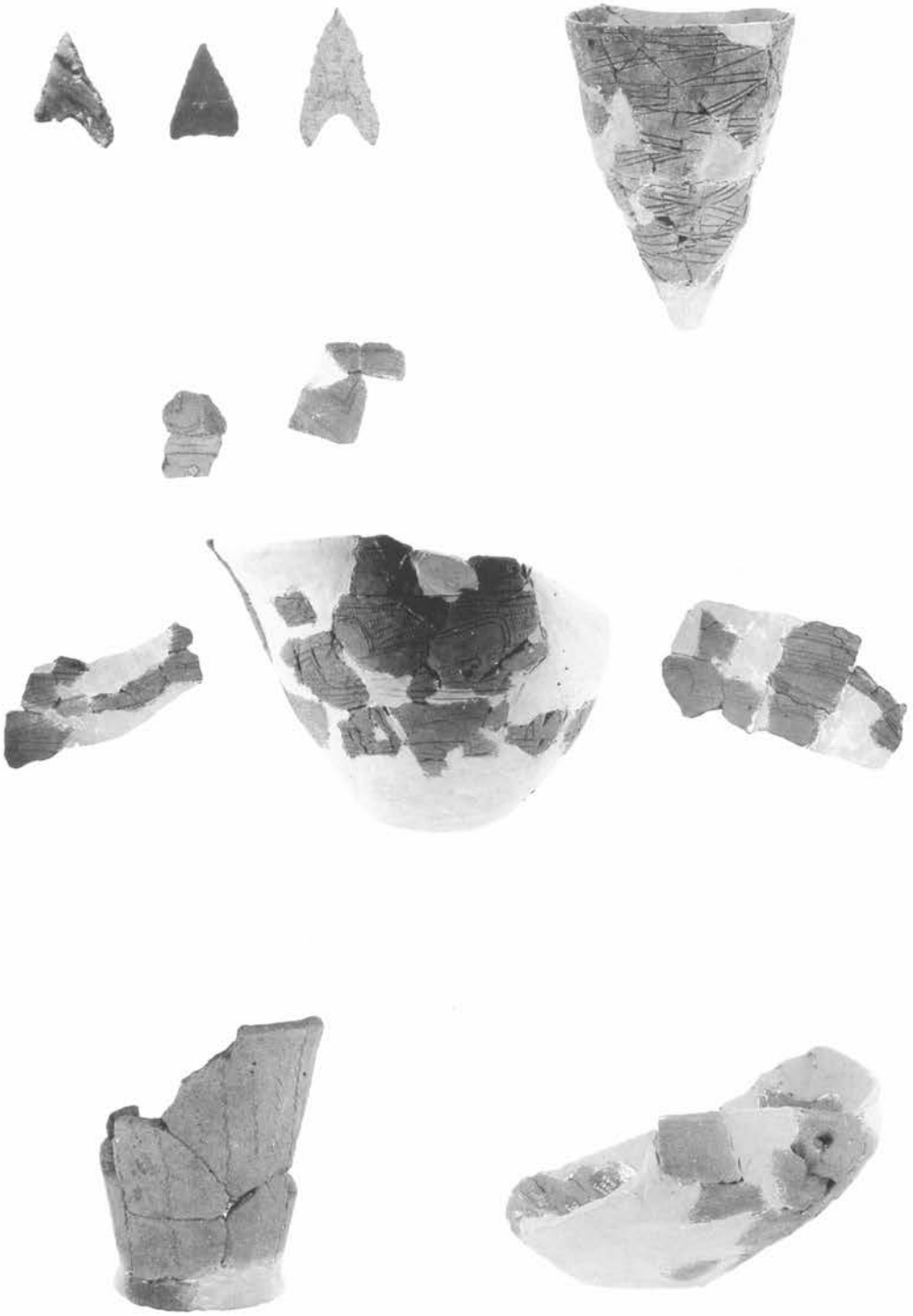


A 地点縄文時代遺物出土状況（東より）

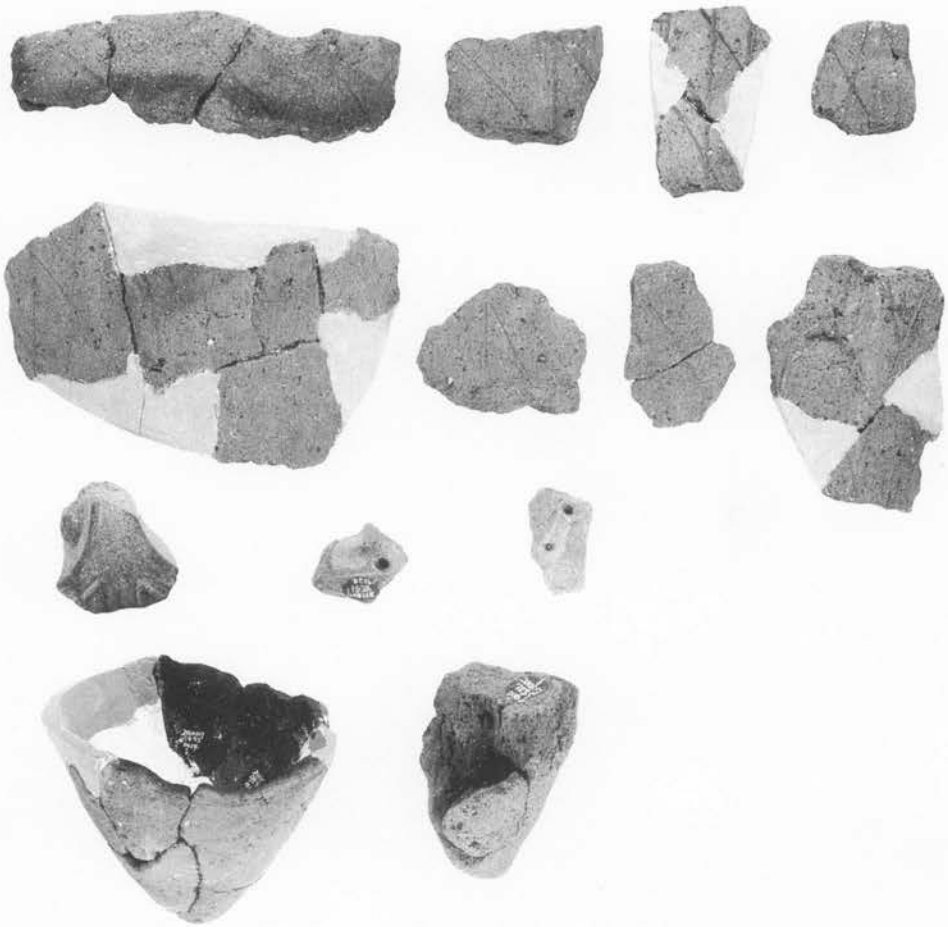




A 地点出土遺物



A 地点出土遺物



A 地点出土遺物

図版11　001遺構

炉部・遺物出土状況

出土遺物

図版12　002遺構

西より

土層セクション・遺物出土状況

出土遺物

土層セクション

検出状況

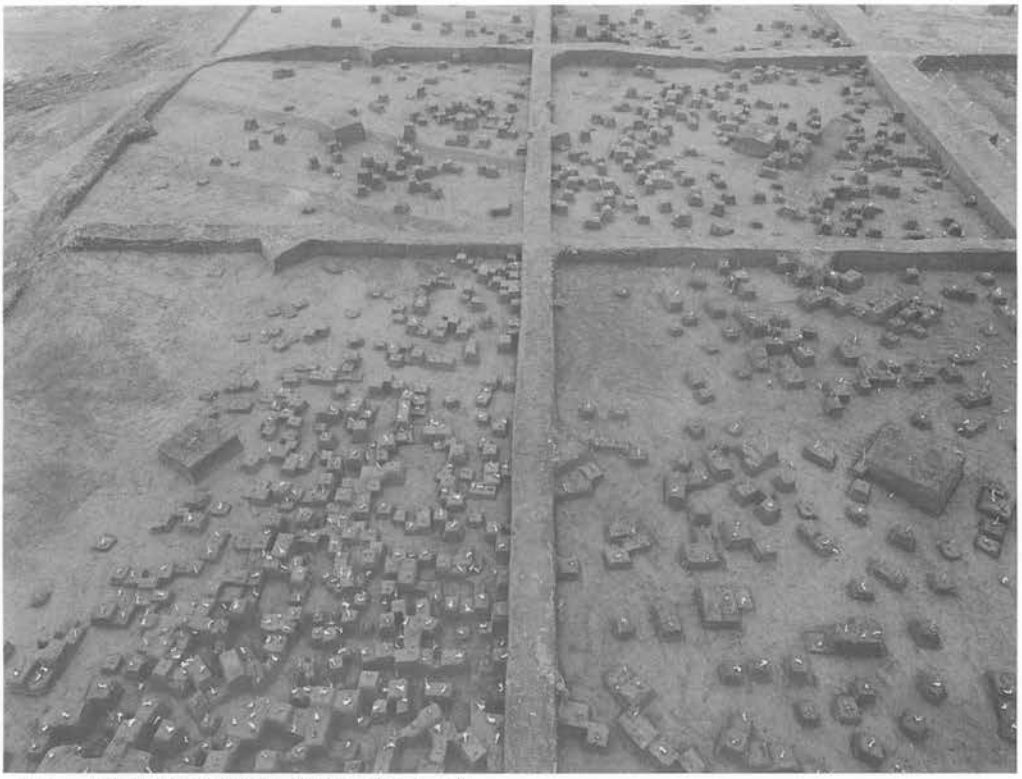
西より

土層セクション

北より

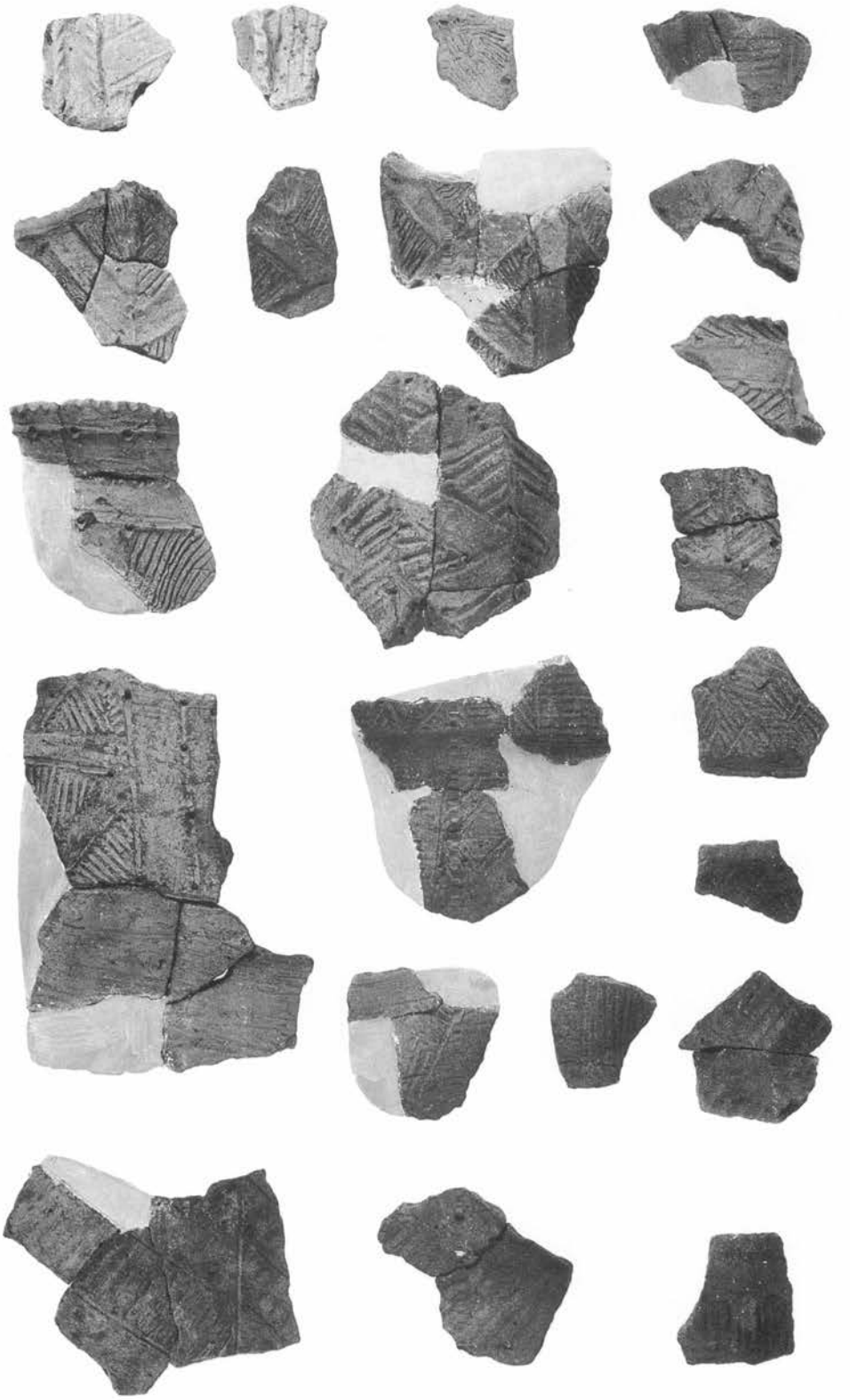
8 G縄文時代遺物出土状況（南より）

9 F南側縄文時代遺物出土状況（南より）

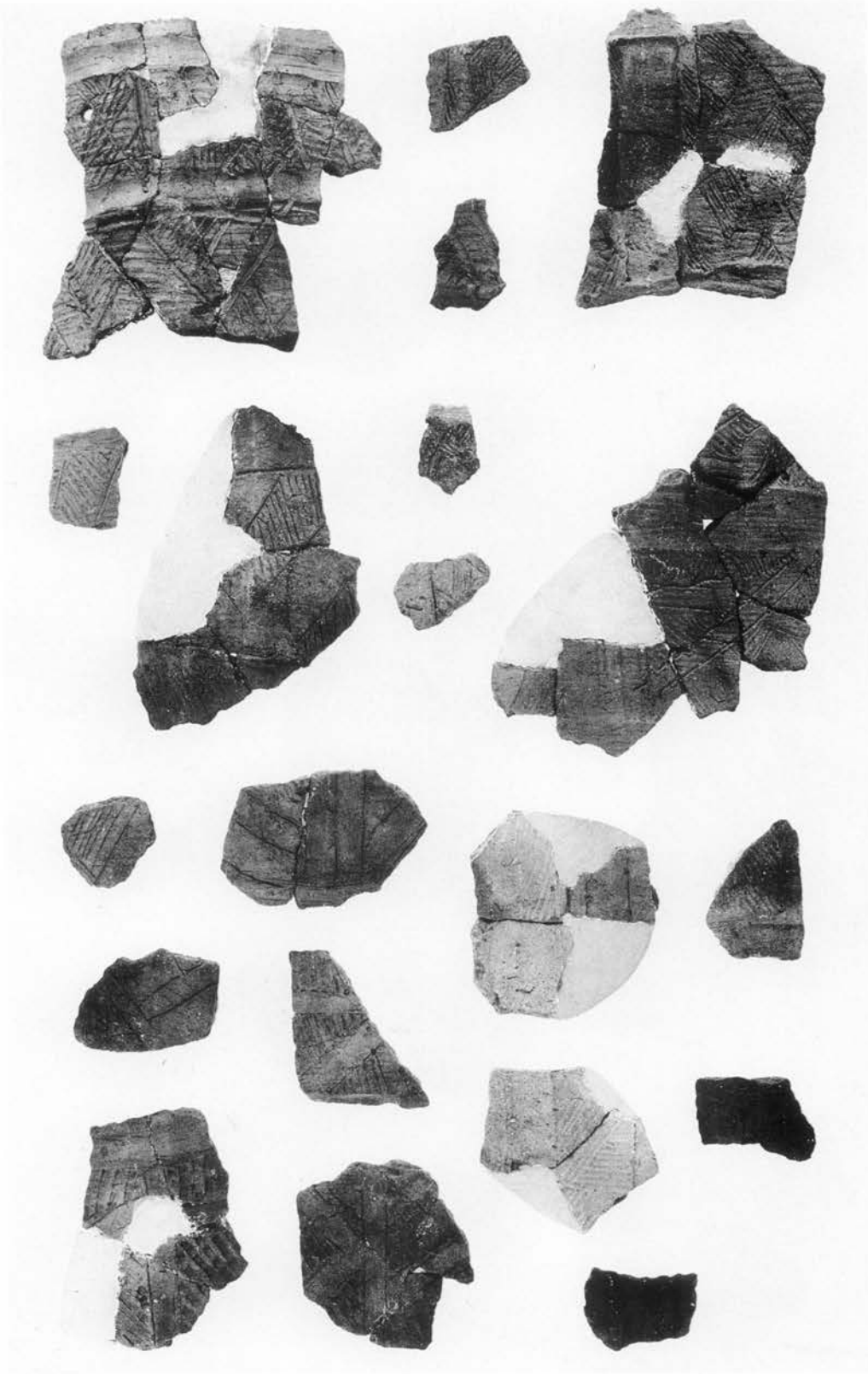


9 F北側縄文時代遺物出土状況（南より）

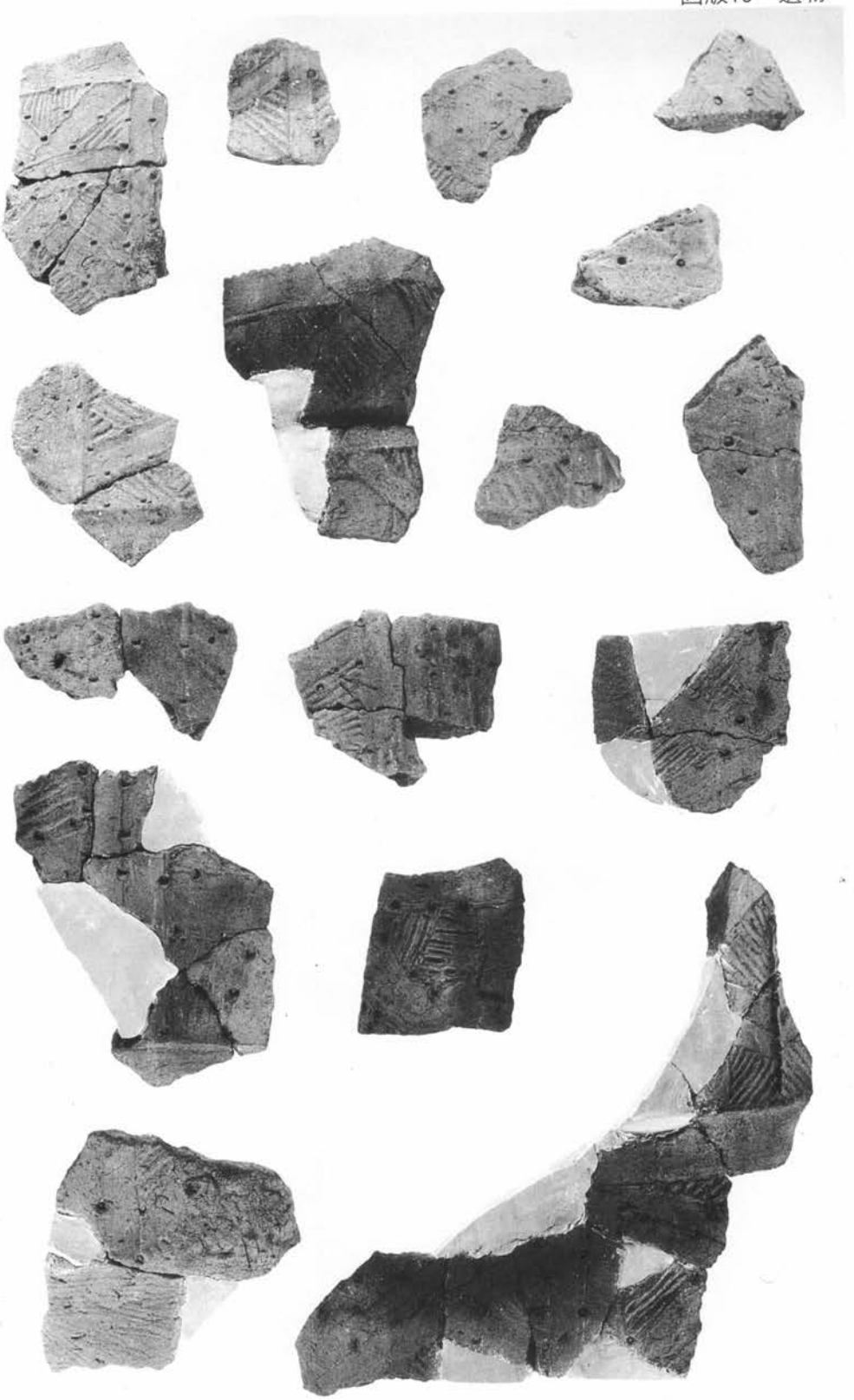
10 F縄文時代遺物出土状況（北より）



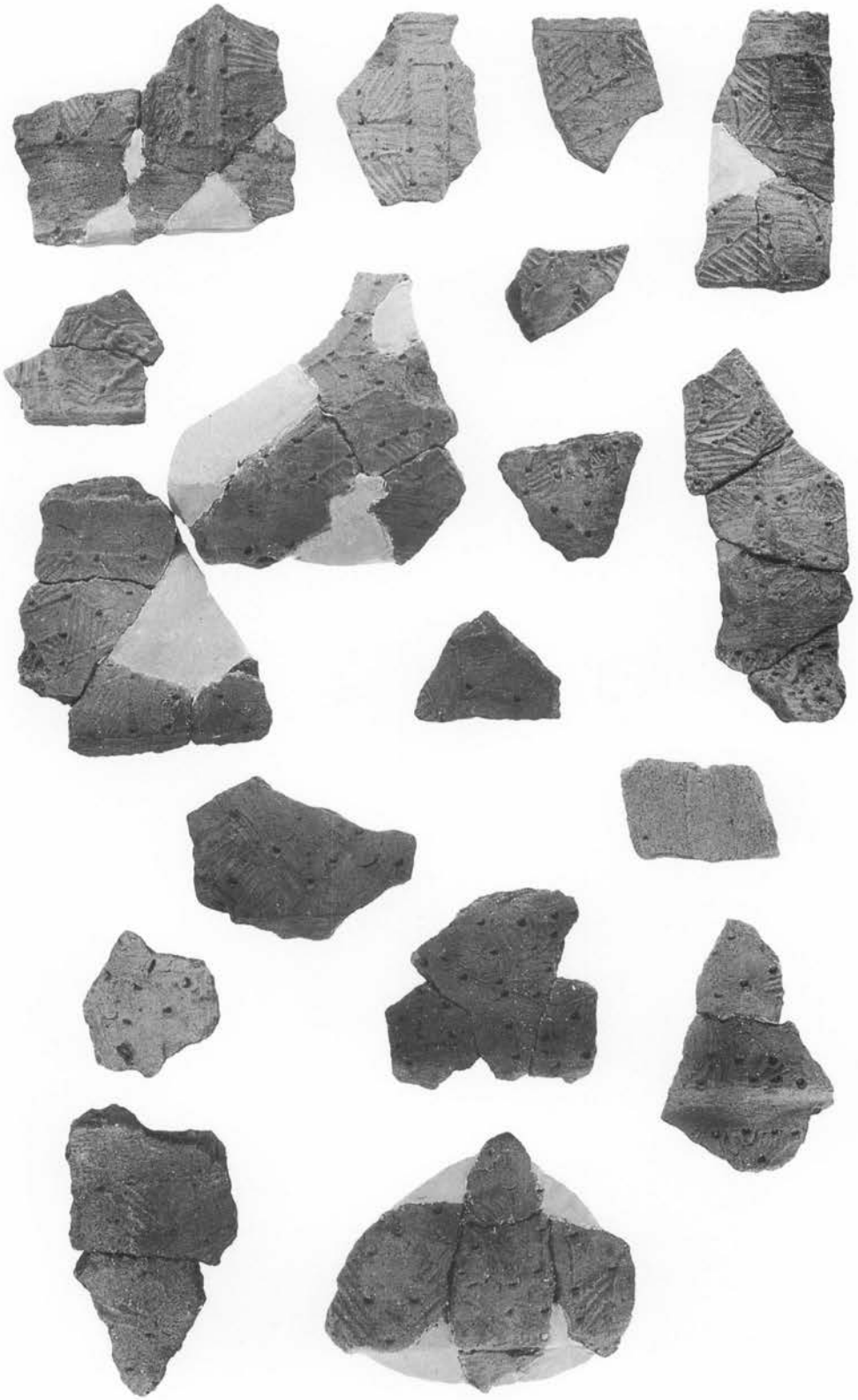
B地点、第2群Ⅰ・Ⅱ類土器



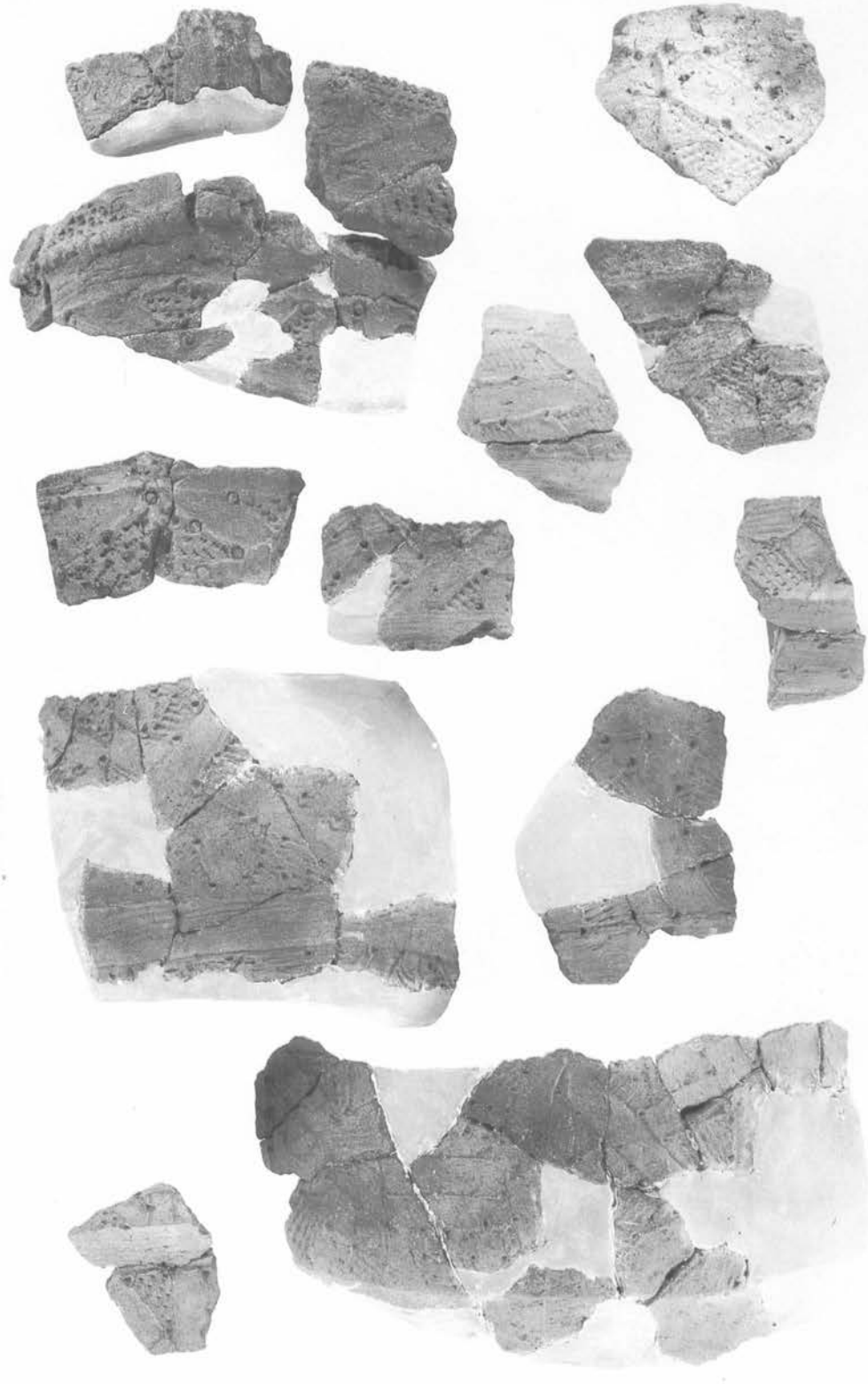
B地点、第2群II類土器



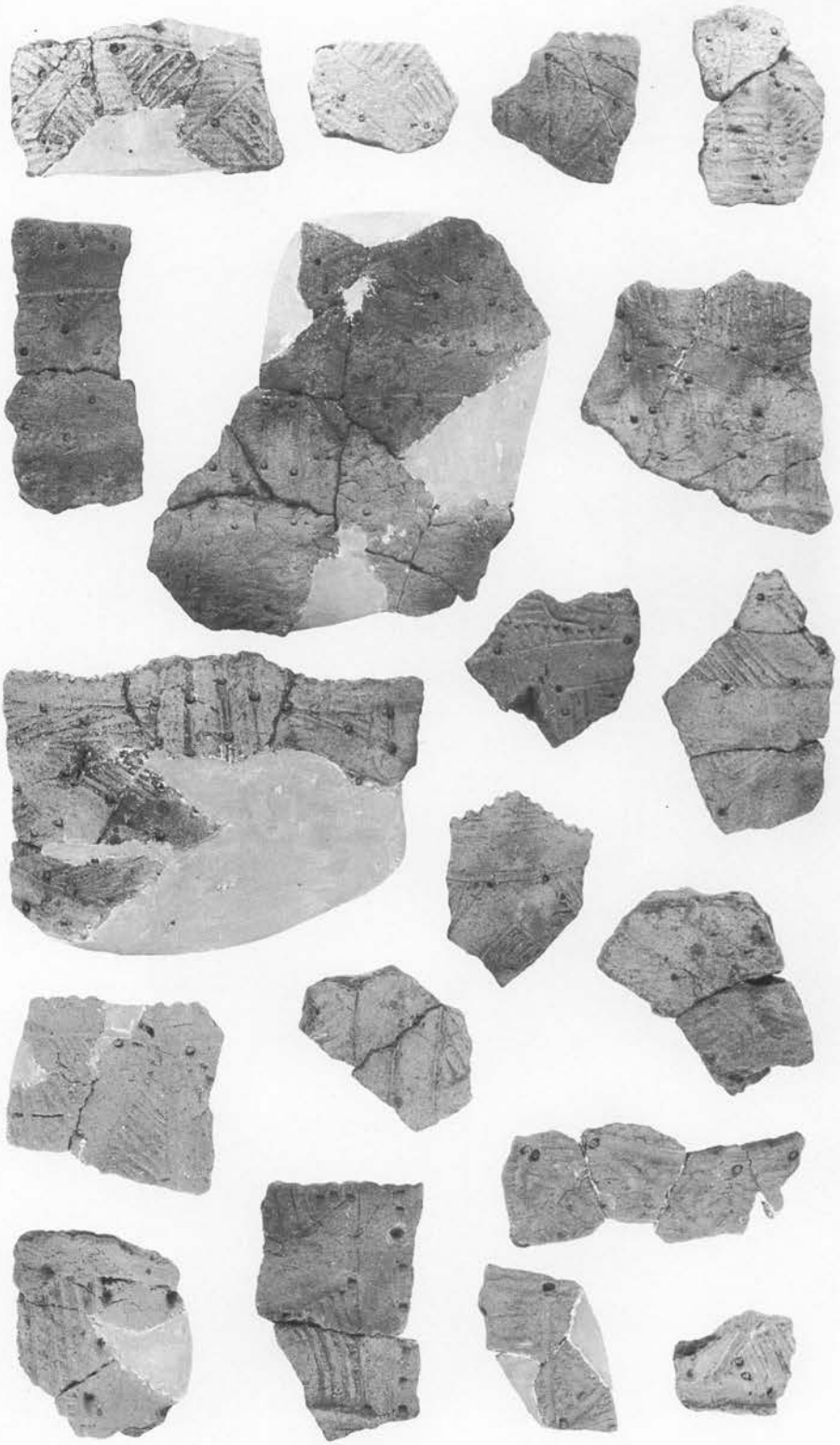
B地点、第2群III類土器



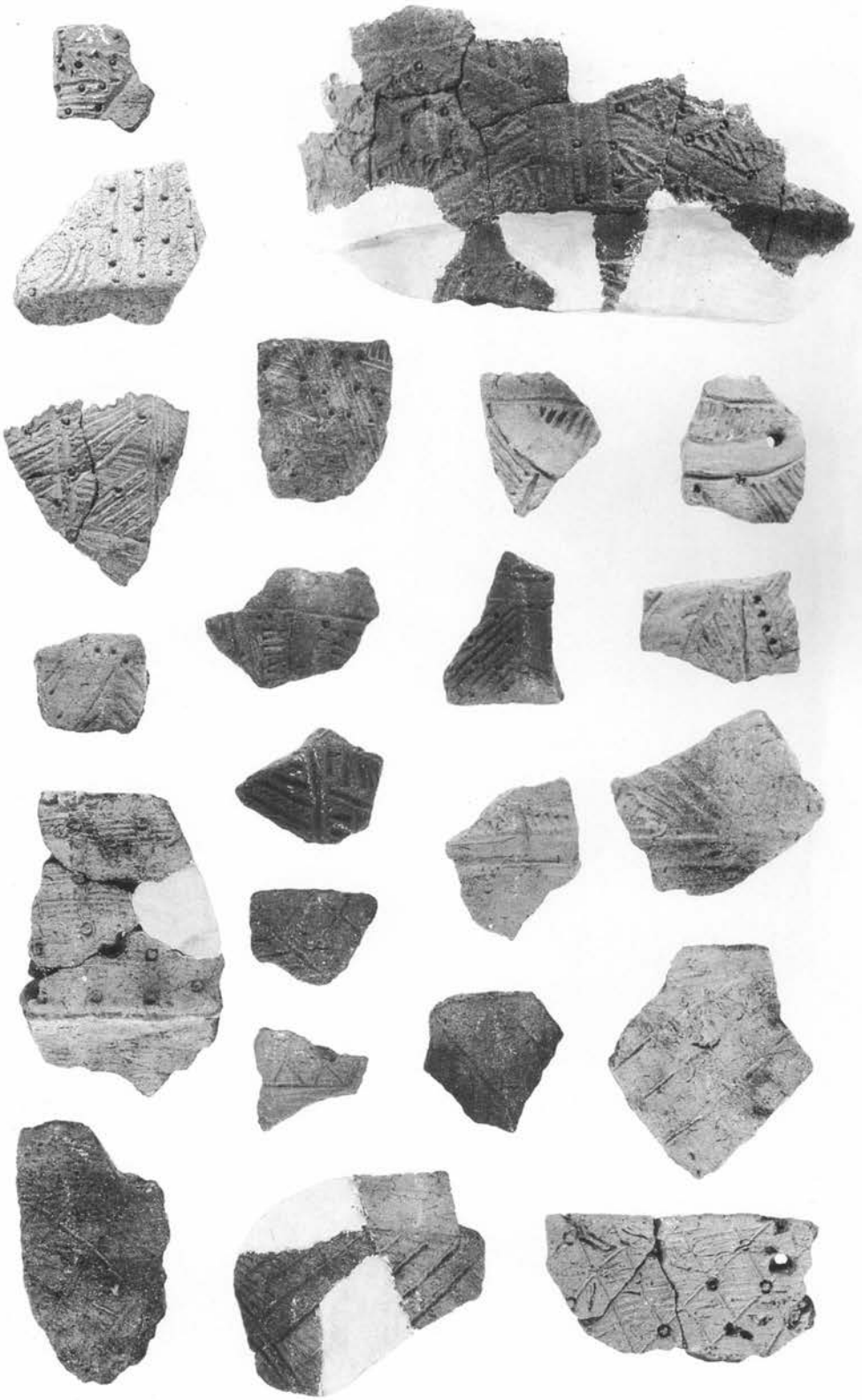
B地点、第2群III類土器



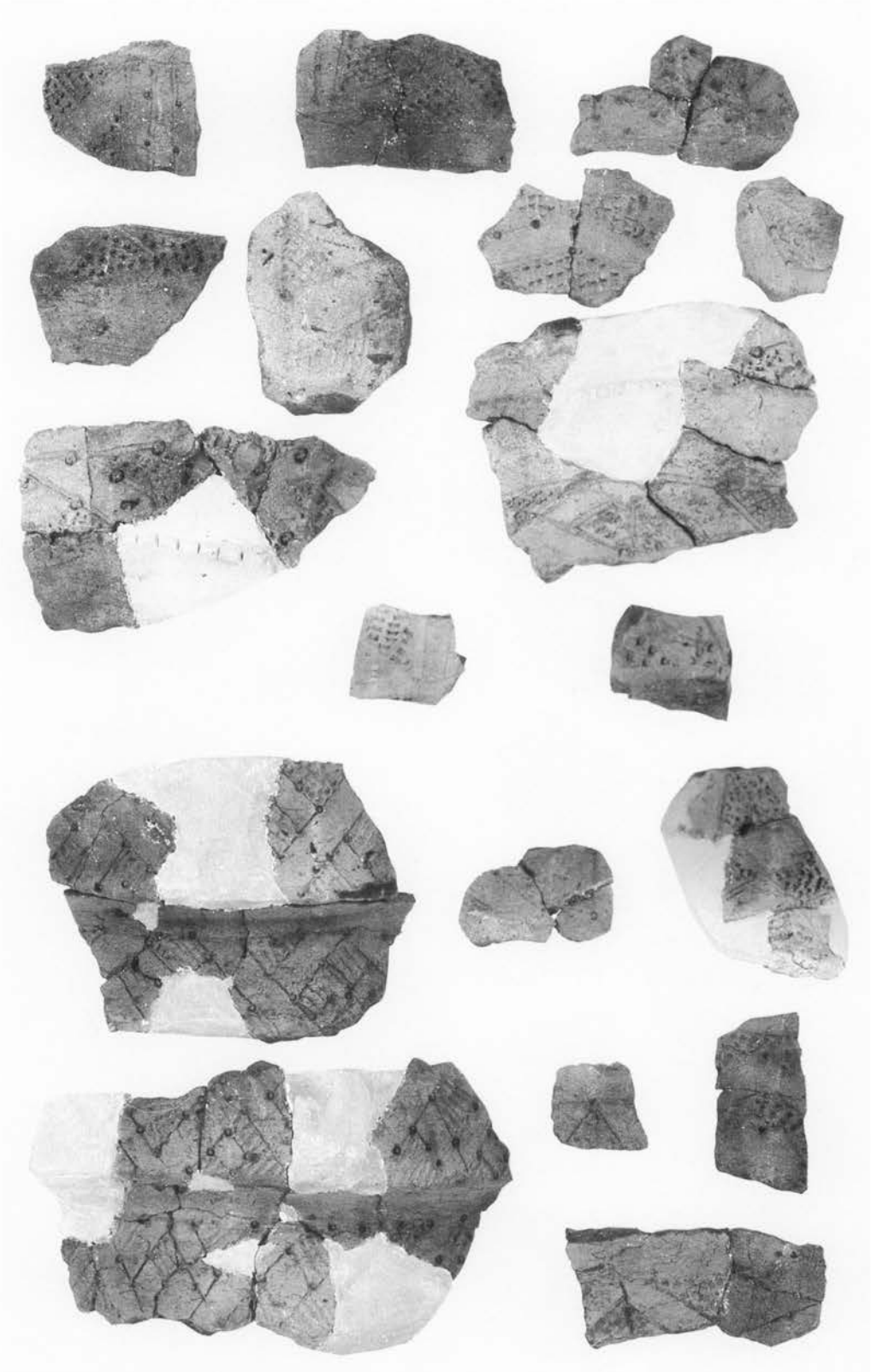
B地点、第2群III類土器



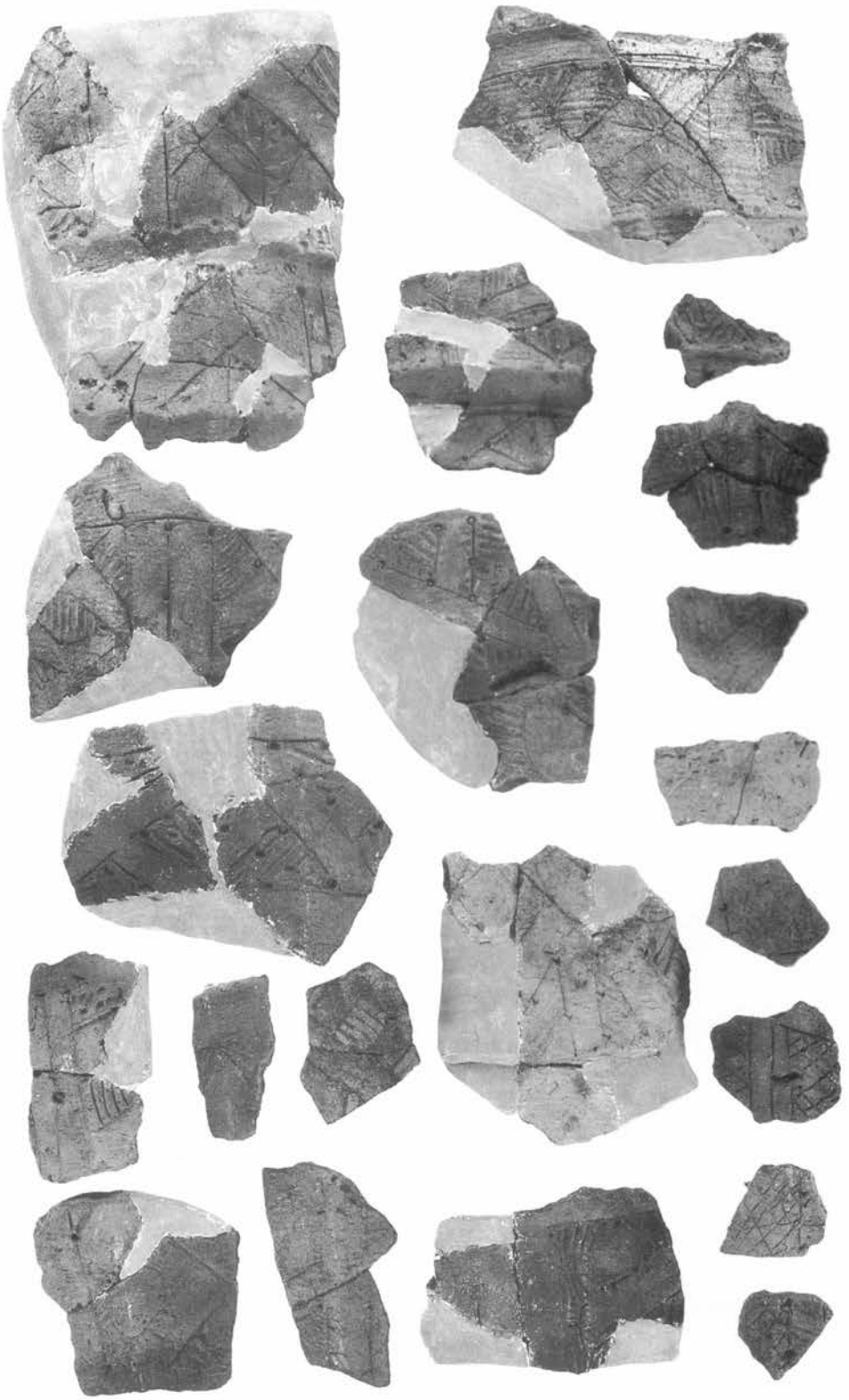
B地点、第2群Ⅲ類土器



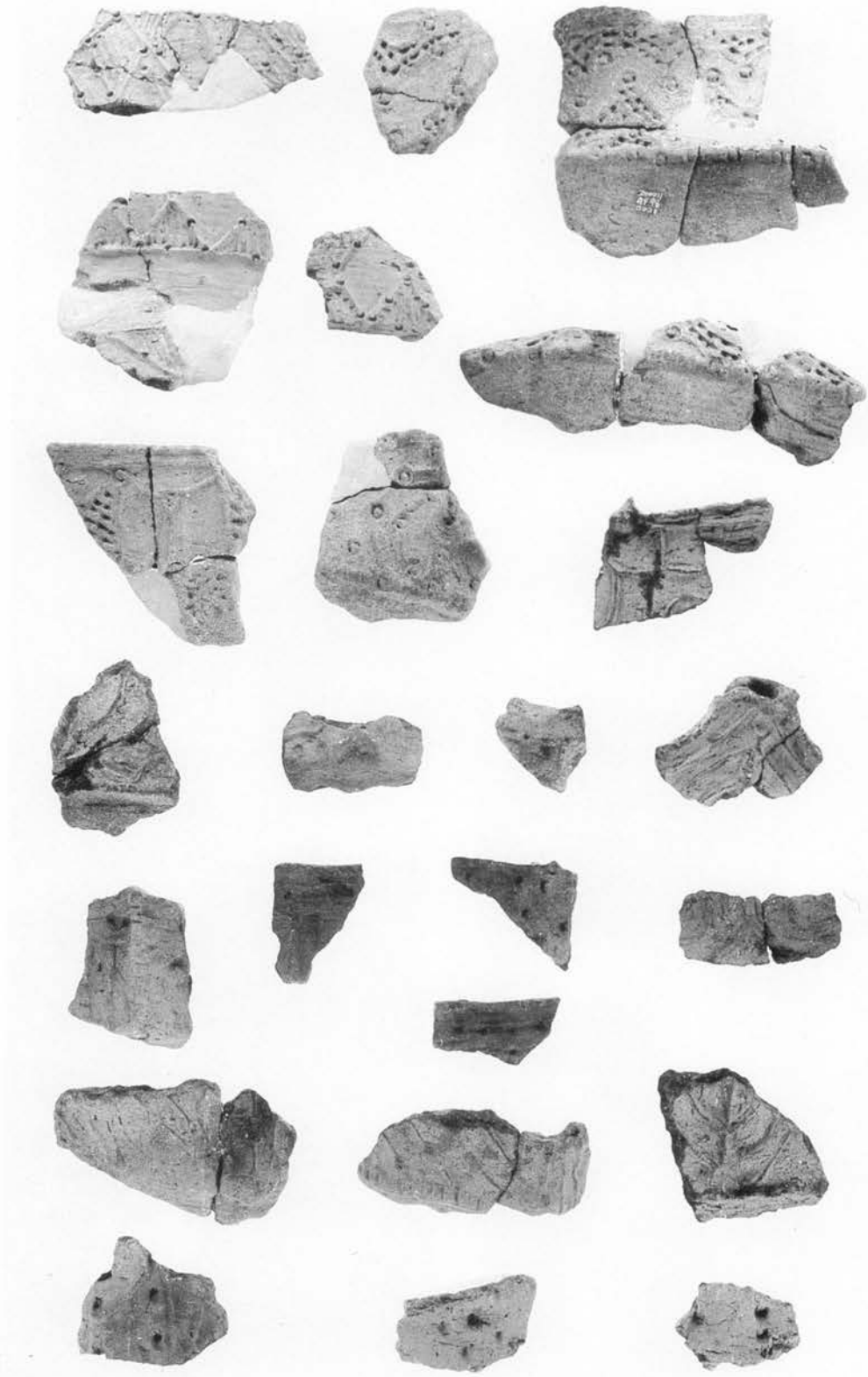
B地点、第2群Ⅲ類土器



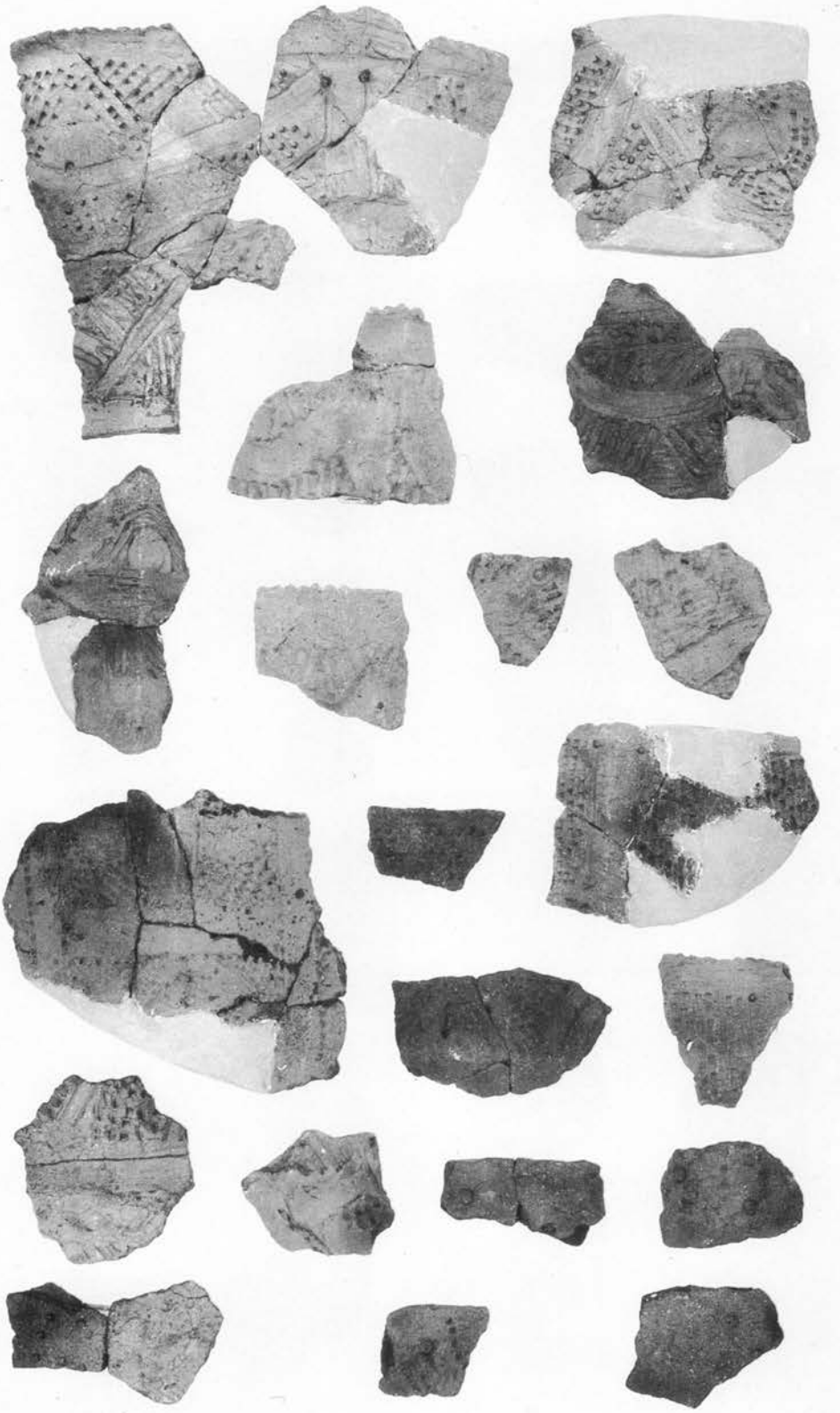
B地点、第2群Ⅲ類土器



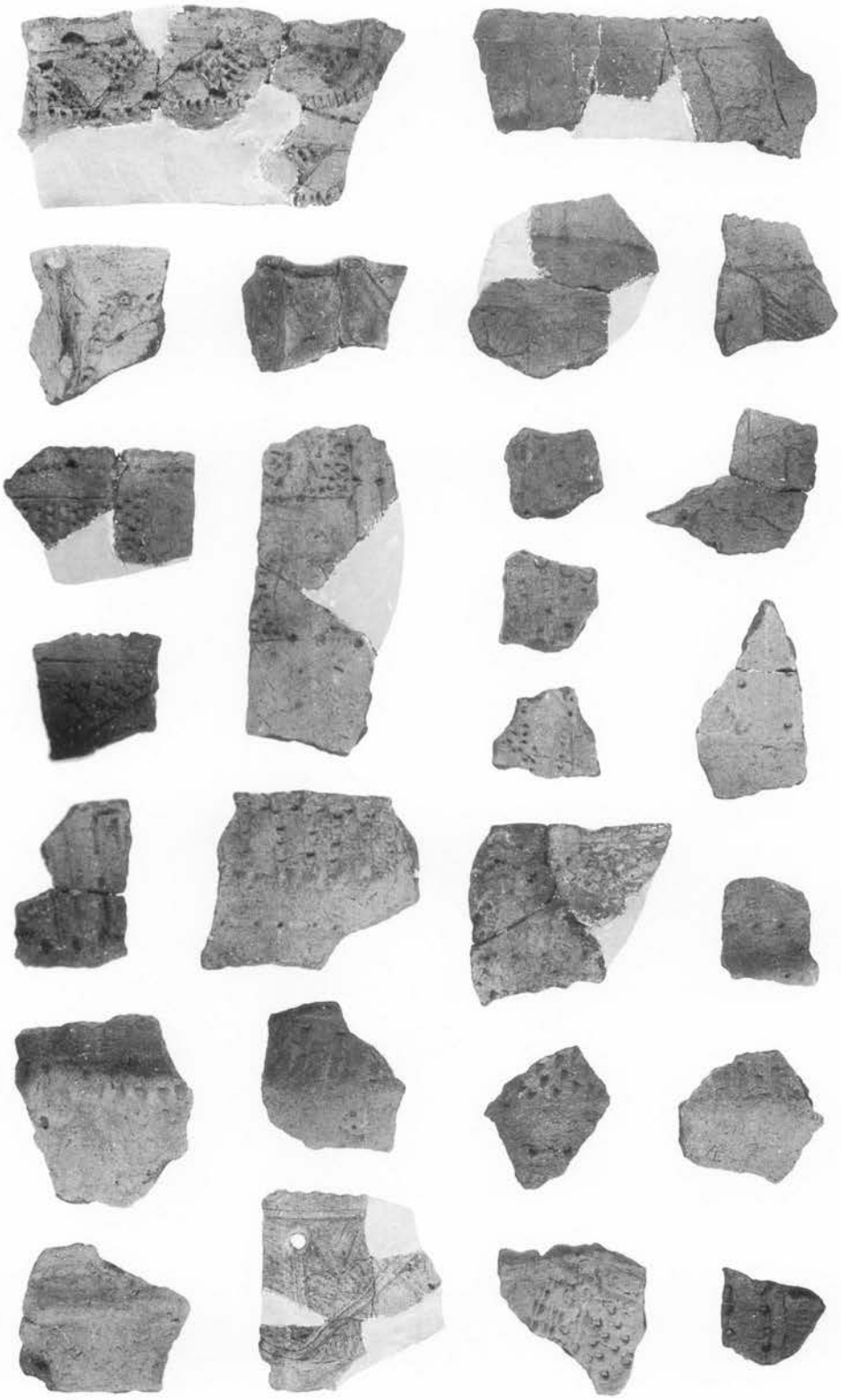
B地点、第2群Ⅲ類土器



B地点、第2群Ⅳ類土器

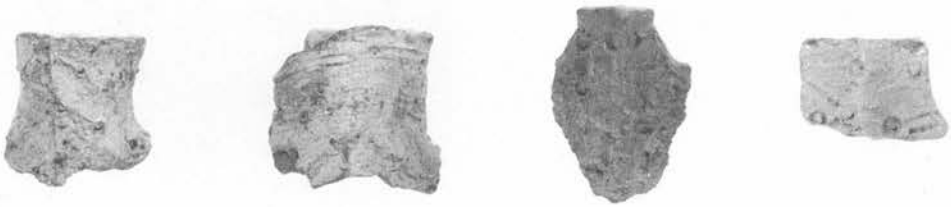


B地点、第2群Ⅳ類土器

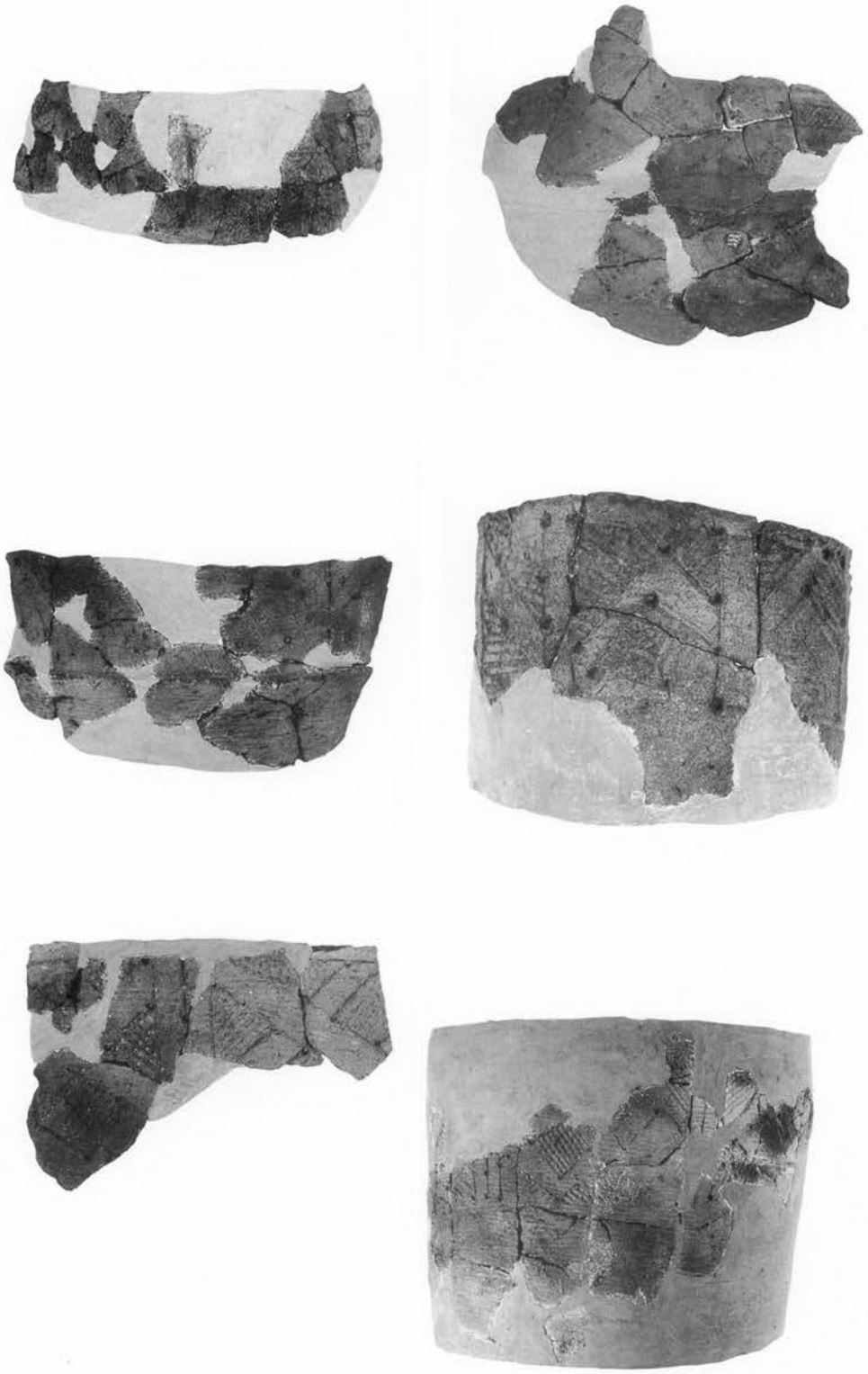


B地点、第2群Ⅳ類土器

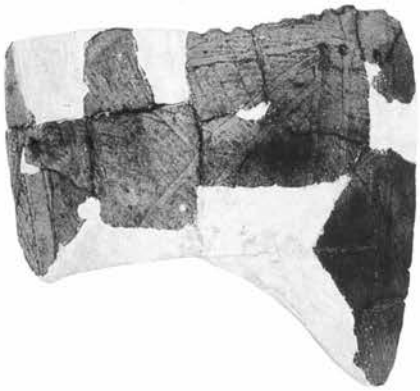
B地点、第2群V類土器

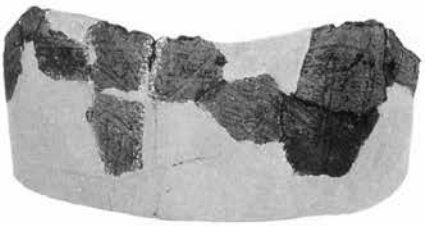


B地点、第2群III類土器（把手）

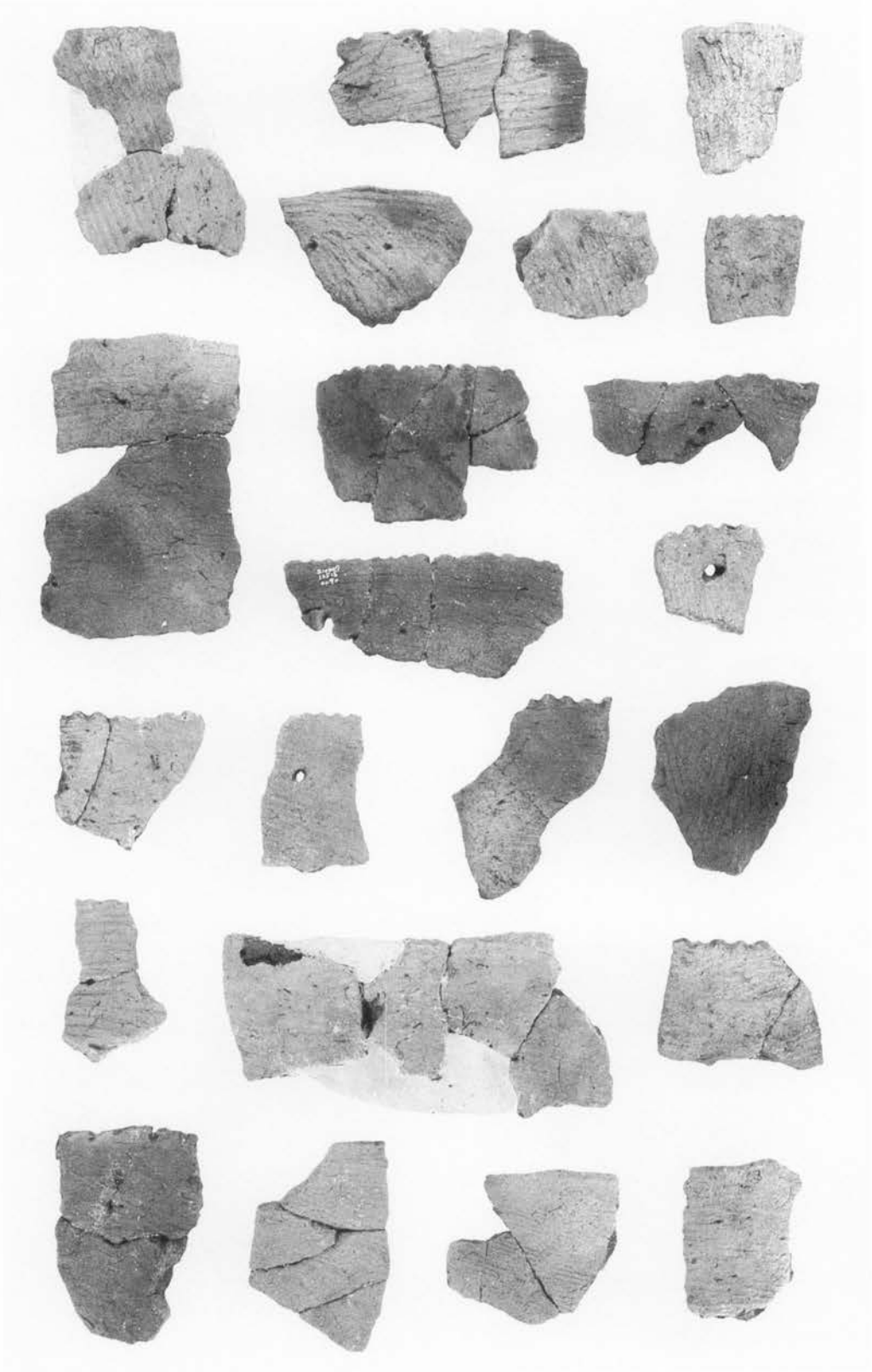


B地点、第2群Ⅲ類土器

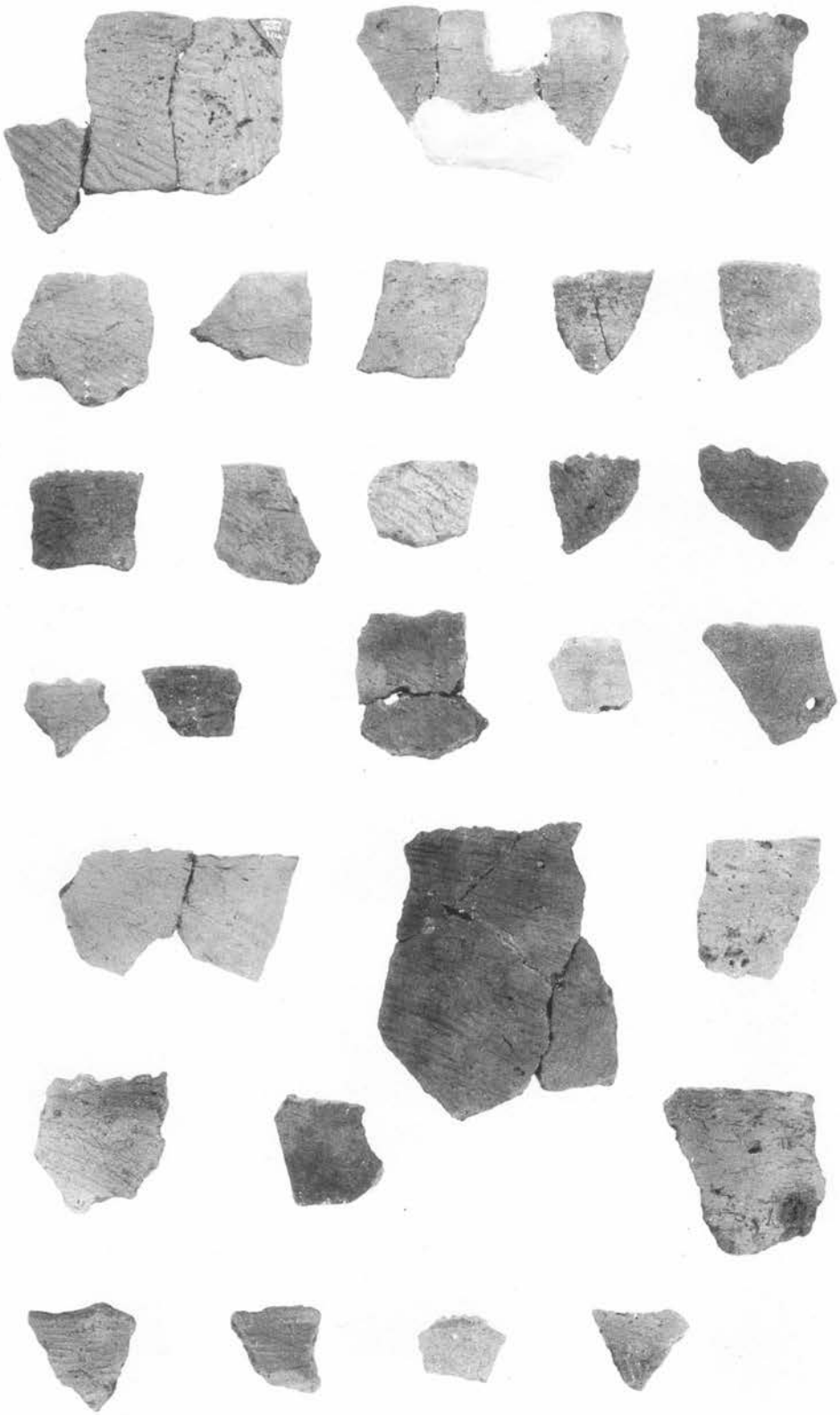




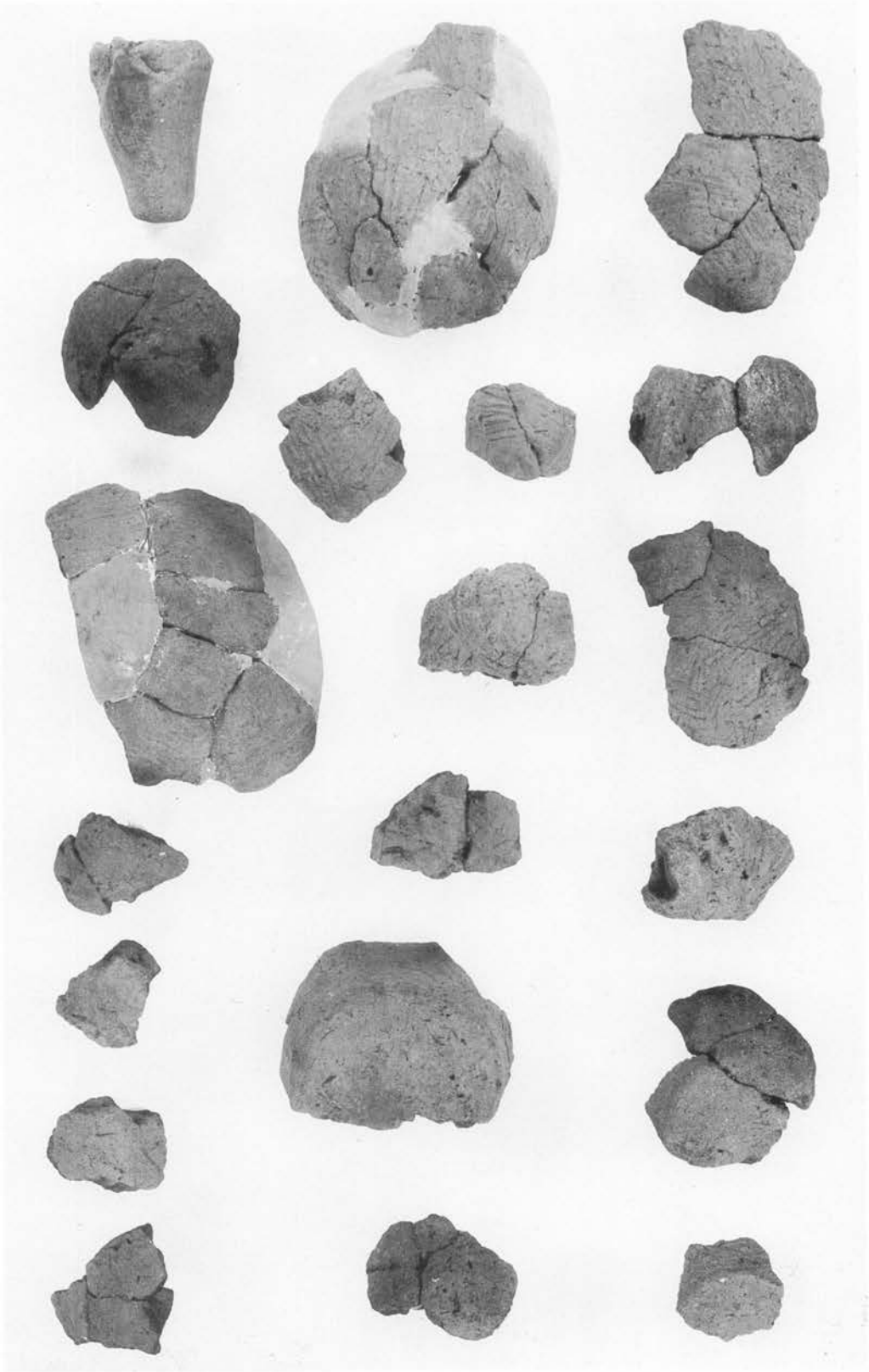
B地点、第2群Ⅲ類土器及び粗製土器



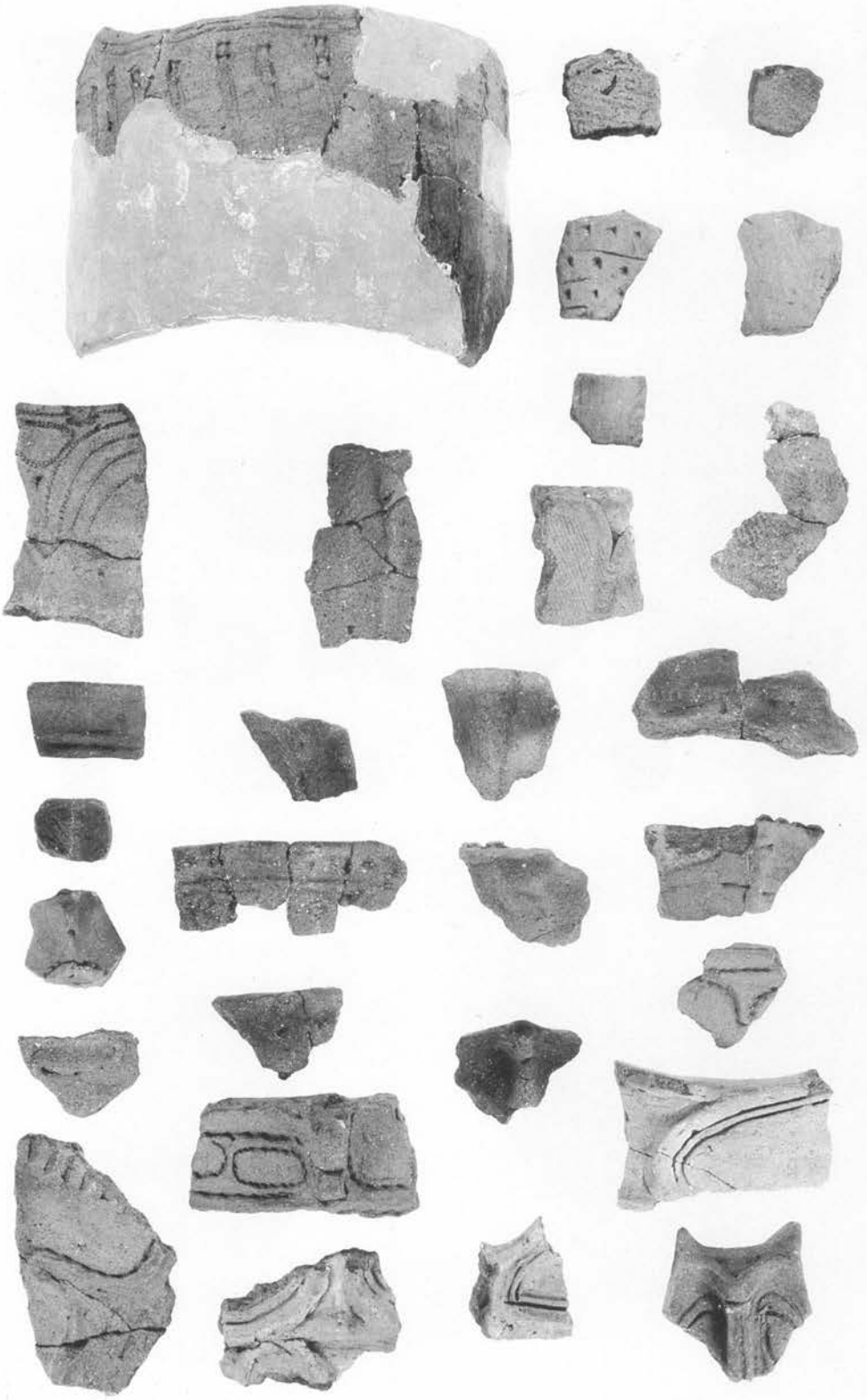
B地点、第2群土器口縁部（1）



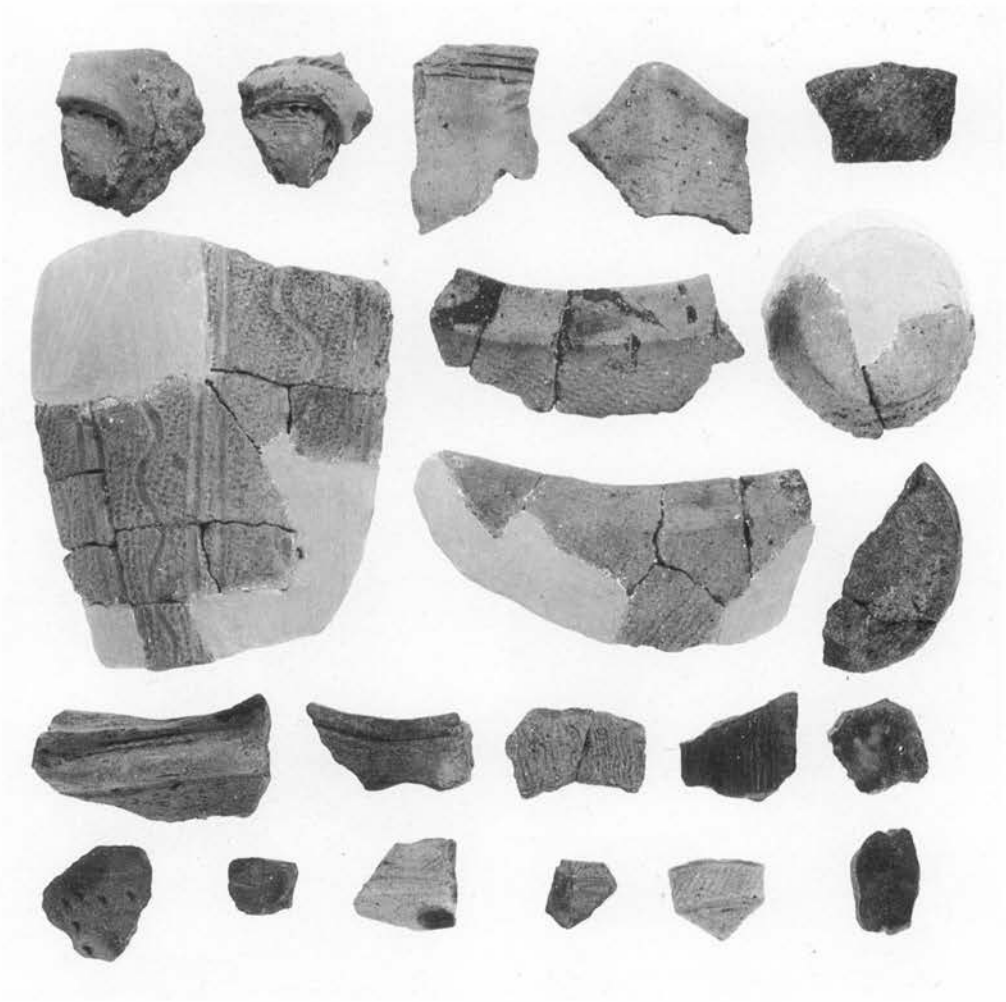
B地点、第2群土器口縁部（2）



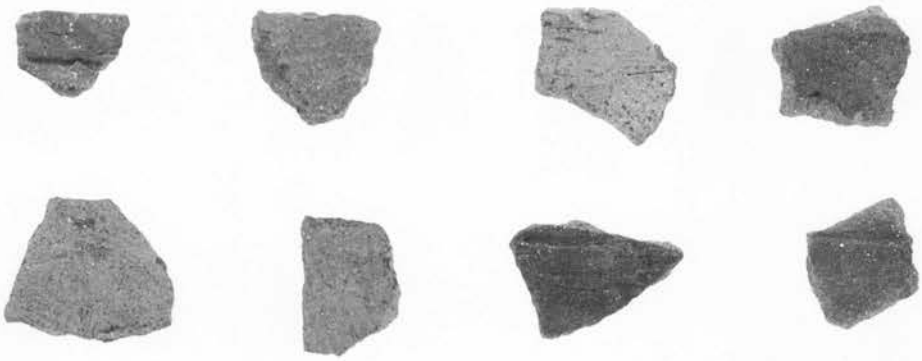
B地点、第Ⅰ・第2群土器底部



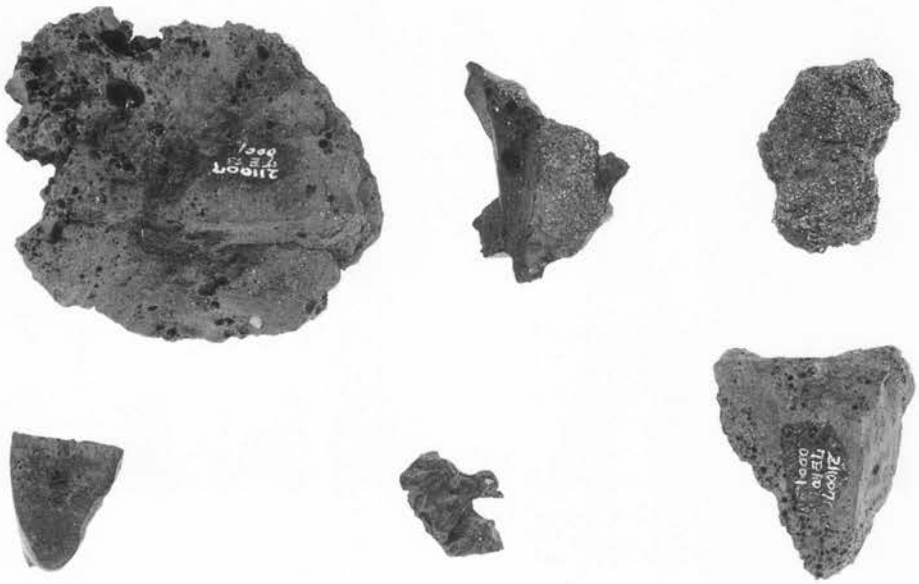
B地点、第3・第4群土器



B地点、第4・5群土器

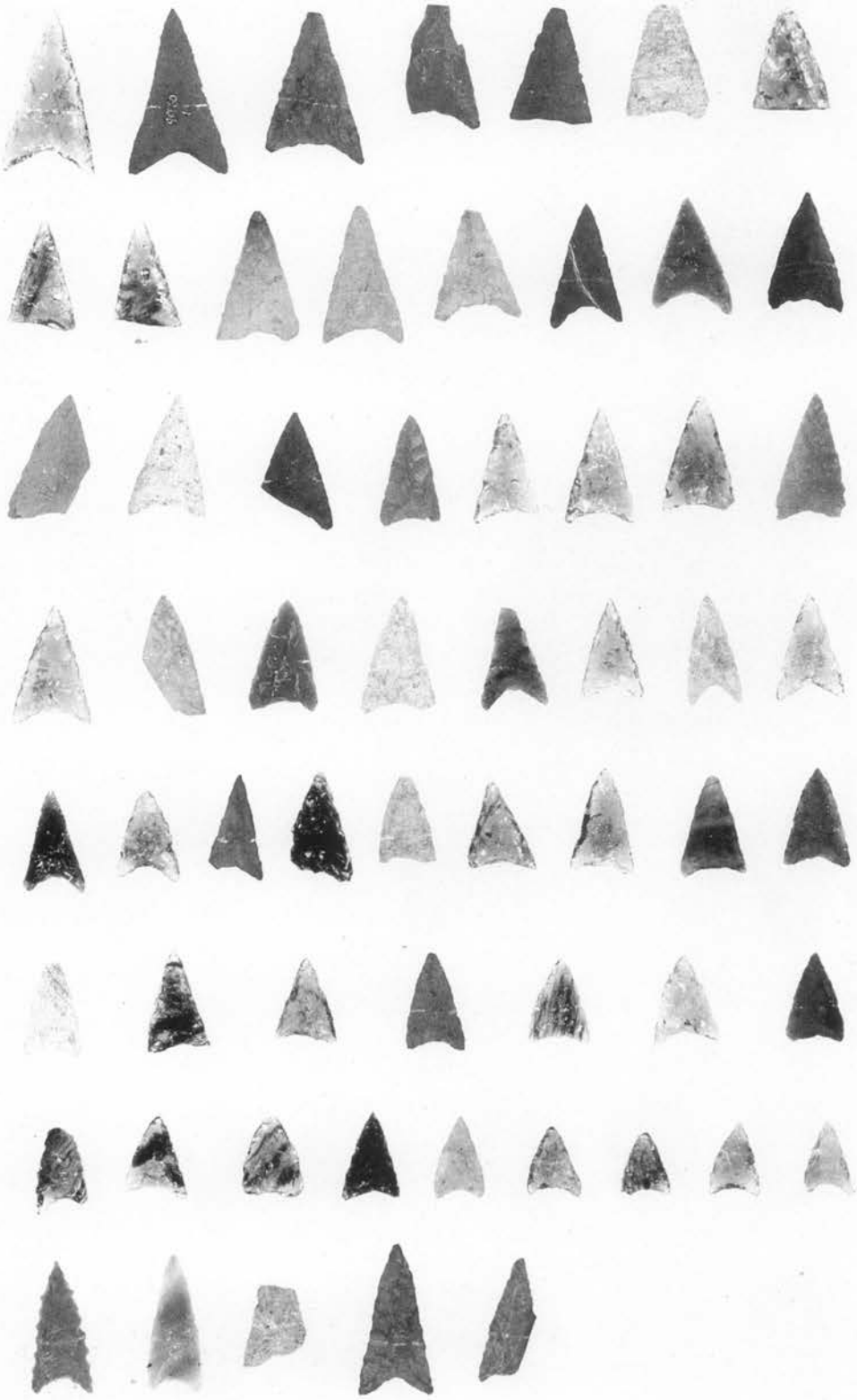


B地点、第5群土器

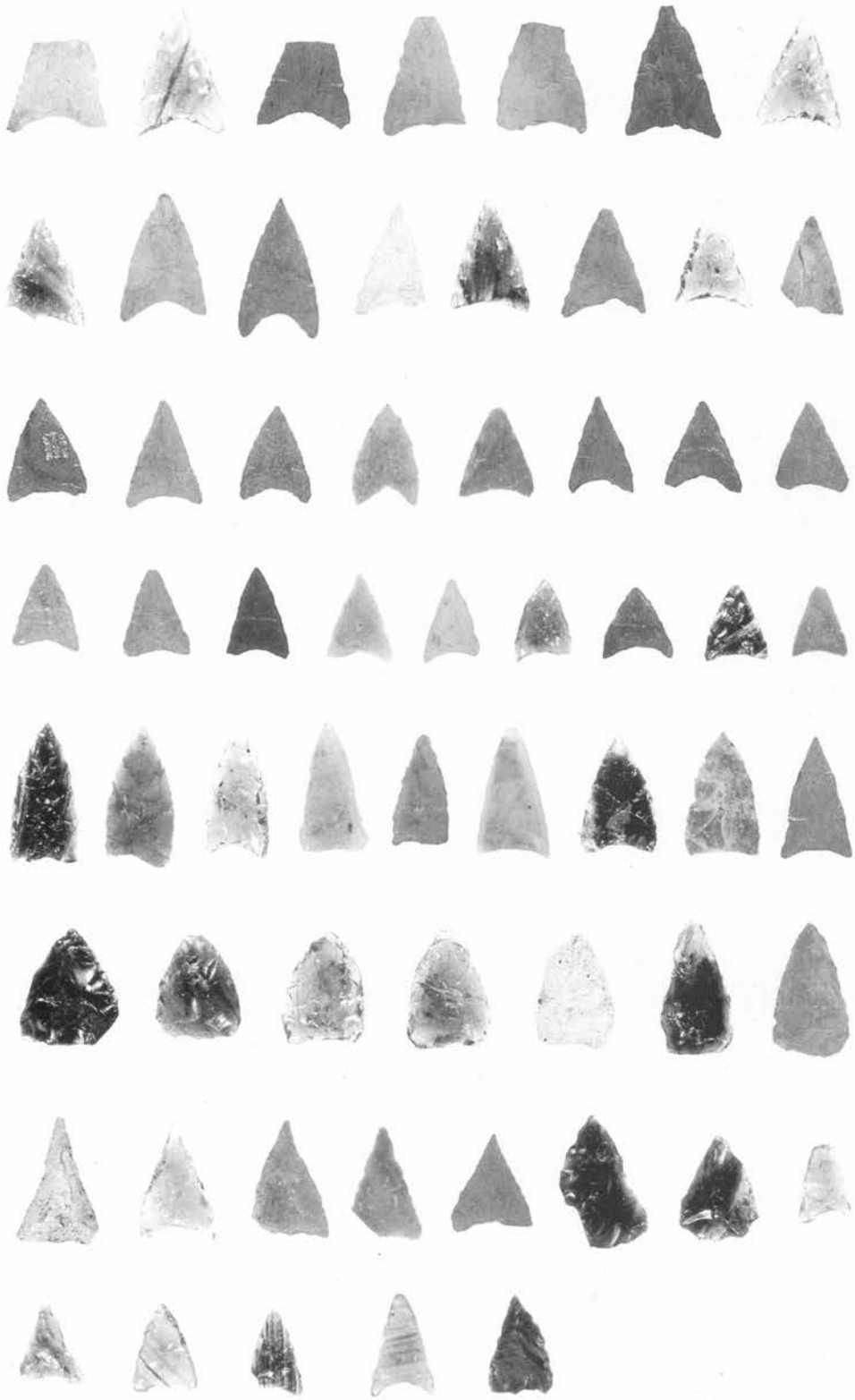


鉄滓

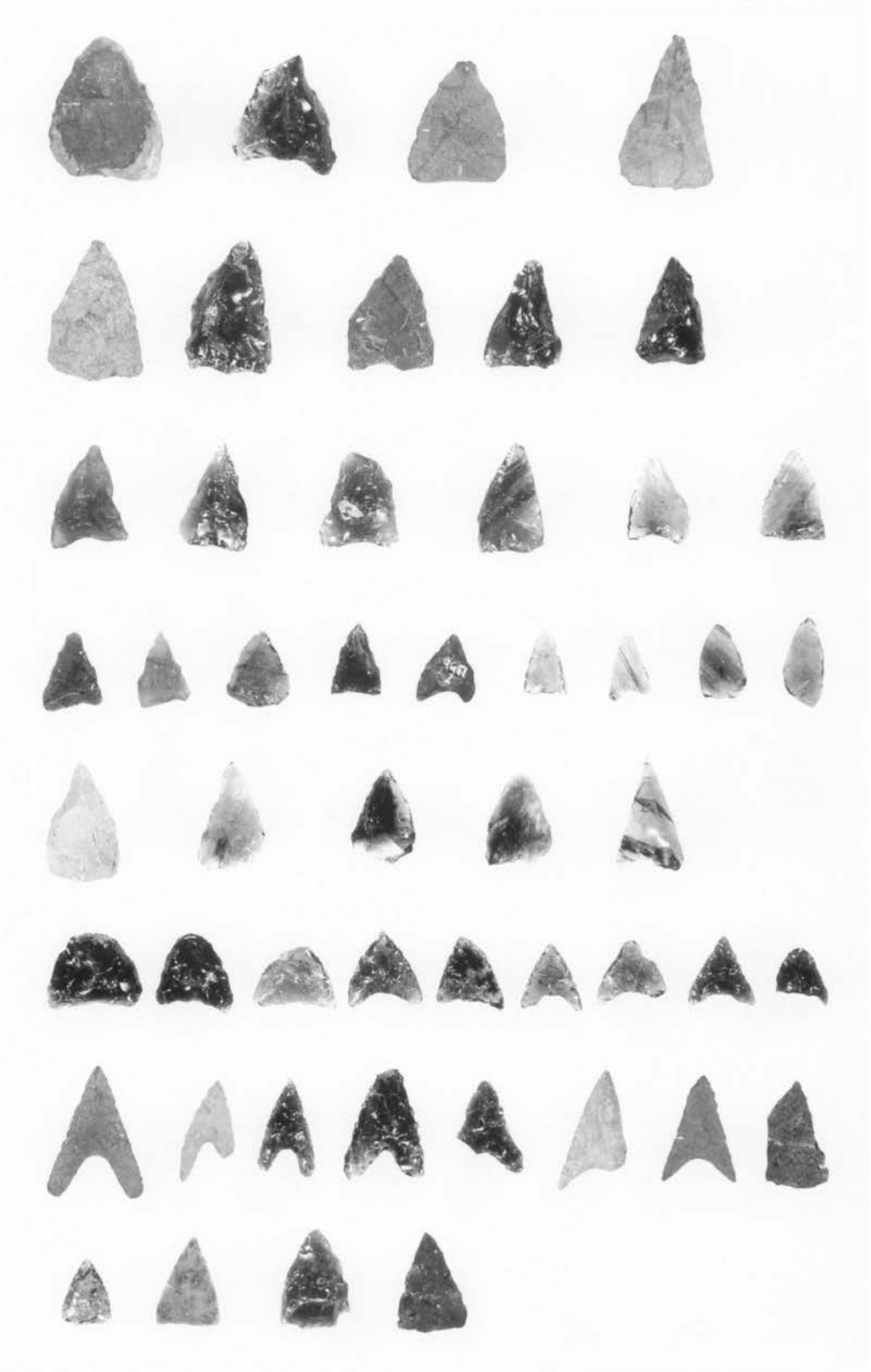
古銭



B地点、縄文時代石器(Ⅰ)

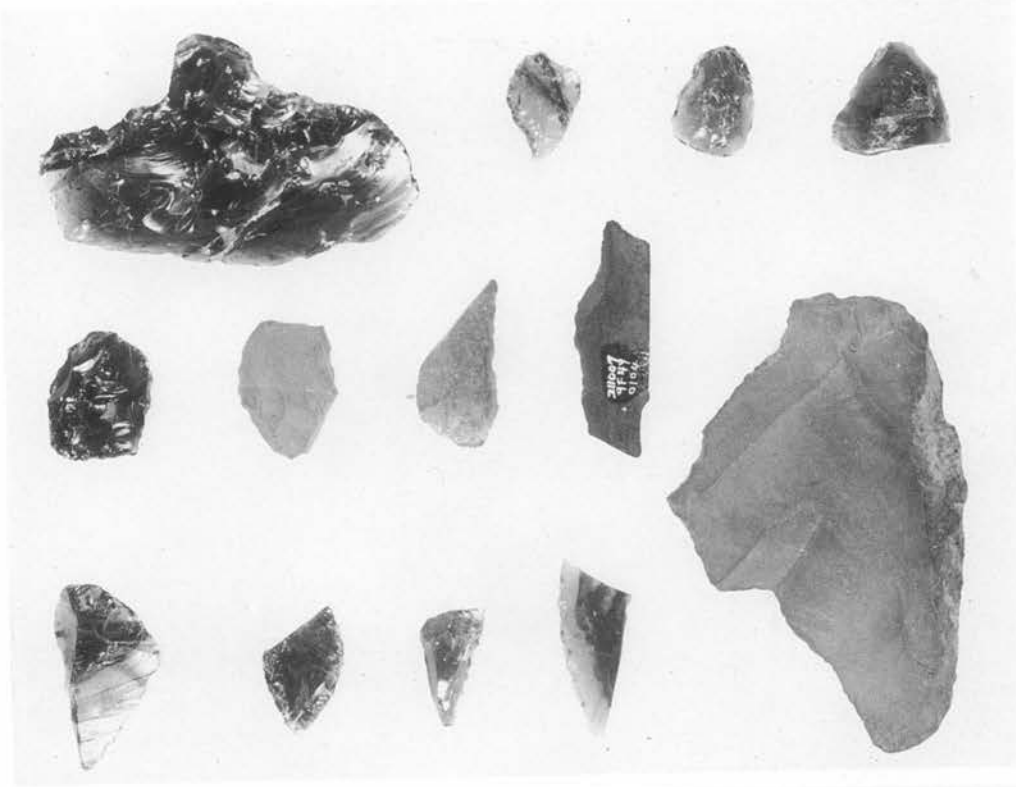


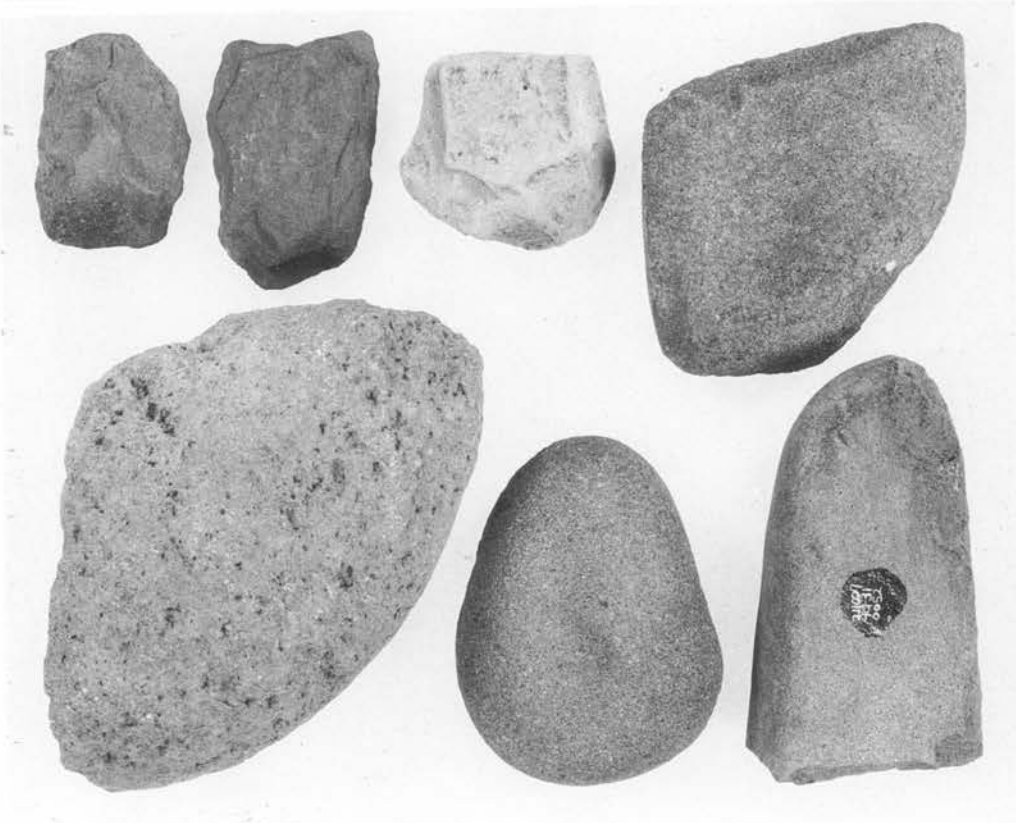
B地点、縄文時代石器（２）



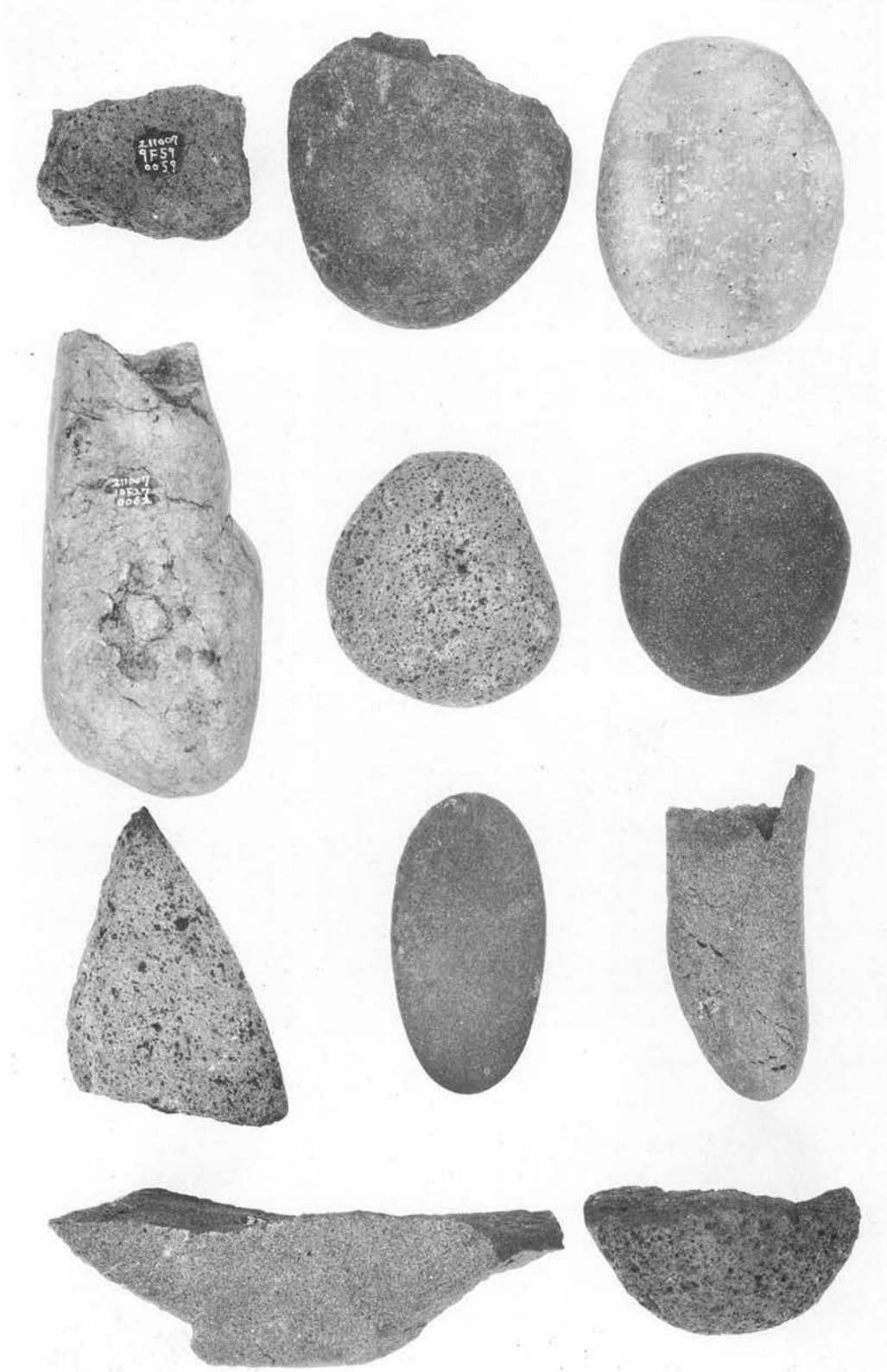
B地点、縄文時代石器（3）

B地点、縄文時代石器（4）

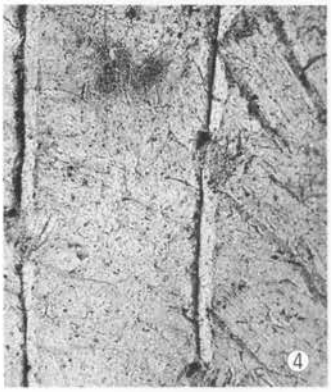


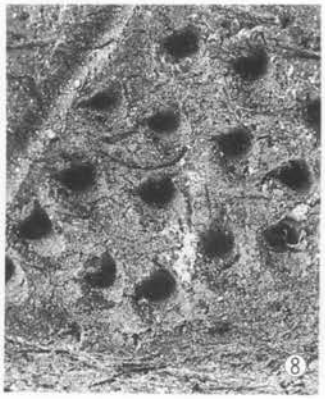


B地点、縄文時代石器（5）



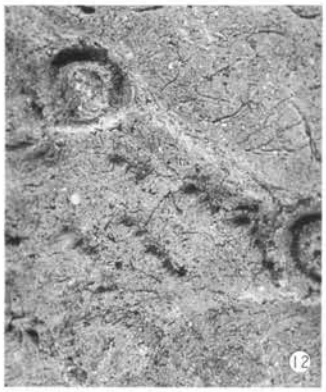
B地点、縄文時代石器（6）





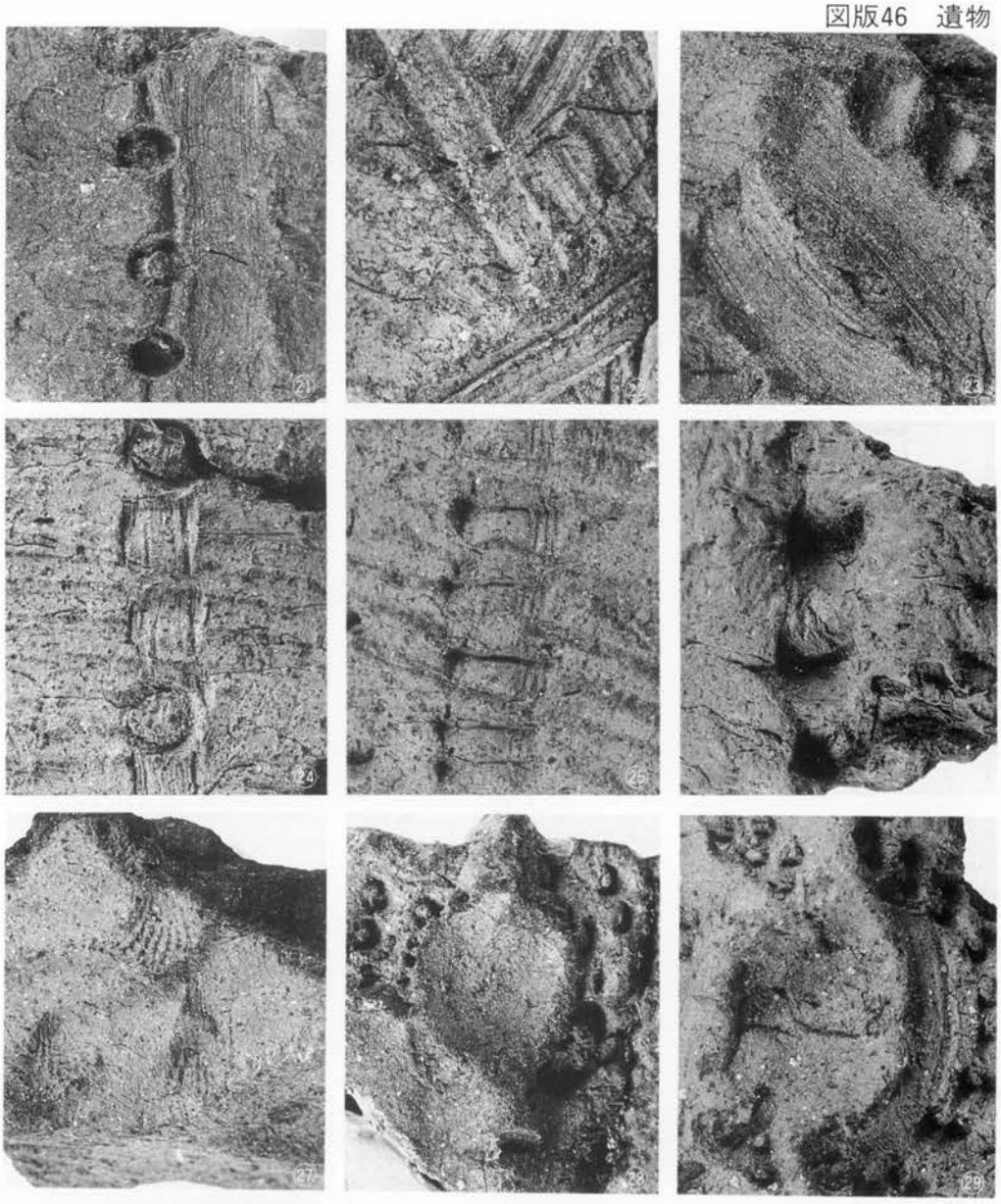
1．細隆起線文と細い集合沈線
2．切断面未調整の円形竹管によるもの
3．太い沈線
4．細い沈線とヘラ状工具による、押し引き文、刺突文
5．ナゾリ手法
6．ナゾリ手法と２連の竹管による沈線文
7．半截竹管による押し引き文
8．半截竹管による押し引き文
9．棒状工具による刺突文
10．ヘラ状工具による押し引き文

第２群土器文様拡大写真（１）



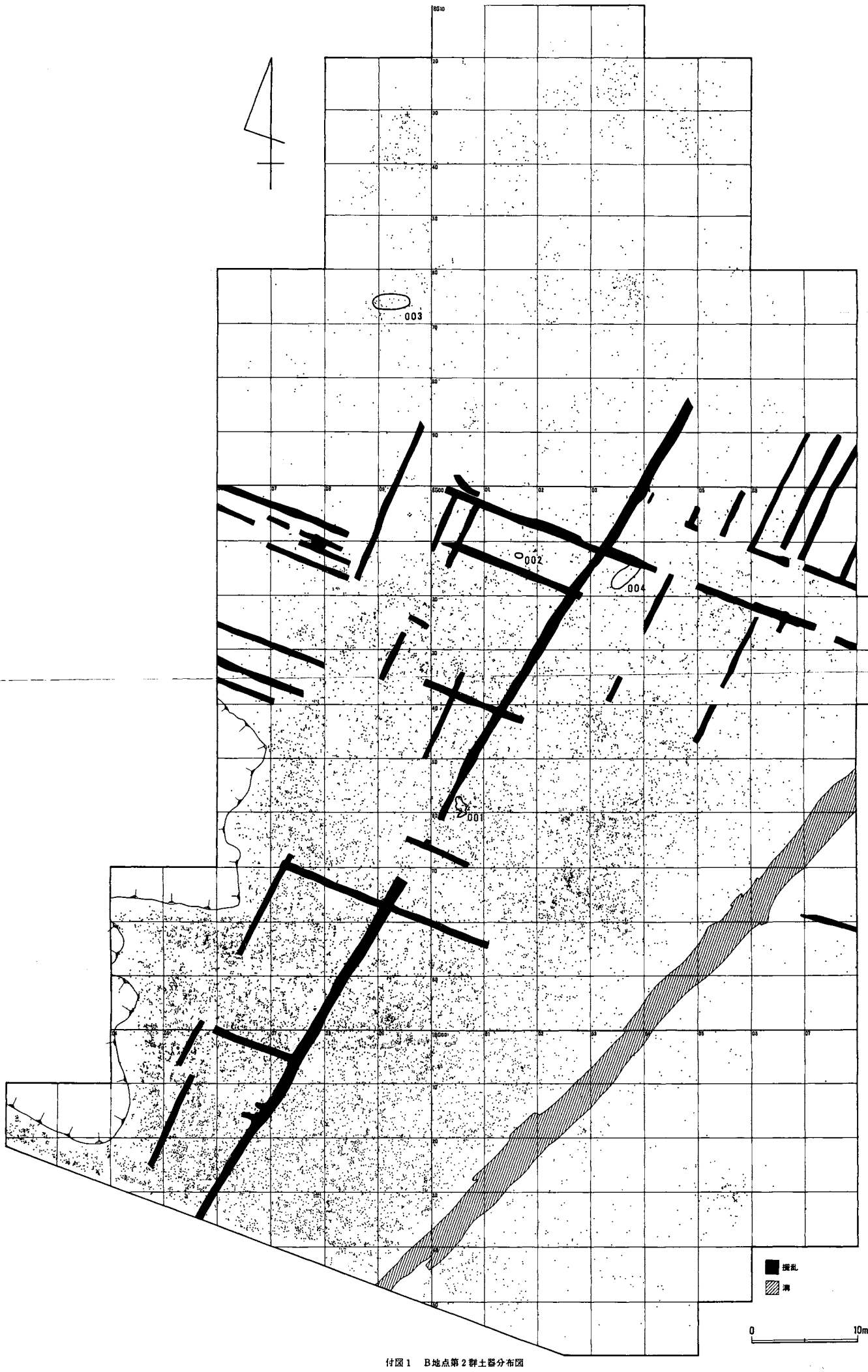
11．２連の半截竹管による押し引き文
12．２連の半截竹管による押し引き文
13．２連の円形竹管による押し引き文
14．２連の半截竹管による押し引き文
15．２連の半截竹管による押し引き文と円形竹管による刺突文
16．沈線と円形竹管による充填文
17．多截竹管による押し引き文
18．多截竹管による押し引き文
19．平行沈線により、作り出された細隆起線状文
20．微隆起線状文

第２群土器文様拡大写真（２）



21．ヘラ状工具による太い沈線、細い沈線
22．半截竹管による沈線文
23．ナゾリ手法
24．ヘラ状工具による押し引き文
25．ヘラ状工具による押し引き文
26．半截竹管による刺突文
27．貝殻（アナダラ属）頭部による押捺文
28．指頭状工具による圧痕文と２連式押し引き文
29．隆起線文と指頭状工具による圧痕文
30．隆起線文、細い沈線文と太い沈線文

第２群土器文様拡大写真（３）



付図1　B地点第2群土器分布図

付図2　B地点石器・剥片類分布図

昭和58年２月19日　印刷

昭和58年２月26日　発行

新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

— No.14　遺　跡 —

発行　新東京国際空港公団
東京都中央区日本橋本町２丁目４番地
財団法人　千葉県文化財センター
千葉県千葉市亥鼻１－３－13

印刷　株式会社　ヤ　カ　東京工場
千葉県松戸市田中新田５－５